持続可能な開発目標

SDGs

アドボカシーと対話

北海道 SDGs 推進懇談会の記録

北海道SDGs推進懇談会の記録

さっぽろ自由学校「遊」

はじめに

この報告書は、北海道庁が打ち出した「北海道 SDGs 推進ビジョン」の策定にあたって、2018 年 7 月から 12 月にかけて計 4 回開催された北海道 SDGs 推進懇談会の記録（主な提出資料と議事録）をまとめたものである。

読んで頂ければ分かるように、この懇談会における議論では、国連で採択された SDGs を含む「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」の理念や重要な要素、その策定プロセスなどをできるだけ忠実に北海道のビジョンに反映させたいと考える懇談会メンバーの多くと、既に策定されていた北海道総合計画と連動させながら SDGs を広めていくことに重きをおく道行政側との間のビジョンに対する考え方のギャップが大きく、最終的には懇談会を辞任するメンバーも現れる異例の事態となった。

そのような懇談会の記録をあえて報告書の形にまとめたのは、この決して成功例とは言えない懇談会における議論の中に、SDGs を自治体政策に反映させていく上での重要なポイントや克服すべき課題が含まれていると感じているからであり、また、行政が招集する懇談会のような場の持つ意味も含めて、行政と市民との向き合い方や政策協働のあり方を考える上でひとつの参考事例となると思われるからである。

SDGs に限らず、国連による国際的な決め事が国内に適用され、さらにそれが自治体に適用されていく過程において、もともとの理念や目的とかけ離れた、水で薄めたような施策になってしまう状況を私はこれまでにも何度か目にしていた。そして残念なことに、私自身が直接懇談会に参加する機会を得ることとなった今回の北海道 SDGs 推進ビジョンの策定においても、それが見事に再現されてしまったと感じている。

SDGs の国内における認知度はまだまだ低いと言われているが、それでも、NGO や市民活動団体のみならず、行政や企業、教育機関など多様なセクターが SDGs に注目しつつあり、その達成に向けてセクターを越えたパートナーシップや協働が求められている。しかし、ここで立ち止まって確認しておきたいのは、「我々の世界を変革する」とタイトルに謳った 2030 アジェンダの理念を真摯に受け止めるならば、持続可能な社会の実現のためには、政策策定のあり方も含め、これまでの社会構造を根本的に見つめ直すことが不可欠だということである。そうした意味で、この懇談会における対話にならなかった対話を、本当の意味でのセクターを越えた対話や協働に結びつけていくための布石としていきたいと思う。

なお、この報告書は、あくまでもビジョンの策定プロセスにおいて開催された北海道 SDGs 推進懇談会の議論を記録することを目的としたものであるので、既に策定された「北海道 SDGs 推進ビジョン」を含む北海道の SDGs 推進の取組については以下の北海道のウェブサイトを参照いただきたい。

北海道における SDGs の推進について
http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/sks/SDGs/top.htm

さっぽろ自由学校「遊」
小泉　雅弘

もくじ

はじめに　1

第１回北海道 SDGs 推進懇談会　道提出資料（一部のみ）　3
第１回北海道 SDGs 推進懇談会　議事録　8

第２回北海道 SDGs 推進懇談会　道提出資料（一部のみ）　26
第２回北海道 SDGs 推進懇談会　構成員からの提出資料　32
第２回北海道 SDGs 推進懇談会　議事録　48

第３回北海道 SDGs 推進懇談会　道提出資料（一部のみ）　68
第３回北海道 SDGs 推進懇談会　構成員からの提出資料　80
第３回北海道 SDGs 推進懇談会　議事録　106

第４回北海道 SDGs 推進懇談会　道提出資料（一部のみ）　126
第４回北海道 SDGs 推進懇談会　構成員からの提出資料　135
第４回北海道 SDGs 推進懇談会　議事録　139

新聞報道　（2019 年 1 月 19 日　北海道新聞）　155

■第 1 回北海道 SDGs 推進懇談会　道提出資料（一部のみ）

◇資料 1　北海道 SDGs 推進懇談会開催要項

資料１

北海道ＳＤＧｓ推進懇談会　開催要領

１　目的
　本道において、持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）に関する理解と参画が広がり、幅広い分野や地域で様々な取組が展開されるよう、道内の実践者や関係団体、有識者が集まり、意見交換を行う「北海道ＳＤＧｓ推進懇談会（以下「懇談会」という。)」を開催する。

２　懇談会の内容
（１） 道内におけるＳＤＧｓ推進に係る意見交換
（２）「北海道ＳＤＧｓ推進ビジョン（仮称)」の策定に向けた意見交換
（３）その他、ＳＤＧｓ推進に係ること

３　開催回数
　平成３０年度に３回程度を目途として開催するものとする。

４　構成員
　懇談会の構成員は別紙のとおりとし、必要に応じて、議題に関係する者をオブザーバー等として出席させることができる。

５　座長
（１）懇談会には、構成員の互選により座長を置く。
（２）座長が不在のときは、座長があらかじめ指名する構成員がその職務を代理する。

６　事務局
　懇談会の開催に係る事務は、北海道総合政策部計画推進課ＳＤＧｓ推進グループにおいて処理する。

７　その他
　この要領に定めるもののほか、懇談会の運営その他必要な事項は、懇談会において別に定める。

附　則
この要領は、平成３０年７月２３日から施行する。

◇資料２　「北海道 SDGs 推進ビジョン（仮称）」の策定について

資料２

「北海道SDGs推進ビジョン（仮称）」の策定について

１ ビジョンの基本的な考え方

SDGs推進の必要性

・2015年に国連で採択されたSDGsは国際社会全体の目標
・国はSDGsの推進は地方創生に資するものであり、その達成に向けた取組は重要と位置付け
・道でも北海道命名150年を節目に、今後の持続可能な地域づくりにSDGs推進が必要

ビジョンの位置付け

・本道においてSDGsを推進するため、道内の多様なステークホルダーと道が互いに共有する「基本的な指針」
・各ステークホルダーのSDGsの主流化や連携・協働の取組を促進し、持続可能な地域づくりを進めるための「ガイドライン」

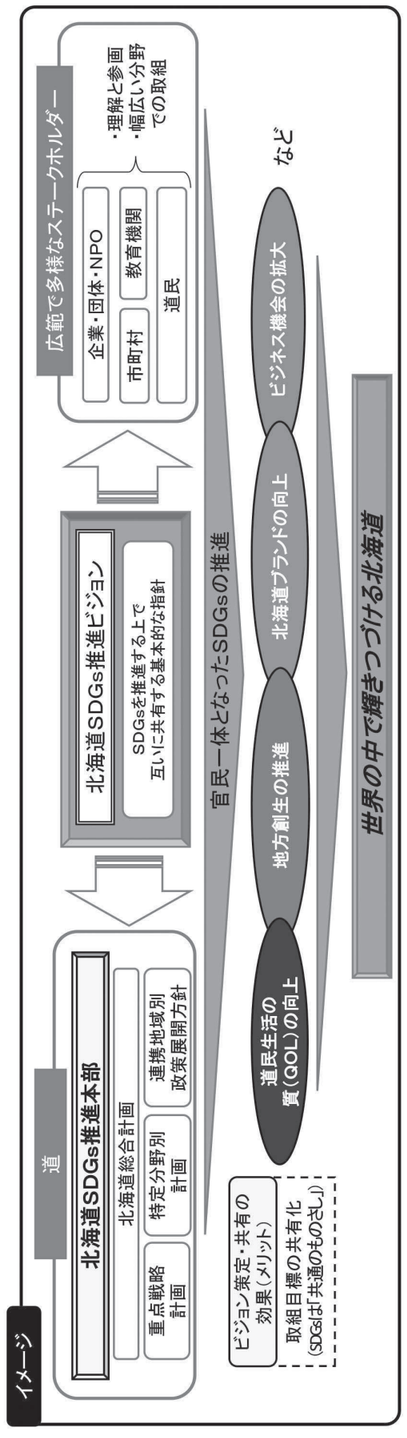
ビジョン策定の必要性

・SDGsの推進には、広範なステークホルダーの連携した取組が不可欠
・SDGsへの道民理解が広がり、SDGsの主流化や連携・協働した取組が推進されるよう、共通の考え方を示すことが必要

目標年

2030年（国連の「2030アジェンダ」の目標年）

イメージ



２ ビジョンの構成

1 ビジョンの基本的な考え方
（1）策定の趣旨
（2）ビジョンの位置付け
（3）目標年

2 北海道を取り巻く状況
（1）北海道の現状・課題
（2）世界に誇れる北海道の価値と強み

3 北海道のめざす姿と優先課題・対応方向
（1）めざす姿
（2）北海道の優先課題と対応方向

4 ビジョンの推進
（1）各ステークホルダーの取組
（2）推進手法
（3）推進管理

３ 策定スケジュール

＜平成30年度＞
6月　骨子案の策定
9月　原案の策定
10月　パブリックコメント、市町村等意見照会の実施
11月　案の策定
12月　ビジョンの決定（北海道SDGs推進本部）

◇資料３－１　「北海道 SDGs 推進ビジョン（仮称）」骨子（備考入り）

資料３－１

「北海道ＳＤＧｓ推進ビジョン（仮称）」骨子（備考入り）

北海道総合政策部政策局計画推進課

骨子	備考
1　ビジョンの基本的な考え方 （1）策定の趣旨 ・　２０１５年に国連で採択されたＳＤＧｓは国際社会全体の目標であり、国においても、その達成に向けた取組は地方創生に資するものであり重要と位置付け。 ・　道としても、北海道命名１５０年を節目に、これから先の５０年、１００年に向け、地方創の成果を確かなものとし、世界の中で存在感を高め、世界とともに歩む持続可能な地域づくり進めていくため、ＳＤＧｓ推進に積極的に取り組むことが必要。 ・　ＳＤＧｓの推進には、自治体、企業・団体、ＮＰＯ、道民など広範なステークホルダーが各々の立場で主体的な取組を進めるとともに、ステークホルダー間の連携した取組を進めることが不可欠 ・　このため、ＳＤＧｓの理念や意義について、道民の理解が広がり、道内におけるＳＤＧｓの主化や多様なステークホルダーが連携・協働した取組が積極的に推進されるよう、本道の直面する課題や独自の価値などを踏まえた「めざす姿」など共通の考え方を示し、北海道全体でＳＤＧｓ推進を図るためのビジョンを策定。	・ＳＤＧｓは全てのステークホルダーが当事者として主体的に参加する全員参加型の取組が求められている。道としては北海道命名 150 年を節目に、世界の中での北海道の存在感を高めていくためにも、SDGs に関する多様な主体の理解と参画が広がり、官民一体となった連携した取組を推進するため、ＳＤＧｓ推進について官民で共有するビジョンを策定することとしたもの ・内容は国の実施指針や「まち・ひと・しごと創生総合戦略 2017 改訂版」などを踏まえ記載
（2）ビジョンの位置付け ・　本道においてＳＤＧｓを推進するため、ＳＤＧｓの理念や意義、本道の「めざす姿」や優先課題・対応方向、推進手法など取組の方向性を示すものであり、道内の多様なステークホルダーが互いに共有する基本的な指針。 ・　ビジョンを通じ各ステークホルダーがＳＤＧｓという「共通のものさし」を持ち、取組目標の理解が進展することにより、各々の活動においてＳＤＧｓの主流化に取り組むとともに、連携・協働した取組を促進し、世界とともに歩む持続可能な地域社会づくりを進めるためのガイドライン。	・このビジョンは、SDGs に関する道民の理解と参画が広がり、幅広い分野や地域で様々な取組が展開されるよう、多様な主体が共有する「基本的な指針」となり、それぞれの取組を促進する「ガイドライン」と位置付ける
（3）目標年 ２０３０年（国連で採択された「持続可能な開発のための２０３０アジェンダ」の目標年）	・2030 アジェンダとの整合を踏まえ設定 ※（4）に SDGs の概要などを追記予定
2　北海道を取り巻く状況 （1）北海道の現状・課題 ＳＤＧｓの１７ゴールに照らしながら本道の課題や強みなどを分析し、次の区分で再整理して明示。 ①　生活・安心　保健・福祉、環境、防災などの状況 ②　経済・産業　農林水産業、観光、エネルギー、雇用などの状況 ③　人・地域　教育、男女平等参画、地方の過疎化などの状況 （2）世界に誇れる北海道の価値と強み ① 魅力となる雪や寒さ ② アジア・ロシア極東との近さなど地理的優位性 ③ 厳しい自然条件などのもとで培われた優れた技術 ④ 優れた自然環境・豊かな水資源と森林 ⑤ 広大な土地・３つの海を背景とした高い食料供給力 ⑥ 豊富で多様なエネルギー資源 ⑦ 多様性に富む地域 ⑧ 独自の歴史・文化	・SDGs 推進に向け、ステークホルダーが本道の実情を共有するため、本道の現状・課題を SDGs のゴールに照らしながらデータを用いて分析 ・「SDGs 指標」や「ローカライズ指標」と関連の深い、道の各種計画で設定する指標（データ）をゴールごとに選定し、「①生活・安心」、「②経済・産業」、「③人・地域」の区分で再整理し、現状等を見える化（資料３－２参照） ・SDGs の推進に貢献する本道の優位性を提示 ・SDGs のゴールと関連があり、かつ、本道が優位性を有するものを、積極的に活かしていくべきものとして掲載し、可能な限りデータで見える化

骨子	備考
3　北海道のめざす姿と優先課題・対応方向 （1）めざす姿 「世界の中で輝きつづける北海道」 ～世界に誇れる北海道の魅力を磨き、育て、様々な強みを活かし、ＳＤＧｓを推進することによって、「世界の中の北海道」としての存在感を高めながら、将来にわたって安心して心豊かに住み続けることができる地域社会を形成していく～ （2）北海道の優先課題と対応方向 ＳＤＧｓのゴールやターゲットを参考にしながら、その推進に向けた取組の柱として、北海道として特に注力すべき課題を次のとおり整理。（※対応方向は、今後、ステークホルダーとの意見交換等を通じて検討。） ① あらゆる人々が将来の安全・安心を実感できる社会の形成 ② 環境・エネルギー先進地「北海道」の実現 ③ 北海道の価値を活かした持続可能な経済成長 ④ 未来を担う人づくり ⑤ 持続可能で個性あふれる地域づくり	・「めざす姿」はSDGsの推進により世界の中で北海道の存在感を高めながら、将来にわたって安心して心豊かに住み続けられることができる地域社会を形成していくとの思いを込めて設定 ・５つの優先課題は、SDGsが示す幅広いゴールや、国の優先課題を踏まえながら、「2 北海道を取り巻く状況」との対応関係と整合を図り設定 （資料３－３参照） ・優先課題に対する「対応方向」は、北海道SDGs推進懇談会における意見等を踏まえ検討 ・「対応方向」ごとに、ステークホルダーに求められる具体的な取組を、先進事例を参考に「取組イメージ」として掲載することを予定
4　ビジョンの推進 （1）各ステークホルダーの取組 ・　行政　～各種施策を通じたＳＤＧｓの推進及び普及、ステークホルダー間の連携強化 ・　企業　～中核的事業を通じたＳＤＧｓ達成への貢献 ・　団体・ＮＰＯ　～国際的・地域的ネットワークや専門性を活かした取組の推進 ・　教育機関　～ＳＤＧｓに関する学習等の推進 ・　道民　～生活者としての主体的取組の推進、活動への参加　など （2）推進手法 ・　道は全庁横断的な「北海道ＳＤＧｓ推進本部」の下、各部・振興局等が一体となりＳＤＧｓ推進に向けた取組を展開するとともに、施策・事業の企画・実施や各種計画の改訂等に当たり、ＳＤＧｓの要素の反映により実効性の確保に努める。 ・　ステークホルダー間でビジョンを共有し、優先課題の解決に向けた連携・協働による取組を推進。 ・　道民の理解促進やステークホルダーによる積極的な取組を促すため、先行して取り組むステークホルダーが連携しながら、幅広い分野・世代に対してＳＤＧｓを普及啓発。 （3）推進管理 ・　道内におけるＳＤＧｓの先進的な取組状況について、ステークホルダーとの意見交換などを通じて把握し、広く情報発信を図るとともに、道の主な取組状況は政策評価を活用して整理し、公表。 ・　経済社会情勢の変化やＳＤＧｓ推進に関する国の動向なども踏まえ、必要に応じて見直す。	・オール北海道の共通指針となるビジョンの下で、各ステークホルダーの取組が活発に展開されるよう、取組において各主体に期待される役割などを国資料なども参考に示す。 ・知事をトップとする推進本部の下、多様な主体と連携しながら取組の拡大を図るとともに、道内における普及啓発にも積極的に取り組むことを示す。 ・ステークホルダー間の連携による取組や普及啓発の推進に向けた「北海道SDGｓ推進ネットワーク（仮称）」を立ち上げ、取組を促進することを示す（資料４参照） ・SDGsを効果的に推進していくためには、先進事例を把握し、多様な主体で共有していくことが重要。 ・このため、民間等の主な取組状況は、「北海道SDGｓ推進ネットワーク」等を通じて把握し、道ホームページ等において情報発信するとともに、道の主な取組状況は、政策評価を活用して整理し、道ホームページ等において公表することを示す ・社会情勢や国の動向などを踏まえ、ビジョンを見直すなど、柔軟な対応を行うことを示す。

◇資料３－２　SDGs 指標と関連性を有すると思われる道の指標（2018 年 7 月時点）

※省略

◇資料３－３　「優先課題」の設定一覧

■「優先課題」の設定一覧

資料３－３

SDGsのゴール	国の優先課題	ビジョンの「2 北海道を取り巻く状況」で掲載が想定されるデータ	ビジョンの優先課題	ビジョンの対応方向	取組イメージ
ゴール 1（貧困） ゴール 3（保健） ゴール 8（経済成長と雇用） ゴール10（不平等） ゴール11（持続可能な都市） ゴール16（平和）	1 あらゆる人々の活躍の推進（働き方改革、長時間労働の是正、子供の貧困対策の推進、障がい者の自立と社会参加支援など） 2 健康・長寿の達成（健康づくり・生活習慣病対策の推進、がん対策の推進など） 4 持続可能で強靭な国土と質の高いインフラ整備（国土強靭化の推進・防災など） 7 平和と安全・安心社会の実現（交通安全対策・組織犯罪対策・児童虐待防止対策の推進など）	【北海道の現状・課題】 ① 生活・安心 ・生活保護世帯・児童養護施設の子どもの高等学校進学率（ゴール1） ・合計特殊出生率、各種死亡率、全道の医療施設に従事する医師数、北海道福祉人材センターの支援による介護職の就業者数、リスクを高める量を飲酒している者の割合、喫煙率（ゴール3） ・交通事故死者数（ゴール3） ・入権侵犯事件数（ゴール10） ・自主防災組織活動カバー率など防災関係データ（ゴール1、11、13） ・刑法犯認知件数（ゴール16） ② 経済・産業 ・年間総労働時間（ゴール8） 【世界に誇れる北海道の価値と強み】 ②アジア・ロシア極東との近さなど地理的優位性（リスク分散による企業立地件数）（ゴール11）	Ⅰ あらゆる人々が将来の安全・安心を実感できる社会の形成		
ゴール 6（水・衛生） ゴール 7（エネルギー） ゴール12（持続可能な生産と消費） ゴール13（気候変動） ゴール14（海洋資源） ゴール15（陸上資源）	4 持続可能で強靭な国土と質の高いインフラ整備（水資源開発・水循環の取組など） 5 省・再生可能エネルギー、気候変動対策、循環型社会（再生可能エネルギーの導入促進、気候変動対策の推進、循環型社会の構築、食品ロス削減、消費者教育の推進など） 6 生物多様性、森林、海洋等の環境の保全（化学物質対策、大気汚染対策、海洋ごみ・海洋汚染対策、生物多様性の保全など）	【北海道の現状・課題】 ① 生活・安心 ・環境基準達成率（水質汚濁・大気汚染）（ゴール6、11） ・循環利用率（ゴール12） ・温室効果ガス排出量（ゴール13） ② 経済・産業 ・新エネルギー導入量（ゴール7） 【世界に誇れる北海道の価値と強み】 ④優れた自然環境・豊かな天資源と森林（ゴール6、14、15） ⑥豊富で多様なエネルギー資源（ゴール7）	Ⅱ 環境・エネルギー先進地「北海道」の実現		
ゴール 2（食料） ゴール 8（経済成長と雇用） ゴール 9（インフラ、産業化、イノベーション） ゴール14（海洋資源） ゴール15（陸上資源）	3 成長市場の創出、地域活性化、科学技術イノベーション（有望市場の創出、開業率・廃業率10%の達成、農林水産業の成長産業化、「明日の日本を支える観光ビジョン」の推進、科学技術イノベーションなど） 6 生物多様性、森林、海洋等の環境の保全（水産資源の持続的利用・持続可能な森林経営の推進など）	【北海道の現状・課題】 ② 経済・産業 ・農業産出額、漁業生産額、道産木材の利用量（ゴール2） ・開業率、観光消費額、観光入込客数（ゴール8） ・製造業の付加価値生産性、産学官の共同研究の件数（ゴール9） ・漁業生産量（ゴール14） ・森林面積（ゴール15） 【世界に誇れる北海道の価値と強み】 ①魅力となる雪や寒さ（ゴール8） ②アジア・ロシア極東との近さなど地理的優位性（ゴール8） ③厳しい自然条件などのもと培われた優れた技術（ゴール9） ⑤広大な土地・3つの海を背景とした高い食料供給力（道産食品輸出額）（ゴール8）	Ⅲ 北海道の価値を活かした持続可能な経済成長		
ゴール 4（教育） ゴール 5（ジェンダー） ゴール 8（経済成長と雇用）	1 あらゆる人々の活躍の推進（女性活躍・男女共同参画の推進、初等中等教育・高等教育・キャリア教育・職業教育の充実、外国人留学生の受入など）	【北海道の現状・課題】 ② 経済・産業 ・就業率（ゴール8） ③ 人・地域 ・平均正答率の状況、児童生徒の体力・運動能力の状況（ゴール4） ・配偶者等からの暴力（DV）の周知度（ゴール5） ・育児休業取得率（ゴール5） ・道の本庁課長級以上の職に占める女性職員の割合（ゴール5） ・道の審議会等における女性委員の登用率（ゴール5） 【世界に誇れる北海道の価値と強み】 ⑦多様性に富む地域（道内外国人留学生数）（ゴール11）	Ⅳ 未来を担う人づくり		
ゴール 9（インフラ、産業化、イノベーション） ゴール11（持続可能な都市）	3 成長市場の創出、地域活性化、科学技術イノベーション（地方創生の本格展開、「環境未来都市」構想の推進など） 4 持続可能で強靭な国土と質の高いインフラ整備（社会資本整備重点計画の推進など）	【北海道の現状・課題】 ③ 人・地域 ・個別施設ごとの長寿命化計画策定率、各種耐震化率（ゴール9） ・道内空港の国際線利用者数（ゴール9） ・集落対策を実施している市町村数（ゴール11） ・本道からの転出超過数（ゴール11） ・国及び道が指定する道内の文化財の数（ゴール11） 【世界に誇れる北海道の価値と強み】 ⑦多様性に富む地域（ちょっと暮らし滞在日数の増加、道内外国人居住者数の増加）（ゴール11） ⑧独自の歴史・文化（本道出身のオリンピック・パラリンピック出場選手の数）（ゴール4）	Ⅴ 持続可能で個性あふれる地域づくり		

◇資料４　北海道における SDGs の推進体制について（案）

資料４

北海道におけるSDGsの推進体制について（案）

道内におけるSDGsの推進状況

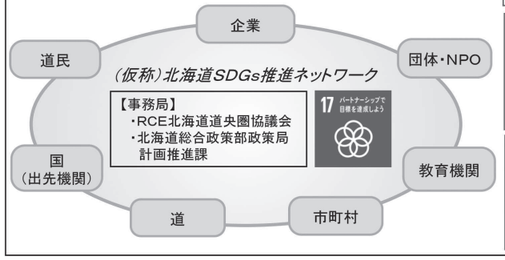
【現状】 各ステークホルダー（企業、団体、市町村等）の一部においてSDGsの達成に向けた取組が推進されるなど、関心が高まりつつあるが、地域間で偏りが大きく、SDGs自体の認知度も全道的には未だ低い状況

【今後】 北海道全体におけるSDGsの推進のため、「（仮称）北海道SDGs推進ビジョン」の策定も見据え、各ステークホルダーにおけるSDGsの取組や主流化の促進、ステークホルダー間の連携を促す環境づくりが必要

SDGsの推進に関する理解の促進を図るとともに、情報の共有や発信、連携等を希望する幅広い主体が参加できる全道的なネットワークが必要

全道的なネットワークの形成

「（仮称）北海道SDGs推進ネットワーク」の創設
（SDGsを推進する多様なステークホルダーが参加するネットワーク）



【① 目的】
・道内各ステークホルダーへのSDGsの浸透を促すとともに、ステークホルダー間の連携・協働関係を構築するなど取組の裾野の拡大を目的とする

【② 構成】
・会員は、ネットワークの趣旨に賛同し、道内でSDGsを推進する者又はSDGsに関心を有する者が対象（会費等はなし）
・事務局はRCE北海道と道で共同運営

【③ 取組内容】
・会員へのSDGs関連情報の提供
・会員間の情報交換の場の設置
・道内におけるSDGsの普及活動
・道外への情報発信（先進事例等）
・連携・協働した取組の実施　など

【④ 設立手法】
・共同発起人により設立
・共同発起人は、RCE北海道と道
・設立当初の会員は「SDGs推進懇談会」のメンバーや道内のSDGs未来都市等を想定

【⑤ 事務局の役割分担】
・メールによる情報提供はRCE北海道が主体
・会員の募集（HPの設置等）・登録事務及び会議等の開催は道が主体
・会議等の内容の企画・立案は共同

【⑥ スケジュール】
・7月　ネットワーク創設について「北海道SDGs推進懇談会」で協議
・8月（予定）　ネットワークの創設
（以後、情報発信等を実施）
・1月　会議（シンポジウム）の開催

第１回北海道ＳＤＧｓ推進懇談会　議事録

日時：平成 30 年 7 月 23 日（月）15：00 ～
場所：道庁本庁舎 5 階共用会議室

【出席者】
○構成員：有坂　美紀、大﨑　美佳、柏村　章夫、木原　利幸、小泉　雅弘、定森　光、清水　誓幸、菅原　亜都子、鈴木　昭徳、野吾　奈穂子、吉中　厚裕　（五十音順、敬称略／ 11 名出席）
○北海道：谷内計画推進担当局長、石川計画推進課長、渡邉計画推進課主幹

石川計画推進課長＜以下、石川（課長）＞
みなさんこんにちは。ご案内の時間となりましたので、ただ今から、第 1 回目となります、北海道 SDGs 推進懇談会を開催させていただきます。本日は大変お忙しいなか、ご出席をいただきまして誠にありがとうございます。私、本日の進行を務めさせていただきます、計画推進課長の石川でございます。よろしくお願いします。本日の懇談会の開催結果でございますけれども、後日、道庁のホームページで公開をさせていただきますので、ご了承をお願いいたします。今日の懇談会の終了時刻でございますが、17 時を目途に進めさせていただければと思います。みなさんどうぞご協力をよろしくお願いいたします。それでは、開会に当たりまして、谷内計画推進担当局長からご挨拶を申し上げます。

谷内計画推進担当局長＜以下、谷内（局長）＞
道庁で SDGs を担当しております、総合政策部計画推進担当局長の谷内と申します。どうぞよろしくお願いいたします。本日はご多忙の中、この懇談会にご参加いただき、ありがとうございました。SDGs の推進に向け、道でも 4 月に知事をトップとする全庁横断的な組織ということで、SDGs 推進本部を設置いたしまして、推進ビジョンの策定に向けた検討や出前講座のようなもの、企業・団体の方と連携した取組などを進めている訳ですけども、こうした中、皆様方はご存じだとは思いますが、６月には、今日懇談会にご出席いただいています下川町、札幌市、ニセコ町とともに、国から「SDGs 未来都市」に北海道としても選定をいただいたところです。SDGs の推進は、道だけではなく、道民の方の取組や、企業や団体、あるいは NPO など、各地域・各分野、色々なところに広がりを持って、様々な取組が展開されることが重要だと思っています。そうした意味で、私ども、年内を目途に、「北海道 SDGs 推進ビジョン」という名のビジョンを策定して、北海道としてどうやって SDGs を推進していくかという基本的な考え方や目指す姿、取組方法、あるいは色々なステークホルダーの方々の取組とか、そういったものを道民の方にわかりやすくお示しが出来ればいいなということで、ビジョンの検討を始めております。今日の懇談会は、そうしたビジョンの策定、あるいは SDGs の推進に向けて、色々な意見をいただきながら、ビジョンの策定を基にした SDGs の推進に向けた取組を加速化していきたいと考えているところであります。また、後ほどご説明をさせていただきますが、今、色々な地域や分野で、SDGs 推進に向けた取組がされていると思いますけれども、そうした方々の取組を横に繋ぐようなネットワーク組織を立ち上げることが出来ないかということも考えております。そうした場で、情報共有や意見交換、あるいは連携した取組ですとか、そうしたものを作り上げることが出来ないかなと考えています。そうしたネットワーク組織の立ち上げについても、ご相談をさせていただきたいなと思っております。今、北海道でも様々な SDGs への取組がされていると思います。ただ一方で、色々なところに十分に浸透しているかというと、まだまだ足りない部分があるのかなと思っております。このビジョンやネットワーク組織など、そうしたものを活用しながら北海道における SDGs の取組、機運をもっと醸成していきたいと思っております。８月４日には、吉本興業さんが「SDGs ウォーク」というものを企画していただけるということで、中島公園を出発とした、道民・市民の方がたくさん参加できる、気軽に SDGs を楽しめるようなイベントもされるということですので、色々なところからそうした SDGs の取組が広がっていっていただければと思っております。今日は短い時間ですが、ビジョンの策定に向けたご意見を中心となりますけども、SDGs 推進に向けて、色々なご意見を賜ればと思っておりますので、どうか忌憚のないご意見をいただけますよう、よろしくお願いいたします。

石川（課長）　ありがとうございます。それでは早速お手元の次第に基づきまして、議事を進めて参りたいと思います。（１）の「座長の選出」でございます。資料 1 として、「北海道 SDGs 推進懇談会開催要領」というものをお配りしています。懇談会の目的ですとか、内容などについてはお示しをしてございますけれども、「５ 座長」の欄をご覧いただきたいと思います。座長につきましては、構成員の互選としてございます。この座長につきましては、懇談会の会議の議論をスムーズに進行していただくため、座長の選出をさせていただくことにしておりますけども、どなたかご推薦などありますか。なければ、事務局の方で提案をさせていただきたいと思いますが、酪農学園大学の吉中准教授にお願いしたいと考えてございます。よろしいでしょうか。ありがとうございます。それでは、大変恐縮でございますけれども、吉中先生、座長をしていただいて、議論の進行をよろしくお願いします。

構成員の自己紹介

酪農学園大学・吉中 厚裕＜以下、吉中＞
ありがとうございます。皆さん、こんにちは。酪農学園大学の吉中と申します。力不足ですけれども、ご指名により、座長ということで、今、局長からもお言葉ありましたけども、忌憚のない意見の交わすお手伝いを少しでもさせていただければと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。何名かの方には、先日お会いして少しお話ししましたけれども、酪農学園大学に去年の４月から来ておりまして、その前は、国連の生物多様性条約の事務局というところで７年ほど仕事をしておりました。当時、ご存じのとおり、SDGs、ポスト 2015 アジェンダというのがニューヨークベースで議論が進んでおりましたが、そのとき、生物多様性条約の事務局では何をしていたかと言いますと、いかに SDGs の中に生物多様性の観点を盛り込んでもらえるだろうかということを、事務局ですのでやれることに限りはあるのですが、色々なチャンネルを使ってしていたことを懐かしく思っております。そういう国連レベルでの話は、どうしても地に足のつかない議論だけのことになってしまうことが多く、物事が起きるのは現場ですので、現場でいったいどうやって実現していくのだろうなというのが、私の当時からのすごい関心事でした。というのも、国連に行く前、私は日本の国立公園の現場で働いておりました。特に北海道では、釧路湿原、阿寒、利尻礼文サロベツという国立公園で、まさに現場で地元の方と一緒に働いておりました。そういうところで、この SDGs がどう活用できるのか、そんなことを皆さんと一緒に勉強させていただきたいと思っております。つたない進行になるかと思いますけれども、どうぞよろしくお願いいたします。それでは、早速、議事に参りたいと思いますが、その前に、初めての方もいらっしゃると思いますので、簡単に一言ずつ自己紹介ということで、お名前、所属とこの懇談会にかける期待みたいなのをお話いただければと思います。

ＲＣＥ北海道道央圏協議会・有坂 美紀＜以下、有坂＞
みなさんこんにちは。RCE 北海道道央圏協議会の有坂です。RCE 北海道道央圏協議会というのは、国連大学のプロジェクトで、持続可能な開発のための地域拠点ということで、現在 164 カ所世界にあるものでして、北海道にも 2016 年に作った組織です。SDGs を掲げる前から、持続可能な社会・世界というものを作っていくということを、我々の使命として掲げてやっておりました。今回、このような場が出来て、本当に期待をしています。SDGs というものが公開性・透明性を持って、そして参加意識と当事者性というものをすごく大事にしながら作られてきたものですので、このプロセス自体もオープンで、誰でも参加できるような形になればいいなと思い、今回は参加させていただいております。どうぞよろしくお願いします。

北海道環境パートナーシップオフィス・大﨑 美佳＜以下、大﨑＞
みなさんこんにちは。環境省北海道環境パートナーシップオフィスの大﨑です。環境省が全国に８カ所設置している、環境分野の中間支援組織です。環境分野から、持続可能な地域づくりをしていくことを掲げており、環境省もすごく SDGs を推している昨今です。チラシも配らせていただいておりますけども、中間支援組織ということで、環境に関係する情報や人、物を繋いでいく、そういったことをやっています。今回、ここの場は、非常に素晴らしい場だと思っていて、開催していただき本当にありがとうございます。ただ、せっかく SDGs という冠をつけておりますので、バックキャスティングというか、北海道のありたい姿というのはいったいなんだろうということを、再考出来るいい機会になると思っています。今の計画案だと、それを出来ていないというのが凄くさみしいので、そこをもう一度、皆さんで再考出来るような場に出来たらいいなという期待をしているところです。よろしくお願いします。

Ambitious Farm・柏村 章夫＜以下、柏村＞
みなさんこんにちは。アンビシャスファームの柏村と申します。私は、隣の江別市で農業をやっておりまして、持続可能な農業を考えたときに、従業員の働きやすい環境を作るだとか、女性が活躍するだとか、今一般的に言われているようなことを事業の中で取り組んでいます。それを突き詰めると、割と SDGs に繋がっているようなところがたくさんあるということで、私自身、SDGs という言葉は、出会ったのがまだ日も浅く、理解も浅いですけれども、先ほど話しにありましたように、一般市民も理解して一緒に取り組めるビジョンを作ると言うことで、私も素人担当ということで、勉強しながら、この協議会に関わっていければと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

下川町・木原 利幸＜以下、木原＞
みなさんこんにちは。下川町政策推進課の木原と申します。下川町は、人口 3,400 人を切る小さな自治体でありますけども、これまで「環境モデル都市」、「環境モデル未来都市」、今回も「SDGs 未来都市」ということで、持続可能

な地域社会を築きあげていく上での必要なツールということで、今、町民の皆さんと一緒に下川町の 2030 年に向けてのありたい姿ですとか、来年度から始まります第六期の下川町の総合計画にこの SDGs を組み込んで策定をしていこうということで、様々な取組をしているところでございます。ジャパン SDGs アワードで、今回大賞をいただいた関係で、７月２日に吉本興業さんと連携を結ぶことが出来まして、早速今週末、下川町はジャンプの町で、平昌オリンピックで葛西選手、伊藤大貴選手、伊藤有希選手が出場しましたけども、彼等の表彰式がありまして、そこに吉本の芸人さんが来られるという、色々な繋がりを持って地域を盛り上げていただけるということで、大変感謝しているところです。どうぞよろしくお願いいたします。

さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘＜以下、小泉＞

NPO 法人さっぽろ自由学校「遊」の事務局長をしています、小泉と言います。さっぽろ自由学校「遊」は、市民が作る市民のための学びの場ということで、一年中、市民対象の色々な講座をやっております。テーマは多様ですけれども、人権、環境、開発、平和、多文化共生など、ある意味、SDGs と関連するような社会的なテーマを中心にやっておりますので、是非ご参加ください。SDGs に関しては、もともと ESD という持続可能な開発のための教育に、教育の 10 年が行われている間に注目して、色々 ESD に関わる活動をしてきました。その流れで、RCE のメンバーにもなっています。2015 年から SDGs を意識した市民の取組を進めていて、既にお持ちの方が多いと思いますけど、北海道の地域目標づくりというワークショップを 2016 年に進めまして、それをまとめた冊子を作ったり、その第２弾で、北海道からの発信と言うことで、『SDGs ×先住民族』という冊子を作ったりしております。今回、ここに参加できるのは、非常に今の関心とぴったりというか、北海道の地域目標づくりというのをやってきたことをどう活かせるかと考えておりますし、あまりこういうところに参加する機会は多くないですが、SDGs の、「誰一人取り残さない」という理念を体現できるような動きになればいいなと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

北海道ＮＰＯサポートセンター・定森 光＜以下、定森＞

北海道 NPO サポートセンターの定森と申します。私どもは NPO の中間支援組織として、NPO の立ち上げや運営のサポートをかれこれ 20 年行ってきている団体になります。現在会員が大体、団体で 200 ～ 300 程度になっておりまして、道内の様々な分野の NPO と、各地の NPO の支援センターと連携をしながら活動をしております。今回、私たちが SDGs に期待するところとして、NPO の活動は単独で社会課題解決できるものではなく、行政や企業、様々な人たちとの連携が必要となってくる、ますますそれが必要だというように感じています。この SDGs が一緒の共通の目標を持つということで、そういった連携が促進されていくということ、繋がることをすごく期待をしているところです。今回の懇談会につきましては、ビジョンを策定していくということですので、この場だけに限らず、色々な人たちの声を聞けるような場になって欲しいと思います。ビジョンというのは、共に作ることで自分たちのものになっていくと思いますので、そこを蔑ろにされてしまうと、作っただけのものになるというふうに思います。ただ単にビジョンを作るだけではなく、作った後にも生かされていく、そのためのプロセスになるようにこの場がなっていくといいなと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

北海道中小企業家同友会・清水 誓幸＜以下、清水＞

一般社団法人北海道中小企業家同友会の理事を務めております、清水と申します。また、江別市で中小企業を経営しております。私どもの中小企業家同友会の方は、北海道で約 4,800 社の会員がおります。4,800 社、その社員も含めると、数十万、たぶん家族まで入れると数百万の人間が、この中小企業家同友会に携わっていると言っても過言ではないと思います。そして、この中小企業家同友会は、「よい会社を作ろう」、「よい経営者になりましょう」、そして「よい経営環境を作りましょう」という３つの理念を持って活動しております。このよい経営環境を作ろうというもの、イコール SDGs のゴールに繋がるのではないかなという、僕自身の思いの中で、同友会の中でこの SDGs をどうやって広めていくかということが、私の課題と思って活動しているところでございます。そして、こういう懇談会の中で企業に与えられる、また、企業がどのような皆様方から価値や期待を持たれているのかということを、よく我々は知りながら、同友会のなか、または企業のなかに知っていただきながら、大きなステークホルダーの一員として活躍していけるように導いていければなと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

さっぽろ青少年女性活動協会・菅原 亜都子＜以下、菅原＞

公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会の菅原と申します。私どもの財団は、札幌市内の児童会館や野外施設、若者活動支援施設などの管理・運営をしている財団になりますが、私自身は、札幌市男女共同参画センターの仕事を 15 年間行っております。そういった意味では、今回お声がけいただいたのは、今回のビジョンにジェンダーの視点をしっかり入れなさいということを期待されて参加させていただくと思っております。ゴール５にジェンダー平等というのが入っているのですけれども、このゴール５だけではなくて、すべての 17 の目標に対して、ジェンダーの視点というのは欠かすことの出来ない視点だと思っております。また、今回のビジョン作成というフェーズもそうですが、ビジョンが出来上がった後の具体的に取組を行うフェーズ、モニタリング、それから評価、統計に関しても、ジェンダー統計というのがまだまだ基盤が出来ていないところだと思うのですが、そういったビジョンが出来た後のあらゆるフェーズにおいてもジェンダー視点が不可欠です。そういったフェーズごとにしっかりジェンダーの視点を取り入れていくということをきちんとビジョンの中に入れていけるようにしたいと思っております。私どものセンターには、多様な女性の方が来館されますが、そういった方たちが、今回のビジョンを自分事だと思える、大切にしていきたい、こんな北海道にしていきたいと思えるような、そういったビジョンを皆さんと一緒に作っていけたらいいなというふうに思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

コープさっぽろ・鈴木 昭徳＜以下、鈴木＞

みなさんこんにちは。コープさっぽろの鈴木と申します。コープさっぽろは、全道に 170 万人の組合員さんがいらっしゃって、世帯構成率だと 50％以上、２世帯に１世帯以上がうちの組合員さんという組織で、店舗事業、宅配事業、配食事業等を行っております。昨今、SDGs という言葉、結構聞くようになりましたが、実は生協は、コープさっぽろだけではなく、1990 年代、全部の生協の 21 世紀理念というものの中で持続可能な社会づくりというのを理念として掲げております。ですので、生協の存在自体が持続可能な社会づくり、SDGs とまさに一致しております。先ほども申し上げたように、コープさっぽろは 170 万人の組合員さんがいらっしゃいますので、うちの組合員さんのために SDGs を推進することは、ひいては北海道のためにも SDGs を推進することに繋がるのかなというふうに思います。皆さんの色々な意見を通じて、うちのコープさっぽろに関する SDGs の更なる発展も考えたいと思いますし、皆さんと共に北海道の SDGs を推進したいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

ＪＩＣＡ北海道・野吾 奈穂子＜以下、野吾＞

みなさまこんにちは。JICA 北海道の野吾です。JICA はですね、国内の皆様のご支援をいただきながら、途上国、開発途上国の支援を行っている政府系の独立行政法人ですけれども、私自身は、もともと環境省の役人をやっておりまして、そこから転職をして JICA に来たという経歴があります。JICA 北海道ですけれども、スローガンが２つありまして、１つは、「国際協力で北海道を元気に」というのが JICA 北海道のスローガンですが、オール JICA のものとしてですね、「国際協力を日本の文化に」というものがあります。やはり、日頃から道庁さんにも非常に国際協力の実践というところでお世話になっていますが、色々なアクターの方々のおかげさまをもってですね、SDGs への貢献、また地方創生への貢献ということを JICA としてはやっているというとこです。後ですね、JICA は SDGs の１番から 17 番のゴールそれぞれについて、ポジションペーパーを作っているわけですが、もちろん JICA 単体ではなし得ないことなので、これもパートナーシップでもって進めていきたいというところがあります。JICA 北海道としては、児童のみなさんへの国際理解教育の推進ですとか、青年海外協力隊の派遣ですとか、あるいは、道内の中小企業の皆様、大学の皆様の技術ですとか、そういったものを海外展開するというような事業を行っています。それとですね、奇しくも今日の午前中に、私、ちょっと別な道教委さんが主催する運営協議会に参加してきたんですが、帰国・外国人児童生徒と教育の推進支援事業運営協議会ということですね、テーマとしては、道内の学校教育現場で多文化多様性の問題が、非常に今、喫緊の課題であるというお話がありました。やはり、今、道内で外国人との接点・交流というと、インバウンドのお話が注目されがちですが、今まさにグローバル化というのがどんどん進んできて、現場で非常に課題も出てきているということです。なので、我々が推進している国際協力、それによって得られた現場の、皆さんの知見が、またこの現場に還元されていくといいなというふうに私自身も感じているところです。最後に、一部の皆様はよくご存じだと思いますが、SDGs をテーマにして歌を作って歌っておりまして、先ほど、吉本さんのお名前が出ていたので、実は８月８日にステージが一本決まりまして、ファクトリーで 16 時 15 分から歌わせていただくなど、色々なアプローチを持って SDGs の情報発信を行っている次第です。どうぞ引き続きよろしくお願いいたします。

ビジョンの策定をめぐって

吉中　ありがとうございました。今の話を聞いているだけで、この懇談会は成功するというのを私は確信いたしました。では早速議事に入りたいと思いますが、お手元の次第をご覧ください。配付資料というところで、資料１から資料２、資料３－１～３、資料４と用意していただいております。みなさんお手元をめくっていただいて、全部そろっているか念のため確認していただけますか。大丈夫でしょうか。それでは、本日の予定されている議事（２）～（４）の３つが予定されております。（２）「「北海道 SDGs 推進ビジョン（仮称）」の基本的な考え方」、（３）「「北海道 SDGs 推進ビジョン（仮称）」の内容について」、（４）「北海道に

おけるSDGsの推進体制について」と、少し広い議題になりますが、どれも関連しているかと思いますので、もしよければ、まとめて事務局のほうからご説明いただいて、３つにまたがるようなコメントをいただければいいかなと思います。よろしいでしょうか。それでは、事務局のほうからご説明いただけますか。

渡邉計画推進課主幹＜以下、渡邉（主幹）＞

計画推進課SDGs推進グループの渡邉と申します。よろしくお願いします。座らせてご説明させていただきます。改めましてですが、国連で2015年に採択されました持続可能な目標、SDGsは持続可能な国際社会を目指そうという世界共通の目標であります。北海道におきましても、人口がどんどん減少してしまっている状況ですとか、未曾有の災害が頻発しているという状況で、地域の存亡に関わる難題に直面している状況にあります。北海道総合計画に基づいて行政の運営を行っていますが、総合計画でもこうした危機を克服するために、これからの50年、100年を見据えて、多種多様な地域資源を活用して、持続可能な地域づくりを取り組もう、と進めてきておりまして、SDGsの考えとこの辺は一致するものかなという認識をしております。今年、北海道命名150年という節目の年に当たりまして、今後の50年、100年を考えるうえで、道庁のみならず、道民の皆様、各市町村、道内で活躍されております企業・団体など、全ての方々が自らのこととして、SDGsに取り組んでいただくことで、北海道全体で持続可能な地域づくりを進めていこうということで、今回、北海道全体でSDGsを進めるに当たり、皆様で共通で考えられるものとしてビジョンを作っていきたいと考えているところから、今回、皆様にお集まりいただいたところでございます。
＜以下、資料に沿って説明（省略）＞

吉中　ありがとうございます。詳細にご説明いただきました。まず資料２の策定では、ビジョン作成のプロセス、タイムスケジュール、背景などをご説明いただいて、資料３－１では、６月に策定された骨子案の概要やさらになぜこういう文言を書いてきたかというようなご説明をいただいたかと思います。そして資料３－３では、空欄があるとおり、ここあたりのこれから埋めていく作業があるのかなと思いますが、骨子案の中で提案されている、優先課題ごとの対応方向を意見交換したいということだと思います。この後、ざっくばらんな意見交換というのをさせていただければと思いますが、凄く広い範囲なので、まずは資料２あたりでご意見・ご質問等をお願いします。

小泉　資料２についての前に、後で齟齬があると困るので、この懇談会の位置付けを確認したいのですが、この懇談会の目的はSDGsに関する意見交換を行う場と書いてあり、内容としてはビジョンの策定に向けた意見交換やSDGsの推進に関わることということで、今年度３回程度開催とされていますが、意見の扱いはどういう扱いになりますか。あるいは、もう少し言えば、ビジョンは道の行政に反映させるだけではなく、多様なステークホルダーに反映させるということが前提だと思いますが、懇談会はビジョン策定の主体なのか、参考意見を言う場なのかということを確認したい。

石川（課長）　我々だとやはり行政的な計画あるいはビジョンになる傾向がありますので、そうならないように、SDGsを実践されている方にお集まりいただいて、その意見を踏まえて一緒に作っていきたいという思いで懇談会を開催しています。ただ、最後は我々が責任持って作らざるを得ませんので、道庁の立場としてビジョンを作ります。どういう扱いにされるかということですが、意見を踏まえて、懇談会の中で一緒に作っていきたいという思いが強いという気持ちは理解いただければと思います。

小泉　構えとしては、作る主体として捉えていいということでしょうか。

石川（課長）　はい。

小泉　ついでにもう一個。先ほど定森さんもおっしゃっていたと思いますが、ビジョンは凄く重要だと思うんですね。ビジョンをベースに、色々な具体的なことに反映されていく。今回のビジョンというのは、説明にもありましが、行政の計画に反映させるだけのビジョンではなく、あらゆるステークホルダーに対応するビジョンを作りたいということだと思いますが、そうであるなら、ビジョンを作るプロセスに多様なステークホルダーが関与しないと、「これがビジョンですよ。」と言われて、「ああ、そうですか。」というものではないと思います。もちろん、道民全員というのは限界がありますが、少なくともそういう姿勢でビジョンを作る必要があるのではと思います。繰り返しになりますが、このプロセスは少し拙速過ぎる。ビジョンを作る上で、既に骨子案があって、さらに原案が９月にできてしまい、年内に策定するという中で、どこまでオープンなプロセスをできるのかというと、かなり無理があるような気がします。私は懇談会のメンバーの方にも、そのオープンなプロセスを懇談会のメンバーとして作っていきましょうと提案をしていますが、それをするには、もう少し丁寧なビジョン策定のプロセスが必要ではないかなと思っております。議会等の対応があると思いますが、オープンなプロセスでやるために拙速に作ることをやめていますと説明すれば、議会も納得すると思います。

石川（課長）　2015年に国際社会全体の目標として出来ているものですので、我々としては、一刻も早く北海道全体で取り組みを進める必要があるのではないかという意識の下で、このビジョン策定のスケジュール、内部でも議論はしましたが、このようなスケジュール間で作業を進めています。しかし、小泉さんがおっしゃるように、非常にプロセスが重要だと思いますので、我々もできる限り、丁寧な策定作業を進めていきたいという思いですので、この懇談会の皆様に、我々も非常に期待をしているところです。この場でも丁寧に御意見をいただきますし、それ以外の場でも、可能な限り意見交換をする場を設けていきたいと思います。

吉中　プロセス、特に策定スケジュールのことでご意見いただいておりますが、何か他のメンバーからご意見はありますか。

定森　私も小泉さんの意見と同様で、中々変え難いスケジュールだとは思いますが、道民の色々なステークホルダーと共有するビジョンというには少しスケジュールが厳し過ぎて、12月に出来上がったものが共通のものだというには、ちょっと無理があるというのが実感です。総合計画に則った形に成らざるを得ないのかもしれませんが、その総合計画自体が広く道民から意見をもらって作られているものなのかよく分かりませんが、「無いのかな」と思うと、この懇談会以外の場でも意見を聞くようにするということを言われましたが、ビジョンができた後もやっていくということと、今回作るビジョンが不十分なものであるということはしっかりと認識する必要があるのではないかと思います。もう一点、総合計画や様々な道の計画に合わせて、指標を図の方で見させていただきましたが、既存の指標と同様のものに留まるのであると、せっかく新しいビジョンを作るには、意味がないのではないかと思います。今ある計画の不十分なところを、普段活動をされていたり、様々な取組をされている人たちは把握していたり気づいていると思いますので、指標についても、多様な意見を踏まえて追加したり、見直すということも必要だろうと思っています。

吉中　ありがとうございます。そのほか、何かありますか。

菅原　成果物として、ビジョンというものは、どれくらい具体性のあるものをイメージされているのかな、と思いました。先ほどから、スケジュールがタイトだというお話がありますが、本当にスローガンのような、みんながこんな社会になればいいと思い浮かべられるような質的なものなのか、もしくは具体的な数値目標もたてるというところまでなのでしょうか。また、このビジョンが決定した後にアクションプランのようなものがあって、その中で具体的な数値目標や事業や予算が決まるのでしょうか。このビジョンができた後に、道で実際に推進されるのは推進本部や各部署になるかと思いますが、道だけではなく多様なステークホルダーの方達がこのビジョンを使って実際に活動を初めて行くというときに、ビジョンがどのように道庁の中で運用されていくか、そういったイメージがあると、成果物としてのビジョンの具体的なイメージがわかるかなと思いますので、イメージがあれば教えてください。

石川（課長）　ビジョンは道庁内だけではなく、色々な方々にビジョンを見ていただいて、SDGsはこんなものなのか、こういうことに取り組んだらいいのか、そういったイメージが沸いていただけるようなものにしたい。ですので、先ほどから申し上げていますけども、オール北海道の共通の考え方を示すようなビジョン。ただ、SDGsとは何かとわかったとしても、例えば、具体的に道民の方々がどういう行動をとればいいのか、企業の人がどういうふうに取り組めばいいのか、一部の人は先行して既にやられていると思いますが、ビジョンに形をとっていただいて、こういう行動をすればいいのか、というのが分かるようにしていきたいというのが一つです。道庁はSDGsのビジョンを作りますので、今書こうとしている優先課題ですとか対応方向に沿った取組を道政の施策とか事業を毎年決めていきますので、そういった中に反映していく。大雑把に言うとそのような形を目指しています。

菅原　道の推進の取組に対しては、道が評価、モニタリングをしていくし、民間の部分に関しては、民間がそれぞれ目標達成できたかモニタリングしていく。個々に行っていくということですか。

石川（課長）　これから相談しようと思っていますが、優先課題を５つ付けており、それぞれに対応方向をいくつか書こうと思っています。それは皆様の意見をいただいて書こうと思っていますが、対応方法ごとに目標値が分かりやすいような指標をつけていきたいなと思っています。そうすると、先ほどご指摘ありましたけども、例えばこういうデータで指標を作ろうとしたとき、データがとれないと指標が設定できませんので、そこも見ながら、これから調整していく必要があるかなと思っています。ただ、あくまで現状・課題で示すようなデータをもって、例えば、現状の「100」を「120」にしましょうということを書こうと思っていますので、それを何にするかというのはこれからのご

相談になろうかと思います。

菅原　優先課題ごとの長期的な数値目標というのは懇談会の中で考えていくということですか。

石川（課長）　こういうデータで設定したらいい、というようなご意見をいただいて、それを我々で一度考えさせていただいて、その数値で本当に毎年評価できるのかといったことを調整させていただいて書き加えていく。

菅原　わかりました。

吉中　他のメンバーの方、ご意見ございますか。

小泉　まず名前ですが、「北海道 SDGs 推進ビジョン」という名前が、名前の良し悪しというよりも、少し整合性がとれないと思います。例えば、骨子案では「４ ビジョンの推進」というのがありますが、推進ビジョンを推進、つまり推進の堂々巡りといいますか、推進ビジョンを作り、それをまた推進する。もしかしたら推進ビジョンを推進するビジョンを作らなければいけないのかといった堂々巡り。2030 年が目標年ですから、2030 年までに SDGs は達成しなければいけないわけですよね。明らかに達成ビジョンの方がいいと思いますが、いかがでしょうか。

石川（課長）　これについても、内部でも凄く議論がありましたが、SDGs そのものはゴールなのに、ゴールを推進というのはおかしいのではといった議論は確かに内部でもしました。今おっしゃられるように、SDGs の達成に向けた取組ということだと思いますが、我々はそれを SDGs の推進と言っているところです。ですので、言われている意味は同じだと思いますが、表現の仕方の問題だと思います。なぜそういうふうにしているのかというと、国において、自治体が SDGs を推進するための取組コンセプトを取りまとめていて、その中で SDGs の達成に向けた取組を SDGs の推進と言っていますので、それを踏襲して我々も使っている。

小泉　こだわりがなければ、取ってしまえばいいと思いますが。「SDGs ビジョン」というような。

石川（課長）「推進」を取るということですか。

小泉　はい。推進ビジョンの推進、というのは何か変ですよね。

石川（課長）　確かにそれは内部でも議論しました。ゴールなのに推進を使うのは違和感があると。少し考えてみます。

吉中　名前は検討していただきたいと思います。

石川（課長）　皆様からも意見いただきたいと思います。

吉中　座長がどこまで話していいか分かりませんが、今の議論はすごく面白いと思って、推進ビジョンの中にビジョンの推進という項目があるというのは、実はこのビジョンの推進というところが肝ではではないかと思います。ビジョンができた後、どのように進捗を測るのか、道庁中ではどうする、それ以外の人はどうするというようなご質問を受けたましたが、資料２でいうと、真ん中のイメージのところに書かれていて、SDGs 推進ビジョンが真ん中にあり、道庁では、総合計画の下にある色々な総合計画に反映させていく。そういうツールを使って、この SDGs の推進のモニタリングをしていく。さらに道庁以外の多様なステークホルダーにも、この推進ビジョンをツールとして、SDGs 達成に向けた取組を折に触れて見直しながらやっていくということからすると、このビジョンの推進というところが一番の肝のような気がします。また、本当にタイトなスケジュールで大丈夫なのかとも思いますが、先ほどの説明でそうかと思ったのは、資料４の推進体制について、この「（仮称）北海道 SDGs 推進ネットワーク」は、実は８月に立ち上げたいということからすると、ビジョン策定と平行して推進体制が立ち上がっていくというイメージで提案されています。そうすると、ビジョン策定のところから、今の懇談会メンバーを超えた広いネットワークを立ち上げて、その方々の意見も聞いていこうということを狙っているのかなと思っていまして、そういうところが、もう少し見えるように、例えば、策定スケジュールのところに、ネットワークをどのように位置付けていくか、パブリックコメントや市町村への意見照会と 10 月にありますが、その前後で、このネットワークを通じた地域懇談会みたいなものをやってみる、そのようなものがあると、策定のところからできるだけ多くの人の御意見もいただき、実施にも繋がっていくということがあるといいと思いましたが、この理解はあまり間違ってはいないですか。

石川（課長）　ネットワークについても、８月には立ち上げたいと思っていますが、現在調整中ですので、具体的にどういった形で回していくかというのは、考えなければいけないのですが、座長からもご指摘ありましたように、ネットワーク組織の中でも、当然、その段階のビジョンを提供させていただいて、色々なご意見をいただきたいと思っています。先ほど、あらゆる機会を使って意見を聞いていくとご説明しましたが、１つとして、これが入っています。

野吾　ご説明ありがとうございました。読めば読むほど、よくわからなくなってきています。質問ですが、資料２のビジョンの位置付けの２点目に、「ガイドライン」とありますが、先ほど石川課長もおっしゃっていたように、これを読んだ道民の人が「SDGs ってこういうものだ」、「こういうふうに進めていこう」というヒント集というようなイメージになるのか、「ガイドライン」という言葉でよく分からなくなってきてしまった。先ほど菅原さんもおっしゃっていたように、どこまで精緻化された内容であるべきなのかというところかなと思いました。定森さんがおっしゃっていた、不十分なものであるという前提というのは、作った時点ではベストなのだろうけれども、時間が経っていくと、どうしても陳腐化してしまうものだと思いますので、そういう意味で見直しも必要だと思いますが、「ガイドライン」という言葉になると、結構具体的なものでないといけないのかなという印象を持ってしまいました。

石川（課長）　これについても、「ガイドライン」がいいのかという議論はしましたが、我々のイメージとして、SDGs の 2030 年のあるべき姿を描いて、バックキャスティングでどういう取組をしていくのかというのは、なんとなくイメージはわかりますが、そではなく、我々が考えている SDGs は道民の色々な人たちが色々な場面で色々な取組をしてもらいたいと思っていますので、ビジョンを見て、「こういう取組をすればいいんだな」というイメージが沸いていただけるような考えを持っています。ガイドラインがいいのかどうかという議論はあると思います。「マニュアル」など、色々考えましたが。それで、先ほどご説明させていただいた資料３－３ですが、優先課題ごとに対応方向を書いて、そこに取組の成果を測れるような指標を説明して、具体的に何をするのかというところで、道民の方はこういう取組、あるいは企業の方であればこういう取組が考えられますよ、そういうことを皆様の意見を聞きながら書いていきたいと思っています。

野吾　ステークホルダーごとに対応方向を書いていくということですか。

石川（課長）　例えば、１の安全・安心社会で貧困対策をする必要があると対応方向に書くとすると、道民の人たちはこういう取組がありますね、企業ではこういう取組がありますね、そんなことを書いていけないかなと思っています。ビジョンを見て、「こういう取組でいいんだ」、「SDGs をあまり深く考えなくても、こういう取組をすると SDGs に繋がっていくんだ」、そういうことがイメージできるようなものにしたい。それをなんとなくガイドラインを呼んでしまっていますが。

野吾　わかりました。ネットワークについても質問がありますが、先にビジョンの方を。

清水　自分から首を絞めるようなことを言ってしまうかもしれませんが、資料３－１の２ページ目、ビジョンの推進の（１）の企業についてです。「中核的事業を通じた SDGs 達成への貢献」と書かれていますが、「貢献」くらいではだめじゃないかなと思っています。企業には「責任」くらい与えてもいいのじゃないかと。CSR でも「貢献」ではなく「責任」ですから。「責任」という言葉に変えてもいいのではないかと思います。また、ニワトリかタマゴか分かりませんが、問題を解決していかなければ、ステークホルダーは増えない気がします。今、北海道民が抱えている課題、この辺りを明確にしていただくこととして、それを我々も含めて道民が知らなければ、企業の皆さんも知らなければ。課題を解決していくことでステークホルダーは増えていきますし、誰も取り残さないということであれば、その問題・課題に関わってしまっている方たちのことをしっかりとみることがまず大事だと思います。その辺があまり明確になっていないような気がします。例えば、資料３－３の一番上の枠の「北海道取り巻く状況」に、「年間総労働時間」が書かれていますが、これはどれくらいで、どれくらいにするといいだろうか、というものも明確になったほうがいい。その下には「就業率」があり、これも、現在どのくらいでどうなるべきか、というように明確になったほうがいいのではないかと思います。ビジョンを作ることで、目を輝かせる人もいると思いますが、逆に、「なんだこれ、僕に関係ないよ」という人が、今、あまりにも多いのかもしれません。そのために、問題・課題を解決していくということも平行してやっていく。どのステークホルダーからでも、同時並行してやっていかなければならないという、自覚や考え方が必要ではないかなと感じていて、今ここで議論されていることは、課題の中の方たちに向いていないとか、意識がない方たちを度外視してないかと感じました。

小泉　まず一つは、ステークホルダーの考え方ということで、清水さんがおっしゃられたこと重なると思いますが、持続可能な開発ということのテーマ、目標なわけですよね。持続可能な開発という中で、SDGs では「誰一人取り残さない」というスローガンを掲げたわけです。逆に言えば、これまでの開発の中で色々な人が取り残されてきたということの反省の上に立ってそうなっているわけです。ですので、一番のステークホルダーは、取り残されがちな人々だと思う。国連では、持続可能な開発に関わる会議の中で、

９つのメジャーグループというのがあり、女性、若者・子ども、先住民族、農業従事者、労働者・労働組合、NGO、ビジネス・産業、科学者、自治体となっています。ここのステークホルダーの捉え方に姿勢がでていると思います。持続可能な開発を進めるという意味合いが。正直に言いまして、道が作った骨子などを見ても、SDGs が一番に掲げている「誰一人取り残さない」ということが感じられないわけです。そこは最重要なポイントだというのが私の意見です。また、北海道で総合計画を作ったばかりですし、総合計画の期間がかなり 2030 年に近いところまでですので、それと反するものを作るのは変だと思いますので、整合性を考えることが必要だと思いますが、総合計画をあまり下敷きにしすぎると何のためのビジョンか分からない。例えば、区分の仕方とか、価値と強みなどは総合計画から引っ張ってきたものですよね。同じことをやっていても仕方ないのではと思います。むしろ、もっと違う区分、誰かも言っていましたが、違う切り口とか視点で、SDGs と絡めて光を当てていくことのほうが、重要ではないでしょうか。下手に総合計画を下敷きにすると、発揮しにくくなると思います。

ビジョン骨子の内容について

吉中　段々、骨子の中身の方に入ってきていますが、何かございますか。骨子の「北海道の取り巻く状況」で、小泉さんがおっしゃっていた、「世界に誇れる北海道の価値と強み」を８つあげていただいていますが、これはどこからオーソライズされていますか。

石川（課長）　総合計画からオーソライズされています。改めて、総合計画とマッチングしてて、これを項目別ごとに SDGs の推進に貢献できるんではないかな、ということで改め確認できたので、そのまま今掲載しています。

吉中　骨子の１番、２番なんかは、背景的な位置付けなので、ほんとに議論すべきなのは、３番、４番だと思いますが。

小泉　「めざす姿」自体が総合計画とほぼ同じ。「世界の中で」があるかないか。

吉中　骨子の中身のところに入ってきておりますが、何かご意見ありますか。

大﨑　骨子についてですが、２番の取り巻く状況で、総合計画から出てきていますが、せっかく SDGs のということで 17 ゴールが掲げられているので、北海道の現状や課題なども、①～③のようにまとめるのではなく、17 ゴールごとに、資料３－２として出していただいていますが、情報を並べ替えていただきたいです。過去に EPO でも 17 ゴールに基づいて、北海道の現状をデータとして出して欲しいというような意見がありましたので、時間のない中、道のホームページで調べさせていただきました。公開している情報で 17 ゴールごとに指標を出すことはできましたが、探す身としては大変で、何がどこにあるか、全然わからなく、大変でした。さらに指標を、経年変化で見える化されるとより良いと思っています。例えば、漁獲量の変化なども経年変化であれば良いと思います。報告によっては数字だけで出されていて、現状を経年変化で見れるような状況になっていなかったのが結構見受けられました。まず、SDGs ということなので、そこを是非お願いします。指標はお持ちだと思いますので、一度、現状をみるという点でも整理していただきたいと思っています。もう１つ質問ですが、３番に「北海道のめざす姿」とありますが、「輝きつづける北海道」というのは、具体的に「輝きつづける」とはどういうイメージでしょうか。私が思うには、「輝きつづける」とはずっと頑張り続けるというようなイメージがあり、少し疲れるイメージ。磨き続けなければいけない、走り続けるとかそういった感じがしますが、具体的にどのようなイメージで、この言葉を選ばれたかをお聞きしたいと思っています。

吉中　１点目の質問は、資料３－２のようなイメージのものではなくて。

大﨑　今、道の方で色んな指標をお持ちだと思いますが、ゴール１でしたら貧困の関係なので、子どもの貧困率などそういった指標があれば、それを経年変化のグラフにして、経まとめて見れるようにして欲しいと思っています。時間軸を置いて現状が分かるようになるといい。

吉中　モニタリングした時点の数値だけではなくて、トレンドをしっかり追っていくということですね。

大﨑　そうですね。数値はお持ちだと思うので、後はグラフを作るだけかなと思います。

吉中　まだ空欄のとこもありますので、これから考えていかないといけないですね。２点目については、何かありますか。

石川（課長）　総合計画の「めざす姿」は「輝きつづける北海道」にしていますが、それは課題を解決し北海道の価値とか強みを活かして、今輝いているものはさらに輝くよう、安全・安心な地域社会を形成していこうというイメージです。将来にわたって、安全・安心に暮らせる地域社会を形成していこうということを「輝きつづける北海道」としています。

大﨑　安全・安心な暮らしが「輝く北海道」ということですか。

石川（課長）　正確に言うと、将来にわたって安全で安心して心豊かに住み続けることができる活力ある地域社会の形成、これを「輝きつづける北海道」として目指していきましょうとしています。そこで SDGs の世界共通目標という視点を加えるので、「世界の中で輝きつづける北海道」という思いを込めて、仮ですけども、骨子の段階ではそういうふうにつけています。

小泉　これはビジョンなので、ビジョンの中で１番の中心がこの「めざす姿」というとこだと思います。なので、骨子案として「めざす姿」があるのは、何もないとイメージがつかないのでわからなくはないですが、元に戻りますけど、これは多様なステークホルダーにとってのビジョンであるためには、ここはすごく議論が必要だと思います。ですので、あまりこれを前提にしないで考えられるようにしてほしいというのが私の要望。総合計画の「めざす姿」だから取り入れたいというのは分かりますが、正直、具体的なイメージが沸かない。例えば、一文でも「誰一人取り残さない」というのは、キャッチフレーズでもあるけれども、向かう方向性が明確に表現されていると思います。だけど、「輝きつづける北海道」はなんだかよくわかんないというか、何をもって輝くとするのかは人によっても違うと思いますし。外に向けて北海道をアピールするというイメージを全体的に感じますが、どちらかと言うと、先ほど清水さんも言われていましたが、中を向くと言いますか、北海道に住んでいる一人一人がきちんと幸せに生きていけるということが、SDGs を参照とした目標になると思います。どう表現するかは別にして、そういう視点がもっと出せないと、推進していきたいという意欲が沸かないというのが正直なところです。

吉中　「世界の中で輝きつづける北海道」と括弧書きで書いてあるのは、キャッチフレーズ、キャッチコピーみたいなことだと思いますが、その下に３行で説明していただいていて、さらに資料２の方では、「道民生活の質の向上」、「地方創生の推進」、「北海道ブランドの向上」、「ビジネス機会の拡大」、まさに北海道の中で北海道の人たちの生活を持続可能でさらに発展していこうというようなことが書かれていますので、ここからいきなり「世界の中で」というキャッチフレーズになるのかという疑問もあるかもしれませんね。私は逆にこれを見たときに、「世界の中で輝きつづける北海道」とい打ち出すなら、どうして国際協力の推進や地方自治体レベルでの海外貢献みたいなものが出てこないのかなと思い、見ていたところ。もしキャッチフレーズを、凄く上手なコピーライターみたいな人がいて、全体ができた時につけていただけると一番響くものが出来上がっていくのかもしれないですが。下の３行については、ご意見ございますか。骨子の３の（１）の「めざす姿」の下に「世界に誇れる北海道の魅力を磨き、育て、様々な強みを活かし、SDGs を推進することによって、「世界の中の北海道」としての存在感を高めながら、将来にわたって安心して心豊かに住み続けることができる地域社会を形成をしていく」とあります。小泉さんがおっしゃったように、誰も取り残さないというのが少し薄いという気がします。そのほか、何かご意見ありますか。キャッチフレーズはちょっと置いといて、説明している文面で何かご意見をいただければ。

鈴木　上手くまとめられていませんが、そもそも SDGs は誰のためのものかといった時に、ここにいる我々のためではなくて、子どもや孫達が安全・安心に暮らしていける北海道のために、今の我々のライフスタイルはこのままでいいんですかというところが SDGs だと思います。そういったことを考えると、子どもや孫が北海道で暮らしていくためには経済力もないといけないというところで、道庁さんも考えられて「世界の中で輝きつづける」とつけられて、少し誤解されたのかなと思います。あくまで大事なのは、皆さんの一番可愛いお子さんやお孫さんが二十歳になるのは何年かと考え時、もうとっくに 2030 年超えてしまっている。もう近々の課題。少し戻りますが、スケジュールを皆さんタイトだと言っていますが、2030 年まで後 12 年ちょっとしかありませんので、オープンディスカッションをだらだらやっても間に合わないです。ここは「えいっ」とやってしまわないと駄目です。その中で、道庁さんの総合計画というのは、これはこれで将来のことを考えられて作られているものなので、別に SDGs に沿ったものだと私は考えます。ただ、道庁さん以外の人も含めた SDGs だとなると、少し分かりづらくなってしまうかなというところです。もっと幅広くやるなら、子どもの副読本で SDGs がありますが、それぞれのゴールごとに何ができるかというようなところまで落とし込んで考えていますよね。やはりそういうところにならないとみんなの SDGs にはならない。私はこの骨子のところを否定するつもりはなくて、それはそれでいいと思います。道としては SDGs こうですよと。では多様な意見を組んで何か KPI を作る必要性があるのかというところですよね。それについては個別のゴールでは作れないですけれども、やはり北海道全体として何十年後

かを考えた時に、「今みたいにきれいな水を飲めますか」、「きれいな空気の環境で住めますか」、「仕事ありますか」、「そういった環境を維持するためにどういったKPIを設定しましょうか」ということを議論すればいいのかなと思います。

定森　今の意見に対して、子どもや孫の将来のことを考えるという視点が大事だというのは本当にそうだなと思いました。加えて、既に色々と困っている、大変な状況にいる人たちもいるので、そういった人たちのことも、小泉さんが言われるように、置いてけぼりにしないというところも重要だと思います。やはり、「誰に」というところが見えにくいというのが、「めざす姿」とまで言えるのかなと私としては思いました。また、進め方について言われていたことで、中々、多様な意見を聞くと時間かかってしまうということはわかる反面、やはりどこかで聞いていくという姿勢も重要だと私としては思っています。ただ、他の手法、例えば、副読本などで伝えていくというのは、推進という意味では色々な形でのやり方をしていると、これはどうしても道庁の推進でと切り分けなければいけないというのは、先ほどの鈴木さんのご意見だったと思いますが、そこは私も同意見ですので、これで作って、またその外でどういうふうに意見をくみ取ったり、意見を伝えていくかということが重要だなと思います。

有坂　ビジョンについてですが、RCEでもビジョンを掲げていて、それを作るのに実は２年かかりました。一つの単語の意味から凄く議論して、一番わかりやすいところで、「開拓」という言葉が最初入っていましたが、それは誰目線かというところで、アイヌの人からしてみれば、「開拓」の意味が「未開の地を拓く」という意味なので、北海道は未開の地ではなく、既に先住民族であるアイヌの人たちが住んでいたという視点から立てば、「開拓ではない」という議論を丁寧にやった結果、２年かかってしまいました。やはり小泉さんがおっしゃっているように、めざす姿というのは、みんなが納得できるというか、わくわくするような表現であるべきかと思います。スケジュールは確かにタイトで大変だとは思いますが、仮に変えられないとした場合に、今回のビジョンというのはあくまで仮のものであって、状況は変化するもので、それに合わせて変えていく。最初は小さく初めていくと先ほど渡邉さんもおっしゃっていて、そういうもので良いとは思いますが、広げていくということは様々な意見が入っていくということになりますので､それはやはり変わっていくものだと思います。ステークホルダーが変われば「めざす姿」も変わってくると思いますので、それに対応できるということをビジョンにいれていただきたいと思います。これで決まりではないと。時間や環境の変化に対応していくということ。やはり未来だけではないと思います。今、大変な人がいるというのはまさに、今の積み重ね、連続性の上に未来があるので、今の問題を解決しなければ、先もないと思います。もちろん、今は過去からの積み重ねでできているので、過去も振り返らなければいけませんが。RCEのビジョンは「北海道の歴史と開発を踏まえ」と言っていますが、昔のことから学ぶことはたくさんありますし、それで今があるので、前のことも大切にしたい。

今の北海道の動きとして、SDGsの未来都市に選ばれた29の自治体のうち、都道府県は４つ。北海道と神奈川と長野と広島。この４つのひとつということは、非常に注目されていると思います。その中で、今ここで出すものというのは、みんなが見ると思います。道民だけではなく、日本全国の人、あるいは世界の人にも見ていただけるものになると思います。それに対応できるくらいの「北海道のやる気」みたいなのをしっかり反映できればと思っています。骨子の中にある「ビジョンの基本的な考え方」のところに、「ステークホルダー間の連携した取組を進めることが不可欠」と書いていただいていますけれども、それをするためにはどうしたらいいのかということを本気で考えていきたいと思います。小泉さんが先ほどから何回も言っているように、国連のメジャーグループの人たちの位置付けですとか、SDGsを作るに当たってはさらにその他のステークホルダーということで、高齢者、障がい者、ボランティア団体など、さらにステークホルダーを増やしています。それが必要だという流れなんだと思います。そういうことを考えると、ビジョンの中の「各ステークホルダーの取組」で挙げられているようなステークホルダーだけではない、もっと多様な人たちを明記すべきなのではないかなと思います。

具体的に推進方法についてはどうするのかもできれば入れていただきたいですし、先ほど大﨑さんからもあった指標の話ですが、挙がっているのは、道庁の中の施策に対応しているだけ。色々な団体が指標を出していると思います。例えば、国際NGOが出しているものもありますし、そういった指標もみていただきたい。例えば、RCEの酪農学園大学で、ゴール15だけに注目をして、「陸域の生物多様性の保全」ですけど、そこに国の国立公園のエリアと道庁が指定している自然保護区とか、コンサベーション・インターナショナルという国際NGOが出している重要なエリア、北海道も出ていますが、それを合わせてギャップをみたりするマップを作ったりしています。行政の施策の基準だけではなく、色々参考になるものが落ちていると思います。ここにいらっしゃる方とか、専門家の方、どういう指標がいいのかと研究している人もいらっしゃると思いますので、そういった方の知恵をお借りしたいと思います。議論の進め方も、どうやったら多様なステークホルダーが参画をしながら社会の意思決定をできるかという手法について研究されている方もいらっしゃるので、そういったところも是非活用できるといいのかなと。他にもたくさん専門家の方がいますので、なるべくそこは開いて知恵を借りながらやっていければいいのかなと思います。

吉中　具体的にどのような専門家の意見を聞いて欲しいとか、この人にも入ってきてもらいたいというようなものがありましたら、是非出していただいて、参考していただければと思います。今、ステークホルダーの分け方として５つに大きく分けていただいていますが、もっと細かな分け方の方がいいのではというような意見も出ています。国連の分け方を参考にすべきではないかという意見もございましたが、その当たりは何かご意見ございますか。

鈴木　SDGsを普及するにあたっては、ハードルを上げない方がいいと思います。普段、普通に行っている活動がそのままSDGsに繋がりうる、大体が繋がっているという認識すらないのが現状です。ですので、そういった視点で改めて自分たちの活動というのを見直した場合に、「もう少しこういうことができる」というように意識を変えることが大事かと思います。そのためには、細かく「SDGsはこうだ」と小難しい話しにしてしまうと、最初から「わー」という感じになってしまう。別に難しいことではなく、普段の活動の中でできることだということを知らしめることが重要。北海道に住んでいる子どもなどが、SDGsとは何かということを普通に話せるとか、そういうことで全然いいと思います。

小泉　今のことに関連して、おっしゃっていることはよくわかりますが、あまり矛盾しないと思います。ステークホルダーを無理に細分化したいという話ではなく、先ほどの国連のメジャーグループでいえば、子ども自体がステークホルダーです。そうすると、子どもにとっても他人ごとではない、ある意味近くなるわけです。女性というのがステークホルダーとして位置付けられていれば、女性団体がSDGsを特段意識していなくても、自分達のことと関係あるんだというふうに、よりSDGsが近づく。それはあまり矛盾しないと思います。しかし、一般的にNGOといっても広いですし、団体と言ったらなんでも入ってしまいますよね。それよりは具体的に、SDGsというか、アジェンダで繰り返し言われている脆弱な立場に置かれている人達、それは誰なのかということが一番重要だと思います。それは子どもであったり、先住民族であったり、女性であったり、外国人であったり。もちろんそれだけではないですが。そこを取り残さないことで、結果的に、みんなを取り残さないということに繋がるというのがある種のスタンスとしてあると思います。持続可能な開発ということを打ち出していく中に。そこは国内や地域で広げる時に意識するべきだと思います。

清水　私も小泉さんと同じで、企業という一括りで書かれていますが、企業といっても、投資する側、経営する側、働いている側がいますよね。それぞれステークホルダーとしての考え方はまったく違うと思います。これを切り分けるという意味ではなく、切り分けて考えていかなければならない。ちゃんとそっちの目線、そっちの目線と切り分けて考えなければならないということは確実にあると思います。企業という一行だと広すぎる。また、企業の中でも色んな役割の企業、事業体があり、これもまた考える視点が全然違うということ。そういうのもあると思いますので、それを無理して分けるわけではなく、色んな視点から考えていくその目線というのがないとまとまっていかない。また、色んな人達がステークホルダーにあるということには中々ならないだろうなと感じたところです。

菅原　私もステークホルダーを明記するということには賛成で、本当に私たちは、そういったことを特別に書かなければ必ず忘れると思います。そういった方達の意見を聞くということを私達が忘れないためにも、絶対に入れていくべきだと思います。もし仮にSDGsの達成に向けた取組が全体の数としては進んでいたかもしれないけれども、例えば、男性だけが享受していて、女性が享受していないとか、障がいを持っている方達は全然享受していないとか、ある特定のステークホルダーには影響が与えられていないということがよくあります。その視点を私達は忘れてしまいがちだと思います。ですので、あえて書いていく必要があるなと思います。また、国連のメジャーグループもありますが、北海道で取り残してしまいがちな人達は誰なのかというところも今一度、考えるきっかけになるのかなと思いました。

野吾　今の鈴木さんのご発言から始まり、皆さんの意見をお聞きしていましたが、最近、私も、国際協力とかSDGsそのものの広報というところに関わって思うこととしては、発信して響く人は割と決まっていて、国際協力にできれば参加していただきたいと思い、色々発信していくのですが、必ず参加する人と、絶対海外なんか行かないという人と、中間層の人がいます。それぞれに対するアプローチの仕方は違うのかと思いますが、凄くアレルギーを持っている人でなければ、中間層の人にも、本当に簡単なことでいいから、一歩踏み出して、アクションを起こしてみていただきたいとJICAとしては思っているところです。先

ほど鈴木さんがおっしゃっていた、普段の活動の中でもSDGsに貢献しているということは実はあると思います。何というか、難しいことではない。しかし、先ほど皆さんもおっしゃっておられた、特別に書いておかないと忘れられてしまう存在だとかもあると思います。そこのバランスはすごく大事なのかなという気がしました。ですので、このビジョンを読んでほしい人に、何を届けたいか、伝えたいかという、ビジョンのビジョンというか、そういったイメージがすごく大事で、例えば、「めざす姿」を書いていただいていますが、これを読んで主体が誰なのか。やはり道庁さんが発信するものとなると、道庁さんがやってくださるものという印象をどうしても持ってしまいがちになると思いますが、そこを「いえいえ、これは皆さん方も含めた自分事なんですよ」ということを感じていただくための書きぶりも必要だと思います。決めていく上でのプロセス、意見聴取のプロセスの問題なのか、道政の方針かなという印象を持ってしましました。

鈴木　難しいですよね。道庁さんの立場だと、道はこういう数値設定しますというのは責任を持ってできると思いますが、では、民間の方にこうして欲しいというのは中々言えないと思いますし、それはまたおかしな話で、民間側が自分達で考えて、「我が社はこうします」とか「うちの団体はこうします」とか、自発的にボトムアップされていくのが本来のSDGsだと思います。

野吾　パートナーシップというところで、道庁さんだけでなくて、色々なアクターが取り組んでいいわけですしね。

鈴木　なので、いつまでにどこの段階までをやるのか、というのは中々難しいですよね。

小泉　今のお話に少し絡んで、言葉使いのことで、細かいところも気になってしまっています。例えば、「官民一体になった」とありますが、これに違和感があります。まず、道の人が自らを「官」と規定しないでほしいというのが一つ。また、一体となるというよりは、それぞれ立場性などが違うわけですよ。連携と言うのかわかりませんが、協力しながらやって行きましょうというイメージ。４文字でまとめるとこうなってしまうのかもしれませんが、ちょっとした言葉使いに、私なんかは違和感を覚えます。また、地方創生の推進というのも、別に国が言うのはいいですが、北海道が自ら地方創生とかいう必要はないような気がします。自分達の地域なんだから。地方と中央とかあまり関係ないですよ。そういうことも含めて、言葉使いの中に、誰に向いているのかということが結構現れてくると思います。

野吾　最近ですと、例えば、金融なども入ってくると思います。

石川（課長）　そうですね。おっしゃるように、安易に「官民一体」や「地方創生」と使っているかもしれないです。なるべく地方と中央の関係にならないようにとは思いますが。少し安易に使っていたかもしれません。

吉中　ビジョンができた後にみんなでやっていく。それぞれのセクター、それぞれのアクターの人が何をやっていくかというのがわかりやすいように、できるだけきめ細かに、何をすることが望まれている、責任がある、そういったことがわかってくる方がいいなと思いました。もう一つは、国連の分け方、あるいは国がやっているような分け方が色々あると思いますが、やはり北海道ならではの強み・特徴をどう活かしていくかという観点での分け方なども検討していただくといいのではないのかなと思います。例えば、典型的なのでいうと、農業従事者というのが国連では入っています。北海道で農業は外せないかなと。あるいはアイヌだとか。先住民というのも国連では入っています。国連で入っているものを全部入れる必要はまったくないと思いますが。北海道の強み・弱みを認識した上で、どういう分け方、考え方で推進していくかというのを、実際に書いてみるということを少し検討していただくといいのではないかと思いました。大分時間も来てますが、ほかに何かありますか。

大﨑　ステークホルダーを少し広げていこうという話になっていて、先ほど有坂さんが言っていた、ステークホルダーが変われば、色々な意見がでてきて、「めざす姿」も変わってくるだろうという考えは凄く賛成です。ビジョンというのは、不十分であり、今、決めるものではない。状況とか世界の動きというのは非常に早く変わっていくので、それに合わせて早く対応ができるものにする。まさに挑戦だと思います。難しいことだとは思いますが、せっかくの機会なので、柔軟すぎるのはどうかという議論あるかと思いますが、柔軟に「めざす姿」を皆さんで決めていく、アメーバのようにステークホルダーを少しずつ決めていく。そうしたことを目指して一緒にできるとわくわくします。

吉中　例えば、「北海道のめざす姿と優先課題・対応方向」の（２）で、骨子では５つの優先課題を出していただいていて、それぞれに取組の対応方向が付いているようですが、これについて今まで何のご意見も出ていませんが、コメント等ありますか。

大﨑　資料３－３について、単純な質問ですが、ビジョンの優先課題というのがあり、それに対応するのが左側のデータで整理をした、という見方をすればいいですか。

石川（課長）　資料３－３については、ビジョンに優先課題を設定しましたので、それに対して、ステークホルダーの方が具体的にどういう対応、取組をすればいいのかというようなことを、皆さんのご意見をいただきながら書いていきたいと思っています。

大﨑　それが右側のところですか。

石川（課長）　その２つの空欄です。

大﨑　左側は現状のデータや国の方針整理したということですか。

石川（課長）　それをくくり直して、５つ優先課題を設定しています。

大﨑　この空欄をこれから埋めていきたいということですね。

石川（課長）　そうです。原案になるまでの間で埋めていきたいと思っていますが、そこをしっかり説明していなかったですね。我々も具体的な取組イメージというのは、ある程度は持っていますが、皆さんもそれぞれの立場で取り組まれていますので、そうした部分も教えていただきながら書いていければと思います。

吉中　真ん中の一番大きなコラム、「ビジョンの「２ 北海道を取り巻く状況」で掲載が想定されているデータ」には、骨子の（２）に記載されている５つの優先課題が上から順番に並んでいて、それに対応すると想定されるデータが出ていると。左に行くと、該当する国が設定優先課題、さらに左に行くと、該当する地球レベルのSDGsのゴールを記載しているということですね。真ん中の大きなコラムから始まり、左にいったり、右にいったりするイメージですね。まず、我々に期待されているのは、右側にいく際に、どんなことが既にもう起こっているのか、どんな取組が進んでいるのか、あるいはどういう方向でそれを進めていけばいいのか、足りないとこは何かなど、そういうところのご意見を期待されているのではないかなと思います。

小泉　優先課題は、既定路線ですか。

石川（課長）　北海道にはこういう課題の方がもっと重要ではないのかというようなご意見をいただければ、それを踏まえて検討することには当然なりますが、我々が骨子段階で考えている優先課題は、現状課題を、あるいはSDGsのゴールを踏まえれば、この５つではないかと提案をさせていただいています。

小泉　案ということですね。

石川（課長）　はい。

小泉　あまり賛同を得られるかわかりませんが、個人的には、「持続可能な」という形容詞と「経済成長」という言葉は繋げるべきではないと思っています。「持続可能な開発」というのが、ある種、誤解を招く一つの要因なのかなと思っています。もちろんSDGsにも「経済成長」が入っていますけれども、少なくとも、所謂先進国と言われる国でこれから無理矢理経済成長していくというスタンスは、あまり「持続可能な開発」に合わないと思っています。普通に捉えれば、持続可能な経済成長というのは、「どんどん経済成長していきましょう」というふうに受け取られます。それが私達のゴールなのかと思いますので、あまりこの単語は取り入れて欲しくない。

吉中　現状ですとか、SDGsのゴールとどうマッチングさせるかという検討をされた上で、５つの優先課題を設定されたということだと思います。小泉さんからは、「経済成長」という言葉に違和感があるというご意見でしたが、他に何かありますか。

鈴木　同じようなことではありますが、持続可能な開発目標を掘り下げた５つのテーマになるので、この１～５の中で「持続可能な」と付くのは、日本語的におかしい気がします。つけようと思えば、全部つけれますので。「未来を担う人づくり」ができていれば、それは持続可能な社会づくりになると思います。「持続可能な」を取ってしまえばいいと思います。SDGsの根本というのは、経済と社会と環境問題、３つを同時に解決するっていうことですよね。環境だけでも経済だけでもだめで、３つを総合的に解決していくというところがもう少し伝わればいいのかなと思います。私は基本的にこの５つでいいと思っていて、後は日本語の問題。凄く雑な言い方しますけども、１～５の下に17のゴールを紐付けて、個別のアクションプランをつけて、KPIをつければ、できてしまう。ごめんなさい、皆さんを敵にすると思いますが。ぱっと作ろうと思えば、それがよくあるSDGsの民間側の作り方だと思います。それをどこまでドリルダウンするのかはわからないですが。基本

的な骨子としては、これでいいと思いました。

有坂　先ほど、菅原さんが挨拶の時に言っていたことは本当にそうだと思って、ジェンダーの視点を全部のゴールに入れると言ってしまうと、例えば、「未来を担う人づくり」にもジェンダーの視点は入りますよね。それこそ全部に入るかと思いますが、どうしたらいいかなと悩んでいます。何の回答もないのですが、そこはすごく重要だなと思っていて、どのように現したらいいのかが難しい。

菅原　鈴木さんがおっしゃったのも本当にそのとおりだと思いまして、ひとつひとつのゴールがあるだけで、それぞれの連関などが見えてこない。17 のゴールが個別に存在するのではなく、ひとつひとつが絡み合っていて連関があるということこそが SDGs の大きな特徴だと思います。そういった意味ではごちゃごちゃしたものができたらいいですね。①の中に②～⑤の視点も入っているだとか。

有坂　難しいですね。分けてしまうと他のところに関係ないのかと思ってしまいますが、そうではないですよね。全部に繋がっていますよね。鈴木さんがおっしゃっていた、同時解決をするには、分けてしまうのもどうかと。

野吾　そのダイナミズムが伝わらなくなってしまいますね。

有坂　だからといって、どう表現していいのかわかんないですが。ごめんなさい、投げてしまいましたが。

鈴木　個別の課題に 1 つのテーマが当てはまるわけではないですよね。私がそれをよくわかったのが、うちの CSR レポート。一番新しいものを、発行する直前に理事長から SDGs のアイコンをつけるよう指示があり、振りました。こういうふうにすると、1 個のアイコンだけがつくわけではなく、複数個がまたがってつきますよね。タイムリーなのは、生協の上部団体に日本生協連というところがあって、そこの環境の委員をしていたのですが、自分の事業を SDGs に当てはめて、どれが当てはまるのかと考えるだけでも理解に繋がる。単純に一対一対の対応ではないということ。ですので、文書化する時に誤解されないように、問題は複合的だというところを示すことは何かやらないと。ぐちゃぐちゃ過ぎると読んでいて混乱するので、ある程度整理はするけれども、これは A でもあり B でもあるというところをちゃんと示す。便利なアイコンがあるので、そこら辺を駆使してわかりやすく伝えることが大事だと思います。

吉中　少し時間をおしていますが、もうしばらくお時間大丈夫でしょうか。いいですか。まず小泉さんが手を上げられたので。

小泉　自由学校「遊」で『SDGs ×先住民族』という冊子を作りましたが、先住民族の課題とか目標とかを 17 ゴール全部に絡めて作りました。全てのものが全部のゴールに絡むかということはないと思いますが、多分、女性などは全部に絡むと思います。話しを少し戻してしまいますが、一つは、ステークホルダーごとに目標との関連を示す切り口がありえるかなと。もう一つは、事業ごとといいますか、取組ごとに目標とどう絡むのか。色々やるとごちゃごちゃになりますが、そういう視点は少し必要かなと思いまして。

清水　優先課題というのは 5 つに羅列する必要がないなというふうに今一度感じていました。もっと複合的なものでいいと思います。言葉としては難しいと思いますが。先ほども意見として言いましたが、逆に、この裏にある課題、問題点の方を明確にする。北海道で起きている問題点のほうだけは絶対に明確にするということをまずはやるべきではないかなと思います。それが表にでてこない限り、それこそ忘れがちになってしまって、取り残されるということに成りかねないので、そこだけは、早い段階で取り組んだ方がいいのではと思います。

吉中　遅れてるところ、取組が中々進んでいないところなどは現状課題のデータをみていく中で出てくるかとは思いますが。例えば、下川町さんでも先進的に色々な取組をされていると思いますが、今の段階で、北海道が音頭をとってビジョンを作るというところで、それが市町村レベルでどういう意味をもってくるとお考えになりますか。

木原　道庁さんで今取り組まれていて、皆さんの言ってることも理解できますし、どちらの立場も非常にわかります。普段、会議の中で私は道庁さん側に座っている人間なので。色々ご意見が出されていますが、うちの 2030 年の「ありたい姿」というものも、たたき台を作って町民さんに議論してもらうなど、やり方は色々あると思いますが、今回、ゼロベースでやりました。ただ、ゼロベースといっても、僕らがファシリテートできるわけではないので、専門家の方を招いて、その方のご指導の下で進めてきました。まず最初は、SDGs の読み方もわからないというようなレベルからですよね。僕らも含めてですが。まず、そこの壁を取り払うというとこが非常に大事だと思います。それがないと普及ができないのかなと。そのファシリテーターの先生は、今を基準にして、「2030 年に下川町内に増えていって欲しいものは何か」、「減るべきものは何か」、「変わらずあって欲しいものは何か」という 3 つの視点で議論していました。非常に入りやすかったです。下川で言えば、森林ですとか、循環型森林経営などをやっていますが、そうすることによって多様な意見が出て、実はそれが色々なものに繋がっている、「繋がり思考」というやり方でやってきました。点ではなく、色々なものが繋がっていて、この地域が成り立っているというようなことをやっていました。そういう意味では非常に入りやすかったと思いました。やっていくうちに皆さんも SDGs 自体を非常に理解していきましたし。今度、総合計画が新規になりますので、ゼロから始まりますが、SDGs のありたい姿を総合計画のめざす方向性にしています。今、7 つありますけども、この 7 つの一つ目「みんなで挑戦し続ける町」から「子ども達の笑顔と未来世代の幸せを育む町」まで 7 つあります。色んな方々が考えたもので、すごく地域の特性がでているなと思っています。これを総合計画のめざすべき姿に置き換えて、そのためにどういった施策をやっていけばいいのかという考え方でやっていますので、下川町的には非常にタイミングが良かったなと。SDGs でまずありたい姿を定めて、それに総合計画を乗っける。そういう手法をとっています。総合計画のヒアリングなんかを今やっていますけども、その辺をまた町民の皆さんと議論していきたいなと。そういったことで、変に難しくしてしまうと中々入りにくくなるなと。

去年の 9 月、10 月頃ですか、広報で毎月 1 回程、SDGs とは何かから始まって、ずっと町民の皆さんが議論してきたものを広報に出していますが、だからといって、下川の町民みんなが SDGs を理解しているかというと、まったくそうではないと思います。まだまだごく一部だと思います。ただ一方で、最近、企業さんと非常に SDGs の関係でお会いする機会が多くなって、お話を聞くと、やはりもう企業では、「投資を得ようと思ったら、SDGs を意識しないととてもじゃないけどやっていけないんだ」というような話しをしていました。やはり、世界目標を会社、企業活動に取り入れていかなければいけないというところがありました。そういったところでも、下川町と一緒に何かできないかというお声がけを非常にしていただきますけれども。本当にそういったレベルから色々なレベルがあると思います。どこにターゲットをとるとなると非常に難しいと思います。百人中百人理解するというのは、中々できないことだと思いますが、わかっている人達はどんどんやっていけばいいと思いますし、そうではない人達は最初の入り口からしっかり丁寧に関わっていけるような、自分の生活に直接関わる部分もたくさんあるというところを理解できれば入っていけるのかなと思います。自分達の、下川町のそういった取組も振り返って、そう感じたところです。

吉中　現地というか地方自治体、市町村単位での取組が進んでいかないと、実際に物事は進まないのかなと、色々な分野で感じています。道庁の役割と市町村との役割の分担、あるいは道庁が市町村に何ができるか、あるいは市町村が道庁のビジョンづくりに何ができるか、そのようなことがどこかに出てくると面白くなるという気がしました。優先課題ごとにどんな取組、あるいはステークホルダーごとにどんなことを目指すべきなのか、やるべきなのかという話しをしたかったのですが、その中で先ほど言いましたが、農業というのが北海道で一番の産業で、一番の売り。日本の中で唯一自給率が達しているというところで、このビジョンづくりというのに農業サイドから期待することや、農業側でもこんな取組をしているというようなことが何かありますか。

柏村　私達は、次の世代が魅力的に感じる農業をやりたいと思い、色々な事業内容を考えたり、組織体制を考えたり、女性の意見が反映できるような事業、組織作りをしています。後は GAP という、国がオリンピックに向けて取組を進めている、安心・安全、環境配慮、農務管理、人権問題の項目で第三者が認証するといったものを社内で取り組んでいます。農業者からみると、自分達の事業が何かしら SDGs に繋がっていると、皆さんおっしゃっていましたが、マッピングを僕たちではできないので、農業でやっている取組が実はこれに繋がっていますよというようなことを分かりやすくしてもらえると、自分達も認識して取り組めます。また、自覚してやるのと、知らないうちにやるというのは違うと思います。自分の事業、本業を通じてどう社会の役に立っているのかというところを分かりやすくしてもらえるとありがたいなというところ。また、本日、専門家といいますか、今までやってこられた方の話は難しくて、中々意見が言えませんでしたが、誰のためにやっているのかが不明確な中での議論というのはすごく難しくて、どのレベルでやるのかというのもありますし、このビジョンを誰に向けてやるのかというのを始めに定めてもらえると意見もだしやすいと思いました。僕自身は内容を読んでいて、「世界の中で輝き続ける北海道」というのはキーワードとしても好きですし、骨子に対しては悪くないなというふうに感じました。

今後の進め方について

吉中　抽象的な議論が長く続いてしまったので、申し訳なく思いますが、何かいい残されたことはありますか。この後どうなるかというところですが、資料 2 でいくと、原案の策定に平行して推進ネットワークの立ち上げを目指すというようなお話がありましたが、我々がお手伝いする、意

見を言えるタイミングはありますか。

石川（課長） 原案を議会に報告する形になりますので、報告前に一度、原案をお示しさせていただいて、それに対して意見交換をやろうと思っていましたが、今日のボリュームを踏まえると色々、整理しなければいけない部分もありますので、我々の作業の兼ね合いもありますが、なるべく早めに原案のたたき台みたいなものを一度整理させていただいて、集まれないかもしれないですが、早めにお示しをして、それに対して意見をいただきつつ、懇談会を開催する流れになろうかと思っていたところです。この辺りについても、又別途、事前に相談をさせていただければと思います。

吉中 次回に向けての進め方について、ご意見などありますか。

有坂 これは公開されるということで、例えば、骨子案を見せながらみんなで考えるオープンな場というのを作ってもいいですか。

石川（課長） 呼んでいただければ、我々が行って説明することも積極的に対応しようと思いますし、大歓迎でございますので、是非よろしくお願いします。

小泉 原案はもうすぐ作ってしまうということですか。

石川（課長） 作業していかないと、議会に報告して、また議会で議論するということになる。白紙で議論にはならないものですから、ある程度は書き込まなければいけないことになると思います。

小泉 仮に原案ができたとしても、例えば、パブリックコメントをしますよね。その辺りに合わせて、色々な人に意見を聞く催しを開くということは、意味合いとしてはあっていますか。

石川（課長） 正確ではないかもしれませんが、議会に対して報告をするときに、基本的に「こういう考え方で原案を書いている」と説明をする形になります。その中身を変えるとすれば、「こういう理由で変えます」と説明しなければならないので、その説明が議会に対して理解が得られるような理由であれば、変える考えはあります。ただその説明ぶりが、理屈でなければ基本的には変えられない。その違いがあります。今おっしゃられたように、報告したものが後で簡単に変えることができる感じではない。

小泉 例えば、議会には出さなければいけないとしても、「色々なステークホルダーの意見を聞く時間は今回ないので、あくまでも道としてはこう考えていますが、これから様々なステークホルダーから意見を吸い上げて、それを反映させていきたい」というような説明はできますよね。

石川（課長） その説明を、懇談会を開催して色々な実践者の方々、取り組まれている方々から意見をお聞きして作っていくという説明にしているところです。皆さんの意見をお聞きして、知恵をいただいて原案を作っていくという整理をしています。

小泉 つまり、今日の話で原案を作るわけですか。

石川（課長） ビジョンの対応方向や取組イメージの具体的なアイディアをいただいて原案をつくろうと思っていたところですが、今日はそこまでいっていませんので、先ほど説明しましたように、早めにお示しをして、アイディア・意見をいただいて、原案を作っていくような流れを考えています。

小泉 私の理解では、直接策定に関わるのはこの懇談会かもしれませんが、それでは足りない。様々なステークホルダーと共有するビジョンを作るには、足りないというのが今回色々な形で出されたと思います。だとすると、例えば、ステークホルダー別の「ビジョンを考える会」などをやる必要があると思っています。それを道庁さんにやって欲しいというわけではなく、自分達でやれないかなと思っていました。そういうことを前提に、議会にも説明してもらえるといいかなと思います。これはネガティブなことではないと思います。ちゃんと意見を聞いた上でビジョンを作りたいと。これはそういうビジョンだという流れでやっていただきたい。それなりに労力をかけてやるとしたら、それだけ意味があるものでないと、自分達もそうですし、集まってきた人達も何言わされているかよく分からないという話になりますよね。そこが何らかの形で反映されるということを道の人にも共有してもらいつつ、それが全て反映されるかどうかは別にして、そういうことを道としても考えているというスタンスを示してもらえると。

石川（課長） おっしゃるとおりだと思いますので、我々、皆さんを通じていただいた意見というのは、最大限尊重しながら、一緒に作るという思いを持ってこの会議を開いていますので、そういった思いは可能な限り取り入れていきたいと思っています。

菅原 資料３－３のブランクになっているところは、懇談会で案を出すのではなく、道庁さんで作文するということですか。

石川（課長） 後でお願いしようと思っていましたが、そこは皆様にお聞きしたいと思っています。ですので、どこのタイミングになるかはこれから調整しますけれども、個別にお聞きしようと思っています。

吉中 我々はブランク部分の意見を出すときに、できる限り自分のネットワークを使い、色々な人の意見を聞いて、知恵を集める努力をしなければいけないということですね。

石川（課長） これしか示していないので、どのように書くか、イメージがあまり沸いていないと思いますので、フォーマットみたいなものをお示ししますので、「こんなことが考えられますね」、「こんな事例を知っています」といった具体的な中身を教えてもらえれば。それをベースに作れるかなと。そこは早めに相談させていただこうと思います。

吉中 公式のプロセスとしては、10 月にパブリックコメントがあるので、そこでどのような意見がでてくるかというのを改めて考えなければいけないというのと、その当たりで、市町村と意見照会といった所謂オフィシャルなプロセスだけではなくて、地域に出かけて説明会みたいなものをやるといったことをお考えいただけるといいかなという気がいたしました。

野吾 資料３－３の組み立て自体も、もしかしたら見直しされるかもしれないということですよね。

石川（課長） そうですね。

谷内（局長） 資料３－３はあくまでも、議論の参考として作ったものです。優先課題があって、それがどう繋がっているのかをこちらに示したというだけの資料で、これをベースに議論いただければという参考の意味合いで作ったものです。本当は我々のビジョンの原案みたいなものがあれば、もっとイメージが沸くのかもしれませんが、今日はそこまで至らなかったので。今日は、このビジョンの対応方向や取組イメージをそれぞれ教えてくださいという直接的なものでもなく、この場で色々出てきた意見があれば、それを吸い上げていこうかなという意味合いもありました。そういった意味で、もう一度、何かご意見などをお寄せいただけるようなやりとりを考えてみたいと思います。

野吾 ありがとうございます。冒頭でも申し上げたように、JICA でも 17 のゴールそれぞれに対応するポジションペーパーというのを作っていて、これも参考に見ていただければ。我々も感想やフィードバックをいただきたいというところもありますので。うちのポジションペーパーは、現状分析して、我が国の取組を書いて、JICA の持っている強み、特に注力するターゲット、といった書き方をしてはいますが、先ほど話しにでていた経済・社会・環境の同時解決というところまで書き切れているかというのは、若干疑問ではありますが。このようなペーパーもありますので、ご紹介でした。

鈴木 資料３－２の指標は、計画推進課さんだけで考えているものですか。私、農政部さんや環境生活部さんと仲良しなんですが、各部局の意見は集約されていますか。

渡邉（主幹） 基本的に既にある計画などから持ってきているものですが、各部の確認はこれから行う予定です。

鈴木 各部に意見を聞いて上げてもらえれば、また少し違ったものがでるのかなと思った次第です。

吉中 時間を超過してしまいましたが、活発な意見交換をいただきました。本当にどうもありがとうございます。先ほどお話がありましたが、我々の責任は続くようですので、頑張りたいと思います。どうぞ、よろしくお願いいたします。では事務局にお返ししたいと思います。

石川（課長） 本日は本当に長時間にわたりましてありがとうございました。これをもって本日の懇談会は終わりますけれども、また色々な面でご相談をさせていただきながら、このビジョンを少しでもいいものになるようにしていきたいと思っています。次回の正式な懇談会としては８月下旬くらいを予定しております。また、事前に調整をさせていただければなと思いますので、よろしくお願いいたします。また、事前にお知らせをさせていただいておりましたが、本日 18 時から懇親会を開催したいと思っていますので、ご出席をされる皆様には大変申し訳ありませんが、お付き合いをいただければと思っております。本日はこれをもって閉会とさせていただきます。ありがとうございました。

■第２回北海道 SDGs 推進懇談会　道提出資料（一部のみ）
◇資料１　第１回北海道 SDGs 推進懇談会における主な意見について

資料１

第１回北海道ＳＤＧｓ推進懇談会における主な意見について

	主な意見	道の対応の考え方
1	あらゆるステークホルダーに対応するビジョンを策定するならば、ビジョンを策定するプロセスに多様なステークホルダーが関与すべき。道が予定している策定プロセスでは少し拙速であり、もう少し丁寧にビジョンを策定する必要がある。	ビジョンの策定に当たっては、ＳＤＧｓ推進懇談会での意見交換をはじめ、道内各分野の団体や学識経験者、地域の有識者等で構成する道の附属機関の北海道総合開発委員会での議論、新たに設立するネットワーク組織会員や市町村、各種団体への意見照会や、さらにパブリックコメントなどを通じて、幅広くご意見を伺いながら、検討していきます。 また、道内の幅広い分野や地域で、ＳＤＧｓの推進に向けた様々な取組が展開されるよう、基本的な指針となるビジョンをできるだけ速やかにとりまとめ、多様な主体と共有していきたいと考えていることから、年内を目途に策定したいと考えています。 なお、ビジョンの策定後においても、ビジョンを踏まえたＳＤＧｓ推進に関して、様々な主体の方々と情報共有や意見交換等を行っていく考えです。
2	策定に当たっては懇談会以外の場でも意見を聞くということが必要であり、また、ビジョンが策定された後もビジョンに対する意見を引き続き聞いていくことが必要。	
3	「(仮称) 北海道ＳＤＧｓ推進ネットワーク」を今後立ち上げるが、ビジョンの策定に当たって懇談会メンバー以外のこうしたネットワークの参加者の方々の意見も聞いていくことも必要。	
4	そもそもＳＤＧｓは誰のためのものかというと、ここにいる我々のためではなく、子どもや孫たちが安全・安心に暮らしていける北海道のために、今の我々のライフスタイルがこのままでいいのか、というところがＳＤＧｓ。そう考えると、2030 年まで後 12 年しかなく、ビジョン策定のディスカッションに時間をかけていては間に合わない。	

	主な意見	道の対応の考え方
5	子どもや将来のことを考える視点に加え、今既に困っている人、大変な状況にいる人たちも置いてきぼりにしないというところも重要。	ＳＤＧｓの「誰一人取り残さない」といった観点を踏まえながら、女性や障がい者の活躍促進、子どもの貧困への対応などについても記載していくことを検討していきます。
6	ＳＤＧｓの達成に向けた取組が、全体としては進んでも、例えば女性や障がいのある方など取り残されてしまいがちな方々をどうしていくのかということについて考えることも必要。	
7	ＳＤＧｓでは「誰一人取り残さない」というスローガンを掲げているが、逆を言えば、これまでの開発の中で色々な人が取り残されてきたという反省の上に成り立っている。国連でＳＤＧｓを策定する際には、策定のための会議の中に女性、若者・子ども、先住民族など、取り残されがちな人々で構成したグループでの議論があった。骨子で示されているステークホルダーの分類では「誰一人取り残さない」ことへの姿勢が感じられない。	
8	ステークホルダーについては、ビジョン骨子の「４　ビジョンの推進」に記載されている方々だけではなく、もっと多様な方々を明記すべき。	ＳＤＧｓの推進に当たっては、道民の皆様をはじめ、多様な主体の理解と参画が広がり、ＳＤＧｓを自らの活動と関連付けながら幅広い分野や地域で様々な取組が展開されることが重要と考えています。 このため、ビジョンでは、主な主体ごとに期待される役割や取組イメージ、各主体の活動内容に応じたＳＤＧｓへのアプローチ手法などについて、具体的に、かつ分かりやすく記載することを検討していきます。
9	ステークホルダーの分類にあたって、「企業」と一括りで記載されているが、企業と行っても投資家や経営者、労働者などもいて、それぞれがＳＤＧｓに対し考え方が違う。また、企業の業態によっても考える視点は違う。それぞれの視点でＳＤＧｓを考えていくことが必要。	

	主な意見	道の対応の考え方
10	ビジョンで用いる指標については、道の既存計画の指標と同様のものに留まるのであれば、せっかく新しいビジョンを作るには意味がないのではないか。多様な意見を踏まえて指標を追加したり、見直すことが必要。	指標については、取組の目標や進捗状況を分かりやすく示すため、原則、次の考え方に沿って項目を選定したいと考えており、参考となるデータについても、幅広く検討していきます。 ① 経済社会の状況や道民の暮らしの状況を表すアウトカム指標 ② 都道府県順位の把握や全国平均値との比較ができる指標 ③ 原則、毎年または隔年で公表される指標
11	指標については、様々な団体が取り扱っている指標も参考にしてはどうか。	
12	骨子の「２ 北海道を取り巻く現状」の現状・課題は、せっかくＳＤＧｓというのであれば、１７ゴールごとに記載した方が良い。また、経年変化で見られるとより良い。	本道においてＳＤＧｓを推進するためには、ＳＤＧｓと関連付けながら、本道の現状や課題を明らかにし、道内の多様な主体と共有することが必要と考えています。 このため、ＳＤＧｓのゴールやターゲットと関連性が高い各種データを用いながら、北海道の現状や課題について、道民に身近な区分ごとに再整理し、可能な限り経年変化が分かるように、表やグラフを用いるなど工夫しながら記載していきたいと考えています。
13	北海道で起きている問題点を明確化するということをまずはやるべき。	
14	ビジョンで一番の中心になるのが「めざす姿」であり、多様なステークホルダーにとってのビジョンであるためには、「めざす姿」について議論が必要。骨子で示されている「めざす姿」を前提にせず議論していきたい。	ＳＤＧｓを推進していくためには、道民の皆様と、将来の北海道のあるべき姿を共有することが重要と考えており、懇談会をはじめ、様々なご意見を伺いながら検討していきます。
15	ビジョンは時間や環境など、状況の変化に合わせて変えていくべき。	ビジョンについては、社会経済情勢の変化やＳＤＧｓ推進に関する国の動向なども踏まえ、必要に応じて見直すことにしています。
16	ビジョンの骨子は、全体的に見て外に向けて北海道をアピールするというイメージを感じる。北海道に住んでいる一人一人が幸せに生きていけるかという視点をもっと出さないと、ＳＤＧｓを推進していきたいという意欲が沸かないのではないか。	ビジョンは、ＳＤＧｓの推進に積極的に取り組むことによって、「世界の中の北海道」としての存在感を高めながら、全ての道民が、将来にわたって安心して心豊かに住み続けることができる地域社会の実現をめざしており、その主旨が道民の皆様に分かりやすく伝わるよう検討していきます。

	主な意見	道の対応の考え方
17	資料３－１の「４ ビジョンの推進」の「企業の取組」に「中核的事業を通じたＳＤＧｓ達成への貢献」と記載されているが、貢献から少し踏み込んで「責任」と記載しても良いと思う。ＣＳＲも責任である。	企業の取組の記載内容については、懇談会をはじめ、様々なご意見を伺いながら検討していきます。
18	ＳＤＧｓの普及にあたり、ハードルを上げない方がよい。普段行っている活動の大体がＳＤＧｓに繋がっているということを知らないのが現状。意識を変えること、普段の活動の中でできることだと理解できることが重要。	ＳＤＧｓの推進に当たっては、道のみならず道民の皆様をはじめ多様な主体の理解と参画が広がり、ＳＤＧｓを自らの活動と関連付けながら幅広い分野や地域で様々な取組が展開されることが重要と考えています。 このため、ビジョンでは、各主体がＳＤＧｓに取り組むことの意義やメリットとともに、優先課題ごとに、多様な主体に期待される「対応方向」、「取組イメージ」、更には各主体の活動内容に応じたＳＤＧへのアプローチ手法などについて具体的に、かつ分かりやすく記載することを検討していきます。
19	道庁が発信するビジョンとなると、道庁が何かをやってくれるという印象になりがちだが、ＳＤＧｓはそれぞれが自分事だということを感じてもらうための書きぶりやプロセスが必要。	
20	ＳＤＧｓについて分かっている人はどんどんやっていけばいいが、分かっていない人には最初の入口から優しく丁寧に伝えていくほうがよい。また、自分達の生活に直接関わる部分が多くイメージできるとＳＤＧｓを理解しやすい。	
21	自分達の事業がＳＤＧｓに繋がっている、ということを、ＳＤＧｓと関連する具体的な取組イメージで分かりやすく示してもらえると取り組みやすい。	
22	ＳＤＧｓの根本は経済・社会・環境の３つを同時に解決することであるが、この部分がもう少し伝わるようなものになればいい。	ＳＤＧｓの経済・社会・環境の三側面への統合的な取組は大変重要であるため、こうした考えが反映できるよう検討していきます。

◇資料２　「対応方向」の設定に関する一覧

■「対応方向」の設定に関する一覧

資料２

SDGsのゴール	国の優先課題	ビジョンの「2 北海道を取り巻く状況」で掲載するデータ（案）	ビジョンの優先課題	対応方向（案）
ゴール 1（貧困） ゴール 3（保健） ゴール 8（経済成長と雇用） ゴール10（不平等） ゴール11（持続可能な都市） ゴール16（平和）	**1 あらゆる人々の活躍の推進**（働き方改革、長時間労働の是正、子供の貧困対策の推進、障がい者の自立と社会参加支援など） **2 健康・長寿の達成**（健康づくり・生活習慣病対策の推進、がん対策の推進など） **4 持続可能で強靭な国土と質の高いインフラ整備**（国土強靭化の推進・防災など） **7 平和と安全・安心社会の実現**（交通安全対策・組織犯罪対策・児童虐待防止対策の推進など）	**【北海道の現状・課題】** **① 生活・安心** ・生活保護世帯数・保護率、ひとり親の世帯数、母子・父子世帯の収入、子どもの高等学校進学率、就学援助率、北海道福祉人材センターの支援による介護職の就業者数、介護職員の有効求人倍率・入職率・離職率、（関連ゴール1） ・全道の医療施設に従事する医師数、二次医療圏別医師数、生活習慣病のリスクを高める量を飲酒している者の割合、喫煙率、各種死亡率（がん、急性心筋梗塞、自殺）、交通事故死者数（関連ゴール3） ・人権侵犯事件数（関連ゴール10） ・自主防災組織活動カバー率、市町村の各種ハザードマップ等作成状況（関連ゴール1、11、13） ・刑法犯認知件数、重要犯罪の検挙率（関連ゴール16） **② 経済・産業** ・就業率、女性・高齢者の就業率、障がい者の実雇用率、年間総労働時間（関連ゴール8） **【世界に誇れる北海道の価値と強み】** ②アジア・ロシア極東との近さなど地理的優位性（リスク分散による企業立地件数）（関連ゴール11）	Ⅰ あらゆる人々が将来の安全・安心を実感できる社会の形成	**ⅰ 医療・保健・福祉の充実**（質の高い医療・福祉サービスの提供、健康づくり・疾病予防、子育て環境づくり、貧困な状況にある人々への支援 等） **ⅱ 平和な社会づくりの推進**（交通安全対策、犯罪対策等） **ⅲ 人々が互いに尊重し合う社会づくりの推進**（人権侵害のない社会の実現、アイヌの人たちの社会的・経済的地位の向上等） **ⅳ 災害に強い地域づくりとバックアップ機能の発揮**（防災体制整備や防災教育、企業の本社機能等の移転・立地等） **ⅴ 安心して働ける環境づくりの推進**（多様な働き手の就業支援、就業環境の整備・改善等）
ゴール 6（水・衛生） ゴール 7（エネルギー） ゴール12（持続可能な生産と消費） ゴール13（気候変動） ゴール14（海洋資源） ゴール15（陸上資源）	**4 持続可能で強靭な国土と質の高いインフラ整備**（水資源開発・水循環の取組など） **5 省・再生可能エネルギー、気候変動対策、循環型社会**（再生可能エネルギーの導入促進、気候変動対策の推進、循環型社会の構築、食品ロス削減、消費者教育の推進など） **6 生物多様性、森林、海洋等の環境の保全**（化学物質対策、大気汚染対策、海洋ごみ・海洋汚染対策、生物多様性の保全など）	**【北海道の現状・課題】** **① 生活・安心** ・環境基準達成率（水質汚濁・大気汚染）（関連ゴール6、11） ・循環利用率、廃棄物の最終処分量（関連ゴール12） ・温室効果ガス排出量（関連ゴール13） **② 経済・産業** ・新エネルギー導入量（関連ゴール7） **【世界に誇れる北海道の価値と強み】** ④優れた自然環境・豊かな水資源と森林（水資源保全地域の指定数、森林面積）（関連ゴール6、14、15） ⑥豊富で多様なエネルギー資源（関連ゴール7）	Ⅱ 環境・エネルギー先進地「北海道」の実現	**ⅰ 豊かな自然と生物多様性の保全の推進**（自然環境や水資源、生物多様性の保全等） **ⅱ 地球環境保全の推進**（地球温暖化対策、再生可能エネルギーの導入等） **ⅲ 持続可能な生産と消費の推進**（循環型社会の形成、食品ロスの削減等）
ゴール 2（食料） ゴール 8（経済成長と雇用） ゴール 9（インフラ、産業化、イノベーション） ゴール14（海洋資源） ゴール15（陸上資源）	**3 成長市場の創出、地域活性化、科学技術イノベーション**（有望市場の創出、開業率・廃業率10%の達成、農林水産業の成長産業化、「明日の日本を支える観光ビジョン」の推進、科学技術イノベーションなど） **6 生物多様性、森林、海洋等の環境の保全**（水産資源の持続的利用・持続可能な森林経営の推進など）	**【北海道の現状・課題】** **② 経済・産業** ・農業産出額、新規就農者数、漁業生産額、新規漁業就業者数、道産木材の利用量、林業の新規参入者数（関連ゴール2） ・開業率、中小企業数、観光消費額、道外からの観光入込客数、訪日外国人来道者数（国・地域別）（関連ゴール8） ・製造業の付加価値生産性、産学官の共同研究の件数（関連ゴール9） ・漁業生産量（関連ゴール14） **【世界に誇れる北海道の価値と強み】** ①魅力となる雪や寒さ（月別倍沿客ベ数）（関連ゴール8） ②アジア・ロシア極東との近さなど地理的優位性（関連ゴール8） ③厳しい自然条件などのもと培われた優れた技術（関連ゴール9） ⑤広大な土地・3つの海を背景とした高い食料供給力（道産食品輸出額、食料自給率）（関連ゴール8）	Ⅲ 北海道の価値を活かした持続可能な経済成長	**ⅰ 持続可能な農林水産業の推進**（スマート農業の普及、適切な漁業資源管理、木材の加工・流通体制の整備等） **ⅱ 地域産業の創造やイノベーションの推進**（食関連産業、ものづくり産業等の創造、研究開発の推進等） **ⅲ 中小・小規模企業の振興**（中小・小規模企業の振興、地域商業の活性化等） **ⅳ 海外成長力の取り込みや多彩な地域資源の活用による持続的な経済の発展**（道産食品の輸出拡大、滞在交流型観光地づくり等）
ゴール 4（教育） ゴール 5（ジェンダー） ゴール 8（経済成長と雇用）	**1 あらゆる人々の活躍の推進**（女性活躍・男女共同参画の推進、初等中等教育・高等教育・キャリア教育・職業教育の充実、外国人留学生の受入など）	**【北海道の現状・課題】** **② 経済・産業** ・就業率（関連ゴール8） **③ 人・地域** ・平均正答率の状況、児童生徒の体力・運動能力の状況（関連ゴール4） ・青児休業取得率、配偶者等からの暴力（DV）の周知度、管理職に占める女性の割合、女性の年齢階層別就業率（関連ゴール5） **【世界に誇れる北海道の価値と強み】** ⑦多様性に富む地域（道内外国人留学生数）（関連ゴール11）	Ⅳ 未来を担う人づくり	**ⅰ 子ども・青少年の確かな成長を支える環境づくり**（学力・体力のステップアップ、世界で活躍できる人材の育成等） **ⅱ 地域や産業を担う人材の育成**（職業訓練の実施や地域産業の技能継承、キャリア教育の充実等） **ⅲ 女性が活躍できる社会づくり**（女性活躍に向けた気運醸成、男女平等参画の推進、女性への暴力根絶等）
ゴール 9（インフラ、産業化、イノベーション） ゴール11（持続可能な都市）	**3 成長市場の創出、地域活性化、科学技術イノベーション**（地方創生の本格展開、「環境未来都市」構想の推進など） **4 持続可能で強靭な国土と質の高いインフラ整備**（社会資本整備重点計画の推進など）	**【北海道の現状・課題】** **③ 人・地域** ・個別施設ごとの長寿命化計画策定率、各種耐震化率、道有施設の老朽化の状況、高規格幹線道路の整備未着手区間の割合、道内空港の国際線利用者数（関連ゴール9） ・人口の将来展望（推計人口）、本道からの転出超過数、集落対策を実施している市町村数、国や道の広域連携制度に取り組む地域数、国及び道が指定する道内の文化財の数（関連ゴール11） **【世界に誇れる北海道の価値と強み】** ⑦多様性に富む地域（ちょっと暮らし滞在日数の増加、道内外国人居住者数の増加）（関連ゴール11） ⑧独自の歴史・文化（本道出身のオリンピック・パラリンピック出場選手の数）（関連ゴール4）	Ⅴ 持続可能で個性あふれる地域づくり	**ⅰ 様々な連携で支え合う地域づくりの推進**（高齢者の生活支援、生活交通の確保、生活関連・行政サービスの維持等） **ⅱ 北海道独自の歴史・文化の継承やスポーツの振興**（独自の歴史・文化の保存・伝承、トップアスリートの育成、スポーツ活動や環境の充実等） **ⅲ 国際協力や多文化共生の推進**（国際交流・国際協力、多文化共生社会の推進） **ⅳ 社会・経済を支える持続可能なインフラ整備の推進**（社会資本の整備・更新、強靭化、交通ネットワークの形成

◇資料３　「優先課題ごとの対応方向」のイメージ

資料３

「優先課題ごとの対応方向」のイメージ

優先課題Ⅱ　環境・エネルギー先進地「北海道」の実現

【対応方向】

ⅰ　豊かな自然と生物多様性の保全の推進

本道の自然環境や水資源など豊かな自然の価値・恵み、生物多様性の保全と次世代への継承に向けた取組を進めます。

【取組イメージ】

取組のイメージ画像	関連する主体の取組について記載
取組のイメージ画像	関連する主体の取組について記載

【関連する道の取組】

取組のイメージ画像	関連する道の取組について記載

※【取組イメージ】掲載の考え方

- **各主体が「対応方向」に沿って取組を進める上で参考となる「取組イメージ」を、「企業」、「団体・ＮＰＯ」、「市町村（又は教育機関）」の区分ごとに、原則、１つずつ掲載**
- **内容は、企業・団体等（道外も含む）が実際に取り組んでいる先進的な事例等を基に記載するが、個別の企業・団体等の名称は掲載しない**
- **内容に関連するイメージ画像も掲載**
- **推薦する事例がある場合は、2018 年８月２９日（水）までに北海道庁計画推進課に情報提供をお願いします（画像データを添付願います。）。**

【指　標】

指標名	現状値	目標値	出典

◇資料４　北海道 SDGs 推進ネットワーク設置要綱（案）

資料４

北海道ＳＤＧｓ推進ネットワーク設置要綱（案）

第１　目的

２０１８年、北海道が命名１５０年という節目を迎えている中、これから先の５０年、１００年後に向け、地域創生の成果を確かなものとし、世界の中で北海道の存在感を高め、世界とともに歩む持続可能な地域づくりを進めていくためには、本道において、国連で採択された「持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）」の達成に向けた取組を積極的に推進することが重要である。

このため、道内の個人や企業・団体、ＮＰＯ、行政機関など各層にＳＤＧｓが浸透し、幅広い分野や地域で具体的な取組が展開されるよう、多様な主体が連携・協働する全道的なネットワークとして、「北海道ＳＤＧｓ推進ネットワーク」（以下「推進ネットワーク」という。）を設置する。

第２　活動内容

推進ネットワークは、前項の目的を達成するため、ＳＤＧｓの推進に関する次の活動を行う。

（１）情報発信や情報共有
（２）情報・意見交換の場づくり
（３）普及啓発
（４）連携・協働した取組
（５）その他、目的の達成に必要な活動

第３　組織

（１）推進ネットワークは、設立趣意書に賛同し、道内でＳＤＧｓを推進する者又はＳＤＧｓに関心を有する者で構成する。
（２）推進ネットワークの構成員は、必要に応じ追加・変更することができることとし、その手続は別に定める。
（３）代表は、北海道総合政策部長とし、推進ネットワークを総括する。

第４　事務局

（１）推進ネットワークの事務局は、北海道総合政策部政策局計画推進課に置く。
（２）事務局は、推進ネットワークの運営に係る庶務及び調整を行う。

第５　その他

この要綱に定めるもののほか、推進ネットワークの運営に関し必要な事項は別に定める。

附則　この要綱は、平成３０年　　月　　日から施行する。

■第２回北海道 SDGs 推進懇談会　構成員からの提出資料

◇有坂 美紀　提出資料

北海道SDGs推進懇談会

第２回

◆北海道SDGs推進懇談会への提案◆

RCE北海道道央圏協議会
事務局長　有坂美紀

1

１　ビジョンの策定プロセスの弱点

◆国連SDGs（策定期間：３年間）
すべてのステークホルダーと人々の声を取り込んだ、３年間にわたる透明な参加型プロセスの成果

◆RCE北海道道央圏（策定期間：２年間）
会員組織（行政、市民団体、教育機関、企業、研究機関、中間支援組織）によるオープンな場での参加型による議論の結果、２年間かけて策定

◆北海道（策定予定期間：６カ月）
７月に第１回目の北海道SDGs推進懇談会が開催され、策定予定は12月。決められた構成員が６カ月、３回程度の意見交換により策定予定

「SDGsの推進にあたって、道民、市町村や企業、団体、NPOなど多様な主体の理解と参画が拡がり、幅広い分野や地域で様々な取組みが展開されること」（平成30年第2回定例会での高橋知事発言）を実現するには、**透明で多様な主体参加型の議論が欠かせず、現行のスケジュールと体制では難しい。**

北海道全体に関わるビジョンとなるか疑問

2

１－２　ビジョン実現のためのステークホルダー

「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」（パートナーシップ）より抜粋
“我々は、強化された地球規模の連帯の精神に基づき、
最も貧しく最も脆弱な人々の必要に特別の焦点をあて、
全ての国、全てのステークホルダー及び全ての人の参加を得て、
再活性化された「持続可能な開発のためのグローバル・パートナーシップ」を通じて
このアジェンダを実施するに必要とされる手段を動員することを決意する。”

◆SDGs策定のためのステークホルダー（国連メジャーグループ）
女性 、子どもと若者、先住民、NGO、地方自治体、労働者・労働組合、ビジネスと産業、
科学技術コミュニティ、農業従事者、地域コミュニティ、ボランティアグループと財団、
移民と家族、高齢者と障がい者
◆北海道SDGs推進ビジョン（仮称）骨子
行政、企業、団体・NPO、教育機関、道民

北海道における持続可能な開発のために、**特に配慮すべきグループ**をステークホルダーとして骨子案にあるグループ以外にも挙げるのが適当ではないか。
例）北海道：農村・農業者、先住民族、行政→自治体
日本政府3つの柱：科学コミュニティ、子ども・若者、女性

3

２　SDGsの要素の欠如

平成29年第3回定例会9月19日本会議・代表質問
池本柳次議員に対する高橋はるみ知事の答弁より
“**SDGsの要素**を反映するなど、持続可能な地域社会の形成に向けて取り組んでまいります。”

日本政府「持続可能な開発目標（SDGs）実施指針」
（３）ステークホルダーとの連携（地方自治体）より
“各地方自治体に、各種計画や戦略、方針の策定や改訂に当たっては**SDGsの要素**を最大限反映することを奨励しつつ、関係府省庁の施策等も通じ、関係するステークホルダーとの連携の強化等、SDGs達成に向けた取組を促進する。”

→　「SDGsの要素」とは何か？

4

２－１　北海道のSDGs実現のための「ビジョン」の必須要素

「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」より抜粋

“すべての国及びすべてのステークホルダーは、協同的なパートナーシップの下、この計画を実行する。～（中略）～、**誰一人取り残さない**ことを誓う。～（中略）～。これらの目標及びターゲ ットは、統合され不可分のものであり、持続可能な開発の三側面、すなわち**経済、社会及び環境の三側面を調和**させるものである。”

日本政府「持続可能な開発目標（SDGs）実施指針」より抜粋

“「**持続可能で強靭、そして誰一人取り残さない、経済、社会、環境の統合的向上が実現された未来への先駆者を目指す**」ことを、本実施指針のビジョンとする。”

国連及び日本政府において、ビジョンに関わる内容として以下の2点を強調している

・誰ひとり取り残さない

・経済、社会、環境の調和

持続可能な開発を進めるための「北海道のビジョン」には
以上２点を必須要素として入れるのが妥当ではないか。

5

３　優先課題（重視すべきこと）への指摘

日本政府「持続可能な開発目標（SDGs）実施指針」より
優先課題に取り組むに当たっては、以下の原則を重視することとする。
（１）普遍性（２）包摂性（３）参加型（４）統合性（５）透明性と説明責任

「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」より抜粋

◆誰一人取り残さない
　・**最も遅れているところに第一に手を伸ばすべく努力**する

◆主要原則　→　**人権ベース**
　・世界人権宣言、国際人権諸条約、ミレニアム宣言、2005年サミット成果文書が基礎
　・「発展の権利に関する宣言」などその他の合意も参照

◆**統合されたアプローチ**の重要性
　・すべての形態及び側面の貧困撲滅、国内的・国際的不平等と戦う
　・地球の維持、持続的・ 包摂的・持続可能な経済成長を作り出す
　・社会的包摂性を生み出すことは、お互いに関連し合い相互に依存している

◆強みを伸ばすより、専門家や実践者が把握しているデータや知見を駆使して「取り残されている存在」を把握し、**「最も遅れているところ」への対処が優先課題**ではないか。
例）アイヌ民族、旧産炭地、過疎、貧困、ジェンダー、生態系、再生エネルギー

◆課題への取組みに係るモニタリング、進捗状況の評価などは、透明性と説明責任の観点からも専門性ある**多種多様な視点**によって行われる体制をつくることが適切ではないか。

6

４　推進手法など取組の方向性への提案

日本政府「持続可能な開発目標（SDGs）実施指針」　５　推進に向けた体制より
・取組状況の確認（モニタリング）
・指標の策定・ 修正を含む実施指針の見直し
・ステークホルダーとの意見交換や協働・連携の推進
・広報・普及啓発活動
・横断的な取組を推進していくための関係制度改革の検討及び財源確保

◆「**北海道SDGs達成行動計画**」の策定

◆骨子案「道の主な取組状況は政策評価を活用して整理」
　提案：SDGs関連施策策定におけるステークホルダー参画の保障
　　多様な主体との協働によるモニタリングと評価を行う体制
　　例）評価委員会等

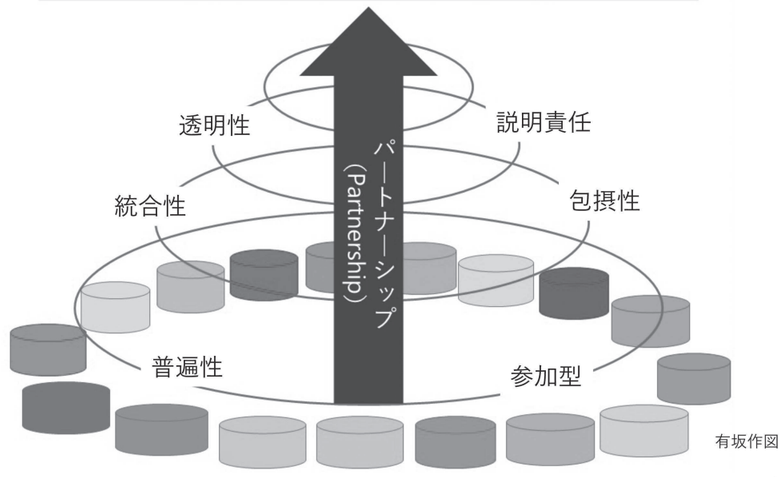
◆骨子案「ステークホルダーが連携」
　提案：より具体的な連携のあり方を例示する
　　例）定期的なステークホルダーとの意見交換、政策協働

◆ 提案：SDGs達成に向けた取組を進めるための財源確保
　　例）市町村への参画型SDGs関連施策策定のための財政支援

◆ 提案：道がグローバルSDGs に何が貢献できるかを示す

7

４－１　政策協働（政策形成、実施、モニタリング、評価）マルチステークホルダープロセスの実現の提案



有坂作図

※「2030アジェンダ」５つの要素（国連広報センター「持続可能な開発とは何か」より）
Planet（地球）／People（人間）／Peace（平和）／ Prosperity（繁栄）／Partnership（協働）

8

◇大崎 美佳　提出資料

20180821_大崎美佳
北海道環境パートナーシップオフィス

北海道 SDGs 推進ビジョン（仮称）に対する提案

〇そもそも、なぜ SDGs のビジョンをつくるのか。

- 北海道総合計画と同じ内容であるなら、新たに策定する必要はないのではないか。
- 「SDGs」→「誰ひとり取り残さない」「バックキャスティング」「同時解決」を取り入れる。
- よりよい北海道を目指すために、北海道庁から考え方の「変革」を行っていく必要がある。

〇それを踏まえ下記を提案する。

①骨子案「4．ビジョンの推進（2）推進手法・（3）推進管理」について

- SDGs は 17 ゴール、169 ターゲット、230 の指標という構成であり、毎年 SDGs の進捗レポートを国連が発行していることから、本ビジョンにおける指標の設定と進捗管理を行うこと。
- 指標は、マルチステークホルダーと協働の上、2019 年度末までに設定する。
  ※SDGs の指標は SDGs 決定後に策定（2016 年 3 月第 47 回国連統計委員会にて合意）
- 指標の検討と合わせて、道民にビジョンの説明、それに対する意見を伺う場を道内各市町村と連携しながら実施する
  →市民から声を聞く理由：対策の担い手としての要請・行政の判断の補完・負担の調整（合意形成）（出典：環境保全からの政策協働ガイド）ビジョンへの興味関心や理解が高まる可能性あり（裏面【参考】パブリックコメント・ワークショップを参照）

②「ガイドライン」の定義に対象の追加

- 道民が課題解決のために行動することをガイドラインと呼んでるが、北海道の各政策に「誰ひとり取り残さない」「バックキャスティング」「同時解決」の考え方を明記すべき。
- SDGs の同一目標の達成に貢献する施策は部局間が連携して実施し、効率的な運営を目指す。

③骨子案「3．北海道のめざす姿と優先課題・対応方向（2）北海道の優先課題と対応方向」を削除

- 「資料３－３優先課題の設定一覧」を構成員で埋めることは不十分である。
- その代わり、めざす姿の実現のために、自身の興味関心がどこにあるのか SDGs で整理する文言を追記するとともに課題解決が求められていることを示す。
- 北海道の課題は2．（1）北海道の現状・課題を参照するように促す。
- 課題等をより具体的に知りたい場合、個別計画や SDGs ネットワーク加盟団体を参照するように促す。

④骨子案「4．ビジョンの推進（1）各ステークホルダーの取組」削除

- 上記のようにそれぞれが自身で何ができるのか考えることとするため
- ここの記載事項は、北海道が期待することであり、誰も同意したものではない。

20180821_大崎美佳
北海道環境パートナーシップオフィス

【参考】

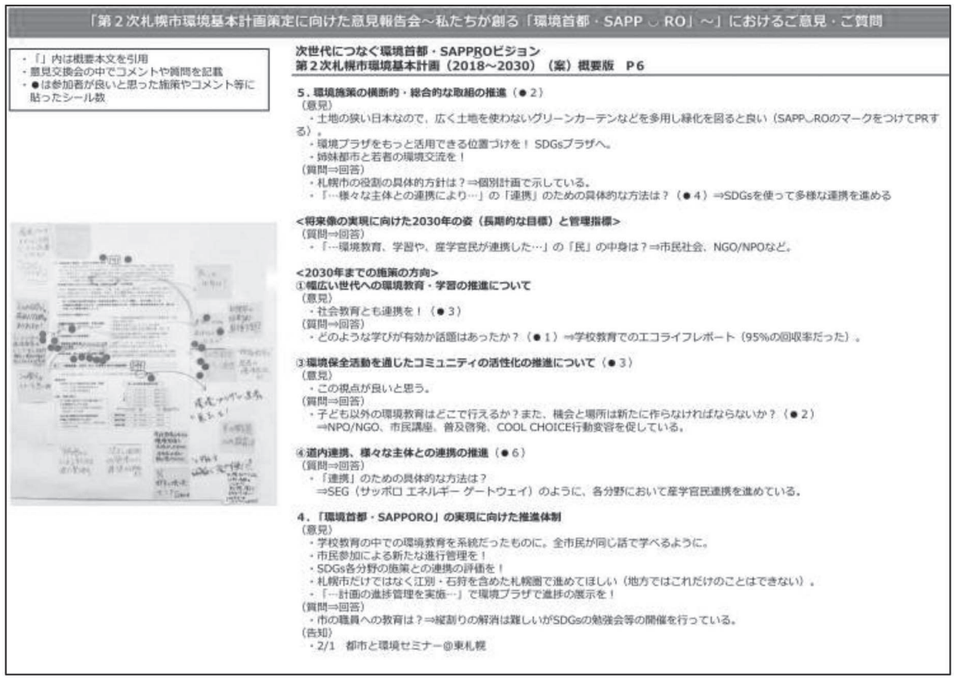
・パブリックコメント・ワークショップ

EPO 北海道ではパブリックコメントの機会を活用し、政策に関心を持つ市民が行政担当者と意見交換を行い、対話をとおして内容を読み解き、自分の意見を整理し、意見提出をお手伝いするワークショップを実施。

・実施事例

事業名：第２次札幌市環境基本計画策定に向けた意見報告会
～私たちが創る「環境首都・SAPP ◡ RO」～
実施日：2018 年1月9日
主　催：環境中間支援会議・北海道
共　催：札幌市

・ご意見等（一部抜粋）


「第２次札幌市環境基本計画策定に向けた意見報告会～私たちが創る「環境首都・SAPP◡RO」～」におけるご意見・ご質問

・「」内は概要本文を引用
・意見交換会の中でコメントや質問を記載
・●は参加者が良いと思った施策やコメント等に貼ったシール数

次世代につなぐ環境首都・SAPPROビジョン
第２次札幌市環境基本計画（2018～2030）（案）概要版　P6

5．環境施策の横断的・総合的な取組の推進（●２）
（意見）
・土地の狭い日本なので、広く土地を使わないグリーンカーテンなどを多用し緑化を図ると良い（SAPP◡ROのマークをつけてPRする）。
・環境プラザをもっと活用できる位置づけを！ SDGsプラザへ。
・姉妹都市と若者の環境交流を！
（質問⇒回答）
・札幌市の役割の具体的方針は？⇒個別計画で示している。
・「…様々な主体との連携により…」の「連携」のための具体的な方法は？（●４）⇒SDGsを使って多様な連携を進める

<将来像の実現に向けた2030年の姿（長期的な目標）と管理指標>
（質問⇒回答）
・「…環境教育、学習や、産学官民が連携した…」の「民」の中身は？⇒市民社会、NGO/NPOなど。

<2030年までの施策の方向>
①幅広い世代への環境教育・学習の推進について
（意見）
・社会教育とも連携を！（●３）
（質問⇒回答）
・どのような学びが有効か話題はあったか？（●１）⇒学校教育でのエコライフレポート（95%の回収率だった）。

③環境保全活動を通じたコミュニティの活性化の推進について（●３）
（意見）
・この視点が良いと思う。
（質問⇒回答）
・子ども以外の環境教育はどこで行えるか？また、機会と場所は新たに作らなければならないか？（●２）
⇒NPO/NGO、市民講座、普及啓発、COOL CHOICE行動変容を促している。

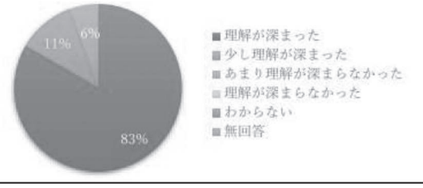
④道内連携、様々な主体との連携の推進（●６）
（質問⇒回答）
・「連携」のための具体的な方法は？
⇒SEG（サッポロ エネルギー ゲートウェイ）のように、各分野において産学官民連携を進めている。

4．「環境首都・SAPPORO」の実現に向けた推進体制
（意見）
・学校教育の中での環境教育を系統だったものに。全市民が同じ話で学べるように。
・市民参加による新たな進行管理を！
・SDGs各分野の施策との連携の評価を！
・札幌市だけではなく江別・石狩を含めた札幌圏で進めてほしい（地方ではこれだけのことはできない）。
・「…計画の進捗管理を実施…」で環境プラザで進捗の展示を！
（質問⇒回答）
・市の職員への教育は？⇒縦割りの解消は難しいがSDGsの勉強会等の開催を行っている。
（告知）
・2/1　都市と環境セミナー@東札幌

・アンケート結果（一部抜粋）

問３　意見交換会への参加を通じて、「第２次札幌市環境基本計画（案）」についての理解は深まりましたか。

理解が深まった	15
少し理解が深まった	2
あまり理解が深まらなかった	1
理解が深まらなかった	0
わからない	0
無回答	0



◇小泉 雅弘　提出資料

2018 年 8 月 22 日
第 2 回北海道 SDGs 推進懇談会提出用

道提出の（仮称）北海道 SDGs 推進ビジョンの策定およびその骨子案に対する意見

小泉雅弘（NPO 法人さっぽろ自由学校「遊」）

Ⅰ．ビジョン策定の前提として

（1） ビジョン策定のスケジュールについて

ビジョンは「道内の多様なステークホルダーが互いに共有する基本的な指針」と位置付けられている。そうであるならば、ビジョンの策定プロセス自体が多様なステークホルダーとの協働作業として取り組まれる必要がある（それが望ましいということではなく、そうでなければ、多様なステークホルダーが共有するビジョンとはなり得ないということ）。

なので、まずは議会にその理由を説明し、スケジュールを見直すことを再度提案したい。

また、第 1 回懇談会で複数の方から意見が出ていたように、どうしても年内の策定が不可避ということであれば、それが限定的なものであり、ビジョンそのものを多様なステークホルダーの意見を取り入れながら更新していくことを明記していただきたい。

また、広域自治体である北海道におけるビジョン策定にあたっては、基礎自治体（市町村）からの意見反映や、各地域のステークホルダー（懇談会メンバーはほとんどが札幌圏在住者）の意見反映も不可欠であろう。年内策定のビジョンにそれを十分に反映できないのであれば、それをどのように反映させていくかも明記していただきたい。

（2） ビジョンの名称について

「北海道 SDGs 推進ビジョン」という名称は、第 1 回懇談会で意見を述べたように整合性が取れず、混乱を招く。2030 年を目標年としたビジョンであれば、「北海道 SDGs 達成ビジョン」ないし「北海道 SDGs ビジョン」とすることを提案したい。

（3） ビジョンの性格について

国連が採択した SDGs を含む 2030 アジェンダは、世界共通の指針であり目標であるため、地域ビジョンの策定にあたっては、アプローチの仕方（バックキャスティングアプローチ）においても、ビジョンの内容においても国連のアジェンダをベース（前提）として組み立てる必要がある。道の骨子案は既存の計画（道の総合計画）や施策をベースとしており、バックキャスティングになっておらず、アジェンダからの逸脱が著しいため（既存の計画との整合性を取ることと、ベースにすることは別である）組み立てを再検討していただきたい。

Ⅱ．道提出の骨子案について

1．ビジョンの基本的な考え方

（1） 策定の趣旨

- SDGs の「誰ひとり取り残さない」という基本理念に従い、過去・現在・未来における課題を直視し、脆弱な立場に置かれている人々を優先的に取り上げることを明記すること。
- 多様なステークホルダーにとって共有できるビジョンをめざすことを明記するとともに、多様なステークホルダーを列挙すること。
- 「官民一体」、「地方創生」などの用語は避けること。

（2） ビジョンの位置付け

「道内の多様なステークホルダーが互いに共有する基本的な指針」（重要）。私がくり返し述べているのはこのことを保障するためのプロセスが必要ということ。

（3） 目標年

2030 年とするならば、SDGs の達成を前提としたビジョンである必要（推進している場合ではない）

2．北海道を取り巻く状況

（1） 北海道の現状・課題　→「北海道の歴史的背景と現状・課題」

「これから先の 50 年、100 年」をみこしたビジョンの策定にあたっては、現状だけではなく北海道の歴史的背景（とりわけこの 150 年の「開発」のあり方を反省的に見つめ直すこと）に踏み込んだうえで、現状の課題を分析する必要がある。

（2） 世界に誇れる北海道の価値と強み

この項目は SDGs の趣旨とあまり関係がないため、割愛することを提案したい。
（北海道を世界にアピールすることがここでの目的ではないため）

3．北海道のめざす姿と優先課題・対応方向

（1） めざす姿

「世界の中で輝き続ける北海道」は、2030 アジェンダの理念からの逸脱が著しいため、2030 アジェンダをベースにしためざす姿を原案とし、それをベースに多様なステークホルダーの意見を反映させていくことを提案。（別紙参照）

くり返しになるが、「めざす姿」（ビジョン）は自分たち（少なくとも自分が帰属意識を持てる集団）が描いたものでなければ意味をなさず、また「めざす姿」が共有されないかぎり、取組みの方向性は本来定まらないはずである。

（2）北海道の優先課題と対応方向

・第 1 回懇談会では、優先課題に SDGs を紐づけるスタイルだと目標間のつながりなどが表現しにくいことやそもそも優先課題を設定する必要が感じられないなどの意見が出されていた。代替案として以下を提案する。

＜案 1＞SDGs17 目標ごとに、北海道の課題を列挙する。

＜案 2＞ステークホルダーごとに、SDGs の目標との関連性を示す。

・もし言葉として使うとしたら、「持続可能な経済成長」は「持続可能な経済」に変更していただきたい。

4．ビジョンの推進

（1） 各ステークホルダーの取組

第 1 回懇談会でお話したように、まずステークホルダーの考え方を改めていただきたい。「持続可能な開発」をめぐる主要なステークホルダーは、「脆弱な立場に置かれている人たち」であり、そこを第一に考え、その参画と課題解決を促すことが重要。国連のメジャーグループ＆その他のステークホルダーをベースにステークホルダーの分類を再検討していただきたい。

＜参考＞国連のメジャーグループ：①女性、②子ども・若者、③先住民族、④ＮＧＯ、⑤地方自治体、⑥労働者・労働組合、⑦ビジネスと産業、⑧科学技術コミュニティ、⑨農業従事者
その他のステークホルダー：地域コミュニティ、ボランティアと財団、移民と家族、高齢者と障がい者

（2） 推進手法

（3） 推進管理

SDGs およびそれを踏まえたビジョンの進捗状況については、各ステークホルダー（グループ）が継続的に情報を入手し、チェックできる体制をつくることを明記する必要。

2018 年 8 月 22 日　第 2 回北海道 SDGs 推進懇談会
小泉提出（参考資料）

私たちのビジョン
「誰ひとり取り残さない北海道」

私たちは、すべての人生が栄える、貧困、飢餓、病気及び欠乏から自由な北海道を思い描く。
私たちは、恐怖と暴力から自由な北海道を思い描く。
すべての人が読み書きできる北海道。
すべてのレベルにおいて質の高い教育、保健医療及び社会保護に公平かつ普遍的にアクセスできる北海道。
身体的、精神的、社会的福祉が保障される北海道。
安全な飲料水と衛生に関する人権を再確認し、衛生状態が改善している北海道。
十分で、安全で、購入可能、また、栄養のある食料がある北海道。
住居が安全、強靱（レジリエント）かつ持続可能である北海道。
そして安価な、信頼でき、持続可能なエネルギーに誰もがアクセスできる北海道。

私たちは、人権、人の尊厳、法の支配、正義、平等及び差別のないことに対して普遍的な尊重がなされる北海道を思い描く。
人種、民族及び文化的多様性に対して尊重がなされる北海道。
人間の潜在力を完全に実現し、繁栄を共有することに資することができる平等な機会が与えられる北海道。
子供たちに投資し、すべての子供が暴力及び搾取から解放される北海道。
すべての女性と女児が完全なジェンダー平等を享受し、その能力強化を阻む法的、社会的、経済的な障害が取り除かれる北海道。
そして、最も脆弱な人々のニーズが満たされる、公正で、衡平で、寛容で、開かれており、社会的に包摂的な北海道。

私たちは、すべての人が持続的で、包摂的で、持続可能な経済と働きがいのある人間らしい仕事を享受できる北海道を思い描く。
消費と生産パターン、そして空気、土地、河川、湖、帯水層、海洋といったすべての天然資源の利用が持続可能である北海道。
民主主義、グッド・ガバナンス、法の支配、そしてまたそれらを可能にする国内・国際環境が、持続的で包摂的な経済、社会開発、環境保護及び貧困・飢餓撲滅を含めた、持続可能な開発にとってきわめて重要である北海道。
技術開発とその応用が気候変動に配慮しており、生物多様性を尊重し、強靱（レジリエント）なものである北海道。
人類が自然と調和し、野生動植物その他の種が保護される北海道。

※上記は、「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」の「私たちのビジョン」の部分の「世界」を「北海道」に、「国」を「人」に変えてみたものです。
各ステークホルダーからの意見を随時反映させていく、更新型のビジョンにすることを前提に、その下敷きとしてこのビジョンを採用することを提案します。

2018 年 8 月 22 日
第 2 回北海道 SDGs 推進懇談会提出資料

（仮称）北海道 SDGs 推進ビジョンの策定プロセスおよびその推進における
アイヌ民族の参画と、その意見のビジョンへの反映の明記の必要性

小泉雅弘（ＮＰＯ法人さっぽろ自由学校「遊」）

■提案趣旨
- 道提出の骨子案やその説明、ネットワークの設立趣意において、「北海道命名 150 年を節目に」という文言が繰り返し出てくるが、その意味するところが読み取れない（単なる枕詞か？）。北海道で「持続可能な開発」を推進していくうえでは、この歴史的意味を掘り下げる必要がある。
- ここで重要なのは、北海道が明治以降、政策的な意図をもって日本国家に編入された土地だということであり、この地にはそれ以前から独自の文化を維持しながら暮らしを営んでいたアイヌ民族が存在しており、現在も先住民族としての権利回復を求めているということである。
- 「持続可能な開発」という概念が世界共通の言葉となっている背景には、これまでの「開発」のあり方が持続不可能であるとともに、そこから取り残されてきた人びとが存在しているという認識がある。そして、世界的・歴史的にみて先住民族がその取り残されてきた集団であることは言をまたない。国連における「持続可能な開発」をめぐる議論にメジャーグループのひとつとして先住民族が位置付けられていることはそうした認識に基づいている。
- 国連では 2007 年に「先住民族の権利に関する国際連合宣言」を採択しており、日本政府もこの宣言に賛成票を投じている。2000 年代になってからこの宣言が採択されていること自体、先住民族が他の人びとが享受している権利を侵害されてきたことを表している。しかし、この宣言に明記されている権利の多くは、アイヌ民族にはいまだに保障されていない。
- さっぽろ自由学校「遊」では、2018 年３月に冊子『SDGs 北海道の地域目標をつくろう２　SDGs ×先住民族』を発行した。これは、日本の先住民族であるアイヌ民族の歴史や現状、課題や目標を SDGs17 目標に沿って紹介したものであるが、この冊子で紹介しているように先住民族の課題は SDGs17 目標のすべてに関わっている。
- それゆえ、「北海道命名 150 年の節目」の年に、北海道で「持続可能な開発」を推進するビジョンを策定していくうえでは、アイヌ民族の参画とビジョンへの先住民族の視点の反映、その明記が不可欠であると考える。

■提案内容
　SDGs 実現に向けたあらゆるフェーズ（意見・情報収集、計画策定、事業立案・実施、評価）において、先住民族（アイヌ民族）の参画を保障し、その視点を取り入れる旨をビジョンに明記いただきたい。

＜参考資料＞
『SDGs 北海道の地域目標をつくろう２　SDGs×先住民族』
（2018 年３月、さっぽろ自由学校「遊」発行）
http://www.sapporoyu.org/modules/sy_book/index.php
※ＰＤＦ版をダウンロード可能

先住民族の権利に関する国際連合宣言（市民外交センター仮訳）
http://www.un.org/esa/socdev/unpfii/documents/DRIPS_japanese.pdf

◇清水 誓幸　提出資料

SDGs 推進ビジョン　策定について

北海道中小企業家同友会　清水誓幸

提案

１．解決すべき課題の根底原因を探り、優先課題とする。

２．ビジョン達成のための戦略、計画を策定し、達成に至るまで計画内容の見直しを行う

３．ビジョン達成に対する「責任」および、「改革すべき点」の明確化を図る。

提案の背景

第 1 回目の懇談会でも意見として出したことであるが、現在の課題が具体的に数値化されないまま作られていくビジョンの内容が、社会に求められるビジョンになるのか疑問を感じている。

私は企業セクターとして、持続可能な社会に求められる企業の在り方を探り考え出すことが必要であると考えている。

同時に、持続可能な社会に選ばれない企業とはどの様な企業なのか、あるいは事業なのかを明確にする必要があると感じている。

　企業の在り方、課題について、企業（経営者主体）だけで考えるのではなく、働く人々は勿論、企業と企業が繋がる中で起きている問題、事業活動による環境影響、などについて、経営陣外からの意見を取り入れることにより、社会や未来から選択される企業になることが必要だと考えている。

また実効性のあるビジョンには、夫々のステークホルダーが関わる、戦略、計画が無ければ行動に結びつかず、掛け声だけで終わってしまう。

　ビジョンを作る中で、解決すべき課題の根底原因を探り、「改革する意識」をもって行動を起こさなければならない。その為にはステークホルダーの夫々の責任と過去からの行動と選択を変える強い意思が重要ではないだろうか？

　ビジョン達成のために、戦略、計画を策定し、進捗確認を達成まで継続させなければ、責任を持ったビジョンとならないと考える。

例えば、「廃プラスティックと食糧残差を大幅に減らすこと」を行動目標にした場合、

企業努力　「ゴミとなる物質の利用が減り製造が減る」「廃棄物処理されるゴミが減る」

消費者努力「大量廃棄を出しているモノを選ばない」

といった効果が期待できる。一方で、改革を施さなかった企業は淘汰されるだろう。

ビジョン達成を進めるにあたり淘汰が発生することを社会として覚悟しなければ、改革はなされず、場当たり的な対策となり、社会環境は何も変わらずに時が過ぎるのではないだろうか？

以上を提案したい。

◇菅原 亜都子　提出資料

提案書

（公財）さっぽろ青少年女性活動協会　菅原亜都子

《提案内容》
SDGs実現に向けた推進体制について、すべてのゴールやターゲット、あらゆるフェーズ（意見・情報収集、計画策定、事業立案・実施、評価）においてジェンダーの視点を取り入れる旨を明記いただきたい。

ジェンダー平等は、すべての目標とターゲットに影響を与えるクロスカッティング・イシューである

ジェンダー平等について、目標５に留まらず、下記のとおり全体を通底した課題と位置付けられている。

①独立した目標 → 目標5

②前文、宣言におけるジェンダー平等および女性のエンパワメントの重要性の強調

②ジェンダー平等にとって重要な人権、リプロダクティブヘルス・ライツなどへの言及

③目標5以外の分野での言及

「ジェンダー平等の実現と女性・女児の能力強化は、すべての目標とターゲットにおける進展において死活的に重要な貢献をするものである」
持続可能な開発のための 2030 アジェンダ

「ジェンダーの平等は、それ自体が目標であるばかりでなく、貧困の削減、持続可能な開発の促進グッド・ガバナンスの構築という課題に取り組むための前提条件となるものである」
コフィー・アナン元国際連合事務総長

「SDGsにおけるジェンダー指標は目標5が中心だが、他分野にまたがっており、全ターゲットの34%、230 Indicatorのうち32%をジェンダー指標が占める。女性の雇用への影響など副次的な効果の測定も踏まえ、評価手法の革新をしなければ適切な評価ができない」
引用：一般財団法人CSOネットワークHP「3/15～17、国際会議『誰も取り残さない：衡平性かつジェンダーの視点でSDGsを評価する』（ニューヨーク、フォード財団・UNICEF本部）に参加しました」

なぜジェンダー評価・ジェンダー統計の重要か

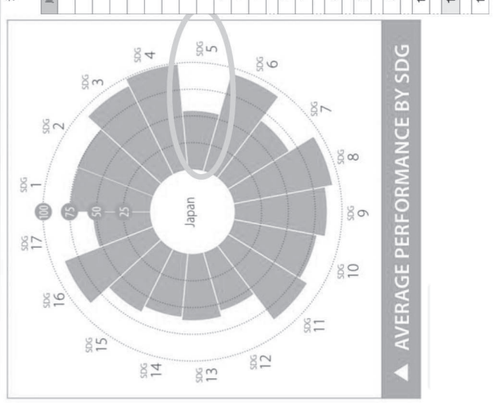
データと統計は、ジェンダー平等と女性のエンパワメントを実現するためのエビデンスに基づく政策を立案し、そのインパクトを評価し、説明責任を促進するために欠かせないツールである。

■包摂性：ジェンダー平等の実現及びジェンダーの視点の主流化のためには、ジェンダー統計の充実が極めて重要であり、SDGsの実施において可能な限り男女別データを把握するよう努める。

引用：日本SDGs実施指針

■ジェンダー関係が不平等な社会では、一見、「中立的」な開発政策や施策、事業であっても男女それぞれに異なる影響を及ぼす可能性がある。そのため、すべての開発政策、施策、事業の計画・実施・モニタリング・評価のあらゆる段階で、社会における男性と女性の社会的な役割の違いや力関係によって生じる課題やニーズを踏まえ、ジェンダー平等の視点を組み込んでいくことが必要。引用：JICA HP「ジェンダーと開発」

日本においてジェンダー平等は伸び代の大きいレバレッジ・ポイントである



ジェンダー・ギャップ指数（2017）
主な国の順位

順位	国名	値
1	アイスランド	0.878
2	ノルウェー	0.830
3	フィンランド	0.823
4	ルワンダ	0.822
5	スウェーデン	0.816
6	ニカラグア	0.814
7	スロベニア	0.805
8	アイルランド	0.794
9	ニュージーランド	0.791
10	フィリピン	0.790
11	フランス	0.778
12	ドイツ	0.778
15	英国	0.770
16	カナダ	0.769
49	アメリカ	0.718
71	ロシア	0.696
82	イタリア	0.692
100	中国	0.674
114	**日本**	**0.657**
118	韓国	0.650

「SDGsには目標を実現するための『梃子（てこ）の力点』、英語では『レバレッジ・ポイント』というものが存在します。…目標間の相互連関とレバレッジ・ポイントの観点ほど大切なものはありません。…日本におけるレバレッジ・ポイントの一つは目標5のジェンダー平等と女性のエンパワメントであると考えています」
引用：SDGパートナーズ有限会社HP
「「レバレッジポイント（梃子の力点）理論」と社会課題の相互連関」

◇吉中 厚裕　提出資料

注：本メモは、北海道 SDGs 推進懇談会の各委員から出された提言･意見を、各委員の協力を得て吉中厚裕（同懇談会座長）の責任で整理したものです。出された提言･意見の全てが網羅されているものではなく、またその内容全てについて同懇談会委員の間でコンセンサスが得られているものでもありません。

2018 年 8 月 24 日

北海道 SDGs 推進懇談会委員からの提言・意見とりまとめメモ

「ビジョン」の必要性

- 北海道総合計画と同じ内容、同計画を前提・ベースとして考えるなら不要。
- 策定するのであれば、SDGs の理念、要素を踏まえるべき。
  - 「誰一人取り残さない (最も遅れているところ、脆弱な立場に置かれている人に手を伸ばすべき)」
  - 「経済、社会、環境の調和」
  - 「バックキャスティング」
  - 「人権ベース」
  - 「同時解決・統合的アプローチ」

策定スケジュール

- 現行スケジュールでは透明で多様な主体参加型の議論を十分に行えないことから、スケジュールを見直すべき。
- どうしても今年中に策定する必要があるのであれば、「ビジョン」の性格・内容・項目等について再検討すべき。

策定プロセス

- 多様なステークホルダーの関与が必須。
- 意見・情報収集、計画策定、事業立案・実施、評価、全てのプロセスにおいてジェンダーの視点を取り入れるとともに、脆弱な立場におかれている人々、特に先住民族（アイヌ民族）の参画を保障し、その視点を取り入れるべき。
- ステークホルダー毎のビジョン提案ワークショップを開催するなどして、できる限り多様なグループの意見を「ビジョン」に反映させること。
- 「透明で多様な主体参加型の議論」を十分に行わずに策定する場合には、「ビジョン」が不十分なプロセスで策定されたものであること、策定後は多様なステークホルダーの参画を得て随時更新していくことを明記すべき。
- また、基礎自治体や北海道全域のステークホルダーの意見をどのように反映させるのか明記すべき。
- 「官民一体」「地方創生」といった用語は本文脈では不適切。

「ビジョン」の名称

注：本メモは、北海道 SDGs 推進懇談会の各委員から出された提言･意見を、各委員の協力を得て吉中厚裕（同懇談会座長）の責任で整理したものです。出された提言･意見の全てが網羅されているものではなく、またその内容全てについて同懇談会委員の間でコンセンサスが得られているものでもありません。

- 2030 年を目標年とした場合「推進」している余裕はなく、「達成」を目指すべき。名称からも「推進」を削除、あるいは「達成ビジョン」へと変更すべき。
- 策定しようとしているものは「めざすべき姿=ビジョン」なのか、SDGs 達成のための「推進方策」なのか、位置づけの明確化が必要で、それに応じて名前も検討すべき。

「ビジョン」の役割・性格

- SDGs の核となる要素を取り入れるべき。
  - 「誰一人取り残さない (最も遅れているところ、脆弱な立場に置かれている人に手を伸ばすべき)」
  - 「経済、社会、環境の調和」
  - 「バックキャスティング」
  - 「人権ベース」
  - 「同時解決・統合的アプローチ」
- 現行の策定プロセス・スケジュールでは「道内の多様なステークホルダーが互いに共有する基本的な指針」とはなり得ない。
- そもそも策定しようとしているものは「めざすべき姿=ビジョン」なのか、SDGs 達成のための「推進方策」なのか、位置づけの明確化が必要。「骨子案」の構造そのものをもし変えられないとしても両者の書き分けは可能ではないか。
- SDGs について全く知らない人々にまずは知ってもらうことが重要。わかりやすく伝え、自分のことと捉えてもらえるきっかけとなることが必要。0 から 1 にする取り組みを。
- 「4．ビジョンの推進（1）各ステークホルダーの取り組み」は、その策定プロセスに各ステークホルダーの十分な参画が保障されていない現状では削除すべき。むしろ、各ステークホルダーに自分自身の興味関心がどこにあるのか SDGs を基に整理していくことを促すような文言を追記すべき。
- 「ビジョン」達成に対する各主体の「責任」及び「変革すべき点」を明確にすべき。そのためには各主体の参画のもと実質的な議論が必要。
- 北海道がグローバルな目標に寄与すべき事項を明確にすべき。
- 北海道庁の各施策に SDGs の核となる要素を組み込んでいくことが必要。
- 基礎自治体の「参画型」SDGs 関連施策策定のための支援方策（技術・財政）を明記すべき。
- ジェンダーについては、ステークホルダーとしての「女性」だけでなく、SDGs 全体の横串となるものでもあるという認識・記載が必要。

ステークホルダー

- 「誰一人取り残さない」ために、国連の「メイジャーグループ・その他のステークホル

ダー」をベースとし、北海道において特に配慮すべきグループ、脆弱な立場に置かれているグループをステークホルダーとして明記すべき。

- ➢ 農村・農業者
- ➢ 先住民族
- ➢ 行政（基礎自治体）
- ➢ 科学コミュニティ
- ➢ 子ども・若者
- ➢ 女性　等

・ 多様なステークホルダーとの連携・協働（意見交換、政策協議、計画策定、事業立案・実施、評価等全てのプロセスにおいて）の方策について具体的に明記すべき。

優先課題

・ 「めざす姿=ビジョン」を「世界の中で輝き続ける北海道」とすることは 2030 アジェンダの理念と合致しない。本来の意味での「ビジョン」については、2030 アジェンダの「私たちのビジョン」をベースとして今後多様なステークホルダーと協働しつつ策定していくべき。そのためには十分かつ広範な議論が必要。今もしキャッチフレーズが必要であれば「誰一人取り残されない北海道」といったものではないか。

・ 解決すべき課題の根底原因を探り、それを優先課題とすべき。

・ 過去・現在・未来における課題を直視し、脆弱な立場に置かれている人々を優先的に取り上げるべき。

・ SDGs の 17 項目毎に北海道の抱えている課題を抽出・整理すべき

・ 恣意的に設定した「優先課題」に SDGs を紐付ける様態では目標間の繋がり・統合的アプローチが明確にならない。そもそも「優先課題」の設定は必要なのか。

・ 「世界に誇れる北海道の価値と強み」項目は不要。むしろ「弱み」について正しく分析、認識すべき。

・ 「北海道の強み」についても「弱み」と合わせて検討すべき。

・ 「強み」を伸ばすよりも専門家や実践している人たちが把握しているデータ・知見を駆使し手「取り残されている存在」を把握し、「最も遅れているところ」への対処こそが優先課題であるべき。

・ 必要なのは「持続可能な経済成長」ではなく「持続可能な経済」ではないのか。

・ ステークホルダーごとに SDGs の目標との関連性を示すことが有効ではないか。「めざす姿」の実現のために自分自身の興味関心がどこにあるのか SDGs を基に整理していくことを促すような文言を追記すべき。

「行動計画」の策定

注：本メモは、北海道 SDGs 推進懇談会の各委員から出された提言･意見を、各委員の協力を得て吉中厚裕（同懇談会座長）の責任で整理したものです。出された提言･意見の全てが網羅されているものではなく、またその内容全てについて同懇談会委員の間でコンセンサスが得られているものでもありません。

・ 「ビジョン」達成のための戦略、行動計画を策定し、その達成に至るまで随時見直しを行っていくべき。

・ 策定に当たっては、多様なステークホルダーの参画を得て協働することが必須（「ビジョン」策定プロセスの失敗を繰り返さない）。そうでなければ実効性が期待できない。

進捗モニタリング・評価

・ 各ステークホルダーが継続的に情報を入手し、チェックできる体制を作ることが必要。

・ 多様なステークホルダーと協働の上、2019 年度末までに「ビジョン」における指標を策定し、その後の進捗管理を行う体制を構築すべき。

・ 既存の道庁が用いている指標だけでは不十分。道庁以外の知見も活用すべき。

・ 指標の検討と平行して広く道民を対象として「ビジョン」の説明、意見徴収・意見交換を各市町村と連携しつつ行うべき。

・ 透明性･説明責任の観点からも専門性のある多種多様な視点による継続的なモニタリング・評価が行われる体制を作るべき。

・ SDGs 達成のためのネットワークとしては、道が立ち上げ募集を開始した「推進ネットワーク」と「RCE 北海道道央圏」との協働が重要。両者の役割分担、具体的な協働体制等について書き込むべき。

（文責　吉中厚裕）

第２回北海道ＳＤＧｓ推進懇談会 議事録

日時：平成 30 年８月 22 日（水）14：00 ～
場所：かでる２．７ ６階６２０会議室

【出席者】
○構成員：有坂 美紀、大﨑 美佳、柏村 章夫、小泉 雅弘、定森 光、清水 誓幸、菅原 亜都子、鈴木 昭徳、野吾 奈穂子、吉中 厚裕 （五十音順、敬称略 10 名出席）
○北海道：谷内計画推進担当局長、石川計画推進課長、渡邉計画推進課主幹

石川（課長） ご案内の時間になりましたので、ただ今から第２回目の北海道 SDGs 推進懇談会を開催させていただきます。本日は大変お忙しい中、出席いただきまして、誠にありがとうございます。前回の懇談会の開催結果でございますけれども、先日、皆様にご確認いただきまして、道庁のホームページで公開をさせていただきました。本日の懇談会の開催結果につきましても、同じように公開させていただく予定でございますので、よろしくお願いいたします。なお、本日の終了時間でございますが、16 時を目処としてやらせていただければと思いますので、御協力の程、よろしくお願いいたします。それでは、開会にあたりまして、谷内計画推進局長からご挨拶させていただきます。

谷内（局長） 計画推進担当局長の谷内です。本日はお忙しい中、お集まりいただきまして、ありがとうございます。また、先月の第１回目の懇談会では、大変貴重な、様々なご意見をいただきましたこと、お礼を申し上げます。いただいたご意見につきましては、この後事務局から、今後どういった対応をしていくかということについて、ご説明をさせていただきます。また、これからのビジョンの取りまとめにあたり、先立ってのご意見や本日のご議論などを踏まえて、策定を進めていきたいと考えております。今、ビジョンの原案となるものを取りまとめ中でございまして、９月の上旬に原案を公表したいと思っていますけれども、その中では、この間、骨子（案）でお示ししているものに肉付けをして、優先課題や対応方向、あるいは色々な主体の方々が具体的な取組をイメージできるような「取組イメージ」みたいなものを、わかりやすくビジョンの中に盛り込んでいきたいと思っています。そうしたことの参考となるようなご提案なども今回いただければと考えております。また、先立っての懇談会でもご説明申し上げました、SDGs の取組の裾野を広げていくための全道的なネットワークの立ち上げについてでございます。今月初めから募集を開始しておりますけれども、今日段階で 103 の企業・団体・個人あるいは市町村から申し込みいただいております。募集期間の設定が短かったので、まだ順次集まってきているところですが、今月中には一旦締め切るような形で、ネットワークを正式な形で立ち上げて、色々な情報共有を進めていきたいと思います。まだおそらく、参加していただける方々が増えてくるのではないかと思っていますが、そういった取組の広がりもどんどん進めて行きたいと思っています。今日も時間は２時間程ですけが、また、北海道内の SDGs の推進に向けた様々なご意見を頂戴できればと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

石川（課長） それでは、ここから議事の進行につきましては、大変恐縮でございますけれども、座長の吉中先生にお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

吉中 お暑い中お集まりいただきましてありがとうございます。前回に引き続き、進行役ということで座長を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いします。お手元に資料が配られているかと思います。議事次第の下に配付資料ということで資料１から資料４までリストがあり、議事次第の後に付いていて、その後に皆様からの具体的なご提案・ご提言の資料を付けていただいているかと思います。よろしいでしょうか。今日の議事で予定されているのが２つ。１つ目が「「（仮称）北海道 SDGs 推進ビジョン」について」、２つ目が「北海道 SDGs 推進ネットワークについて」ということで、局長からもお話があったと思います。道庁から用意していただいた資料１から資料４で、議事２つをカバーするような形になっています。前回の議論で申し上げましたが、推進ネットワークというのがビジョンを実行していく上で肝となるのではないかということを私は考えていますが、そういうこともあり、２つの議題を合わせて道庁からご説明いただいて、その後に皆様からの資料をそれぞれご紹介していただいて、ディスカッションというような進め方にしたいと思います。よろしいでしょうか。資料については、事前に配られていますので、説明はできるだけ簡潔にしていただいて、議論の時間を取りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。それでは、資料の説明をお願いします。

渡邉（主幹） 計画推進課の渡邉です。よろしくお願いいたします。座って説明させていただきます。私の方から、資料１から資料４につきまして、簡潔にご説明させていただきます。

まず資料の１につきましては、前回の懇談会でいただきました主な意見について、道の対応への考え方を含めて整理したものでございます。いただいたご意見などにつきましては、ここに書いてある考え方、本日の懇談会で皆様と行わせていただきます意見交換の内容と合わせまして、先ほど局長の方から説明ありましたが、現在、取りまとめている原案にその内容を反映していくように検討しているところでございます。

続きまして、資料２につきましては、対応方向の設定に関する一覧としまして、SDGs のゴールと国で定めている優先課題、ビジョンで検討している北海道の現状と課題、価値と強みなどの、北海道を取り巻く状況で掲載しているデータを整理しまして、ビジョンの優先課題として、５つ整理したものです。ここまでは、前回も皆さんにお配りしていたものですが、事務局側で検討した優先課題ごとの対応方向も記載しています。対応方向につきまして、皆様からのご意見をいただければと思っております。各主体の皆様が対応方向に沿って取組を進めて行く上で、参考となるような「取組イメージ」というものを掲載したいと思っております。

資料３が、その対応方向を記載していくイメージ、このような形で取りまとめていきたいというものになりますが、取組イメージについては、各主体が対応方向に沿って取組を進める上で参考となるようなイメージを主なものとして企業、団体・NPO、市町村の区分ごとに少なくとも原則１つずつくらいは記載していきたいと思っています。内容については、実際に取り組まれている先進的な事例を元に記載しますが、個別の企業名等は記載しない方向で考えています。できれば分かりやすくするために、イメージ画像も掲載していければと考えております。こうした取組について、皆様の方で参考となるような事例をお持ちでしたら、大変期限が短くて申し訳ないですが、８月 29 日までにご提供いただけますと大変参考になりますので、よろしくお願いいたします。

続きまして、資料４がネットワークの関係でございます。ネットワークの設立については、前回、RCE と共同ということでお話をさせていただいていましたが、道側の判断で、まずは一義的に道が責任を持って設立するということで考えまして、応募の期間もあったということがあり、既に募集を開始しています。皆様には事後の報告になってしまったことにつきまして、誠に申し訳ございませんでした。８月７日に設立について周知を開始しまして、今朝、確認できた段階で 103 の応募。大体、企業、団体、市町村がそれぞれが３割ずつくらいで参加のご連絡をいただいていたところでございます。特に団体・企業などは、全道的に活動されているところが多いので、札幌圏が多くなっていますが、それ以外は、全道まんべんなく入っていただいており、市町村もほとんどの振興局管内の市町村からご連絡いただいているところでございます。道側で用意しました資料の説明につきましては以上です。

吉中 ありがとうございます。大変簡潔に説明していただいたので、聞きたいことはたくさんあるかと思いますが、この後、皆様からの提言もお聞きした上で、広く意見交換をさせていただきたいと思いますが、今説明いただいた資料の中身について、よくわからないところ、意味の質問等がありましたら、お願いします。

清水 ネットワークについてですが、募集をかける時に、どのような手段を使ったのかを教えてください。

渡邉（主幹） まずは当課のホームページの方で掲載しております。また、道の各部に、関係している団体や包括連携協定を締結している企業、または日頃から業務的にお付き合いのある団体等に連絡していただくようお願いしております。

大﨑 意見と質問が１つずつです。意見として、資料１で主な意見について対応をいただきましたが、時間のない中進めるには、９月上旬に示すであろう原案の案のようなものをこの場で示していただいた方が、議論がしやすいと思いました。我々の設置目的にもビジョンについてと書いていますので、第１回の意見の反映状況がわかるような原案の案をいただいた上で、今日、お話できるとよかったと思っています。質問については、資料１の３ページに、指標に関する道の対応の考え方がありますが、ここに記載されている①から③ということを指標で考えているということですか。文章からあまり読み取れず、どのようなことを具体的に考えているか教えてください。

石川（課長） 指標の関係については、道庁内で、①から③の基本的な考え方で既に整理させてもらっていますので、今回のビジョンもその考え方に沿って設定したいと考えているところです。①というのは、例えば、経済状況として暮らしの状況を表すものとして、「合計特殊出生率」といった生活に密接に関わるような数値がありますし、②の都道府県順位の関係でいくと、「健康寿命」だったと思いますが、47 都道府県のどの順位にあるのかといった比較ができる指標。指標ですので、目標値を数値で設定しますが、毎年あるいは隔年で把握できるもの。そういった考え方で整理をしていきたいと考えております。

大﨑 今、総合計画などで使われている考え方ということ

ですか。

石川（課長）　道庁全体の考え方です。

有坂　今のことに関連していいですか。数値を設定されると仰いましたか。2030 年にクリアする具体的な数値を設定されるということですか。

石川（課長）　前回、少しお話しさせていただいたと思いますが、今、優先課題が５つあり、それぞれに対応方向を記載していて、その対応方向ごとに現状値や 2030 年に向けて「こういう数値にしたい」というような目標値の設定をしたいと考えています。

有坂　それは、各部局に照会されて、出して欲しいというようなことを言って、それぞれ出していただいたものですか。

石川（課長）　はい。

小泉　大﨑さんが言ったことの確認です。今回、原案が示されていないですが、ここで原案を検討する前に議会に出してしまうということですか。

石川（課長）　原案の策定に向けて、今、ご議論をいただいているところです。

小泉　原案の策定に向けた意見は、原案の原案のような、原案がどうなっているのかが見えないと、空気に物を言っているような感じになる。

石川（課長）　仰ることもよく分かるのですが。原案を出して、また議論をしていただこうと、段階を踏みます。案に行く段階で。

小泉　原案として出すための議論はないのですか。

石川（課長）　今、まさにそういう意識でやらせていただいています。

小泉　原案として出すためには、道が考えた原案の案が検討されないと。原案が分からないので。前回、骨子案に対しては、かなり色々な意見が出されたと思いますが、資料１の意見についてというのを見ても、どう変えようとしているのか全然分からない。見ようによっては、ほとんど変えるつもりもないというふうにしか読めないので、何に対して意見を言っていいか分からない。

石川（課長）　我々の思いとしては、原案の策定に向けてご議論・ご意見をいただいていると捉えて開かせていただいております。

小泉　第１回目で、骨子案に対して色々な意見が出されていましたが、その意見を踏まえて、どのように原案を考えているのかが示されていないので、どこに対して意見を言っていいかわからない。

石川（課長）　例えば、資料２のように、原案に向けてこのように整理したいという考え方は、道庁内部で整理させていただいたものについては、資料をご提供させていただいているつもりです。ですので、骨子をお示しして、原案に進む過程の中で、今、ご議論をいただいて、それを我々がしっかり受け止めさせていただいて、原案の策定作業に反映していく、そういう段階。

小泉　前回、私が一番始めに、この場はビジョンを作る主体なのか参考意見を言う場なのかを確認し、一緒に作る主体であると確認したと思います。そうであるならば、原案を外に出す前に原案の検討が必要だと思います。

菅原　今の小泉さんのお話と同じことですが、原案を議会に提出する前に、原案を私達が確認して意見を言う機会というのはありますか。

石川（課長）　同時になります。「外に出る」という段階は、懇談会にお示しすること、道議会に報告すること、道民の皆さんに「こういう原案ですよ」とお示しすること、それは同じタイミングになります。

小泉　そうすると、この場の意味がよく分からないです。

石川（課長）　道庁内部で原案を策定して、世間に公表するのは、懇談会の場であろうが道議会の場であろうが、道民に対して、我々の考え方を公表しますので、同じタイミングになります。

小泉　一道民として今まで意見を言っていた訳ではないですよね。ビジョンを策定するために、ある程度集めていただいて、この場を開いていると思いますが、そうすると、タイミング、順番が納得しかねますよね。

石川（課長）　行き違いがありましたら申し訳ありませんが、懇談会の皆さんは、道民の専門の分野、専門の立場で参加していただいていますので、当然議論をいただいて、

一緒にビジョンを作っていくという意識の中で作業をさせていただいています。しかし、道民の代表の道議会に報告しますので、それは同じタイミングになります。ですので、どこかを優先的にお見せするのではなく、同じタイミングで公表させていただいて、それに対して意見をもらう。

定森　今の説明ですと、一緒に作るというニュアンスとは少し違うという印象です。こちらは意見を言って、それに対してどのように書くのかについてはあくまで道庁がやり、やったものに対して、またこちらの意見を言います。一方通行のやりとりをやられようというスタンスに感じています。一緒に作るとなると、双方向でやりとりをしながら、例えば、私達があげた意見を道庁で何処をくみ取り、何処をくみ取らなかったということを示していただいて、どうしてそうなったかについてのやりとりがまたあり、出来上がったものが原案になるというようなイメージでいました。前回の１回目の意見に対して、どのように反映したのか、原案を見るまで分からないとなると、あくまで参考意見を言っているというふうに受け止めざるを得ないのではないかと思います。

石川（課長）　私の説明不足かもしれませんが、原案を出した段階では、当然いただいた意見については、どのように反映したのか、参考にさせていただいたのかということをお示しした上で、原案をベースにした考え方の状況を整理してご説明させていただき、最終案をどうするかという議論をしようと思っています。ですので、そこのタイミングの問題だと思いますが、我々が一方的に作るのではなく、それぞれの代表の皆様からご意見をいただき、それを真摯に受け止めさせていただいて、それを原案にどういう考え方で盛り込んだのか、その考え方が駄目であれば、その次の段階で状況をご説明させていただいて、最終案になだれ込む。そういった作業スケジュールを考えています。一方的に我々が作るというふうに思われるのは、我々のご説明不足だなと反省しています。

菅原　先日、10 月か 11 月にもう一度、懇談会を開くかもしれないと別の機会でお話をいただいていましたが、議会に出すのがゴールではなく、議会でも議論して、その後にまたこの懇談会で意見を言って反映していただける、そういったタイミングがあるということでしょうか。

石川（課長）　最後に皆様にご了解を取ろうかと思っていましたが、今までの説明だと 10 月に開いて終わりとお話ししていたと思いますが、作業のスケジュール間もありますし、皆様から非常に活発なご意見もいただいておりますので、原案にどのように反映したのか、パブリックコメント（道民意見提出手続）や市町村・団体への意見照会を行いつつ、10 月の中下旬くらいにもう一度開いて、最後のビジョンの最終案をどういうふうにしていけばいいのかをご議論をいただこうと思っています。さらに案もできた段階で、もう一度開いて、最終案がこうなりましたので、今後、具体的にどのように推進していけばよいのかについてご意見をいただこうかなと。全体で４回になるイメージで思っているところです。

吉中　確認ですが、道庁がお考えになっている予定としては、今日の後、既に原案を策定されつつあるとお話しいただきましたけれども、９月始めに原案を議会に提出されて、同時に広く公表される。そして我々にも、共有していただく。次の懇談会は 10 月中下旬に開くということですが、９月初旬から 10 月の第３回目までの間というのは、パブコメ（パブリックコメント）と市町村への意見照会、関係団体への意見照会が行われるということになりますか。

石川（課長）　はい。

吉中　その結果を踏まえて、原案の修正版のようなものが、10 月中下旬の第３回懇談会でご呈示いただけるということですか。

石川（課長）　10 月の段階では、原案に対して色々なご意見がでていますので、どういう方法で最終案に盛り込むかというところまで書けるか微妙ですが、こういう対応を考えているというようなことを皆様にご説明させていただくことになるかと思います。

吉中　そこでどういう議論になるのか分かりませんが、色々な意見がでて、もう少し修正が必要になってくるということになると、その修正についてを第４回の懇談会の前にしていただくことになるのですか。

石川（課長）　第４回の時は「最終案がこうなりました」ということになると思います。

大﨑　第４回はパブコメが終わった後ですか。

石川（課長）　パブコメが終わり、我々の内部の整理をしています。

大﨑　もう完成の方ですよね。

石川（課長）　完成のイメージです。

有坂　完成バージョンに対して、どのような意見を言えばいいのですか。

石川（課長）　完成バージョンに対しての意見というよりは、「こうなりました」というご報告と、今後、このビジョンを使ってどういう取組をしていけばよいのかという、取組に向けて、皆様からご意見をいただこうかとイメージしています。

小泉　第４回目の予定はまだ決まっていませんか。

石川（課長）　まだ決まっていませんが、作業のスケジュールもありますので。

野吾　年内ですか。

石川（課長）　年内です。

吉中　細かいことで申し訳ないのですが、第４回の前にビジョンは出来て、公表されているという理解でいいですか。

石川（課長）　そうですね。最後の段階です。

吉中　そうすると、前回の意見やここでの議論を、最大限道庁の方で尊重していただいて、原案を作って、９月初旬に公表される。そこまでの原案の策定途中は、我々もこの会議が終わった後でも随時意見を言うことはできますよね。メール等で意見を言うことは可能であるにせよ、原案は出せない。９月初旬から10月中旬の第３回までの間は、別のオフィシャルなプロセスとしてパブコメ、市町村意見照会等がなされる。それと平行して、我々も原案について、意見を言うことは可能ということでしょうか。

石川（課長）　はい。

吉中　ただ、こういう形で集まる場は今のところ設定されていないですよね。

石川（課長）　はい。

清水　どうもしっくりしないところがありまして、ビジョンを作るということは、取組を考えながらビジョンを作らないと、動くビジョンになるということは考えづらい。自分が今まで生きてきた中で、色々な計画を推進してくる中で、ただビジョンを立てて動くということは上手くいっていないです。計画を立てたり、取組の戦略を考えたりしながらでなければ、ビジョンをしっかり描けないと思います。何かビジョンの言葉だけが先行しそうで、取組が本当に忘れられがちな気がしています。それが、４回目以降に行われると言われたら、「え？」というような感じがしました。

野吾　道庁のご意見を想像してのコメントですが、SDGsがそもそもバックキャスティングなので、目指すべきイメージをみんなで共有して、それに向かってしゃにむに取り組んでいくという強い意志の現れなのかと逆に捉えました。

清水　そのように捉えられたらいいのですが、今起きている社会の問題や取り残されそうになっている方たちのことが実際に表にでていないこともたくさんある。本当に自分達も知らないことがたくさんあるわけですから、そこをどうするのということですよね。それは前回も言いましたが、前回もでてないし。そこを知らないで、何をするのか。輝くことだけするのか。「そうじゃないでしょ」と言いたい。

野吾　そういう意味では、資料１の13番に、「北海道で起きている問題点を明確化するということをまずやるべき。」とあるが、そのとおりだと思っていました。右側に道庁からの回答欄があり、今後整理していくということでしたが、前も申し上げたとおり、北海道の課題などは自分自身も弱いところがあるので、早めに教えていただきたいと思います。また、有坂さんがまとめてくださった資料には、「北海道が持つ強みも大事だけれど、今まで手が行き届かなかったところにもしっかりリーチしていくべき」と書いてあり、ごもっともだなと思って読んでいました。

谷内（局長）　先ほど、清水さんからもお話しありましたけれども、原案の中では具体的な取組がイメージできるようなものを盛り込んでいこうと思っております。この１、２週間で形にしていかなければいけないと思っています。先ほどお話しありました原案とスケジュールの関係につきましても、今、原案を取りまとめ中です。今日も色々な資料をいただき、これから説明していただけると思います。１回目の時、中々全部の議論を集約できていなかったかもしれませんが、この資料をいただきながら、この２、３週間ほどで原案の作成をもう少し詰めていきたいと思っています。そして９月の上旬くらいに公表すると同時に皆様方にもお配りして、パブリックコメントなども進めて行きますが、その原案を基に10月中にまたお集まりいただいて、これまでのご意見などを原案にどのように反映したのかを説明しながら、もう一度議論をいただき、そして最終案に作り変えていくというようなスケジュールを考えております。ですので、もう一度原案に対して直接のご意見をいただく場を10月に開こうと思っています。

構成員からの提案説明

吉中　おそらく清水さんが仰っているのは、具体的な取組というのをビジョンに書いていくのであれば、具体的な取組を行う人が策定にあたって関与していないと意味のあるものにならないのではということだと思います。それを１、２週間で書いてしまっていいのかという問題提起だと思いますので、少し答えがずれているかと思いますが、それは少し置いときます。

議論が大分、中身に移っていますので、野吾さんからも有坂さんの資料のお話もありましたので、皆様からご提言いただいている資料の方に移りたいと思います。配られている資料は大体ご覧になっていると思いますので、そこで書き切れなかったことや「これが意味するのはこのようなことだ」というようなことをそれぞれから簡潔にご紹介いただければありがたいと思います。その後、さらに議論を続けたいと思います。それでは、資料をずっとめくっていただきますと、RCE北海道道央圏協議会の有坂さんにご用意していただいた資料が２つありますので、ご説明いただいていいですか。

有坂　では、簡潔に説明させていただきたいと思います。今、論点については大分出てきたと思いますので、ざっくりと説明させていいただきたいと思います。まず、スケジュールについては、非常にタイトであるということはもう一度伝えておきたいと思っております。高橋知事も第２回定例会において、色々な主体の人たちに理解と参画が広がって、幅広い分野や地域で様々な取組が展開されると仰っている中で、それを実現して行くためには、透明性や多様な主体の参加など、今までずいぶんと出てきていますが、この議論が欠かせないというふうに思います。そのためには、現行のスケジュールでは短いですし、この懇談会だけで意見を聞くという体制、もちろん資料の中ではこの懇談会だけではなく、パブコメなど別なところでも聞くとありますが、それで本当に聞いたと言えるのかという疑問が残ることが１点目です。

それに関わって、ステークホルダーの分類といいますか、国連のSDGsの策定においては、ここに書かせていただいている９つのメジャーグループとその他のステークホルダーとして、計13グループが上げられています。非常にグループ自体が細かく定義されるようになってきている現状の中で、道庁の骨子案では、行政、企業、団体・NPO、教育機関、道民となっていますので、もう少し、特に配慮すべきグループというのを上げた方がいいのではないかということです。第１回の時にも語られていましたが、北海道ならではの農業者や先住民族、あるいは行政ではなく自治体とした方が市町村は意識しやすいのではないかということが一つと、日本政府の３つの柱の中でも科学コミュニティ、子ども・若者、女性というのが上げられていますから、この辺も入れた方がいいのではないかと思っております。

次にめくっていただきまして、SDGsの要素を反映するというようなことが何度も議会の中でも出てきていますし、日本政府の実施指針の中でも語られていますが、「SDGsの要素を反映」の「要素」とは一体何かというところで、SDGsはそもそもの「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載されており、アジェンダを実現するために17の目標、SDGsがあるわけです。そこに書かれている「誰一人取り残さない」ことを誓うということや、「経済、社会、環境」の３側面を調和させるということが書かれています。また、日本政府の方でもその二つについては書かれているので、きちんと「誰一人取り残さない」ということ、「経済、社会、環境の調和」ということは、北海道のビジョンの中にも入れるべきではないかと考えています。

その次のページです。優先課題ということで、何を優先課題とするのかということですが、最も遅れているところに第１に手を伸ばすべく努力するということが2030アジェンダの中で言われています。先ほど、野吾さんにも指摘していただきましたが、強みを伸ばそうという今の骨子案ではなくて、取り残されている存在というものが一体どういったものなのかということを、道庁の視点だけではなく、実践者や専門家の方々が把握しているデータや実践というのがいくらでもあると思いますので、これを是非活かしていただきたいと思います。その中から、本当に取り残されている存在というのは誰で、その存在に対して、どのような取組が必要なのかということを考えるべきではないかと思っています。例えば、北海道では、アイヌ民族や旧産炭地、過疎、貧困、ジェンダー、生態系、再生可能エネルギーの問題があるかと思います。この優先課題に取り組むためには、モニタリングであるとか、進捗状況、評価というのが欠かせないと思います。そのモニタリングや評価をしていくにあたっては、透明性と説明責任というところが重要になってくるかと思いますが、それを道庁だけでやるのではなく、専門性のある多様な視点によって行われる体制を作っていくべきではないかと思います。その辺りは、2030アジェンダや政府の実施指針でも上げられているところだと思いますので、道庁においても重視していただければと思います。

それに関連して、推進手法です。できれば、ビジョンだけではなく、「北海道SDGs達成行動計画」というような行動計画を立てていただきたいと考えます。骨子案の中には、道の主な取組状況に、政策評価を活用して整理すると書かれていますが、先ほども申し上げましたとおり、ステー

クホルダーの参画を得て、きちんと共同によってモニタリングや評価を行う体制を作っていただきたいと考えています。骨子案には「ステークホルダーが連携」と書いてありますが、連携とは何を指すのかということを具体的に表示していただきたいと思います。例えば、定期的なステークホルダーの意見交換の場を年何回開催するといったことや政策協働していくというようなことをしっかり文言として書いていただきたいと思います。また、やはりSDGsを進めていくためには、自治体が欠かせないと思っておりますので、市町村への支援の体制をきちんとやっていくということを是非書いていただきたいと思います。「世界の中で輝きつづける北海道」ということで、世界と出ていますので、北海道が世界に対してどのような貢献ができるのか、どうやって世界に対して輝いていくのかということを表明、明らかにするためにも、北海道内のことだけではなく、その辺りも書いていただけるといいかと思います。こういったSDGsの達成に向けた取組を進めるためには、政策協働というものが欠かせないと思っていて、これは道庁とでなければできないことだと思っています。政策協働についても何度かここの場でも出ていますが、立案から一緒に作っていくというところです。文章も一緒に考えさせていただきたいという思いをもって、実現していくための方法であるとか、モニタリング・評価なども一緒にやらせていただきたいというふうに思います。その上で2030アジェンダが掲げている、地球と人間の繁栄と平和のためにパートナーシップで実現していくということが、初めてできるのではないかと思っています。以上です。これが提案の方ですが、もう一つは、RCEの活動の内容を説明させていただいていますので、後ほどご確認いただければと思います。ありがとうございます。

吉中　ありがとうございます。このご提案はRCE北海道道央圏協議会に加盟されている51の団体の総意といいますか、ある程度の意見を踏まえて提示されたと考えてよろしいでしょうか。

有坂　総意ではないのですが、一応、「このようなことでどうですか」ということを意見照会し、また、意見交換の場も設定し、集まっていただいて意見出しをした結果をまとめたものですので、そのような位置付けとして考えていただければなと思います。

吉中　ありがとうございます。議論は後でまとめてということで、続いて、今日配られた資料に行きます。大﨑さんお願いします。

大﨑　なぜSDGsのビジョンなのかというところをもう一度書かせていただきました。基本には北海道総合計画と同じ内容であれば必要性がなくなるので、先ほど有坂さんが仰っていたようなSDGsの要素を取り入れることをやっていく必要が絶対あると思っています。総合計画と同じであれば作る必要はないと思います。またSDGsの中で変革ということが一番大きく言われていると思いますが、道庁から変革を実践していく必要があるのではないかと思っています。それを踏まえて、４つ程提案を書かせていただきました。

一番目は、骨子案のビジョンの推進管理についてです。これについては、指標の設定と進捗管理をしっかり行うこととしています。ビジョンということで何かしらの目指す姿というのを表して、「それに向かってこういうことをやります」や「こういう課題があるので目指す姿を作ってこういうことをやっていきます」ということがあるかと思いますが、具体的な指標はまだない状況だと思います。先ほど、何かしらの形で設定するというお話だったと思いますが、既存の指標がいいのか、あるいはSDGsということを標榜するのであれば、それにあわせた新しい指標を作ることも考える必要があると思っています。その場合、我々というよりは指標に関する専門家の方のご意見をしっかり聞く、そういう場をしっかり設けて共同で作成するべきではないかと思っています。指標については、今年度中というよりは、少し遅れてもいいので、ビジョンができた後でも、しっかり時間をかけて作ってはいかがかと思います。SDGsの指標についても、SDGsの策定は2015年ですが、その１年後にSDGsの指標が策定されました。ですので、そこはしっかり時間をかけたらいかがかと思います。また、今回の懇談会の中でも色々な方から意見を聞く場が必要という意見がありますが、道の政策を理解していただく機会にもなりますし、政策を進める上で人々に担い手になっていただける可能性もあります。行政だけではなく、情報を補完する機能というのを持っています。この間に何か意見を聞くということは難しいですが、ビジョン策定後でも、道としてビジョンを作ったということを179市町村と一緒に、地域説明会をどんどん開いていただきたいと思っております。裏面に参考で、EPO北海道でパブリックコメントワークショップについて、札幌市の環境基本計画策定の時のものを載せています。パブリックコメントという機会が一応ありますが、パブリックコメントが実はあまり知られていないということもあります。その機会を活用するために、行政の担当者の方から、計画についてお話いただいて、ざっくばらんに計画についてわからないことや意見などを、写真では見づらいですが、付箋にメモしたりしながらお話しするといったワークショップをやっています。こういうことをやらせていただくと計画に対する理解が深まったというアンケート結果も出ていたりしますので、計画についてお話を理解する場というのは必要かなと思いますし、今回もパブリックコメントがあるので、そういう場をEPOとして作れないかと少し思っています。

次に、ガイドラインの定義ということで、ビジョンでありガイドライン、道民が課題解決の行動をするためのガイドラインと言っていますが、道の政策にSDGsの考え方を入れていくような、政策のためのガイドラインといった位置付けにもして欲しいと思っています。例えば、道でSDGsの項目を政策ごとに整理していると思うのですが、同じゴールになるものは一緒にできないか、「皆さん、ビジョンを実現するための政策を変えていきましょうよ」と、そういった同時解決できないかといった連携はどうかと思います。

３番と４番に関しては、骨子案の項目を削除してはいかがかという提案です。３番については、資料２と資料３で出していただいている、取組の対応の方向性についてです。これを構成員で埋めることは難しいのではないかと思います。意見が漏れたりするのではないかと思い、私としては非常に危惧しているので、ここであえて示す必要がないのではないかと思います。その代わり、SDGsと自分自身がどのように関連していたりするのか、興味あるSDGs対して、北海道ではどんな課題があり、もっと知りたければ、関係する団体をご紹介するような場にしたらいかがかというものです。４番についても、骨子案にステークホルダーの取組が各行政とか書いていましたが、それは道庁として期待することであって、その人たちが実際どう思うのかというのはわからないので、消してしまっていいのではないかと思います。以上です。

吉中　ありがとうございます。続いて、小泉さんお願いします。

小泉　私からは、提案のようなものが２つ、参考資料を１つ出させていただきました。１つは前回の道提出のビジョンの策定及び骨子案に対する意見ということで、内容はほとんど有坂さんが言ったことと被り、また、前回、私が言ったことや皆様から出されたことを文字にしたというだけのことです。

１つ目のビジョン策定の前提としてということは前回も言いましたが、言ったことに対するフィードバックがないので、言い続けるしかないということで、ビジョンを多様なステークホルダーと共有するビジョンとするのであれば、先ほども出ていたように、多様なステークホルダーが策定のプロセスに関与しなければならないというのは、何というか数学的な命題みたいなものだと思っています。ですので、互いに共有するビジョンを道庁が策定できると考えるのは傲慢だと思います。ビジョンを作るのであれば、ちゃんとそれができるようなスケジュールでやって欲しいということを改めて書いてあります。もちろん、道は広域の自治体なので、道内市町村からの意見反映ということも当然必要だと思います。次に、いつくかは原案を考えていらっしゃる段階で答えていただけると思いますが、もう一つ前回言ったことで、推進ビジョンという名称が整合性がとれていないので変えて欲しいです。また、ビジョンの性格について、先ほど野吾さんがバックキャスティングと言っていましたが、前回、道の方が言っていたと思いますが、今回のビジョンをバックキャスティングで作っていないということを明言されていたと思うので、バックキャスティングになっていないですよね。既存の計画をベースにしている。国連が採用したSDGsをあえてやっていこうということなので、考え方にしろ、策定のプロセスにしろ、基本的に国連が採択した2030アジェンダというのをベースにすることが当然基本だと思います。そこを改めて、考え直していただきたいということです。

２つ目の骨子案について、手がかりが前回出された骨子案しかないので、一応その項目に沿って書いていますが、書いてあることはほとんど有坂さんから出たことと被っているかと思いますので、１番は省略します。２番で「北海道を取り巻く状況」ということで、北海道の現状と課題を書いていくという話でしたが、私の提案として、現状と課題だけではなく、歴史的背景をきちんと踏まえた課題・分析をして欲しいということ。これは後ほどの提案にも関わります。これも色々な方から出ていたことですが、世界に誇れる価値と強みというものは、別のところでアピールしてもらうのはいいと思いますが、SDGsとあまり関係ないので、いらないと思います。基本的にはやはり「誰一人取り残さない」、課題を解決するということがSDGs達成のポイントなので、世界にアピールする点をここで書く必要はないと思います。これもどこまで反映されるのか、空気に向かって言っているような話ですが、次に、「めざす姿」の「世界の中で輝きつづける北海道」は、アジェンダの理念から少し外れすぎなので変えて欲しいということです。私の提案は、キャッチコピー的に言うなら「誰ひとり取り残さない北海道」でいいと思います。参考資料に、ビジョンのもう少し細かい中身として、事前に懇談会のメンバーの方には投げていましたが、アジェンダに書いてある「私達のビジョン」のところの「世界」を「北海道」に全部変えたものです。今年策定するビジョンというのは、多様なステークホルダーの意見を反映していないので、更新型でこれからやっていきますということを前提としていて、そうであれば国連のビジョンをベースにするのが一番いいのではないかと思います。人によって違うと思いますが、これが出されると私は結構ワクワクします。優先課題については、少々既定路線になっている感じですが、少な

くとも前回の懇談会で出された意見として、優先課題の区分の仕方をもう少し考え直してはどうかという意見も出ましたし、そもそも優先課題いらないのではないかという意見も出されていたと思います。そこは少し変えることを考えてはどうかということです。一応、代替案としては、２つ程あげております。前回から言っている割と大きなポイントは、持続可能な開発を巡る議論をするときのステークホルダーの考え方ということで、国連のメジャーグループのような形を考えて欲しいということです。これはとても大きなことだと思っています。SDGs の際にいきなり出てきたメジャーグループではなく、それこそリオサミットの際の、アジェンダ 21 の中でそもそも規定されている９つのメジャーグループです。歴史的経緯もあるわけですから、ここもきちんと反映させるようにして欲しい。当然、ビジョンができた後のモニタリングなどにも多様なステークホルダーが絡むようにして欲しいということです。

それともう一つ、これは菅原さんの提案を見て、出しておいた方がいいと思い、出したものですが、アイヌ民族の参画とその意見のビジョンへの反映の明記の必要性ということです。あまり詳しくは説明しませんが、ビジョンの骨子案にもネットワークにも、「北海道命名 150 年を節目に」という文言が出てきていますし、説明の中でも何度か触れられていたと思いますが、この「節目」の意味がよく分からない。ただの節目なのか、もうちょっと深く考えようという姿勢なのかということで、個人的にはとても重要な節目だと思っています。まさにこれまでの 150 年、北海道が近代国家としての日本に組み込まれてからの 150 年の「開発」の歴史をきちんと反省的に振り返るという意味での大きな節目にする必要があるかと思います。書いてあるとおりですが、重要なことは、国連の持続可能な開発を巡る議論の中でも、先住民族がメジャーグループの一つとして位置付けられていますし、持続可能な開発という概念自体、先住民族の貢献なしには考えられない概念だと思います。ですので、北海道で SDGs のビジョンを作る限りは、先住民族であるアイヌ民族の参画とその意見の反映ということがなければ、仮に世界的に発信した際に、「何じゃこれ」と思われると思います。これはおそらく国内の目以上に、世界はそのように北海道を見ていると思います。正直、懇談会にアイヌ民族のメンバーがいないということ自体がとても残念なことですが、やはりこのプロセスの中に、きちんとアイヌ民族の参画というのを位置付けて欲しいということです。以上です。

吉中　ありがとうございます。では、続いて、清水さんお願いします。

清水　私からの意見として、A4 一枚で書かせていただきました。私は中小企業家同友会としての名前で来ておりますが、同友会の中でこうしたことを審議したとか議論・意見をいただいた訳ではありません。同友会の名前で RCE に参加したり ESD 支援センターに参加したりしている中で、自分が常に感じていること、そして今回の道庁のビジョンに対して思ったことですので、私個人の意見と思っていただければと思います。自分たち企業や事業をやっている経済界の人たちが、どのように関わっていくのかということをイメージして提案を出しました。

その中で、一つ目としては、解決するべき課題の根底原因というものを探るということを一番優先する必要があるのではないかということです。やはり知らないことがあまりに多すぎるように思います。つい最近お会いした、働きづらい方を支援している事業をやられている方から聞いたことですが、障がい者手帳を持っている人たちだけが働きづらい方ではなく、一度勤めたけれども仕事というもののイメージが付かず、挫折し、怯んでしまって仕事を辞め、そのまま引きこもりになってしまった方、別に障がいがある訳でも何でもないけれども、そういう方たちも働きづらい環境になっている。このことは、この方たちだけでなく社会に問題もあると思う。そういう支援をしている人たちと話をしていると、どういうところに問題があるかというと、企業の事業としての価値や事業としてのあり方など、社会人になる過程の中で、子どもの時から示していない、どの仕事がどのような付加価値や利益を生んで賃金に跳ね返ってくるのか、そういった仕組みだなどが説明されていないので、自分の仕事の中での価値が分からないということも、話し合った中で知ったことでした。企業はもっと自分たちの仕事というものを知らせていくべきだと感じたところです。そういうことで、根底原因というのはまだまだ違うところにあると、色々な人に会うことで知るので、根底原因を探るということが優先課題として重要なことではないかと思います。

二番目については、皆様とだいぶ被っているかと思いますが、ビジョンを動かすためのものではなく、達成するまでの行動計画をつくり、そして常に見直していくということが必要だと思います。

三番目に挙げたのは、ビジョン達成に対する「責任」ということで、これは僕ら企業や経済界に対して責任という意味合いのものがあるべきではないか。というのも、今、現実として、社会的に市民や道民から選ばれているものが本当に未来から見た目線で正しいものが選ばれているのだろうか。企業が作ったものが、これは本当に未来から見たときに、環境面や健康面などで、正しいものが選ばれているのだろうか。そういう目線で考えたときに、やはりこれは考え直すべきだろうということを、誰が示すのか、そういうこともやはり覚悟しなければいけない、そういうことをしっかり示さなければならない、誰が示すのか、ということも色々なところで議論した上で、例えばリサイクルをするのであればリサイクルにしっかりのせるインフラを作るべきだと思うし、そこにのせるまでの間にゴミをポイ捨てする人をどうするのか、そういう人をどうなくしていくのか、という問題でもあります。ずっとつながっていく問題だ、常に従っていくものだと思うので、そうしたことを掘り下げて、そして責任の有る色々なセクターの人達に責任というものがはっきり、何か公的にという責任とかではなく、この方達にとってこういうものが責任ある、ということを明確にすることが、重要ではないか。そういう責任の中で変革を起こしていく、変革を起こすべき点を明確化するということを提案させてもらいました。こういうことに対する、最終的には決意ということがあると思います。出してしまえば、今まで選ばれてきた人が選ばれなくなる、こういうことをやられると困るといった人も居るかもしれません。しかし、それが今までの、企業の経済活動によって起こした環境破壊でもあると思うので、今すぐできることではないが、変革をしっかり意識するということが重要ではないかと思い、この三つの提案を出させて頂きました。以上です。

吉中　ありがとうございます。最後の話は大崎さんが仰っていた SDGs を如何に自分のものとして考えていくのかということをしっかり議論していかなければならないということと関係してくるのかと思いました。続いて菅原さんお願いします。

菅原　全体のことについては皆様から詳しく説明していただいておりますので、私は自分の専門分野から一点だけ提案させていただきたいと思います。SDGs 実現に向けた推進体制について、すべてのゴールやターゲット、それからビジョンの策定作業や指標、モニタリングといったあらゆるフェーズにおいて、ジェンダーの視点を取り入れるという言葉を入れていただきたいと思っております。今回の懇談会は私も勉強しながら参加させていただいているところで、初めはゴール５にジェンダー平等という課題と目標があるというくらいに思っていましたが、アジェンダを広く見ていると、ジェンダー平等は一つの課題と言うよりは全てに通底する見方、視点であると改めて気づくきっかけをいただきました。独立した目標としてゴール５にジェンダー平等が掲げられているほか、前文･宣言にもジェンダー平等や女性、女児という言葉が何度も強調されています。また、ゴール５以外のゴールにおいてもジェンダーのことは言及されていまして、調べたところ、全ターゲットの 34％、指標の 32％をジェンダー指標が占めるということがありました。ですので、ジェンダー平等というのは一つの目標ではなく全ての目標とターゲットに影響を与えるようなクロスカッティング、分野横断的な問題であると改めて感じました。そのような意味では、全てのゴールやターゲットにジェンダーの視点を取り入れるということを記載していただきたいと思っています。また、あらゆるフェーズにも入れていただきたいというところは、先ほどからモニタリングの話や指標の話も何度か出ていると思いますが、ジェンダーの視点をどのように入れていくかというところがすごく重要だと思っています。指標や統計の話となると、数字を取るということ、取っている数字から数字を見せることの二段階があると思います。数字を取るというところは、先ほどご説明いただいたとおり、北海道のルールがあると思いますし、国連や国などでも、ジェンダー統計についてはジェンダー統計のミニマムセット、最低限これを取りましょうと推奨しているものがあると思いますが、それを超えて取るのはなかなか難しいということかと思います。一方で、既に男女別の数字があるものに関して、きちんと男女別の統計を見せるということは、今ある数字でできることかと思います。ですので、今まで出していないものもあるかもしれませんが、そこは今後出していくというチャレンジを是非していただきたいと思っています。

重ねてになりますが、メジャーグループとしての女、取り残されやすい存在としての女性といった意味合いと、もうひとつ、ジェンダーの視点という二重の意味で、ジェンダーの視点、ジェンダー平等という言葉を、是非入れていただきたいと思います。しかし、この骨子を見て、どこに入れたらいいかと考えたときに、入れづらいなとは思います。先ほどの小泉さんの話とも共通しますが、国連のアジェンダの前文などを見ると、価値観や理念などのような、少しワクワクするような記載というのがあると思うのですが、そういったものがこの原案の中に入ってくるといいなと思います。そうすれば、ジェンダー視点もそうですし、それ以外の誰も取り残されないという想いやパートナーシップといった、いくつもキーワードが既に出ていると思うので、そこを入れて、ここで大事にしたい価値観みたいなもの、少しワクワクする文章を入れることを是非提案したいと思います。以上です。

吉中　メジャーグループとしての女性、というのは先ほども出ていましたが、それに加え、まずジェンダーというクロスカッティングな視点をしっかりと理念的なところに取り込んで欲しいというお話でした。ありがとうございました。では、今回、紙で提言、提案、あるいはご意見をいただかなかった方からも、前回言い足りなかったことや前回の議論を聞いて、考えてきたということなどがあれば、聞かせていただければと思います。どなたからでもいいですが、アイウエオ順でお願いしたいと思います。

柏村　前回から二回目ということで、私が率直に感じたことを言うと、普段から SDGs に深く関わっていないといいますか、考えていない、一農家として農業経営をしていまして、自分の事業を通じて SDGs に興味を持ち、今、取組を始めているような、素人目線でこの会に参加させていただいています。そもそも今までの話で言えば専門家の意見を聞く場のようになっていますが、私は場違いかなと少し感じながらも、必死について行っているつもりなんですが、どうもこのビジョンに対して、先ほどから色々なステークホルダーの意見を取り入れてやるべきという意見がある中で、専門的な意見を聞く場なので仕方ないのかもしれませんが、やっぱり少し取っつきにくいといいますか、中々分かりにくいなと感じるところです。ステークホルダー、利害関係者などは、言葉としては分かりますが、それをどう具体的に捉えるかというところを、ビジョンの中で一般の人にも分かるような形で表現された方がいいのではないかと感じました。あまりまとまっていませんが、自分事にどう捉えるかというところで、僕はこの協議会苦手だなと正直思っています。一方通行なやりとりで、先ほど小泉さんが「空気に対して話すようだ」と仰っていましたが、協議会に対し、もっとやりとりの中で作られていくものではないかという僕の認識があります。意見を出す側もですが、道庁に対して、「足りてない」や「こうしよう」というスタンスが、僕は少し苦手に感じています。少し幼稚な言い方をすれば仲良くやれないものか、この会に向かう足が重くなるような会ではなく、ワクワクではないですが、せっかく未来に向かって意味のある会議をしていると思うので、お互いに作り上げていくような感じがもっと出せたらいいなと感じています。以上です。

吉中　ありがとうございます。足が重くなっているとは知りませんでした。すいません。ありがとうございます。是非、場違いと思わず、どんどん言っていただければと思います。今のご意見もすごく参考になるご意見だと思いますので、どんどん発言して頂ければと思います。

定森　皆様の発言を聞いておりまして、少し一方通行なやりとりになってしまって、私も対行政に対して話をしているというふうになっていたということで少し反省したところです。一緒に作っていくというところは重要だと凄く思いますし、そのプロセスを、色々な人達と一緒に経ていくということが大事だと思いました。前回も言われていたかと思いますが、個人的にこのビジョンが誰のためのもので、誰に向けたものかということが見えづらいところがあり、最終責任は道庁が取るというところが姿勢として伝わってきますが、やはり一緒に作る私たちも、色々なステークホルダーもまた責任の主体だと思います。そういったところがこのビジョンから見えてこないといけないのかなと思いました。指標についても、道庁の各部署が挙げたものというのは、道庁ができる範囲内のもので止まってしまうと思います。そうではなく、色々なステークホルダーが感じている、今まだ見ぬ課題というものを浮き彫りにしていくということも重要だと思います。それをどのように解決するかということは、今すぐ答えがなくても、それもまた一緒に考えて作っていく、政策協働ということがありましたけれども、そういったことをやっていくという姿勢を見せることがビジョンでは重要だと思いました。

吉中　ありがとうございます。

鈴木　私は皆様とスタンスが違いまして、この会議自体が政策委員会などではなく、あくまでも懇談会ということですので、道庁がどういうことを考えているかを理解すること、また一方で、私はコープさっぽろで実際に SDGs を作っていく立場として、どういうった方向性で作ればいいのかなど、情報収集も兼ねて参加しておりますので、そういう意味では本当に勉強になるなと感じているところです。私は作り手でもあるので、そういった立場からすると、皆様からの意見にありましたけれども、細かく色々なところを網羅しようとすると、逆に落とし込みづらいのかというところ、雑な言い方をしてしまいますと、「SDGs やりますよ」と言うだけでも世の中は変わるかなと個人的に思います。今、我々のお店や色々な場所に SDGs のポスターが貼ってありますが、店長さんなども「これは何なんだろう」といったレベルです。情報だけが先にいってしまっていて、中身を理解していないというのが現実だと思います。ですので、一番大事なことは、個別の課題それぞれに数字を詰めてアクションプランを進めていくことは大事なことですが、そもそもライフスタイルを変えなければ行けないということ、そのための SDGs であるということ、まず「０」から「１」にするところに行けばいいのかなと思います。皆様の議論はどちらかというと、「８」を「９」、「９」から「10」にするような感じがして、まだまだ世の中はそこのレベルに到達していないのではないかというのが内部の職員や組合員さんに説明する立場として、率直にそのように思いました。以上です。

吉中　ありがとうございます。それでは。

野吾　先ほども引用させていただいた有坂さんの力作がありましたが、最も遅れているところの対処が優先課題であるという点について、一市民としてのコメントと組織の人間としてのコメントが混じってしまったので、改めて言及させていただきたいと思います。最も遅れているところへの対処が喫緊の課題だということは、私も市民として賛成しています。しかし、ここでは「強みを伸ばすよりも」といった書かれ方をされていますが、私の中ではどちらも大切ではないかと思っています。JICA が推進する国際協力は、国内のリソースパーソンにご協力いただきながら進める途上国の開発支援です。北海道が持っている価値や強みで国際協力に貢献できるところはたくさんあり、これまでの実績もたくさんあります。しかし、日本全国を見渡してみても、日本の進める国際貢献は世界の中でまだまだ弱いと感じることがあります。ですので、小泉さんには申し訳ないのですが、世界に誇れる価値と強みを削除してはどうかというお話には少し反対で、逆にこれを残していただくことで、道庁だけではなく、各市町村もこれを根拠にして国際協力に取り組みやすくなるのではないかと感じています。実際、途上国から来日する JICA の研修員も、農業や観光といった北海道が強みを持っている分野を学びに来ているのですが、途上国の研修員が学ぶだけではなく、その研修の場でのディスカッションを通じて、日本の各地域の方々が逆に途上国の研修員から学ぶということもたくさんあります。お互い相互に学び合って両方が発展してくというのが、手前味噌ですが JICA 事業の良い部分だと思いますので、北海道が誇る価値や強みは残していただければと思いました。以上です。

吉中　ありがとうございます。一通りご意見をいただきましたが、言い足りなかったことや言いそびれたことなどあればお願いします。

野吾　有坂さんから提供の参考資料の 17 ページに載っている話、RCE の考える 100 年後の話もいい、いっそのこと、これがビジョンでもいいのではと思いました。以上です。

提案を踏まえての議論

吉中　ありがとうございます。今、皆様の意見を言っていただいて、野吾さんからは他の方の意見に対するご意見も出ましたけれども、今までの言われたことなどに対して、少し考えが違うといったことやサポートするといったことなど、何かあればお願いします。

小泉　原案が分からないので、応えられる範囲で現在どのように考えているのか、応えて欲しいのですが、私の提案の中で、そもそも名称はどうするのか、「めざす姿」は「世界の中で輝きつづける北海道」のままなのか、ここでの意見を反映させるのかなど、現時点で原案をどういうふうに考えているのかを教えて欲しい。でなければ、先ほどから分からない中で言っているという状態が解決されないです。

吉中　前回の我々からの意見については、資料 1 に項目立てしてまとめていただいて、それに対して道の対応の考え方が一応書かれてありますが、どれも「していくことを検討していきます」や、「幅広く検討していきます」と、分かりにくいといいますか、議会に対してはこういうことだろうという感じがしています。我々が実際に見たいのは、この意見が原案にどう反映されつつあるのか、もし原案を見せてもらえないということであれば、どういう作業が行われているのか、困っていることがあるのか、担当として書き込みたいけど書き込めないなど、そういうことをもっと知りたいと個人的に非常に思います。どれも「考えていきます」などが書いてある。今日、午前中に Facebook を見ていて、誰かが虚構新聞の記事をシェアしていまして、虚構ですが、ビッグデータを使って、役所が使っている言葉が実際にどれくらい実現しているのかを調べてみたという記事がありました。「前向きに検討します」や「善処します」と応えていただいているものが、実際の施策に結びついているのかを調べたところ、結びついていたものが０％だったという記事が虚構新聞にあり、面白いと思って読んでいました。それが頭にある中で、これを読んでいました。すいません、失礼なことをいいました。分かる範囲で結構ですが、資料 1 で紙に書けなかったけれども、今考えていることなど、差し支えない範囲で応えていただけると、少し我々の議論もイメージが進むかと思います。

石川（課長）　本当に今、悩んでいる最中だというのが正直なところ。一つ明確にお伝えできるのは、いい話ではないですが、策定スケジュールは拙速だと言われていますが、我々としては 2015 年に SDGs が提唱されて、今年度、北海道命名 150 年という節目で、そこで SDGs の取組をやっていきたいという思いで始めているので、この策定スケジュールを変えずに、北海道の全体のなかで、SDGs の取組を広げていきたいという思いで作業をしているものですから、年内にビジョンを作りたいというところは変えられない状況です。ただいまご指摘いただいたような名称の話や「めざす姿」の話というのは、前回からもご意見をいただいておりますので、それをどういうふうにするのか、あるいは変えないのであれば、例えば注釈をいれるとか、そこを今、ギリギリ検討している最中です。

谷内（局長）　若干補足しますと、もともとこのビジョンがどういうものかというと、ご存じかと思いますが、広告代理店が SDGs の認知度を調査したときに２割くらいの人にしか認知されていない、札幌市もこの前に調査されてい

ますけれども、知らない人がかなり多く占めているという状況の中で、先ほどお話しありましたけれども、あまり日常的にSDGsというものを意識されていない方が大半な中で、「SDGsやっていこうよ」、「進めていこうよ」ということを分かりやすくお示ししていければいいなというのがビジョンの取っかかりでもあります。そこに何を盛り込んでいくかというと、ただ「SDGsがんばりましょう」ということですと、二枚くらいのものになってしまうのでそうもいかない。ただ、色々な人々が日常の行動の中で、普段の生活の中で、「これがSDGsに関わっていて、繋がっているんだ」と意識できるように、具体的な取組イメージが分かるように、という意味で基本的な指針であり、ガイドラインという意味合いを持たせようかと思っております。できるだけ分かりやすいもの、使いやすいものにと考えていて、これが出来上がった暁には我々も出前講座のようなもので、色々なところに行ってお話ができるようなものにしたいと思っています。そういった意味で言うと、ご意見ありましたように、例えば、二、三年かけてじっくりやっていく、いろんなことを書き込んで素晴らしいビジョンにしていくといった、時間をかける方法もあるのかと思いますが、やはり一方で、まだまだ道内でSDGsが知られていないという中で、できるだけ速やかに作ってSDGsを広めていきたいということが想いとしてあります。そうした意味でいくと、ビジョンの名称も、SDGsビジョンがいいのか、達成ビジョンがいいのかというと、我々としては今のところSDGsを進めていこうという意味で、SDGs推進ビジョンというのが分かりやすいと個人的には思っています。「めざす姿」も、いろんなご意見があると思います。今日もご意見いただきましたけれども、SDGsが世界共通の言葉ということでいけば、北海道として何に貢献して共通の目標に向かっていくということでは、やはり世界というキャッチフレーズは何らかの形で入れ込んだ方がいい、しかし、その中に「めざす姿」で今日もご意見がありましたように、「誰一人取り残さない」や「環境・経済・社会の統合」などを「めざす姿」かどこかに、どういう形で入れ込んでいくことができるかということを現在考えているところ。

小泉　今の話、これまでの話を聞くと、北海道としてやりたいことはSDGsの取組を広めていく、そのためだとしたら、ビジョンという名前自体が変ではないですか。推進であれば推進プランとか。ビジョンというのは将来像。「こういう北海道にしよう」という将来像を決めて、そこからバックキャスティングで作っていくのがSDGs的なスタンスですよね。SDGsを推進していこうというのはまた別の話ではないですか。それなら「めざす姿」いらないですよね。

谷内（局長）「めざす姿」があって、それに向かってどのような課題があり、どういう対応をしていくのかということをその中でお示ししていかないと、皆様が取り組むに当たって何に向かってSDGsに取り組むのか、SDGsとはこういうものだというように、ただSDGsの言葉を紹介するだけでは、SDGsが進まないという気もします。SDGsを進めて行くにはこのような方向があって、こうしたものに向かって行きませんかということをお示しすることも、SDGsの取組を広めていく上で意味があるのではないかと思っています。

有坂　話が二つあり混同している気がしています。分かりやすく伝えるということと本質は何かということ、ビジョンということと推進していくことは違うもので、分かりやすく伝えるということは本当に重要だと思いますし、そこはやり方の問題だと思っています。そこを話すと、理念的なビジョンと混同してしまい、「分かりやすく伝えなければいけない」がビジョンになってしまう。それを分けて考えていないので、ずっと議論が平行している気がします。分けた方がよい。私たちは難しいことを伝えて欲しいと言っている訳ではなく、SDGsの理念に沿った形でやっていただきたいと言っているだけです。SDGsのメジャーグループとは何かといったことを伝えて欲しいということではなく、大切な、「誰一人取り残さない」といったことをちゃんとビジョンに載せていただきたい。それを分かりやすく伝えるのは、プランであったり推進計画であったりするのではないかなと思います。それが混同しているから変な感じになっている気がする。この骨子案を見ると、一緒になっているから議論が難しくなっている気がしていますので、分けられないのかなという感じがします。

石川（課長）　我々はビジョンの中で、分かりやすく伝えるものと理解していただいて具体的な行動に繋げようとするものとをビジョンと呼んでいる。

有坂　その位置付けが分からない感じになっています。

小泉　食い違っているというのを今の説明を聞いても思いました。

谷内（局長）　前回の説明でも申し上げましたが、基本的な指針、どういうふうにSDGsを進めていくのかということ、また、誰もが取り組めるようなガイドラインという二つの位置付けをビジョンに持たせようと思っていますので、有坂さんが仰っているとおり、二面性がその中に入っているということはあるかと思っています。

有坂　ビジョンというのは小泉さんが参考で出してくれたようなものをビジョンとしてイメージしてしまうものですから、そこをきれいに分けていただいた方が議論しやすいと思います。

定森　今話しているのは、推進のためのビジョン、推進をどうするかという話をしているので、達成のためのビジョンはまた別にやるなど、何か分けた方がよい。混同しているように感じる。推進のためということであれば、推進のためにやり、達成のために別でやるのであれば、それを推進プロセスの中に明記した方がよい。

吉中　達成のためにというところは、何人かからご意見のあった行動計画や、それぞれの主体が責任をもって何ができるのか、何をすべきなのかということを書き込んでいく必要がある、という意味合いのことでいいですか。

定森　そうです。優先課題というのは鈴木さんも言われましたが、あまり明記しなくてもいいのではないかと思います。それは達成計画のなかで、色々なステークホルダーとともに作り上げていくとするぐらいでいいのでは。

小泉　切羽詰まって「多様なステークホルダーの意見を」と言っているのはビジョンだから言っています。達成するための将来の北海道の姿を、多様なステークホルダーで共有するためのビジョンであれば、多様なステークホルダーと一緒に作らなければならないということ。推進方法などは、それと少し違う話。逆に言えば今回、時間のない中でやるのは、どういうふうにこれから推進していくのか、どのように多様な主体を巻き込んでいくのかというようなプランを出すというイメージであれば両立するのかな。無理に、「めざす姿」を書かないで。

吉中　推進していくために、どういうプロセスを踏んでいくべきかということを書くということですか。

小泉　そういうことであれば、齟齬がないかと思います。「将来像がこうですよ」ということを、意見を聞かない中で言ってしまったら、「へー」で終わってしまう。「そう考えてるんだ」で。

有坂　パートナーシップをうまく活かすためにいつも気をつけていることは、どれだけ参加の意識を持っていただくかということ。とても難しい。関われる余地を残す、というとおかしいですが、関わってもらえるような余白を作るということがパートナーシップには重要ではないかと思います。今、道庁が作っているものは余白がないように感じるので、逆に、広めようとするときにどうやって関わるのかというところが見えづらい。しかし、昨日、SDGsの勉強会のようなものをやった際に具体的に何をしたらいいか分からないという意見もあり、実はそれが大半だと思います。具体性を出していく必要もあるけれども、それとは何かということは、やはりその道をやられている方や専門家の人たちからの「こういうふうにやるとこうなる」といった説明があるといい。作るのは道庁と一緒にやった方がいいものができるのではないかと思います。少し矛盾していますが、最初の一歩、既に意識をもってやっている方の参加を促すには余白が必要で、それ以外のまだ意識がない人たちにとっては、より具体的なものが必要だと思う。その両方が必要で、それを一個にしようとしているのが、すごく無理があるように感じ、きれいに分けられないものかと思います。推進方法などになってくるのかもしれませんが、そこをうまく分けられたらすごくいいなと思う。私たちが今言っているのは「余白を作ってくれ」ということ。道庁の仰っているのは後者の具体的な方。そこがかみ合ってない理由かと感じました。そこを整理して議論できると、もっと建設的な議論になるのかと気がしました。

小泉　分けるということもそうですが、僕はこの機会を上手く使って、2030年の北海道の姿を色々なグループで考える集まりができるといいなという提案をしていて、全部はできないかもしれないが、いくつかはやろうと思っています。ある意味、SDGsを知らなくてもできるわけです。2030年にどういう北海道であって欲しいのかということは皆が考えられること。それが結果的に、北海道のSDGsのビジョンな訳ですよ。SDGsという言葉は広まったほうがいいですが、別に知らなくてもできることなので、今、有坂さんが言ったように、ぎっちり埋めてしまわないで、それをうまく使うことが、逆に言えばSDGsをうまく広げることにつながると思う。SDGsという言葉の問題では無く、2030年までに私たちの世界をこういうふうにしていこうという目標がSDGsであり、それを北海道という地域に落とし込んで、自分が北海道をこうしたいというところから始まるのが一番いい。これまでもそうやってきましたが、北海道が策定するビジョンとうまく重ねられると魅力的だし実質的なので、いいチャンスだと思って提案しています。

清水　私も、小泉さんが言われたように、今回道庁と懇談会をやれるというのはチャンスだと思っています。企業や多くの人達が、気がついてくれることによって、そこで働いている人達も、健全で幸福な生活が送れるよう、環境が変わっていくことを期待したい。今回は本当にチャンスにしたい、道庁と一緒にやることによって、北海道で一番多いのは中小企業ですから、中小企業が変わっていく、中小

企業で働いている人達が意識していく、そういう中で子ども達を育てていく、そして北海道が変わっていく、という姿を描きたい。そのチャンスにしたいと思い、参加させてもらっています。意識の低い経営者や企業さんもいると思いますが、その方々が少しでも気がつき、そして取り組むことによって、働きづらい環境から働きやすい環境に変わり、ブラック企業がホワイトに変わっていく。そして環境に対する意識も強くなる、そういうものに結びついていきたい。目指すものは重たいと思いますが、チャンスにしたい、きっかけにしたい、と強く思うのです。決して、意識が低いことが問題だと思っているわけではない。でもこれをチャンスにしなければ、変わるきっかけはなかなかない。何かきっかけを作らないと。それが今回、道庁が未来都市として選ばれ、そしてこれの推進を図ろうとすることをチャンスとして、僕らとしても、それを企業のなかに浸透させるきっかけにしたいと思っています。

菅原　先ほどの皆様の提案と、その後のそれぞれお一人ずつの話を聞いて、二つの考え方があったかと思います。一つは世界で輝くとか、強みを生かすという考え方。もう一方は、誰一人取り残さないとか、一番困難がある人を支援する、弱みを底上げしていくという考え方。私は両方の意見、両方の必要性があると考えます。というのも、皆様の活動を見ていて、困難を抱える方の支援をしている方は「誰一人取り残さない」を重視しがちと思うし、高みをより引っ張り上げていく活動をされる方は「世界で輝く・強み」の意見になりがちかと思います。ジェンダー平等の分野で言うと、「ガラスの天井」という言葉を聞いたことがあると思うのですが、例えば、管理職に女性がなれないとか、政治家に女性が少ないといった意思決定する立場に女性がいないといった問題。「ガラスの天井」の問題はすごく重要な問題です。一方で「べたつく床」という言葉もあります。最底辺のところから中々まともな生活に上がれないといったこと。両方大事だと私たちは考えていて、どちらが優先事項でどちらが後ということではなく、両輪でやっていくことが必要と考えていますので、そういう意味では、両方の価値を入れていただきたいと思います。「キラキラ系」も「困難を抱えている人達」も、「誰一人取り残さない」という意味でも両方とも北海道に必要だと思いますので、両方の価値を入れていただきたいと思います。

吉中　提案いただいている骨子案の中では、見る限りにおいては取り残さないという方があまりに薄いというところが気になる人が多いと思います。強みをまったく活かさないという選択肢は無いと思いますが、取り残されている人達をもう少ししっかり入れていかないと、小泉さんも仰っていましたが、SDGs の目指すところと大分本質的にずれてしまうのではと心配をしていましたが、今、仰っていたとおり両方が大事だという気がします。今のご議論の中でも、推進のための方策を書いていきます、その中でビジョンは色々な方の意見を聞いてやっていかないといけない、進捗管理するにも全ての関係者が関わる仕組みを持ってないといけません、みたいなところと少し混同していると仰っている部分をかき分けていくというのは、どういうふうになっていくのでしょうか。骨子案が出ていて、それをどこまで聞いていただけるのか聞いてみたいと思いますが、その二つを整理するとすればどんな形になり得るのでしょうか。

有坂　骨子案というのはビジョンを作るための構成のようなイメージですよね。これをもってビジョンを作るということではない。少し分からなくなってきました。

石川（課長）　骨子案をベースにしてビジョンを作ります。

有坂　ということは、「ビジョンです」というような文章が出てくるということですか。作るに当たっての考え方や状況というのが骨子案に書かれている。ビジョンの原案、こういうビジョンでいきますという文章が出てくるのが原案ということですか？

石川（課長）　ビジョンの形になったものが原案です。

小泉　ビジョンというのは、骨子案で書かれた全体を「ビジョン」と呼んでいる、呼ぼうとしているというわけですよね。

石川（課長）　そうです。

小泉　骨子案の構成と別にビジョンという文章があるイメージではないですよね。

石川（課長）　骨子案でお示ししたビジョンがありますが、それに肉付けしていったものが原案です。

小泉　項目に文章を埋めていくイメージですよね。

有坂　骨子案が骨格になって、ここで言われた意見が原案で出てきて、そのあとビジョンの案になる。では、ビジョンは出てくるということですか。

小泉　そうではなく、全体を「ビジョン」と呼んでいる訳ですよね。

渡邉（主幹）「ビジョン」とは、ワンフレーズで作る文章のビジョン、そういうものも含まさった全体を、現状と課題から推進方法までの全部を含んだものを、一つの冊子として「ビジョン」というふうにしている。

野吾　それはたぶん今までの定義ですよね。今日出ていた話を踏まえると。

小泉　そこはちょっと混乱の基になる感じがします。

野吾　そこを分ける方策はありますかね。そもそも、分けていただけるのでしょうか。

石川（課長）　先ほどご議論ありましたビジョンとプランを別に作るという議論は、今のところ考えてはいないです。

小泉　今更プランに変えるというのは難しいかもしれませんが、ビジョンの策定の仕方のようなところを、今、出せるのは出すものなのかな。ビジョンの策定も含めた推進の仕方のようなところを、道庁が考えていますよね。それを「ビジョン」と呼んでいるので混合してしまう。

野吾　ビジョンについても、前に有坂さんが定期的に見直していくようなメカニズムを組み込むという提案をされていたと思います。懇談会としては、最低限、そういうことが必要だと思います。

石川（課長）　ご意見いただいているので、見直していくということ、どのように書いていくかということを、今、検討している最中です。

有坂　例えばビジョンの推進などにそういったことを入れていくということですよね。全部をもって「ビジョン」ということになるのですね。

石川（課長）　全部をもって「ビジョン」と呼んでいます。

小泉　本来的なビジョンは、「めざす姿」のところだと思います。

有坂　そのようなイメージをしています。

小泉　言葉の意味的なビジョンとしては。

石川（課長）「めざす姿」を達成するためにどういう取組をしていくのか、というのが「ビジョン」ですよね。ですので、「取りまとめコンセプト」（注：「「地方創生に向けた自治体 SDGs 推進のあり方」コンセプト取りまとめ」（2017/11/29 自治体 SDGs 推進のための有識者検討会））で言っているように、あるべき姿を描いて、それを達成するためにどういう取組をしていくのかとしています。

小泉　例えば、私が国連のアジェンダの世界を北海道に変えたものは「私たちのビジョン」というところだけを抜き出したのですけど、あれはまさに「めざす姿」。

石川（課長）　あるべき姿ということですよね。

谷内（局長）　あるべき姿に向けて取り組む方向性も書きましょうというのが「ビジョン」ですよね。

小泉　道としては枠組みとして、もっと広いものを考えている、ということですよね。

有坂　日本政府の実施指針みたいなものをイメージされていますか。実施指針にはビジョンが書いてあって、本当に短く書いてあって、これが「めざす姿」に当たるところなのかと思います。実施指針のようなものを「ビジョン」と呼んでいるという理解をしていたところですが。

谷内（局長）　実施指針だと 5 ページくらいのものですよね。我々のビジョンというと、もっと具体的なものを考えています。

石川（課長）　実施指針では国の政策でどういうことをやるかということを書いてある書きものですよね。

有坂　実施指針のなかに色々なステークホルダーの取組が書いています。それに近いものをイメージされて、それを「ビジョン」と呼んでいるのですか。それだと理解ができます。

谷内（局長）　国の実施指針のようなにもあるニュアンスは骨子に入っていると思います。

有坂　形としては、実施指針が「ビジョン」に近い感じだと思っていますが。

菅原　ビジョンの位置付けとして、一つ目に指針と書いてある。ですので、それこそ今おっしゃっていた実施指針と同じように使われていて、二つ目のガイドラインというのが、具体的な取組イメージ、それを併せたものということでいいですか。

谷内（局長）　推進プランと言われている、どのように推進していくかということも「ビジョン」の中に入れ込んでいる。

吉中　具体的な取組イメージは資料３のイメージで募集していこうという提案がありますが、これは具体的な行動事例・先進事例のようなもので提示する感じになり、８月29日までに我々が出すということですか。

石川（課長）　我々も作業している最中ですが、皆様からも行動事例等をお持ちであり、提供いただければ、それを踏まえて書いていきたい。

清水　この件について疑問を持ったのですが、先進的な事例と言っても、こちらから見たら先進的な事例だけれども、他からみたら、というそもそも論がありますよね。それは誰が精査、審査するのですか。SDGsの目線で考えたときに、どちらを取るかというのは誰がみるのでしょうか。それがこれから一番取り組んでいくときに一番重い決意だと思います。それをはっきりしないうちに先進的事例だと言っても、真逆なものが先進的な例として出される可能性もあると思う。そういう仮定を考えておいた方がいいのではないでしょうか。

吉中　道庁の中でも事例を探していると仰っていましたが、まさに清水さんが仰っていた件は私も思っていまして、誰が選んで先進事例としてだすのか、道庁の担当者の方の責任でだすのか。それが少し心配で、具体的な行動指針や行動計画といったものは、やはり別途議論した上で、色々な方も参画した上で作っていかなければいけないのではないかという気がします。

　議論が堂々巡りになっていますが、今、私が回しているのは、私の個人的な興味で、皆様から紙で出された意見を項目毎に整理したもの、今朝、大崎さんからいただいた後にまとめたもので、漏れや言いたいことと違うことが書かれているなどあるかと思います。実はけっこう共通して仰っていることもあり、今日の話の中で「私はそうは思わない」という意見もありましたが、私の意見を言わせていただくと、一番大事なのは、このビジョンの必要性のところの二つ目の「SDGsの理念要素をしっかり踏まえるべき」だろうなという気がしています。皆様が仰っていたとおりの語句ですが、経済・社会・環境の調和というところで北海道の強みを活かしてどうやっていくかというところは充分書き込めると思います。むしろ、SDGsの一番の理念である「誰一人取り残さない」ということをどのように全体を流れるトーンに仕上げていくのかを是非考えていただけたらと思います。それが皆様の総意なのかと。その策定スケジュール・プロセスについては皆さんからご意見いただいたとおりですけれども、今出てきた行動計画や行動指針みたいなものと、いわゆるビジョンと呼んでいる、これからの推進のためにどうあるべきか、ということを上手く分けて、今の制約のある骨子案の中で分けて書けるのではないかと考えています。必要なプロセスを書き込むことが大事なのではないか、皆様からの意見だったと思います。これは今年中に作らなければいけないとしたら、それはそれとして、そこに書くべきことは今後どうするかということをしっかり書き込んでいただくことが何より重要なのではないか。そうでなければ続かないような気がしていて、作って終わりになる感じがしますので、無理して具体的な事例集を取り繕って集めて載せるよりは、こういうプロセスで作っていくということを書いていただくのがいいかと思います。皆様からの出された紙も見つつ、今日の皆様の意見も聞きつつ、思っていたところです。

　あとは羅列といいますか、皆様のものをコピーペーストして書いてあります。これで何かをしようと思っているのではなく、私の頭の整理のために作ったものですので、少しでも皆様の頭の整理に役に立つのであれば使っていただければと思います。優先課題はもう出されていますが、やはり、SDGsという枠組みを上手く使い、北海道ではどこが遅れているのか、何が一番必要なのかというところをしっかり精査された方がいい。よくあることですが、SWOT分析で、強みや弱み、機会や脅威が出ていますけど、ビジョンを見ていると弱みのところの分析が少し弱いような気がしました。後は具体的に小泉さんからいただいたような細かい提言を載せたつもりです。せっかく作ったので持ってきましたが、私のお願いとしては、今日の発言していただいたこと、今日の意見について、私の興味としてまとめていきたいので、「これ違うよ」や「もっと言いたい」、「私はこう思わない」など思うことがあれば、私にもフィードバックしていただければと思います。これをどのように使うかまで考えていませんが、先ほど、今後の原案作りを道庁が進めるプロセスの中でも、我々から意見をいう機会があると仰っていただけたので、皆様の意見をうまくこれで反映できているものであるとすれば、これに足していただいて、私の個人的なメモとして道庁さんにお渡しして、参考にしていただければありがたいという気がしています。

小泉　同じことしか言ってないのですが、関連して、前回からステークホルダーの捉え方ということで、具体的に明記が必要で、特に脆弱な立場に置かれている人の明記が必要だということを色々な形で出してきましたが、現時点で原案の中で、道としてステークホルダーをこういうふうに捉えたいというものはありますか。私が出したものに引きつけていえば、先住民族が入っているかどうか、これがかなり大きなポイントです。

石川（課長）　少し話がずれますが、そもそもの話として、ステークホルダーという言い方がいいのかという議論もあり、少し分かりづらいという意見もあります。それと、アイヌ民族についてはビジョンの中で当然言及すべきと言う意見が多い、私自身もそう思っています。しかし、どういうふうに書き込めるのか、まだ考えが決まっていませんので、引き続き検討していきたいと考えています。しかし、先ほど言われた13グループの個々の配慮すべきステークホルダーという出し方ではなく、座長からご指摘がありましたけど、全体の考え方として、「誰一人取り残さない」という理念を盛り込めないかというふうに思っている。

小泉　「誰一人取り残さない」を盛り込むことは、SDGsである限り、前提だと思いますが、「誰一人取り残さない」というのは具体的に誰なのかについて踏み込まないと、ダメだと思います。踏み込んでいますよ、少なくとも国連では。アジェンダを見ても列挙しています。何度も書かなくてもいいのではと思うくらい列挙する。それはまねした方がいいと思います。

推進ネットワークをめぐって

吉中　すいません、少し時間が超過して次のご予定がある人もいらっしゃると思いますので、まとめなければいけないのですが、お配りしたものは後ほどメールでファイルを送りますので、ご意見を書き込んでいただいて、一両日中くらいに返していただけると大変助かります。皆様の意見を入れたものをもう一度回覧させていただいて、私の責任で道庁に出していいということであれば、出したいと思います。ネットワークの話をまったくしていなく、すいません。ご意見があまりでていませんが、何かネットワークについて、言っておきたいことはありますか。

大﨑　小泉さんの受入になってしまいますが、道庁がやるので、是非、179市町村と振興局は必ず入ると、義務的にしてしまってはいかがか。現在、募集であるので、興味のあるところは入ろうかなという声が聞こえてきますが。ここで声をかければ、全市町村に情報が届く体制を作ってはいかがかなと思います。また、ネットワークの活動内容に、連携・協働した取組の実施と書いてありますが、これは具体的に道庁がコーディネートするということですか。

渡邉（主幹）　振興局は道庁ですので、入るという形ではなく、運営側に回る形になります。市町村に関しては、中々このご時世、義務で入るというような強制する権限は我々にございませんので、そこまでは言えませんが、当然、全部の市町村に入っていただきたい気持ちは持っています。募集を開始してから２週間足らずですが、30を超える市町村から参加の申込をいただいております。照会等もたくさんいただいておりますので、これからどんどん入ってきていただける、また、入ってこられないところには働きかけをしていかなければいけないと考えております。連携・協働した取組については、ネットワークが取組を広げるためということで、情報交換・情報共有の場という方向で進めておりますので、出来れば実際に集まってお話しする場を提供していきたいと考えております。そういう中で次のステップとして、連携・協働した取組に繋げていくようにしていきたいということで、実際に道が関与して、例えば、インキュベーターのようなことをやるかどうかについては、今の段階ではなんとも言えない状況です。予算も絡む話しですので。

小泉　私はRCE道央圏の運営委員でもあるので、RCEの会議で渡邉さんとは話はしていますが、改めてこの場でも少し経緯を確認しておいた方がいいのではないかと思います。RCE側から見れば、RCEはESDの地域拠点ですけれども、設立時期の関係もあり、目的の中にSDGsの達成ということを明確に入れているということもありますので、事実上のSDGsのネットワークにも成っていた。しかし、RCEといっても分からないので、SDGsのネットワークやプラットフォームなどといった打ち出しが必要だという議論があるところに、ちょうど道の人が考えていた時期とも重なり、共同事務局という話になったと思います。しかし、道側の都合でといいますか、道側の判断で共同事務局というのはなくなった。しかもあまり確認のないまま下ろされたという経緯だと思うんですよね。RCEとの議論の場ではないですが、私がきちんとした方がいいと思うのは、RCEでもSDGsのプラットフォームを立ち上げた方がいいという話は今も継続しているので、道が既に打ち出しているものとの性格を分ける、意見としてはネットワークではなくメーリングリストという名称にして欲しいというような意見もでているところですが、そのような配慮というのが少し必要ではないかと、少し他人ごとのように言っていますが、思います。

吉中　皆様も覚えていらっしゃるかもしれませんが、前回の会議資料では、このネットワークについての概要のようなものが１枚配布され、RCE道央圏が共同事務局として機能していくという案が示されていました。私も前回、こういうものがすぐ機能していくのならば、実質、ビジョンの実施と策定が平行して進んでいくということで、サポート

するような発言をした記憶があります。その後、先ほどのご説明もあったように、道の責任でまず立ち上げて始めるということが、懇談会にはまったく知らされず行われたということでございます。その辺りをもしご説明いただければ。

石川（課長）　経緯は小泉さんが仰っていましたとおりで、道側もネットワークを作るべきではないかという議論を内々でやっていまして、RCE 側で全道的なネットワークというお話もありましたので、共同というようなお話しを我々から持ちかけされていただいていたところです。そうした中で、先ほど SDGs の道内普及率が低いというようなお話をしましたけれども、やはり我々のところに、具体的に何をしたらいいか、連携して何かやりたいが、どこがどういう取組をしているのかわからないといった問い合わせが増えてきたものですから、極力早く立ち上げるべきではないかという判断に至ったというところです。その中で我々が立ち上げようとしている北海道 SDGs 推進ネットワークは、取組を行っている人あるいは関心のある人に自由に参加いただくような、緩やかなネットワークという位置付けにしています。そういった中で RCE さんだけに入っていただくよりは、我々がまずは一義的に立ち上げさせていただいて、その取組の中で連携をさせていただきたいということでそういう手続をさせていただいたところです。手続的に非常に申し訳なかったのは、会長や有坂さんには事前にお話をしていましたが、それが RCE さん全体の手続との齟齬が生じていたものですので、その辺は非常に申し訳なかったと思いますが、なるべく早く立ち上げるということで今の形になっています。

有坂　ご説明はいただきましたが、事後報告だったと思います。「こうなってしまいました。」という形だったということだけは、保身ではないですが、誤解のないようにしていただければ。金子代表と私が了承したというふうに捉えかねられないので、そこだけは誤解のないようにしていただきたいと思います。しかし、道庁も RCE の会員ですので、一緒にやっていきたいということはもちろん思っていますので、どういう形にしたら上手くできるのかということを考えられればいいかなと思います。ご事情があるのはよく分かっているつもりです。ただ、何らかの形で、小泉さんが仰っていたみたいに、多様なステークホルダーの人たちが入っている持続可能な社会を実現するためのネットワークというものは、今現在、RCE しかないと言っていいかと思います。そういった状況の中で、道庁さんが多様なステークホルダーとの連携を考えられるのであれば、RCE を使ってもらえればいいというふうに思っていて、その他の存在をいちいち集めるのではなく、既にそういったプラットフォームがあるということだけはご理解いただきたいです。RCE は法人格もありませんし、道央圏という名前がついているというところでネックになっているのかもしれませんが、実質的にプラットフォームの役割を果たしているのは RCE だけだと思っておりますので、活用をしていただき、上手く協働・連携できれば一番いいかと思っております。

　ですので、個人的に、道庁にやっていただきたいこととして、先ほど大﨑さんからも全自治体に入って欲しいというような意見もありましたが、難しいとは思いますが、道庁だからこそ声をかけやすいということがあると思います。今、ご担当されているのが総合政策部というところで、色々な部局に対してのパイプがちゃんとあるという状況の中で、部局に対して SDGs の優先しているものを一つずつ出してもらうことをやっていただいたり、先ほど指標を作る中で、照会して出してもらうといった話しがありましけれども、SDGs に凄く関わる重要なところだというものをそれぞれに考えて出していただくということなどをやっていただきたいです。各市町村に対して、SDGs で一番押しているところのようなものを出してもらうことや、14 振興局単位で、モデル都市のような市町村を一つずつ上げていただき、その人たちに集まっていただく機会を作り、そこに多様なステークホルダーが入って議論ができるような機会を作るなど、道庁でしかできないことだと思っていますので、道庁しかできない役割というのをしっかり考えていただいき、道庁で全てカバーするという考え方ではなく、道庁がやるべき SDGs ということを考えていただけると非常に凄くありがたいという気がしています。その部分で一緒に連携できるといいなという気がしています。具体的な実行の話しになってしまうかもしれませんが、自治体とのパイプという強みを SDGs 実現に向けて発揮していただくことがいいと思っております。

吉中　この作ろうとされている計画の中でも、推進のための重要なメカニズムだと思いますので、既存の RCE との役割分担や協働のあり方といったところも今後も RCE 側とも調整していただいて、書き込める問題は書き込んでいただくのがいいのかなという気がします。よろしくお願いします。すいません、時間がどんどん押してしまって。また、まったく何も結論が進まないまま終わってしまいました。今年中に何らかの形でビジョンと呼ばれているものを作り上げるということは外せないという道庁の強いお考えを踏まえつつ、また、空気に対してどうやってものを言うのかということも認識しつつですが、できるだけのことは言っていきたいと思っております。皆様のご意見をこれからも、直接道庁側に伝えていただければと思いますし、もし私の書き始めたものが少しでも参考なるのであれば、それに書き足していただいて、まとめた形で出せるのであれば出し、できる限り道庁に考慮していただければと思います。これ以上のことは何もできないかという気がします。９月の公表の時に見て、「なんだこれ」ということにならないように期待しつつ、難しいというのは重々承知の上、重ねてお願いさせていただけるとすれば、公表前にできるだけ何らかの形で、「こんな方法で考えています」というようなことだけでも、懇談会のメンバーにお知らせいただければありがたいと思います。具体的なものを見せていただく必要はないと思いますが、ご指摘したことについては、「このような形で具体的に書き込む方法で進める」というような、プログレスレポートを聞きたいという気がしておりますので、それも合わせてご検討いただければ大変ありがたいと思います。このようなところで終わっていいでしょうか。私にも、少し違うのではというようなことをメールでもいただければと思いますので、よろしくお願いたします。では、マイクを事務局にお返ししてもよろしいでしょうか。よろしくお願いします。

石川（課長）　本当に本日も熱心にご議論をいただきまして、ありがとうございます。本日の懇談会はこれをもって終了させていただきますけれども、先ほども申し上げましたが、当初 10 月下旬で３回目を開催して終わるというようなお話しをさせていただきましたが、10 月の中くらいに３回目を開き、そのときには意見に対してどのように整理させていただいたかというものもご紹介させていただいて、またご意見をいただければなと思っています。それは最終案に向けて、「このようにすべきではないか」というようなご意見になるかと思いますが、そういったご議論をいただきたいなと思います。先ほど少し申し上げましたけれども、ビジョンの出来上がった段階で最後かなと思っておりますが、それはまた考えさせていただいて、別途ご相談をさせていただければなと思います。これで今日は閉めさせていただきますけれども、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

■第３回北海道 SDGs 推進懇談会　道提出資料（一部のみ）

◇資料１　（仮称）北海道 SDGs 推進ビジョン（原案）　※省略、以下を参照

http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/sks/SDGs/hkdSDGsvision-genan1.pdf

http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/sks/SDGs/hkdSDGsvision-genan2.pdf

http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/sks/SDGs/hkdSDGsvision-genan3.pdf

◇資料２　第２回北海道 SDGs 推進懇談会における意見について

資料２

第２回北海道ＳＤＧｓ推進懇談会における意見について

	ご意見の概要	意見に対する道の考え方
1	**「ビジョン」の必要性** ・　北海道総合計画と同じ内容、同計画を前提・ベースとして考えるなら不要。 ・　策定するのであれば、SDGs の理念、要素を踏まえるべき。 ➢　「誰一人取り残さない（最も遅れているところ、脆弱な立場に置かれている人に手を伸ばすべき）」 ➢　「経済、社会、環境の調和」 ➢　「バックキャスティング」 ➢　「人権ベース」 ➢　「同時解決・統合的アプローチ」	○　SDGs の推進に当たっては、その理念や意義について道民の皆様の理解が広がり、幅広い分野や地域で様々な取組が展開されることが重要。このため、道内の多様な主体が共有する「基本的な指針」となり、それぞれの取組を促進する「ガイドライン」となるビジョンを策定することとしており、その旨は、ビジョン原案の１の「(1)策定の趣旨」、「(2)ビジョンの位置付け」に記載。 ○　「誰一人取り残さない」等といった SDGs の理念や意義などについては、原案の１の「(4)SDGs の概要等」、３の「(1)めざす姿」に記載。
2	**策定スケジュール** ・　現行スケジュールでは透明で多様な主体参加型の議論を十分に行えないことから、スケジュールを見直すべき。 ・　どうしても今年中に策定する必要があるのであれば、「ビジョン」の性格・内容・項目等について再検討すべき。	○　2015 年に国連で採択された SDGs の理念や意義について、道民の皆様の理解が広がり、幅広い分野や地域で様々な取組が展開されるよう、できるだけ早期にビジョンを策定する必要があると考え、年内を目途にビジョンを策定することとしており、その策定に当たっては、SDGs 推進懇談会での意見交換をはじめ、知事の附属機関である北海道総合開発委員会での議論、SDGs 推進ネットワークの会員や市町村、各種団体への意見照会、さらにはパブリックコメントなどを通じて、幅広くご意見を伺いながら検討していく考え。 ○　また、ビジョンの原案には、SDGs に関する道民の理解が広がり、幅広い分野や地域で様々な取組が展開されるよう、SDGs 推進に向けた基本的な考え方をはじめ、めざす姿や優先的に取り組む課題と対応方向、各主体に期待される取組例、推進手法などを記載。
3	**策定プロセス** ・　多様なステークホルダーの関与が必須。	○　ビジョンの策定に当たっては、市町村や関係団体、SDGs 推進ネットワーク会員への意見照会を行うほか、パブリックコメントを通じて、道民の方々から広く ご意見を伺うとともに、SDGs 推進懇談会をはじめ、各部・各振興局が開催する各種会議等の場の活用、さらには、地域で SDGs の活動に取り組んでいる方々とも意見交換を行うなど、丁寧な策定手続きを進めてまいる。

	・　意見・情報収集、計画策定、事業立案・実施、評価、全てのプロセスにおいてジェンダーの視点を取り入れるとともに、脆弱な立場におかれている人々、特に先住民族（アイヌ民族）の参画を保障し、その視点を取り入れるべき。 ・　ステークホルダー毎のビジョン提案ワークショップを開催するなどして、できる限り多様なグループの意見を「ビジョン」に反映させること。	○　ジェンダー視点の主流化やアイヌの人たちなど「誰一人取り残さない」といった考えについては、ビジョン原案の１の「(4)SDGs の概要等」と３の「(1)めざす姿」に記載。 ○　ビジョンの策定に当たっては、市町村や関係団体、SDGs 推進ネットワーク会員への意見照会を行うほか、パブリックコメントを通じて、道民の方々から広くご意見を伺うとともに、SDGs 推進懇談会をはじめ、各部・各振興局が開催する各種会議等の場の活用、さらには、地域で SDGs の活動に取り組んでいる方々とも意見交換を行うなど、丁寧な策定手続きを進めてまいる。
	・　「透明で多様な主体参加型の議論」を十分に行わずに策定する場合には、「ビジョン」が不十分なプロセスで策定されたものであること、策定後は多様なステークホルダーの参画を得て随時更新していくことを明記すべき。 ・　また、基礎自治体や北海道全域のステークホルダーの意見をどのように反映させるのか明記すべき。 ・　「官民一体」「地方創生」といった用語は本文脈では不適切。	○　ビジョンは、策定後においては、各地域で説明会を開催するなど、ビジョンの周知を図るとともに、様々な機会を通じて、ビジョンをはじめ、本道における SDGs 推進についてご意見を伺い、必要に応じて見直しを行うなど、柔軟な対応に努めることとし、その旨はビジョン原案の４の「(3)推進管理」に記載。 ○　「官民一体」については、ビジョン原案では公的セクターと民間セクターの垣根を越えて連携していく旨を、ビジョン原案１の「(1)策定の趣旨」に記載。 　また、「地方創生」については、国の創生総合戦略において、SDGs の推進は、地方創生に資するものとしていることを踏まえ、ビジョン原案では、SDGs の推進に期待される効果の一つに「地域創生の推進」として、ビジョン原案１の「(4)SDGs の概要等」に記載。

4	**「ビジョン」の名称** ・ 2030 年を目標年とした場合「推進」している余裕はなく、「達成」を目指すべき。名称からも「推進」を削除、あるいは「達成ビジョン」へと変更すべき。 ・ 策定しようとしているものは「めざすべき姿=ビジョン」なのか、SDGs 達成のための「推進方策」なのか、位置づけの明確化が必要で、それに応じて名前も検討すべき。	○ ビジョンの名称については、北海道全体で SDGs の達成に向けた取組を推進していくためのビジョンであることを表すため、「(仮称) 北海道 SDGs 推進ビジョン」としている。なお、「SDGs の達成に向けた取組を推進すること」を「SDGs の推進」と表すことを記載。 ○ このビジョンにおいては、世界共通の目標である SDGs について、北海道全体で取組を積極的に推進していくため、本道の実情に即して、2030 年のあるべき姿を描き、その実現に向けた取組の方向性を道民の皆様と共有する「基本的な指針」であり、多様な主体の取組を促進する「ガイドライン」として位置付けている。
5	**「ビジョン」の役割・性格** ・ SDGs の核となる要素を取り入れるべき。 ➢ 「誰一人取り残さない (最も遅れているところ、脆弱な立場に置かれている人に手を伸ばすべき)」 ➢ 「経済、社会、環境の調和」 ➢ 「バックキャスティング」 ➢ 「人権ベース」 ➢ 「同時解決・統合的アプローチ」 ・ 現行の策定プロセス・スケジュールでは「道内の多様なステークホルダーが互いに共有する基本的な指針」とはなり得ない。 ・ そもそも策定しようとしているものは「めざすべき姿=ビジョン」なのか、SDGs 達成のための「推進方策」なのか、位置づけの明確化が必要。「骨子案」の構造そのものをもし変えられないとしても両者の書き分けは可能ではないか。	○ 「誰一人取り残さない」等といった SDGs の理念や意義などについては、原案の１の「(4)SDGs の概要等」、３の「(1)めざす姿」に記載。 ○ SDGs の理念や意義について、道民の皆様の理解が広がり、幅広い分野や地域で様々な取組が展開されるよう、できるだけ早期にビジョンを策定する必要があると考え、年内を目途にビジョンを策定することとしている。その策定に当たっては、幅広くご意見を伺いながら、SDGs の趣旨や優先的に取り組む課題、参考となる取組例などをできるだけ分かりやすく示しながら、多様な主体の方々と取組の方向を共有できるものとなるよう検討していく考え。 ○ ビジョンは、北海道全体で SDGs の達成に向けた取組を推進していくためのビジョンであることを表すため、「(仮称) 北海道 SDGs 推進ビジョン」としている。なお、ビジョン原案では「SDGs の達成に向けた取組を推進すること」を「SDGs の推進」と表すことを記載。

	・ SDGs について全く知らない人々にまずは知ってもらうことが重要。わかりやすく伝え、自分のことと捉えてもらえるきっかけとなることが必要。0 から 1 にする取り組みを。 ・ 「４．ビジョンの推進（１）各ステークホルダーの取り組み」は、その策定プロセスに各ステークホルダーの十分な参画が保障されていない現状では削除すべき。むしろ、各ステークホルダーに自分自身の興味関心がどこにあるのか SDGs を基に整理していくことを促すような文言を追記すべき。 ・ 「ビジョン」達成に対する各主体の「責任」及び「変革すべき点」を明確にすべき。そのためには各主体の参画のもと実質的な議論が必要。 ・ 北海道がグローバルな目標に寄与すべき事項を明確にすべき。 ・ 北海道庁の各施策に SDGs の核となる要素を組み込んでいくことが必要。 ・ 基礎自治体の「参画型」SDGs 関連施策策定のための支援方策（技術・財政）を明記すべき。 ・ ジェンダーについては、ステークホルダーとしての「女性」だけでなく、SDGs 全体の横串となるものでもあるという認識・記載が必要。	また、ビジョンは、世界共通の目標である SDGs について、北海道全体で取組を積極的に推進していくため、本道の実情に即して 2030 年のあるべき姿を描き、その実現に向けた取組の方向性を道民の皆様と共有する「基本的な指針」であり、「多様な主体の取組を促進する「ガイドライン」と位置付けている。 ○ 道民生活や企業活動の中に SDGs を取り込んでいただけるよう、各主体の SDGs への様々なアプローチ手法については、1 の「(4)SDGs の概要等」に記載するとともに、優先課題の対応方向ごとに、今後の取り組みに向けて参考となる取組例などをビジョン原案３の「(2)優先課題と対応方向」に記載。 ○ グローバルな目標への寄与については、多様な国際交流や国際協力に取り組むこととし、その旨はビジョン原案３の「(2)優先課題と対応方向」に記載。 ○ 道の各施策への反映については、各種計画等の策定や改訂に当たりビジョンの内容や SDGs の要素の反映に努めることとし、その旨はビジョン原案の４の「(2)推進手法」に記載。 ○ ネットワーク組織の活動などを通じて、市町村との連携を強めるほか、意見交換の場づくりや取組を支援する仕組みを検討していく考え。 ○ ジェンダーの視点等については、ビジョン原案の１の「(4)SDGs の概要等」と３の「(1)めざす姿」に記載。

6	**ステークホルダー** ・「誰一人取り残さない」ために、国連の「メイジャーグループ・その他のステークホルダー」をベースとし、北海道において特に配慮すべきグループ、脆弱な立場に置かれているグループをステークホルダーとして明記すべき。 ➢ 農村・農業者 ➢ 先住民族 ➢ 行政（基礎自治体） ➢ 科学コミュニティ ➢ 子ども・若者 ➢ 女性　等 ・多様なステークホルダーとの連携・協働（意見交換、政策協議、計画策定、事業立案・実施、評価等全てのプロセスにおいて）の方策について具体的に明記すべき。	○　ビジョン原案では、「ステークホルダー」といった表現については、道民の皆様にとって分かりやすいものとなるよう「主体」と標記。 ○　「誰一人取り残さない」等といったSDGsの理念や意義などについては、ビジョン原案の１の「(4)SDGsの概要等」、３の「(1)めざす姿」に記載。 ○　多様な主体との連携・協働については、ビジョン原案４の「(2)推進手法」、「(3)推進管理」に記載。
7	**優先課題** ・「めざす姿=ビジョン」を「世界の中で輝き続ける北海道」とすることは2030アジェンダの理念と合致しない。本来の意味での「ビジョン」については、2030アジェンダの「私たちのビジョン」をベースとして今後多様なステークホルダーと協働しつつ策定していくべき。そのためには十分かつ広範な議論が必要。今もしキャッチフレーズが必要であれば「誰一人取り残されない北海道」といったものではないか。 ・解決すべき課題の根底原因を探り、それを優先課題とすべき。 ・過去・現在・未来における課題を直視し、脆弱な立場に置かれている人々を優先的に取り上げるべき。 ・SDGsの17項目毎に北海道の抱えている課題を抽出・整理すべき ・恣意的に設定した「優先課題」にSDGsを紐付ける様態では目標間の繋がり・統合的アプローチが明確にならない。そもそも「優先課題」の設定は必要なのか。 ・「世界に誇れる北海道の価値と強み」項目は不要。むしろ「弱み」について正しく分析、認識すべき。 ・「北海道の強み」についても「弱み」と合わせて検討すべき。 ・「強み」を伸ばすよりも専門家や実践している人たちが把握しているデータ・知見を駆使して「取り残されている存在」を把握し、「最も遅れているところ」への対処こそが優先課題であるべき。 ・必要なのは「持続可能な経済成長」ではなく「持続可能な経済」ではないのか。 ・ステークホルダーごとにSDGsの目標との関連性を示すことが有効ではないか。「めざす姿」の実現のために自分自身の興味関心がどこにあるのかSDGsを基に整理していくことを促すような文言を追記すべき。	○　ビジョン原案では、SDGs推進に当たっての「めざす姿」について、本道ならではの価値と強みを活かして、SDGsの推進に積極的に取り組むことによって、「世界の中の北海道」としての存在感を高めながら、誰一人取り残さない、将来にわたって安心して心豊かに住み続けることができる地域社会を形成していくといった観点から「世界の中で輝きつづける北海道」としたところ。 ○　優先課題については、「めざす姿」の実現に向け、多様な主体が、本道の課題や価値・強みなどをSDGsと関連付けながら、取り組む課題を共有することが重要と考え、SDGsのゴールやターゲット、さらには、北海道の課題や強みなどを踏まえ、SDGsの推進に当たって優先的に取り組む課題を整理し、ビジョン原案３の「(2)優先課題と対応方向」に記載。 ○　「価値や強み」については、本道ならではの価値と強みを活かしSDGsの推進に積極的に取り組むことにより、「世界の中の北海道」としての存在感を高めながら、誰一人取り残さない、将来にわたって安心して心豊かに住み続けることができる地域社会を形成していくといった考えから、ビジョン原案２の「(2)世界に誇れる北海道の価値と強み」に記載。 ○　経済成長については、SDGsのゴール８「包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用を促進する」を踏まえ、優先的に取り組む課題の一つとして、ビジョン原案２の「(2)優先課題と対応方向」に、「北海道の価値を活かした持続可能な経済成長」として記載。 ○　各主体が様々な取組を進めていくための対応方向や今後の取組に向けて参考となる取組例をビジョン原案３の「(2)優先課題と対応方向」に記載。
8	**「行動計画」の策定** ・「ビジョン」達成のための戦略、行動計画を策定し、その達成に至るまで随時見直しを行っていくべき。 ・策定に当たっては、多様なステークホルダーの参画を得て協働することが必須（「ビジョン」策定プロセスの失敗を繰り返さない）。そうでなければ実効性が期待できない。	○　各主体それぞれがSDGsの達成に向けた計画づくりの手法などを記載したSDGsへの様々なアプローチ手法について、ビジョン原案の１の「(4)SDGsの概要」に記載。 ○　ビジョンの策定に当たっては、SDGs推進懇談会での意見交換をはじめ、知事の附属機関である北海道総合開発委員会での議論、SDGs推進ネットワークの会員や市町村、各種団体への意見照会、パブリックコメントなどを通じて、幅広くご意見を伺いながら検討していく考え。 ○　また、ビジョンの推進管理については、ビジョン原案４の「(3)推進管理」に、ネットワーク組織の活動などを通じて道内の様々な主体の取組状況を把握し、広く共有するとともに、道の取組については、政策評価を通じて共有し、ビジョンに設定した指標を用いて、進捗状況のフォローアップを行う旨などを、ビジョン原案４の「(3)推進管理」に記載。

9	**進捗モニタリング・評価** ・ 各ステークホルダーが継続的に情報を入手し、チェックできる体制を作ることが必要。 ・ 多様なステークホルダーと協働の上、2019 年度末までに「ビジョン」における指標を策定し、その後の進捗管理を行う体制を構築すべき。 ・ 既存の道庁が用いている指標だけでは不十分。道庁以外の知見も活用すべき。 ・ 指標の検討と平行して広く道民を対象として「ビジョン」の説明、意見徴収・意見交換を各市町村と連携しつつ行うべき。 ・ 透明性・説明責任の観点からも専門性のある多種多様な視点による継続的なモニタリング・評価が行われる体制を作るべき。 ・ SDGs 達成のためのネットワークとしては、道が立ち上げ募集を開始した「推進ネットワーク」と「RCE 北海道道央圏」との協働が重要。両者の役割分担、具体的な協働体制等について書き込むべき。	○ 取組の目標や進捗状況が分かりやすいものとなるよう、ビジョン原案の３の「(2)優先課題と対応方向」の中で、対応方向ごとに「指標」を設定。 ○ 指標については、原則、次の考え方に沿って選定していますが、原案に示した指標以外で参考となるデータがある場合は、幅広く検討していく考え。 ① 経済社会の状況や道民の暮らしの状況を表すアウトカム指標 ② 都道府県順位の把握や全国平均値との比較ができる指標 ③ 原則、毎年または隔年で公表される指標 ○ ビジョンの策定に当たっては、SDGs 推進懇談会での意見交換をはじめ、知事の附属機関である北海道総合開発委員会での議論、SDGs 推進ネットワークの会員や市町村、各種団体への意見照会、パブリックコメントなどを通じて、幅広くご意見を伺いながら検討していく考え。 ○ ビジョンの推進管理については、ビジョン原案４の「(3)推進管理」に、ネットワーク組織の活動などを通じて道内の様々な主体の取組状況を把握し、広く共有するとともに、道の取組については、政策評価を通じて共有し、ビジョンに設定した指標を用いて、進捗状況のフォローアップを行う旨などを、ビジョン原案４の「(3)推進管理」に記載。 ○ また、ビジョンについては、経済社会情勢の変化や SDGs に関する道内外の動向などを踏まえ、多様な主体の参画の下、幅広く意見を伺いながら必要に応じ見直す旨を、ビジョン原案の４の「(3)推進管理」に記載。 ○ 既に様々な取組を行っている団体等との連携・協働については、ビジョン原案４の「(2)推進手法」に記載。

◇資料３　平成 30 年度　第１回北海道総合開発委員会の概要

※省略

◇資料４－１　ビジョン（原案）に対する意見について（パブリックコメント）

ビジョン（原案）に対する意見について（パブリックコメント）

資料４－１

（１）「１　ビジョンの基本的な考え方」に関する意見

	意見の概要	原案ページ
1	（１）策定の趣旨 「かけがえのない地球環境を守り、多様性と包摂性のある社会の実現に向けてＳＤＧｓを共通の目標に掲げ、公共セクターと民間セクターの垣根を越え、多様な主体が連携しながら、幅広い分野で促進する」という基本的な考え方に賛同します。 当協会としても、ＳＤＧｓ推進ネットワークの一員として、さまざまな観点から取り組む所存です。ＳＤＧｓの理念が、次代を担う青少年にも広く浸透することを期待します。	1
2	「効果」が最も重要でビジョンの核となると思うが、これが「経済」「社会」「環境」のバランスに配慮したものとなっているか。	5
3	「国内外の多様な主体との連携やパートナーシップの推進」 様々な主体は、道内で見ても条件が大きく異なる大都市札幌と地方の市町村、海外に目を転じれば先進国、開発途上国が混在しています。また、一概に大都市、先進国で解決済の問題が、そのまま地方の市町村、途上国の問題として残されているとは言えません。新たな問題が地方、途上国に見出されている場合もあるし、大都市、先進国と地方都市、途上国に共通する問題もあると考えられます。 大都市と地方、先進国と途上国が対等の立場で連携しパートナーシップを強化し、相互に経験を共有し学び合うことが重要であり、そのことによって、期待されるイノベーションが生み出されると考えます。	6

（２）「２　北海道を取り巻く状況」に関する意見

	意見の概要	原案ページ
4	「北海道を取り巻く状況」が資料・図表とともにまとめられていて分かりやすいと思います。	9～42
5	「生活保護世帯の状況」について、保護率のみを問題としているが、実態として、生活保護基準以 下の収入でも保護を受けているのは2割程度といわれている（捕捉率20%）。本来、捕捉率は１００％を目指すべきであり、この旨の記述を追加すべき。	10
6	○環境基準対策 原子力非常事態宣言が未だに解除されていない福島原発からのトリチウム汚染水問題や、六ケ所村核燃料再処理工場から放出され続けている放射能流入対策が考慮されていない。青森県の発癌率は全国１位である。泊村の発癌率も全道で１位を占めている。 フルＭＯＸ燃料の大間原発の建設を中止させないと、戸井のマグロは食べられなくなるし、事故発生時は、北海道が滅亡する。	14 45
7	○障害者の実雇用率 水増しと疑わざるを得ない。	24
8	「鉄道、航空路、航路といった基幹的な交通ネットワークや交通基盤の充実が必要となってきます」とあるが、３１ページに「鉄道」についての記載がない。空港や道路同様、鉄道の「高速化率」や「電化率」、「複線化率」などのデータを掲載してはどうか。	30
9	「道内空港の国際線利用者数」について、既に２０１７年（暦年・年度）のデータが発表されていることから、グラフに最新のデータを追加すべき。	31
10	○「強み」を活かして「北海道」の存在感を高めていくことがＳＤＧｓを推進し、これから必要となることなのか。逆に「強み」に含まれない目標に対して道にとって「弱い」部分を今後、どう推進していくべきかを道民とともに考えていくべきと思う。特に「ジェンダー平等」の目標達成に向けて。	33
11	○太陽光発電 太陽光発電による電力の買取価格が半減し、補助金も受けられなく成るので、太陽光発電パネルは、再生利用が困難な粗大ゴミとして各地に放棄されかねない。	39
12	○外国人留学生の受け入れ増加 日本人学生が、教育ローンを組まされ、借金漬けにされ、バイトに苦しみながら生活を送る一方で、外国人留学生は、学費も寮費も無料の上に、毎月のプリペイドカードまで支給されるのは、税金を使う優先順位が逆転していて本末転倒である。定員数を満たすためだけの、補助金目当ての留学生の受け入れは、日本人学生との対立関係を激化させる結果を齎す。	41
13	○トップアスリート育成 トップアスリートに選ばれるのは、極ほんの一握りのスポーツエリートに過ぎず、選ばれなかった、その他、多くの落ちこぼれ選手を乱造する結果を引き起こし、大きな社会問題に発展する。 トップアスリート育成を目指した国々は、例外なく、マフィアや暴力団などの闇社会が勢力を拡大し、違法薬物の蔓延化と、治安の深刻な悪化に繋がっている。 道民の生活を脅かす結果を引き起こす、トップアスリート育成は断念すべきである。	42
14	○あらゆる人々の活躍の促進 高齢者は年金を受け取らずに、死ぬまで働け、の意味に聞こえる。有給休暇の取得の義務化、男性の育児休暇取得の促進、ワークシェアリングの導入などの具体策が必要である。	44

（３）「３　北海道のめざす姿と優先課題・対応方向」に関する意見

	意見の概要	原案ページ
15	「北海道」が2030年のあるべき姿としている「世界の中で輝き続ける北海道」を目指してＳＤＧｓの目標達成に向けて推進し得ようとしているものは『持続可能な地域社会の形成』か。	43
16	「価値と強み」、「価値」(単独)、「強み」(単独)が文中に混在しています。「価値と強み」に統一するのが適当と考えます。従って、優先課題III は「北海道の価値と強みを活かした持続可能な経済成長」と修正してはいかがでしょうか。	45
17	「優先課題」ごとに記載されている指標の位置づけが不明です。達成しても優先課題の解決につながる指標になっていないと考えます。	48～

18	優先課題ごとの対応方向に［指標］が記載されていますが、それぞれの施策による現状値と目標値の集約のみに受け取れます。道としてのSDGsは何なのかよくわかりませんでした。2030年にそれぞれのゴールが具体的に記載され、それに対する取り組みがバックキャスティングで書かれていることが必要と思います。そのためには、もっと議論や策定の時間が必要で、引き続きステークホルダーとの議論を継続することを望みます。	48～
19	（２）優先課題と対応方向 　各項目に付記されている「指標」のうち、「現状値」については出典が示されていますが、「目標値」についてもその根拠を明示する必要があると思います。 　ビジョンの目標値は、北海道総合計画（2016年度～2025年度）の指標の目標値と一致しているものも多くありますが、総合計画に含まれていない指標や、総合計画の目標値と一致しない数値が記載されている項目もあります。（※例えば、59頁の温室効果ガス排出量、77頁の外国人居住者数など）。 　これらの数値は今後の議論の基礎資料となるものであり、ビジョンにおける目標値の考え方や根拠を示すなど、丁寧で分かりやすい記述を求めます。	48～79
20	指標の「喫煙率」の目標値が１２％となっているが、喫煙者本人の健康増進や受動喫煙の防止の観点からゼロを目指すべきであり、修正すべき。	49
21	指標の「自殺死亡率」の目標値が１２．１以下となっているが、ゼロを目指すべきであり、修正すべき。	49
22	指標の「交通事故死者数」の目標値が１５０人以下となっているが、死者ゼロを目指すべきであり、修正すべき。また、死亡には至らないが重度の後遺症を含む負傷者は毎年１万人を超えている。事故発生件数および負傷者についても減少を図るため、死者数同様に目標値を設定すべきである。	50
23	指標の「人権侵犯事件数」の目標値が全国平均値となっているが、人権侵害は１件たりともあってはならないものであり、目標値をゼロに修正すべき。	51
24	「ヘイトスピーチ」に関する記述がないが、人権侵害の観点から看過できない問題であり、記述を追加すべき。	51
25	気候変動対策の重要な取り組みのひとつに再生可能エネルギーの推進が期待されていますが、そのひとつとして風力発電施設があります。道北を中心に大規模な風力発電施設が整備されていますが、野鳥や景観の関係が整理されておらず、関係者に不安が広がっています。本ビジョンでは別々に考えられていますが、自然環境と再生可能エネルギーの両立を考える項目が必要ではないでしょうか？	56 58
26	「地球環境保全の推進」について。温室効果ガス削減のためには、主としてマイカーに起因する運輸部門の削減が必要である。マイカー依存型社会を脱却し、公共交通機関へのシフトを中心とした温暖化対策、意識啓発を図っていくことを明記すべき。	58
27	○水素・燃料電池（ＦＣＶ）自動車の普及啓発、道央圏の水素利用の基盤整備を推進 　水素ステーション１基の建設費は２億円。ガソリンスタンドの建設費２０００万円。電気自動車の充電スタンドは２００万円。つまり、水素ステーション１基の建設費で、電気自動車の充電スタンドが１００台も設置できる。コンビニやホテルの敷地内にも、手軽に設置できている。 ※FCVは二度に渡る変換効率も悪く、インフラ整備に膨大な費用が掛かり過ぎで、無駄遣いの極みである。水素・燃料電池（FCV）自動車の普及啓発は中止し、計画を断念すべきである。	58
28	○木質バイオマス発電事業 　福島原発事故による放射汚染で生じた、除染事業で掻き集められた、木質バイオマス（枯れ枝、枯れ葉、雑草、海草、等）を、燃料ペレットやバイオコークスなどに加工し、北海道内で燃やす事は、放射能汚染の道内への拡散と成るので、許されない。	61
29	「道内空港の国際線利用者数」の現状値および目標値について、既に公表されている２０１７年度の最新データによると、道内５ 空港（新千歳、函館、旭川、帯広、釧路）で３７４万人を記録している。２０１８年度はさらに増加が見込まれており、原案の目標値（２０２５年３８０万人）では数字が低すぎ、２０１８年度中には 確実に達成される模様である。過去５年間、利用者数は毎年平均４９７千人増加している。７年後の ２０２５年の目標値は３７４４千人+４９７千人×７年=７２２３千人と推定される。以上により、現状値を３７４万人、目標値を７００万人程度に修正してはどうか。	68 79
30	i 子ども・青少年の確かな成長を支える環境づくり　本文の２行 未来を担う人材は、「世界で活躍できる多様な人材」ではなく、国境を超えた「国内外で活躍できる多様な人材」と考えます。	69
31	i 子ども・青少年の確かな成長を支える環境づくり　本文の２行 子どもたちが「健やかに成長できる」ためには、「学力・体力のステップアップ」だけでは不十分と考えます。格差の固定化、連鎖、それらが子供の教育環境に負の影響を及ぼしている状況を改善することが必要不可欠です。換言すれば、子どもたちが将来に希望を持てるような環境整備が必要です。この観点からの【指標】も追記したほうが良いと思います。	69
32	i 子ども・青少年の確かな成長を支える環境づくり　本文の２行 北海道の未来を担う人材として海外人材は必要であるが、「海外の優秀な人材」に限定することはないと考えます。	69
33	指標の「育児休業取得率」の目標値が低すぎる。本来の趣旨に鑑み、目標値を男女とも100%に修正すべき。	72
34	iii 国際協力や多文化共生の推進 ・国際協力はSDGs ゴール1～17 全てに関わるので、すべてのアイコンを表示したほうが良いと思います。	77
35	iii 国際協力や多文化共生の推進 ・本文の３行に関して、「持続可能」かつ「個性あふれる」地域づくりには、在留外国人に限らず外国人観光客との「多文化共生」推進が必要なことは容易に理解できると思われますが、「国際協力」と地域づくりの関連性に関しては理解されないおそれがあります。取組例には多文化共生事例しか記載されていないため、国際協力の実践例を追記することも検討できると思います。優先課題IV の未来を担う人材として、海外の人材が有用であると同じような意味で、地域づくりには国際協力が活用できることを追記することをご検討ください。	
36	・【指標】に関して、 　外国人居住者数が32,408 人から38,000 人に増えたことで、必ずしも国際協力や多文化共生が推進されたとは言えないと考えます。市町村自治体、NPO・NGO、団体等が実施する「国際協力」案件数の増加、他の都府県の外国人居住者数の増加率を上回っているかどうか(北海道が外国人材にとって他府県より魅力的であることの証左の一つになると思われる)などの指標の検討をお願い致します。	77

37	iv 社会・経済を支える持続可能なインフラ整備の推進 「社会・経済を支える持続可能なインフラ整備」は優先課題V だけに対応が必要なものではなく、他の優先課題にとっても必要不可欠なものと考えます。ここでは、「地域づくり」に限定したインフラ整備推進と理解できる記述としたほうが分かりやすいと思います。	78

（４）ビジョン全体に関する意見

	意見の概要	原案ページ
38	ビジョンの基本的な考え方の前に、道としてＳＤＧｓの推進に対する「あり方」を示すべきと思う。	－
39	今回「北海道SDGs推進ビジョン」を拝見して、私には『明確な目的』を読み取ることができません でした。策定の趣旨は、分かりましたが、それだけでは、各々の気持ちに響くことは難しいです。目的が明確になったときに、道民の気持ちを同じ方向に向けられると思います。そのため、一番初めに『目的』を策定してはいかがでしょうか？	－
40	2030年をターゲットとする「ＳＤＧ’ｓ」をもとに、北海道の未来構想を立案し、その実現に向けての施策を多角的にわかりやすく提示しながら推進しようとする発想に賛同します。	－
41	SDG’sの理念の一つである「誰も置き去りにしない」世界の確立という点をしっかりと強調しながら、2030年の社会を担う現在の中学生や高校生に対して、意識の高まりを促すようなアプローチ・働きかけを期待します。教育現場への働きかけとして、例えば、①SDG’sに関わるアイディアを募集し、そのプレゼン大会を10年程度定期的に開催する。②各分野の専門家や研究者と中学生や高校生との意見交換の場を開催する。③国際交流の一環として、海外の中学生や高校生と北海道の生徒との意見交換の場（高校生サミットのような場）を開催する。④『アイディアブック』のようなものを編纂またはHP上に開設し、アイディアや情報の共有化を図る。などが考えられます。文科省から出された高等学校の新学習指導要領においても、特に公民科において、SDG’sは具体的に取り上げられています。ぜひこの機会に、教育現場への働きかけ、支援を強化していただきたいと希望します。	－
42	2030アジェンダでは、特に「脆弱な人々」への取り組みが求められ、全ての人の人権と基本的な自由の尊重が重要であることがこの取り組みを進めていく上で、不可欠であるとされている。加えて日本国内においては、5つの「実施のための主要原則」が掲げられ、その一つとして「包摂性」として、この視点が捉えられている。しかし、今回作成された原案に対して、「外国人」と「人権」をキーワードに検索してみると、その内容の薄さが気になった。	－
43	今回の胆振東部地震では、地震直後の「外国人観光客」への対応が大きな課題となったのは言うまでもない。「外国人観光客」を経済効果としてしか捉えていなかったからだろう。改めて「脆弱な人々」への視点から検討されることを願う。今回の原案で「外国人」は、主に「外国人観光客」であり、次に「外国人留学生」となり、地域住民としての外国人での視点ではない。道庁のHPで「外国人」を検索すると、「外国人観光客」に関するものが主であり、次に来るのは、「外国人技能実習生」である。既に北海道の経済活動を支える重要な存在として「外国人技能実習生」がいるにも関わらず、今回の原案ではその存在に触れずにいることに疑問を感じている。「外国人技能実習生」の存在を肯定するつもりはない。しかし、農業、漁業、林業、酪農業という北海道経済を支える現場では既に「外国人技能実習生」が地域産業を支えており、これからはより多くの人が見近に感じる介護の現場でも「外国人技能実習生」が取り入れられようとしている。このような現状及びこれからの北海道を考えた場合、地域住民としての外国人を視野に入れた推進ビジョンが必須であると思う。必須ではあるが、その存在は、やはり「脆弱」である。だからこそ視点にいれるべきだと考える。	－
44	「人権」に関しては具体的な取り組みを望む。人権侵犯事件が全国平均よりもやや多い水準であると把握していながら、P51に記載されている「人々が互いに尊重し合う社会づくりの推進」の中には、 啓発活動を実施とあるが、何も具体的な取り組みの記載はなく、指標も「人権侵犯事件数」のみである。誰一人取り残さず、一人一人が大切にされる取り組みがベースにあってこそ、SDGsの全てのゴールに繋がっていると思う。北海道では既に人権に関して大きな宣言が出されている。これに向けた取組みがこれまでどれくらい行われていただろうか？ 改めて自分たちが行ってきた取組みを検証し、SDGsに繋がる新たな指標を作成し、取り組んでいただきたい。	－
45	当団体のSDGｓへの取り組みや消費者教育、消費者啓発の活動、消費者庁の施策に照らして、以下のような問題点の指摘と、提案として以下のような追加を要望します。 北海道庁の案の問題点 　足りないもの 　１　消費者の安全・安心につながるような視点 　２　消費者教育への取り組み 　３　子ども、高齢者、障害者などへの見守り 提案　追加を要望 　優先課題Ⅰ　あらゆる人々が将来の安心安全を実感できる社会の実現 　　目標１　　高齢消費者・障害消費者の見守り 　　目標3　　子どもの事故防止 　　目標12　安定したエネルギーの確保と適切な価格での供給 　　目標12　消費者教育の推進 　優先課題Ⅱ　環境・エネルギー先進地「北海道」の実現 　　目標12　エシカル消費普及・啓発活動 　優先課題Ⅳ　未来を担う人づくり 　　目標12　消費者教育の推進	－
46	「未来都市」で事業提案した「自転車事業」の位置づけは。	－
47	今世界中が注目している「ゴミゼロ」に向けた究極の循環型社会への先進事例を推進していくことなどが必要ではないか。	－

◇資料４－２　ビジョン（原案）に対する意見について（市町村）

ビジョン（原案）に対する意見について（市町村）

資料４－２

（１）「1　ビジョンの基本的な考え方」に関する意見

	意見の概要	原案ページ	管内
1	○「策定の趣旨」 ＳＤＧｓという言葉自体が、道民に浸透しているとはいえないことから、北海道がこの時期に本ビジョンを策定する意義を道民や自治体、関係団体等に分かりやすく説明する必要があると考える。	1	十勝
2	＜段階的な対応＞ 現在ＳＤＧｓを団体等には、「気づきから始める」という文言は非常に響くと感じる。原案においても、そこの部分をもっと強調した書き方にすることで、垣根を低くしオール北海道で取り組む気運が醸成されるのではないか。	7	日高

（２）「２　北海道を取り巻く状況」に関する意見

	意見の概要	原案ページ	管内
3	いじめ（特に小・中・高）は、不登校・引きこもりの要因となり、その後の社会生活に多大な影響を与えたり、自殺にもつながることから、教育や安全・安心、健康・福祉に関連するものとして、いじめの件数や不登校、未成年者の自殺死亡率をどこかに掲載してはどうでしょうか。	9～32	上川
4	ひとり親の世帯数を掲載しておりますが、貧困や健康にどのように関係しているのか不明です。掲載するならば、ひとり親の家庭が貧困または健康的ではない根拠となる資料が必要になると考えます。	10	上川
5	（１）北海道の現状・課題 ○防災　○エネルギー　○インフラ この度の北海道胆振東部地震による長期間のブラックアウトや、その後の電力需要への対応など、北海道の電力インフラの脆弱性が明らかになったところであり、「安全で安定した持続可能な電力」について上記３区分のいずれかに盛り込んではいかがか。	16 22 30	根室
6	９月６日の胆振東部地震による大規模停電を踏まえ、有効活用に関した課題点を掲載してはどうでしょうか。	22	上川
7	エネルギーに関する本道の現状・課題について、風力発電やバイオマスなどの「再生可能エネルギー」の導入促進等についても記述してはどうか。	22	留萌
8	再生可能エネルギーでだけでなく石炭についても記載していただきたい。 【理由】 空知・釧路地域においては、石炭の採掘が行われており、多様なエネルギー資源を確保する観点からは、再生可能エネルギーだけでなく、引き続き石炭資源の利用を推進すべきである。石炭資源の利用については、二酸化炭素排出量が多いという環境面での課題はあるものの、バイオマス混焼技術やクリーンコール技術の開発が行われており、経済、環境のバランスを取りながら進められている。	39	釧路
9	「本道には、自然との共生など高い精神性を映す縄文遺跡群やアイヌの人たちにとって受け継がれてきた歴史・文化があります。」との記載があるが、前頁（４０頁）の中で、オホーツク連携地域の記載の中に「モヨロ貝塚などオホーツク固有の歴史・文化」という記載があることから、オホーツク連携地域を中心に道北連携地域（宗谷）や釧路・根室連携地域（根室）等にも遺跡が分布しており、また、後のアイヌ文化の形成及びアイヌ民族の遺伝子的な面においても影響を与えた「オホーツク文化」について、北海道の歴史・文化の中に追記してもよいのではないかと考えます。 なお、オホーツク文化については北海道だけではなく、サハリン・千島列島などにも遺跡が分布しており、アジア・ロシア極東地域の古代文化との関連性も認められることから、古代における環オホーツク海地域の交流という点で、３３頁「②アジア・ロシア極東との近さなど地理的優位性」とも関連付けることが可能なものであります。	41	オホーツク

（３）「３　北海道のめざす姿と優先課題・対応方向」に関する意見

	意見の概要	原案ページ	管内
10	釧路地域の火力発電所の取組について記載していただきたい。 【理由】 地元石炭とバイオマスとの混焼や、地域の水資源の活用による火力発電所の建設が行われており、石炭産業の長期存続はもちろんのこと、環境に配慮した取組が行われている。また、東北海道に発電所ができることは分散型エネルギーの確保や、国土の強靭化にも資するものである。	58 64 78	釧路
11	(1)全道産学官ネットワーク推進協議会について ii地域産業の創造やノベーションの創出 【道の主な取組】の４項目目 上記の表現において、「全道産学官ネットワーク推進協議会」については、北海道科学技術振興計画においても位置づけされているところであるが、北海道ホームページや他のキーワード検索においても具体的な取組みについて見当たらないことから、会議の趣旨（規約）、加盟団、推進方策などを明らかにしてほしい。 ※６５ページの余白において「全道産学官ネットワーク推進協議会とは…」解説を掲載してはいかがでしょうか。	64	石狩
12	(2)地域の産業支援機関への企業支援マネージャーの配置について ii地域産業の創造やノベーションの創出 【道の主な取組】の４項目目 「道立工業技術センターによる技術支援や地域の産業支援機関への企業支援マネージャーの配置などにより企業支援を行っている」とあるが、現在の地域数やマネージャーの配置数など具体的な状況を記載していただきたい。	64	石狩
13	輸出促進の取組に関して、道内からの輸出額に係る指標を加えてはどうか。	68	留萌
14	地域や産業を担う人材の育成・確保の指標として、高校・大学の新卒者の道内就職率等を加えてはどうか。	71	留萌

（４）「４　ビジョンの推進」に関する意見

	意見の概要	原案ページ	管内
15	ＳＤＧｓの推進に向けて特に取り組んでいる市町村との連携や支援について、次のようなより具体的な内容を明記していただきたい。 ＜多様な主体の連携・協働＞ ・ＳＤＧｓの推進に向けて積極的に取り組んでいる市町村との連携を強化し、多様な支援策を検討します。 ＜道としての取組＞ ・ＳＤＧｓの推進に向けた積極的な取組を行う市町村と連携し、道内におけるＳＤＧｓの普及を図るセミナー・シンポジウムを開催します。	81～82	渡島
16	北海道SDGｓの推進に向けて、地域住民へ広く普及できるよう様々な活動を行っていただきたい。	81	オホーツク
17	各主体の取組の推進にあたっては、北海道が中心となって、それぞれに求められる役割や取り組みの推進によるメリットなどを各種対に対し、しっかりと説明する必要があると考える。各種対が共通の認識に立ち、取り組みを進めていくべきであり、策定主体である北海道にはそうした役割が求められているものと考える。	80～82	十勝
18	誤字　「重用」→「重要」	80	根室

（５）ビジョン全体に関する意見

	意見の概要	原案ページ	管内
19	9月6日に発生した北海道胆振東部地震により、道内295万戸が停電するブラックアウトになったところです。ビジョンでは北海道の強靭化や安全性について触れられていますが、今回の地震で必ずしも北海道が首都圏と比較して災害に強いという立地条件ではないことが明らかになったところです。このビジョンは震災前に作成したものであり、策定に当たっては、今回の震災の内容を踏まえ、さらに踏み込んだビジョンにすべきと思います。	－	空知
20	多様なエネルギー資源の利用については、その背景について十分な検討を行ったうえで進めていった方が良いと思います。風力発電については、希少種である大型のウミワシ類の被害が多数報告されており、37ページの生物多様性保全にも関わってくると思われます。ソーラーパネルや蓄電装置などにはレアメタルや多くの鉱物が使用されており、現状これらの採掘のために外国では大規模な森林伐採がなされています。結果的に、CO2を最も吸収するとされる原生林が大規模に伐採され（しかもその多くは植林がされていなかったり、植林できたとしても2次林のCO2吸収量は原生林に劣る）、限りある鉱物資源を採掘しなければ成り立ちません。リサイクルも行われていますが、現実的には原生林の大規模伐採と鉱物採掘の減少は見られません。多様なエネルギー資源を検討することも必要ではありますが、それ以前にエネルギー使用の削減に向けた提言が必要なのではないかと考えます。また、鉱物資源開発による大規模な森林伐採では、多くの先住民族の生存権・生業権が危ぶまれています。北海道あるいは日本において先住民としてアイヌ民族への配慮を考えているようですが、SDGsにおいてはもっとグローバルな視野で、検討・配慮が必要になるのではないかと思います。	－	十勝
21	SDGsに関して、実現に向けた取組を行うだけの理解度が足りない団体がまだ多いのではないか。その中で、市町村からの意見照会を実施しているが、この状況でどのくらい期待して、照会しているのか。（本気度が見えない。）	－	日高
22	北海道がビジョン策定した場合、市町村に、具体的取り組みを求めるのか？若しくは、市町村に個別で策定を求めるのか。	－	日高

■第３回北海道 SDGs 推進懇談会　構成員からの提出資料

◇小泉 雅弘　提出資料

2018 年 10 月 22 日　第三回北海道 SDGs 推進懇談会
小泉 雅弘（ＮＰＯ法人さっぽろ自由学校「遊」）

グループ別ビジョン提案ワークショップ実施の趣旨と概要
およびそれを踏まえた提案

■開催の趣旨

・北海道 SDGs 推進ビジョン（仮称）においては、最初に示された骨子案の段階から、「ビジョンの基本的な考え方」として、「多様なステークホルダー（注：原案では主体）が連携・協働した取組が積極的に推進される」ための「多様なステークホルダー（主体）が互いに共有する基本的な指針」として位置付けられており、その考え方はあらゆる人びとを対象としている SDGs や、その背景にある「持続可能な開発」をめぐる議論のプロセスに沿ったものであり、歓迎すべきものである。

・しかし、道のビジョン策定のプロセスにおいては、一般的な道民対象のパブリックコメントや市町村・関係団体等への個別の意見聴取は想定されていたものの、国連における SDGs の策定プロセスを含む「持続可能な開発」をめぐる議論において想定されているステークホルダー（その中心が９つのメジャーグループである）の参画が想定されていなかった。

・「持続可能な開発」という概念を一般に広める契機となった 1992 年のリオ地球サミットは、社会のあらゆるグループを意思決定の審議機構に取り込むことを試み、その成果文書であるアジェンダ 21 では、９つのメジャーグループの役割の強化に第三部のすべて（10 章分）を割いている。以降、SDGs の策定やフォローアップに至るまで、これらのグループの参画は「持続可能な開発」をめぐる意思決定の前提となっている。

・こうした多様なグループの意見反映のプロセスを北海道の地域ビジョンの策定に取り入れるには骨子案の提示から策定まで約半年間のスケジュールでは無理があるという意見が懇談会の複数のメンバーから出されたものの、スケジュールの変更は困難ということから、限られた準備期間ではあったが、懇談会メンバー有志のイニシアティブ、北海道の協力という形で、2030 年の北海道のあるべき姿（ビジョン）を提案するグループ別ワークショップをできる範囲で行うことにした。

■実施の概要

９月下旬から 10 月上旬にかけて、４つのグループと１つのテーマで合計５つの 2030 年の北海道のあるべき姿(ビジョン)を考えるワークショップを開催した。

１．2030 年のほっかいどうを考える Women’s Meeting
　　日時　2018 年９月 27 日　①10:00～12:00　②19:00～21:00
　　会場　札幌エルプラザ　会議室１・２

２．2030 年の北海道を考える the Ainu people’s Meeting
　　日時　2018 年９月 27 日　19:00～20:30
　　会場　札幌市中央区民センター　つどいＢ

３．2030 年の北海道のあるべき姿を考える CSO（市民社会組織）ミーティング
　　日時　2018 年 10 月６日　13:30～16:30
　　会場　札幌エルプラザ　環境研修室

４．2030 年のほっかいどうを考える Youth’s Meeting
　　日時　2018 年 10 月 10 日　18:30～20:30
　　会場　札幌エルプラザ　会議室３・４

５．持続可能な経済の創造へ～2030 年のほっかいどうを考える Economy Meeting～
　　日時　2018 年 10 月 11 日（木）18：00～20：30
　　会場　札幌駅 TKP カンファレンスセンター　2A

2018 年 10 月 22 日　第三回北海道 SDGs 推進懇談会
小泉 雅弘（ＮＰＯ法人さっぽろ自由学校「遊」）

■ワークショップの実施を踏まえた提案

１．ビジョン原案の「１．ビジョンの基本的な考え方」の中に、「ビジョン策定までのプロセス」という項目を設け、懇談会の開催やパブリックコメントの実施などとともに、懇談会の取組みとしてグループ別のビジョン提案ワークショップを開催したことを明記してください。

２．ビジョン原案の「３．北海道のめざす姿と優先課題・対応方向」の（１）めざす姿の記述において、各グループから出された意見を可能な限り反映させてください。なお、十分に反映させることが難しいのであれば、その理由と反映できていない事実を明記してください。

３．ビジョン原案の「４．ビジョンの推進」の（１）各主体の取組において、最低限今回実施したグループ（女性、アイヌ民族、ユース、CSO）の項目を加えてください。

４．ビジョン原案の「４．ビジョンの推進」の（２）推進手法、＜道としての取組＞において、今回ワークショップを実施したグループを含む国連の９つのメジャーグループおよびその他のステークホルダーを参照したグループの参画やそれらのグループとの連携・協働を明記してください。

５．ビジョン原案の「４．ビジョンの推進」の（３）推進管理の記述において、上記の各グループによるフォローアップのための意見交換の場を最低年１回は設けることを明記してください。

６．SDGs では、「脆弱な（立場に置かれた）人々」の抱える課題を解決することを最優先しており、今回実施した各グループのワークショップにおいてもそうした意見が多数みられます。道の取組みとしてそれらの課題解決に取り組むグループなどと協力して、課題理解のための SDGs パンフレットを作成してください。

例：「SDGs とジェンダー」「SDGs と子どもたち」「SDGs と外国籍住民」「SDGs と障害者」など

参考：さっぽろ自由学校「遊」発行『SDGs×先住民族』
～SDGs17 目標に沿って、日本の先住民族であるアイヌ民族の歴史や現状、課題や提案を紹介した小冊子。

IMADR 発行『ダリットを知る』
～ダリット（南アジアで不可触民とされてきた集団）の置かれている状況を、SDG s の５つの領域(貧困、水と衛生、教育、女性、雇用・労働)から紹介した小冊子。

2030 年の北海道を考える the Ainu people's Meeting

日　時　2018 年９月 27 日　19:00～20:30
会　場　札幌市中央区民センター・つどいＢ
参加者　札幌アイヌ協会メンバー　１２名

＜出された意見＞

■なくしていきたいこと・もの

・人間中心の考え方をやめる
　～アイヌ民族の世界観：カムイ（＝自然）とアイヌ（＝人間）の関係性を意識して、自然の生み出す利子分だけをいただき、元本には手を付けないという教え。モノを取りつくさない、食べ物にも感謝の心を持ってすべてを無駄にしないなど、持続可能な自然との向き合い方
・虐待をなくす。今は地域社会のつながりが希薄。
・環境汚染。かつてはきれいだった川が、いつの間にか汚れている。
　～自然環境は自分たちのものではない、未来の世代から借りていると意識すること。
・貧困と差別。

■変わらずにあってほしいこと・もの

・心の思いやり。家族、家庭内での文化伝承、コミュニケーション。
　～文化伝承の最小単位は家庭。地域のつながりを大切に
・豊かな自然環境

■増やしていきたいこと・もの

・アイヌの考え方や知恵をすべての人に。
・貧困の是正。アイヌだけではなく、すべての人に。
　～先住民族の知恵、文化をきっかけに北海道の社会問題解決の糸口が見つかる！
　～自然との向き合い方、自然を大切にする思い。「天から役目なしにおろされたものは一つもない」
　～子どもや老人を大切にする（全員が通る道だから）。
・時間的な余裕をもつ。少しの不便さは許容する。
・子育てをサポートする政策の充実。
・若者に対する支援
　～集うことで民族の「誇り」が形成される。話し合う場が必要
　～しかし、金銭的な負担があると継続しないので、サポートが必要。
・「先住民族」という概念の正しい理解の促進、啓発が必要
　※研究者ですら、「私も〇〇の先住民族」というようなことを言う人がいる。
・教育の充実
　～先住民族とはなにか、先住民族がいる社会について道民全員が知見を深める。郷土教育としてのアイヌ民族教育確立の必要性。加えて、アイヌ民族の子どもたちの進学率向上。
　～学校およびすべてのセクター（公務員・司法関係者含む）で、北海道独自の歴史を正しく教える。
　～アイヌ語教育。アイヌ民族のための教育。
　～アイヌの進学率の向上。都心・地方で格差が生じないよう配慮が必要。
・経済的自立
　～土地や資源の権利。海、山の利用権。明治以降、土地を奪われていった「償い」が必要。
　～国後島、択捉島などを先住していたアイヌ民族の土地に。ロシアは日本ではなくアイヌになら返す用意があると言っている。
　～観光業などで経済的に自立する方法もある。

2030年の北海道のあるべき姿（ＣＳＯミーティングより）

２０３０年の北海道のあるべき姿を考えるＣＳＯ（市民社会組織）ミーティング
日時：2018年10月6日（土）　13:30～16:30
会場：札幌エルプラザ　環境研修室

分類	北海道のあるべき姿（ビジョン）	減らしたいこと・もの	残したいこと・もの	増やしたいこと・もの
総合	自治と共生、自然と共に北海道			
人権・包摂・平和	すべての人に優しい北海道	差別　偏見　社会的孤立　社会的分断　社会的差別　社会的格差　ヘイトスピーチ　ハラスメント　パワーハラスメント　セクシャルハラスメント　ドメスティックバイオレンス力（×２）　性暴力　性的搾取　男性議員、男性管理職　自衛隊、米軍基地などと　すべての戦争	9条	近い外国の人びとの交流（サハリン、韓国朝鮮、中国など）　在日を認める社会　在日外国人の権利～地方参政権　多様なキャリア、学歴　マイノリティグループの議員（女性、障がい者、ＬＧＢＴなど）　居場所　女性の社長　女性の所得　多様性を認め合えるシステムと人　学校いけない子の学校、フリースクール
	人権を大切にする北海道			
	脆弱な人々を弱一に考える北海道			
	貧も脆弱な人々のニーズが満たされる、公正・寛容で社会的に包摂された北海道			
	子ども、障がい者、外国籍…と様々な立場を認め合う北海道			
	職業に対する偏見がない北海道			
	生きて存在してるだけで価値のある北海道			
	先住民族アイヌの人権をとりもとして、差別なく理解しあえる北海道			
	広々とした大地のように豊かな心をもって、差別のない北海道			
	誰にも支配されたり、暴力を振るわれたりしない北海道			
	社会が女性性に基づく調和と愛に根差した北海道			
	誰もが居場所と役割のある北海道			
暮らし・いのち・環境	健康で自立する北海道	貧困（×２）　貧い物難民　金融資本主義経済　銀行（既存の）　児童労働に依存した産業構造　ブラックされる人々　添加物たらけの食品　大きな格差　種子法廃止　子どもの健康を損なうワクチン・フッ素など行政の強制　原子力発電（×５）　火力発電　太陽パネル・メガソーラー・風力発電　良いと思われてどんどん増えている風力、太陽光、バイオマス等）自然破壊や健康被害をもたらすものでなくしたい　携帯基地局増ってほしい　温暖化ガス　メガ　農地　外来種　自然の汚染　環境破壊　プラスチックゴミ　プラスチック製品　プラスチックゴミ　ガラス	原野、森、自然　北海道の豊かな自然　北海道の素晴らしい自然、動植物　北海道のおいしい食べもの　ＩＴ・ＡＩの真に貢献できる技術進化	グリーンコンシューマー　自然食品の店　安心・安全な食べもの　寿命　健康寿命　支え合い　小規模農業エネルギー農業　循環型のリサイクルプラント（古書、プラスチック、生ゴミ原料）　自然多様な生き物がいる豊かな自然　路線（公共交通）　具体的にはわからないが交通　自動運転　ギフト経済、物々交換経済　クラウドファンドの金融システム　寄付文化　中小企業を応援するしくみ（創業だけでなく）　小さい仕事、商売　経済の地域循環システム　個人が使えるテクノロジー、メディア　地域の新ブランド化　開発力（商品）　産官学金＋ＮＰＯ法人＝新規　ＥＳＧ投資
	長寿命（100歳）人生の北海道			
	安心・安全な食料が手に入る北海道（実は農業が多い）			
	ゴミが地上資源になり、安価で信頼できる持続可能なエネルギーで循環する北海道			
	持続可能なエネルギーを誰もが利用できる北海道			
	エネルギーをつくりすぎない北海道			
	生物多様性の豊かさに誇りが持てる北海道			
	道民一人ひとりが自然の一部であると自覚して暮らす北海道			
	自然を大事にして維持し、さらに豊かにしていく北海道			
	豊かで多様な生き物・人々が刺激的に調和する北海道			
	経済と環境が両立している北海道			
	産官学金の長期安定稼働の北海道			
	事業振興の北海道			
自治・文化	自由に選択できる北海道	忖度　国からの補助　頭脳流出　不法（国際法との差異）　婚姻制度　既存の教育システム　公共事業（ダム　ＣＣＳ　カジノ）　道議会議場の建設　大きな政府　きな行政システム　ヒラミット型組織　お金のかかりすぎの選挙　夢のない大人	道徳心のある大人	独立、自治　新規取組（市民要望）　市町村のSDGsを北海道波及　女性的リーダーシップ（政治家、管理職、経営者）　対話のあふれたあらゆる組織　ティール組織　社会参加する若い人　政治に関心を持つ人　生活につかれていない人　政治に参加する若い人　わくわく、楽しく生きている大人　心、夢、希望のある大人　利他心のある大人　社会参加の機会　力を発揮できる場とかしくみ　若者が活躍できる環境　遠くの人と会える仕組み　文化を育てようという心　歴史教育　自由な学校　教育で試験・評価のないシステム　20人に1人の教員
	公平に参加の機会がある北海道			
	独自の歴史を誇れる北海道			
	豊かな心と自然でアートがどんどん生まれる北海道			
	教育が強力的で誰でも留学したい北海道			
	格差のない教育を子どもに支援する北海道			
	すべての子どもたちが十分、それぞれの能力を発揮してのびのび成長できる北海道			

＊付記（欠席者からの意見提出）
①減ってほしいこと・もの～自然災害　国内貧困格差　児童虐待　孤独死　原子力発電所・火力発電所　自家用車　化学肥料を使用する農業
②残したいこと・もの～手つかずの自然も残ってほしいが、農村の里山的自然環境を残したい。そのためには産業として農業が成り立つ構造の確立が必要
③増えてほしいこと・もの～完全バリアフリー化　非核宣言・平和宣言する自治体　難民を受け入れる「第三国定住」制度を宣言する自治体　フェアトレードタウンとして宣言するコミュニティ　発電力の大半が自然再生エネルギーとなること　すべての食料が有機農業で地産地消されること　持続可能な農業・漁業生産を中心に、食品加工業、流通業、外食産業、観光業などの産業連携が盛んになること　健常者と障碍者が統合教育として学べる機会　先住アイヌ文化の共存する場　移民も含め多様な文化が共存するコミュニティ

【参考】2030 アジェンダにおける多様なステークホルダーの関与についての記述（抜粋）

■前文より

すべての国及びすべてのステークホルダーは、協同的なパートナーシップの下、この計画を実行する。

パートナーシップ

我々は、強化された地球規模の連帯の精神に基づき、最も貧しく最も脆弱な人々の必要に特別の焦点をあて、全ての国、全てのステークホルダー及び全ての人の参加を得て、再活性化された「持続可能な開発のためのグローバル・パートナーシップ」を通じてこのアジェンダを実施するに必要とされる手段を動員することを決意する。

■宣言より

６．（これまでの経緯）最も貧しく最も脆弱なところからの声に特別な注意を払いながら市民社会及びその他のステークホルダーとの間で行われた２年以上にわたる公開のコンサルテーション及び関与の結果、この目標とターゲットができた。

■我々の世界を変える行動の呼びかけより

５２．（人々を中心に据えたアジェンダ）「われら人民は」というのは国連憲章の冒頭の言葉である。今日 2030 年への道を歩き出すのはこの「われら人民」である。我々の旅路は、政府、国会、国連システム、国際機関、地方政府、先住民、市民社会、ビジネス・民間セクター、科学者・学会、そしてすべての人々を取り込んでいくものである。数百万の人々がすでにこのアジェンダに関与し、我が物としている。これは、人々の、人々による、人々のためのアジェンダであり、そのことこそが、このアジェンダを成功に導くと信じる。

■フォローアップとレビューより

７４．(基本原則) すべてのレベルにおけるフォローアップとレビュー（FUR）のプロセスは、次の原則によって導かれる。
d. これらは、すべての人々にとって開かれて、包摂的で、参加型の、透明性を持ち、すべてのステークホルダーによる報告をサポートする。
e. これらは、人間中心で、ジェンダーに配慮し、人権を尊重し、特に、貧困で脆弱な最も取り残された人々に焦点を当てたものとする。

７９．(国内での実施) また我々は、加盟国が、国及び地域レベルにおいて、各々の国のイニシアティブで行われる定期的で包摂的な進捗に関するレビューを行うことを促す。かかるレビューは、各国の現状や政策、優先課題を踏まえつつ、先住民、市民社会、民間セクター及び他のステークホルダーからの貢献を得つつ行われるべきである。また、国会やその他の機関もこうしたプロセスを支援する。

８４．(ステークホルダーの関与) 経済社会理事会主催による「ハイレベル政治フォーラム」では、国連総会決議 67/290 を踏まえて定期的なレビューを実施する。同フォーラムでのレビューは、先進国、開発途上国の他、関連する国連機関、市民社会・民間セクターなどのステークホルダーに対し報告を促しているが、あくまで自発的な性格のものである。レビューは、閣僚やその他のハイレベル参加者が関与した国家主導のプロセスである。レビューは、メジャー・グループ及び関連したステークホルダーの参加を通して、パートナーシップのためのプラットフォームを提供する。

８９．（メジャー・グループ）「ハイレベル政治フォーラム」は、国連総会決議 67/290 に沿って、メジャー・グループ及び関連したステークホルダーによるフォローアップ・レビューのプロセスへの参加を支持する。我々は、これらの関係者に対し、アジェンダの実施に対する彼らの貢献について報告することを呼びかける。

◇菅原 亜都子　提出資料

第３回　北海道 SDG s 推進懇談会　資料
（公財）さっぽろ青少年女性活動協会　菅原　亜都子

「2030 年のほっかいどうを考える Women’s Meeting」から考える「北海道 SDG s 推進ビジョン」への提案

（公財）さっぽろ青少年女性活動協会では、このたびの「北海道 SDG s 推進ビジョン」策定に当たり、取り残されやすいグループの一つである「女性」を対象に、声を聴きとるワークショップを行いました。また、「当日ワークショップには参加できないけれど、ぜひ声を届けたい」という女性たちからも意見をいただきましたので、ご報告いたします。

１．「2030 年のほっかいどうを考える Women’s Meeting」の結果報告

［日時］①2018 年 9 月 26 日（木）①10：00:~12：00: ②19：00~21：00
［場所］札幌エルプラザ公共４施設　２階 会議室１・２
［場所］（公財）さっぽろ青少年女性活動協会
［協力］北海道、ＥＰＯ北海道
［内容］（１）開会
（２）ワークショップ「2030 年の自分、ほっかいどうを考える」
・２０３０年、ほっかいどうに増やしたいこと・もの
・２０３０年、ほっかいどうでなくしたいこと・もの
・２０３０年、ほっかいどうで変わらずにあってほしいこと・もの
（３）閉会

「風と共に去りぬ」～安心して選択できる社会～	
増やしたいもの	個人事業。小商い。いろいろな働き方。兼業の自由。いろんな家族。女性が半分いる意思決定の場。学校、家以外の場所。安全、自己決定、安心。子供の遊び場、遊び相手。安全。弱者への優しさ。返済義務のない奨学金。自然エネルギー発電。学びの格差、学びの自由。ベーシックインカム。仕事を創る。森、湿原、山、川、海、原野
なくしたいもの	二人目まだ？。なんで独身？。自由自己決定。誹謗中傷。セクハラ。強制的な飲み会。暴力。男ばかりの意思決定過程。女性一人だと経済的自立できない。女性に「男化」するよう求める風潮。自由、安全、安心、おおらか、強さ、しなやか自然と共生。なんで女同士で暮らしてるの？LGBT 過剰反応。異性カップルじゃないと使えないサービス。上下関係。核。一人で育てられない環境。家事ができない人。働いていないとダメ。プレッシャー。恋愛しなきゃプレッシャー。結婚しなきゃダメプレッシャー。残業。強制的な転勤。貧困女性。
残したいもの	歴史的建物。水。おいしい食べ物。自然。一人でいられる自由さ。離れられる自由（家族と）。社会福祉保障。人付き合い（ネットも込み）有事に頼れるご近所付き合い。現金。

	新聞。FM ラジオ。本・雑誌。インターネット、個人が発信。個人の発言の自由。「夫婦」「家族」。

「命あるものすべてが AZUMASHII 自然体なほっかいどう」	
増やしたいもの	男女平等な雇用機会。昇進機会。自主的な学びの姿勢。ディスカッションできる場義務教育段階から)。わからないことを聞ける。逃げ場を作る、日本オリジナル、地下歩、オフライン　本音で付き合う関係、ぎもん？現代版フロンティアスピリッツ、好きな服を着ること、自分で人生を選べる、障碍者への配慮、マイノリティでもありのままに生きられる。当事者意識、それぞれがそれぞれらしく、ポテンシャル人・自然。アクションできる環境、お金、責任。コンパクトシティ。国立公園。森林。自然エネルギー。エシカル消費。会話。声を上げる場、つながり。女性首長（リーダー)。そもそも論。リラックスできる場所。サードプレイス（職場、家庭以外）
なくしたいもの	家事。格差。経済的不安。雪かき。高すぎる教育費。貧困。「私なんて」セルフハンディキャッピング文化。貧困格差。「地球にやさしい」という言葉。女性にやさしい。マウンティング。被害者意識（開拓時代からの歴史的つながり)。人種差別。既成概念。マイノリティ排除。じろじろ見る。コンビニのエロ雑誌。男のプライド。マッチョ（精神的）性別・学歴での差別。年齢、学歴、社歴でのヒエラルキー。大声での叱責。ブラックな労働環境。活躍する女性を排除しようとする風潮。悪しき風潮。組織の悪いカルチャー。パワハラ。WLB を無視した残業。外来種。自殺。輸入。外来語。原発。結婚出産＝退職。

２．ワークショップ以外からいただいた声

・大学進学率の男女差のことを取り上げてられていましたが、北海道は男女格差が大きい方に入っていたようです（10 ポイント以上の開きがあるそうです)。小さなことですが、首都圏に進学した北海道出身の学生向けの北海寮は男子学生だけが対象となっていますよね。経済的な負担にも配慮して女の子の進路の選択肢が広がるような施策も考える必要あるかなと思います。

・子育てしながら、家庭の家事（料理、洗濯、掃除、家を回すこと、お弁当作り、お片付け・・）が本当に女性にかかっていて、なんだかな～となっている。男女とも同じように仕事をしている方でも、今までの育ってきた環境や、周りの人

も同様ということで、女性にかかる負荷が多い→男性だから、女性だからという視点よりも、同じ人間として個別のニーズにこたえるサービスや思想があるとうれしいのですが。そういった視点が外国諸国よりも日本は弱いと思います。昨年 2 回スウェーデンに行ったとき、ベビーカーを押す父たちの姿が颯爽としていてすてきでした。（両親ともに親は 1 週間に何時間以上子どもと一緒にいないと罰せられるということでした！）

・公共のサービスの延長サポートで、バスや地下鉄でもベビーカーを押したり、自転車を乗せることができたり、荷物を運ぶサービスがあったりなどあるといいと思います。みんなが楽になるから、ひいては日本では女性たちが担っている割合が高い買い出しやお散歩や移動などが楽になるなと思いました。そうした乗り物に補助金があるとか、市町村が採用しやすいなどの仕組みがあるといいのでしょうか。

・働いている友人の女性が、東京在住で、保育園に子どもを預けられないから、個人か会社がしている子どもを数時間みてくれるサービスを有料で使っていました。東京ではそうしたサービスが多いのでしょうかね。それでも足りないといっていました。岩見沢の友人は市が月に何十時間そうしたサービスを提供して、母が美容室に行ったり、からだを動かしたり、リフレッシュする時間を確保したり、仕事をしたりに使えるという話をしていました。

　当たり前にそうした母の自由になる時間が確保できると、子どもの心身のすこやかにもよさそうです。それが収入や配偶者の有無や育児に対する個人の考え方などの状況によらないといいなと思います。日本は皆保険だから出産などにも補助が出ていてその中で入院費などはまかなえると聞きました。アメリカは場合によっては 300 万円くらいかかるなど、現実的に厳しいとか。日本の持ついい面がたくさんあると思いますが、きつい面も本当に挙げたらきりがないのだと思います。だからこそ希望をもってみんなの癒しををサポートできるといいな～と祈っています。大家族や地域的な子育てなどは必然的に誰かの大変だ！が軽減されてうまく回っていたのかな～なんて思ったりします。現代も、元気なアクティブシニアの方は多いでしょうから、コミュニティに生きているハブのようなお方に光を当てて「ここととここがつながる」～なんて教えてもらうとかアナログな方法が一番はやかったりして。

・今日、異業種で話をしていて、幼稚園の園長から根拠なく、母親が仕事に没頭し過ぎるから、根拠ないが子どもがグレる言われたと、ビックリしました。平成の忘れ物のジェンダー格差。先の教育者の言い分にしても、海外との違いは教育にあると思います。やはり、そこに切り込まない限り、現状は変わらないでしょう。残念ながら、改正児童館ガイドラインにも、ジェンダー表記はありませんでした。数値目標を定めて、無理にでも格差是正したところで、表面的な変化にしかならないでしょうね。

・ジェンダーギャップ指数の日本の低さにビックリしました！小さいころから私たちは「〇〇らしく」とかこうあるべきで育てられた気がします。１人１人オギャーと生まれたときに本当の自分はちゃんとあって、それを伸ばせる教育でありたいと思います。教育にも関わる奥の深い分野ですね。

・ジェンダーのことっていつも優先順位低いですよね。それだけ大切にされてないんだって感じます。「こうじゃなきゃダメ」っていうバイアスで、押しつぶされてる人ってものすごくたくさんいると思います。私たち LGBT は、それで死ななくていい人がたくさん死んでます。私よりずっと能力や才能がある人もうまく生きられない状態で、悲しくなります。ジェンダーの平等、格差の是正はこれからの日本にとって急務と思います。

・ダブルケアの問題も取り上げてもらいたいです。まずとりかかりたいのは・女性ひとりが抱え込まない。・ダブルケアで孤立しない。・地域で支える。・離職しなくてもできる。ことでしょうか。また、民間の統計や調査でも貴重なものがたくさんあります。そういったものもぜひ利用していただきたいです。

３．ワークショップ等からわかったこと

①ジェンダー平等に関わる課題は、個人的な課題と捉えられ、顕在化しにくい

ワークショップから、女性たちがジェンダーに関連した課題について「増やしたいこと」より「なくしたいこと」が多かった。また、「なくしたいこと」をあげる過程において、個人の経験が多く語られたことが印象的であった。たとえば、職場で受けたハラスメントのこと、家庭内での役割分担やパートナーとの関係性に関すること、等々。普段当たり前に経験していて地域や社会の問題ではなく「自分さえ我慢すればいい」と個人的な問題と捉えられ、顕在化しにくいのがジェンダー課題であることを改めて感じられた。

②ジェンダーの視点はすべての目標に関わっていることが女性たちの語りからも明らかとなった

ジェンダー課題がクロスカッティングイシューであることはこれまでの懇談会でも指摘されてきたが、ワークショップの中でも、「ジェンダー平等」以外の目標におけるジェンダーの視点で語られたものが多かった。たとえば、「女性の貧困」、「女子への教育」、「働きやすさとジェンダー」、「雪かきと女性の負担」など。

４．ビジョンへの具体的な修正、加筆のお願い

最後に、推進ビジョンに対して、下記のとおり修正、加筆を提案いたしたい。

特に、今回はビジョン原案作成の過程において、女性の声を聴き、生かすタイミングがなかったため、今後のビジョンのモニタリングや見直しの際には、女性等の脆弱な立場に置かれた人々の声を丁寧に聞き取りそれを反映させること、またすべての目標に向けてジェンダー視点の主流化を徹底することをお願いいたしたい。

該当箇所	現段階の表現	希望する修正後の表現	備考（理由等）
p 72	企業の取組例 「女性活躍推進セミナー」を開催	企業の取組例 女性管理職の登用、セクシュアル・ハラスメント防止の徹底、女性社員の職域拡大、…	多くの企業において、「女性活躍推進」の啓発のステージはすでに終わっており、具体的なアクションを推奨する段階にあるため。
p 82	記載なし	「ビジョン推進のモニタリング、見直しの過程においても、脆弱な立場におかれた人々（子供、若者、障害者等）の声を反映させ、常に人権の尊重と、ジェンダー平等の実現及びジェンダーの視点の主流化といった視点を確保する。」	全体にわたり強調している「脆弱な立場の人への配慮」と「人権尊重、ジェンダー視点の主流化」が、推進の部分では抜け落ちているため。

以上

20181016_大崎美佳
北海道環境パートナーシップオフィス

（仮称）北海道 SDGs 推進ビジョン（原案）に対する提案

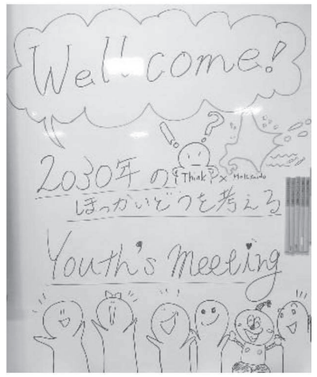
○道民それぞれが持つ背景や大切にしたいことは様々

- 北海道 SDGs 推進懇談会の構成員有志で行った北海道のビジョンを考えるミーティングでは、５つのグループで意見の違いがみられた。また、EPO 北海道主催「（仮称）北海道 SDGs 推進ビジョン（原案）パブリックコメントワークショップ」においても多様な意見が寄せられた。
- ミーティングの中で、道庁が提案するめざす姿「世界の中で輝きつづける北海道」という意見は１つもなかったことから、全ての道民がそれに賛成するとは言えない。
- ビジョンであるからには、多様な背景を持つ関係者から意見を伺い反映させることが、SDGs が示す「誰ひとり取り残されない」に合致し、SDGs を踏まえたビジョンと言える。

○現段階ですべての修正は困難が伴うと考えられるため「４．ビジョンの推進（３）推進管理」について下記文章への変更を提案する。

ビジョン（原案）原文	提案文（下線部）
・道内における様々な主体の主な取組状況は、推進ネットワークの活動などをとおして把握し、広く共有するとともに、道の広報ツールなどを活用し、道内外に情報発信していきます。	・（２）推進手法＜道としての取組＞へ移動
・道の取組については、政策評価を通じ、SDGs 関連施策の推進状況を取りまとめ、公表します。	・道の取組については、政策評価を通じ、SDGs 関連施策の推進状況を取りまとめ、公表します。
・ビジョンで設定した指標を用いて、進捗状況のフォローアップを行います。なお、指標については、道の各種改訂等に伴い、必要に応じて見直します。	・ビジョンで設定した指標を用いて、進捗状況のフォローアップを行います。なお、指標については、道の各種改訂等に伴い、必要に応じて見直します。
・ビジョンは、経済社会情勢の変化や SDGs に関する道内外の動向などを踏まえ、多様な主体の参画の下、幅広く意見を伺いながら、必要に応じて見直します。	・ビジョンは、経済社会情勢の変化や SDGs に関する道内外の動向などを踏まえ、１年に１回ビジョンの進捗状況を道民へ報告し、見直しための意見交換の場を設けます。 ・意見交換の際には、国際連合が提唱するメジャーグループ「女性」「子どもと若者」「先住民」「NGO」「地方自治体」「労働者・労働組合」「ビジネスと産業」「科学技術コミュニティ」「農業従事者」、また、その他の利害関係者「コミュニティ」「ボランティアと財団」「移民と家族」「お年寄りと障がい者」を対象とした意見交換の場を振興局ごとに実施します。 ・これらの意見を踏まえ 2015 年にビジョンの目指す姿や各種項目や指標の見直しを行います。

2030 年のほっかいどうを考える Youth’s Meeting



［日時］2018 年 10 月 10 日（水）18：30～20：30
［場所］札幌エルプラザ公共４施設　２階　会議室３・４／
　　旭川医科大学図書館内
［参加者］24 名（うち旭川サテライト参加者３名）　５グループ
［主催］北海道地方 ESD 活動支援センター
［共催］（公財）さっぽろ青少年女性活動協会市民参画部市民参画課事業係
　　（札幌市男女共同参画センター指定管理者）
［協力］北海道、学生リビング穂と葉
［内容］（１）開会
　（２）ワークショップ「2030年の自分、ほっかいどうを考える」
　　・２０３０年、ほっかいどうに増やしたいこと・もの
　　・２０３０年、ほっかいどうでなくしたいこと・もの
　　・２０３０年、ほっかいどうで変わらずにあってほしいこと・もの
　（３）閉会

「Join us なほっかいどう」 間口を広げることで誰もが入りやすい環境をつくり、それが活気につながり、生活の質を高めていくことにつながっていく。	
増やしたいこと・もの	「多様性がある」ことを認めあえる社会、欲求&サスティファクション、人とのふれあい、多言語、雪でも冬でも「楽しい」と思えることをする！、雪をもっと有効活用、雪のない地域に送るなど、除雪機の普及・充実、自動運転、エコモビリティ→ムダな使用をなくし新たな技術を、電子マネー、仕事とのバランス、ライフワーク、時間帯、省エネをもっとポジティブに、紙を使わない→もったいない？電子機器の発展？、１つのツールに頼りすぎない、近所のふれあい（地域のつながり）あいさつだけでも、道内でも地域差あり、世帯数が少ない地域の強いつながりをつくりたい、地球市民意識、郷土愛、マイノリティ教育支援（制度レベルだけでなくボランティア・草の根）、北海道にいたら北海道の歴史がわかる教育体制
なくしたいこと・もの	貧困・ネグレクト←社会・地域のつながりがあれば減らせる？、食品ロス（震災をうけもっとうまくまわせそう）、汚染（人口減少はそれに対してはポジティブ？）、雪で“外遊び”をしなくなる精神、雪かき（ロードヒーティングはいい）→勉強や

	読書など他の時間がへる→地域のつながりがなくなる、教育・学力格差、車の運転、“すすきの”の閉鎖的な感じ→クリーンなすすきのに！、若者が“すすきの”で働かなければならない状況、人口減少、時間外手数料反対！
変わらずにあってほしいこと・もの	QOL・活気・お祭り、おいしい食べ物、安心・安全、承認欲求・所属欲求・生存欲求、仲良く楽しい、おいしい、自然、災害時の対応力、市民意識、親切心・暖かさ、方言・アイヌ語、文化、寛容さ

「新・フロンティア精神　北海道愛を伝えよう！なほっいどう」 閉じこもりがちな道民、北海道愛が強すぎる道民が今必要なことは発信。	
増やしたいこと・もの	プールの施設、空の見える場所、オーガニックの店、札幌などで遊べる場所、観光客をうけいれる環境、人に優しい観光、誰もが安心できる場所、同世代とつながる場、いろいろな人とのつながり、大学 or 相当の学び場、外へ開かれた社会、おもしろい人（お笑いとかではなく）、表面だけじゃなくてちゃんと考えられる人、子ども、若い人（農村とかに）、安心して育児ができる場所、笑顔、仕事の幅・選択肢、中小企業の危機感、自然や食以外のブランド、交通の便、伝統文化を残す運動、戦争のこと（過去のこと）に興味がある若者、国際協力に興味がある若者、地産地消
なくしたいこと・もの	貧困、格差、場所・地区での区切り、北方領土問題、災害、交通事故、高齢化社会、空き家、将来を考えない若者、農家の離農、人手不足、荒れ地、孤独死、病気
変わらずにあってほしいこと・もの	ご近所付き合い（雪かきゆえに・・・？）、フロンティア精神、「新しい」を受け入れる環境、飲み屋街、北海道出身の芸能人、助け合う空気、北海道ブランド、北海道に憧れを持つ人、北海道愛、美味しい食べ物・店、農業、自然、自然と親しむ場、星がきれいに見える空、雪、北大

「道民の優しさと自然と食の豊かな北海道」 道民って優しい、自然を守りたい、美味しいものを残したい、豊かな北海道へ。	
増やしたいこと・もの	情報が豊かなシステム、正確な情報、学校で料理する機会、フェアトレードを買える場所（ワゴン・札幌駅）、エネルギーについて考える人たち・話せる場所、女性が働きやすい会社、より実践的な ESD、野生生物の保護、北海道の生物多様性を理解してくれる人、狩猟ができる人々、農業体験・担い手
なくしたいこと・もの	ゴミ問題、待機児童、ムダな電力使用・看板のネオン、コンビニ・スーパーでのムダな電力、コンビニのご飯・ファストフード・カップ麺などの安い食、何も考えずにおかれた太陽光パネル・風力発電、外来種問題、インフルエンザなどの問題、遡上がしずらい川、除雪問題、過疎化による人口問題、フードロス
変わらずにあってほしいこと・もの	北海道について考える場所・機会、日本食を食べる！、北海道の美味しい食べ物、水源、電車やバスなどの公共の交通機関が豊か、今絶滅しそうな在来種、雪、ウィンタースポーツ、アウトドア、沿岸バスなど強い交通網、海・川・食・山・動物・

	要は“自然”、コミュニケーションツール、道民の方の優しさ・ワイルドなマインド、助け合いの心、商店街のコミュニティ

「なまらいいっしょ北海道」 北海道を一人ひとりが知りつくしていいよって言える、誰もも行きたいって思ってくれることが、自らの向上と愛がある人が増える北海道へ。	
増やしたいこと・もの	自分ごとと捉える人が増加すること、防災意識の向上、ゴミ分別意識、若年層の投票率、農業の生産者と消費者がつながる仕組みづくり、お母さんが安心して働いていくための子育て支援システムづくり、スピード、積極性と持続性、人口、若い人の希望となる職場環境、声を聞く場づくり、コミュニケーションがとれる場所、いろいろな地域の人と関わる機会、生物多様性を考える場、自然環境を活用した再生エネルギー、シカ食品、地熱エネルギー
なくしたいこと・もの	保守的行動、ヨソ（国など）に頼りすぎる体質、トップダウンで決定するしくみ、問題を先送りする意識、あいまいさ、満足、ムダな経費、情報、ゴミ、孤独死、観光で生き物が減ること、環境破壊につながる事、物
変わらずにあってほしいこと・もの	穏やかさ、心の広さ、おおらかさ、北海道を愛する心、地元愛の自信を持つ、豊かさ、人当たりの良さ、自然環境、四季、ウィンタースポーツ、雪、空気、夏のすずしさ、自然、農村風景、美味しい食べ物（スープカレー！！！）、食料自給率の維持

「北海国」 SD（持続可能な開発）を考えたら自立した経済圏の確立、北海道の持続性が必要であり、北海道を国として考えることが必要。	
増やしたいこと・もの	冬に動かない環境、VR 飲み、VR 北海道、地下都市、情報インフラ、ドローン、経済圏、地下鉄、企業の本社、観光客、チャレンジャーを求める企業、研究開発拠点、実験都市、新しい教育、新しい価値、コンパクトシティ、ベーシックインカム、融雪道路、無人都市、姉妹都市、イベントスペース（ステキな）、無人農業、おしゃれ、フェス、クラブ、若者、楽しいイベント、レジャー（ニセコ的な）
なくしたいこと・もの	たばこ、年功序列、ムダな教育、不必要な行政、ムダな医療、雪、雪かき、冬は家の中精神、道路の雪、バスの遅延
変わらずにあってほしいこと・もの	来るもの拒まぬ精神、耐用性、一次産業、酪農、自然、多様性、観光資源、夜景、旭川空港、美食、アイヌ、計画性

「（仮称）北海道SDGs推進ビジョン（原案）」パブリックコメントワークショップ　実施報告

□実施概要

「（仮称）北海道SDGs推進ビジョン（原案）」パブリックコメントワークショップ
日　時：2018年10月２日（火）18:30～20:30
会　場：札幌エルプラザ２階　会議室１・２
主　催：環境省北海道環境パートナーシップオフィス（EPO北海道）
共　催：（公財）さっぽろ青少年女性活動協会 市民参画部市民参画課事業係
（札幌市男女共同参画センター指定管理者）
協　力：北海道

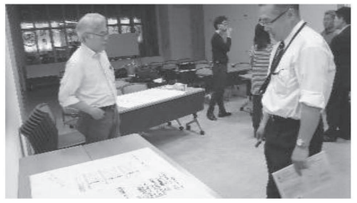
プログラム
18:30　開会・参加者自己紹介
18:50　「（仮称）北海道SDGs推進ビジョン（原案）」について
北海道総合政策部政策局計画推進課SDGs推進グループ
渡邊 訓男氏

19:30　ビジョンについて話し合おう！
※参加者一人ひとりがパブコメの機会を活用することをねらい、
意見の素材を見つけ出すための対話を行いました。
20:15　まとめ
20:30　閉会

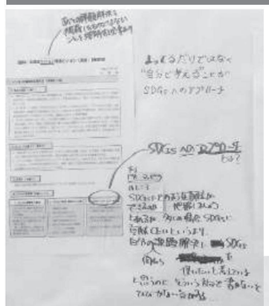
○「（仮称）北海道SDGs推進ビジョン（原案）」パブリックコメントの詳細は下記をご覧ください。

北海道（総合政策部政策局計画推進課）のホームページ
http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/sks/SDGs/vision-dominiken.htm

□実施状況（写真）

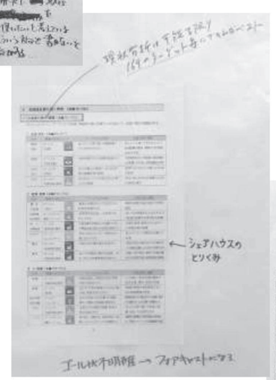


「（仮称）北海道SDGs推進ビジョン（原案）」パブリックコメントワークショップ　ご意見・ご質問



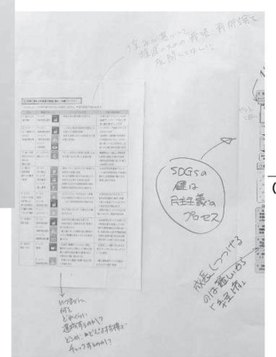
「（仮称）北海道SDGs推進ビジョン（原案）」概要版　P１

１ ビジョンの基本的な考え方
・「SDGs」は、すべての課外解決を網羅したものではないことを理解する必要あり
・まっているだけではなく、“自分で考える”ことがSDGsへのアプローチ
（４）SDGsの概要等
・「③SDGsへのアプローチ手法」のSDGsへのアプローチとは？
・本文P８のマッピングのところに「SDGsにどのような貢献ができるのか・・・把握しましょう」とあるが、多くの場合、SDGsに貢献したいというより、自分の関わる課題解決SDGsを使いたいと考えていると思うので、そういう方向で書かないとひびかない気がする



「（仮称）北海道SDGs推進ビジョン（原案）」概要版　P２

２ 北海道取り巻く現状
（１）北海道の現状・課題
・現状分析は可能な限り169ターゲット枚にできればベスト
・ゴールが不明確→フォアキャストになる
・「②経済・産業　観光」シェアハウスのとりくみ
・目標達成へのコストの視点



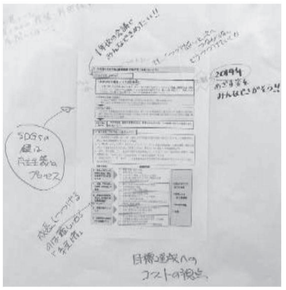
「（仮称）北海道SDGs推進ビジョン（原案）」概要版　P３

（２）世界に誇れる北海道の価値と強み
・強みに基づいて推進のための戦略・戦術論を展開してほしい
・いつまでに、何を、どれぐらい達成するのか？どこが、どんな指標でチェックするのか。

●「」内は概要本文を引用
●「・」模造紙に書かれたコメントや質問を記載

「（仮称）北海道SDGs推進ビジョン（原案）」パブリックコメントワークショップ　ご意見・ご質問

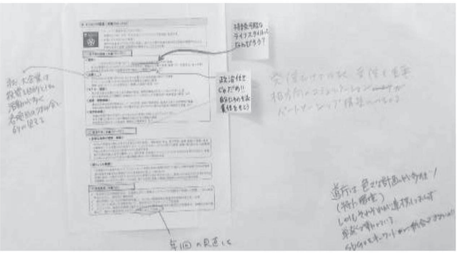
●「」内は概要本文を引用
●「・」模造紙に書かれたコメントや質問を記載



「（仮称）北海道SDGs推進ビジョン（原案）」概要版　P４

３.北海道のめざす姿と優先課題・対応方向性
・2019年北海道のめざす姿をみんなでさがそう！！
・SDGsの鍵は民主主義のプロセス
・目標達成へのコストの視点
（１）めざす姿
・１年後の会議でみんなで決めたい！
・「世界の中で輝きつづける北海道」はつかれる。ぴんとこない！←でも、「つづけ」ないと次へつながらない。どうつづけていくのか。

（２）優先課題と対応方向
・「Ⅲ　北海道野価値を活かした持続可能な経済成長」は。成長しつづけるのは難しいから「経済」



「（仮称）北海道SDGs推進ビジョン（原案）」概要版　P５

４ ビジョンの推進
・道庁はいろいろな計画が多すぎ！（特に環境）しかもそれぞれが連携しておらず単発で動いている。
　SDGsをキーワードに統合できないか。
（１）各主体の取組
＜道民＞
・持続可能なライフスタイルってなんだろう？
・政治任せじゃだめ！！自分たちの生活に責任をもとう
＜企業＞
・まだ、大企業は投資を目的とした活動が多く、各項目のつまみ食い的にみえる
＜地方自治体＞
・発信だけではなく受信も重要。相方向のコミュニケーションがパートナーシップ構築につながる
（３）推進管理
・年に１回の見直しを

◇清水 誓幸　提出資料

Economy Meeting から見え・考えた「北海道 SDGs 推進ビジョン（原案）」への意見書

北海道中小企業家同友会
清水　誓幸

※こちらの意見書は北海道が９月に（仮称）北海道 SDGs 推進ビジョン（原案）に対比して記載しております。

１．
５ページから６ページ
ビジネスチャンスの拡大や企業の持続可能性の向上　について
６ページの３行目
「企業が SDGs への取組をアピールすることで・・・」と書かれているが、持続可能社会に向けたバランスの良い取組であるかどうか、現段階では審査する機能はない。一部で取り組んでいても、違うところでは持続に反していることが行われている事もありえる話であり、「SDGs ウォッシュ」の懸念もある。その様な現状においては、慎重な対応が求められるため、「企業がバランスの取れた SDGs の取組を続けることで、企業イメージの向上・・・」と変えるべきと考える。

また、７行目以降の中に、「企業が SDGs に取組むことで、フェアトレードを組み込んだ持続可能なサプライチェーンが創出され、ビジネスによって貧困や人権に課題を解決することが期待される」などの明記が必要だと考える。

２．
① 生活・安心　について
健康・福祉
９ページから１２ページ
ゴール１　働きづらい環境や立場に置かれている多様な方々の存在も明記してほしい。
（例　病気や障がいを抱える人々、LGBT、女性、ひとり親世帯　など
また低所得者を減らすことを明記すべき。
（一般的には３００万円以下が低所得者と言われているが、北海道の市町村別の平均所得を見ると、１７９市町村の内、１３０市町村が３００万円以下である）

ゴール３　東京都の受動喫煙防止条例を見習い、全ての職場で実現させることが必要と考える。
外国人労働者の健康と安全を日本人と同等にするべき。

ゴール８　「健康を害する長時間労働を無くす」　を追加すべきと考える。

環境

１３ページ

ゴール１１　課題として、放置された危険な住宅など建築物の処理課題がある。
過疎化や高齢化が極度に進んだ市町村の持続の在り方を町の人々と考え取組むことが必要と考える。

ゴール１２　企業側は過剰包装を減らすこと、フードロスを減らすこと、容器など自然に戻せる素材等への転換を目標とする必要がある。

ゴール４　消費者はゴミが出やすい商品を選ばない、食物残渣が極力出ない食べ方、食物残渣が大量に出る食物を選ばないなど、消費者教育を推進する必要がある。

ゴール８　フードロス、製造品廃棄の裏側には、働き甲斐の搾取となり労働生産性を下げる労働（原料の無駄遣い、廃棄処理費用、価値に変わらない労働）などが隠されているため、フードロス、過剰生産、廃棄を減らすことが働き甲斐、賃金上昇につながると考える。

安全・安心　１５ページ

ゴール１０　外国人労働者、非正規雇用者、性別など、同一な仕事での不平等のない北海道にする必要がある。

ゴール１６　フェアトレードを実現したグローバル社会が必要である。

② 経済・産業について

農林水産業　１８ページ

ゴール３　労働者が高齢化している農林水産業では、北海道民の食を継続的に供給していただくために、特に働く人々すべてが健康であることが大切である。

ゴール８　農林水産業に従事している方たち全ての労働環境が一般労働者と同等になること。

ゴール９　上記のためにも技術革新や新たなインフラ（マイレージ）に力を入れる必要がある。

地域産業と研究開発　２０ページ

ゴール４　質の高い教育を受けられることによって、付加価値の高いモノづくり、サービスづくり、が実現する基盤整備が必要です。

中小・小規模企業　２１ページ

ゴール８　・フェアな利益、フェアな賃金などの健全な経営により持続可能な経済循環に寄与している、または目指している中小・小規模事業者を評価することが重要である。

・企業数を減らす原因の一つが後継者不足であるが、企業価値を高め、継承者が出る取組が重要となっている。

・また、RCE 北海道道央圏協議会の協働プロジェクトとして北海道大学大学院環境科学院が中心となって実施した SDGs の活動に関するアンケート結果（以降、「アンケート結果」）により労働慣行に対する意識が低く実施も進んでいないことが明らかとなり、意識改革、実施が必要とされる。

・行政も企業も異動を当然とする習慣の労働環境があるが、単身赴任による二重生活が家庭破壊を生むなどの課題や、離れた親の介護のための課題などがあり、働き甲斐を喪失、人材不足の原因になっており、柔軟な労働条件が求められている。

ゴール４　小中学生の頃より、働くこと、多様な産業、事業の社会的価値や役割を学ぶ機会を授業の中に取入れる「キャリア教育」の必要性高まってきている。
（仕事のイメージが無いままの就職での挫折、キッザニアなどの人気）

ゴール３　仕事に従事する人すべての健康を考えた企業の体制が必要である。

ゴール１　・働きづらい環境や立場に置かれている多様な方々やその家族が安心できる労働環境が望まれている。

・低所得者を減らす。

ゴール５　・性別に分け隔てない、差別されない働く環境が必要である。

・セクハラの無い職場環境が必要である。

・女性の管理者、リーダーが増える環境づくりのためのジェンダー平等教育が必要である。

ゴール９　環境負荷が極力無い、技術革新を追求し続ける必要がある。

ゴール１０　・ビジネス対ビジネス　ビジネス対消費者　の取引の中の不平等を無くす必要がある。
また、労働者への人権意識が低いというアンケート結果を受け、人権意識の向上を図る必要がある。

ゴール１１　中小・小規模事業者は、社会的責任において持続可能なまちづくりや地域社会に寄与することが必要です。

ゴール１２　廃棄物の極力出ない製品づくり、包装の在り方、残渣の削減、長く使える製品づくりなどの努力を行うことが必要です。

ゴール１３　災害などによる影響を極力減らすため、また、事業の早期復旧のための措置（BCP 事業継続計画）を企業それぞれが取組む必要がある。

ゴール１４　事業規模に拘らず事業活動による廃水の成分確認と環境管理をする必要がある。

ゴール１５　事業規模に拘らず作業場近隣までの土壌汚染を意識し確認管理する必要がある。
ゴール１６　パワハラや遣り甲斐の搾取などが無い職場環境が必要である。
ゴール１７　事業のサプライチェーンだけに留まらず、あらゆるステークホルダーと繋がり課題解決のために協力することが必要である。

エネルギー　２２ページ
ゴール９　大手電力会社に依存しない、小規模地域でのスマートグリッドの開発と促進が必要である。

観光　２３ページ
ゴール８　観光客は増えているが、観光地域の平均所得は北海道の中でも平均以下が殆どである。　地域の人々が潤う観光の在り方が必要である。

雇用　２４ページ
ゴール８　・北海道の労働時間は全国平均より長く、所得は平均以下であることは、働く地域としては魅力を感じてもらいづらい環境である。時間当たりの付加価値の向上を図ることが必要である。
ゴール５　・ジェンダーによらない平等な就業環境整備が必要である。
ゴール１１・地域の多様な働き手を受け入れる環境を、整え、雇用を図ることが持続可能なまちづくりに必要である。

③ 人・地域について

教育　28 ページ
ゴール４　・貧困家庭であっても教育を受けることが出来る社会づくりが必要である。
・社会人になってからでもスキルを付けるための場や仕組みが必要であることと、支援と理解が重要である。

文化　30 ページ
ゴール４　・先住民族のことを全ての北海道民が認識する教育が必要である。

インフラ　30 ページ　　70 ページに関連
ゴール９　・北海道の広さ、広さに対する交通量、などを鑑み、交通法規は北海道独自の規制を考え、実施することで、お金を掛けずにインフラ整備の効果を生むことに繋がる。（道東、道北地域の住宅や街以外の一般道の速度規制を 10 キロ上げるなど）
・仕事において重要度が高くなっているネット環境において、災害時にもダウンしない通信インフラが必要である。

（２）世界に誇れる北海道の価値と強み

①魅力となる雪や寒さ　33 ページ
本道の価値と強み　　「続可能な観光業を促進することなどの目標が掲げられています。」と書かれているが、そこでの付加価値額（平均所得）が低ければ、働いている人々が豊かになれず、働き甲斐も経済成長も望めないのではないのか？　観光の付加価値を上げていくことが重要であると考えます。

優先課題Ⅰ
平和な社会づくりの推進　５０ページ
指標　　刑務所出所者の就職率　刑務所出所者の就労支援の確立の現状と目標が必要と考える。

人々が互いに尊重し合う社会づくりの推進　51 ページ
参考となる主な取組例の企業の例は何をもとにしたものか？　北海道の中小・小規模企業への 2018 年のアンケート結果では人権意識が低く、取組が少ないという結果が出ている。

指標　　労働局などへの相談内容、相談件数も指標に加えるべきではないだろうか？
安心して働ける環境づくりの推進　54 ページ

ゴール４を追加　　安心して働ける会社を選ぶ能力を身に着ける教育が必要である。

道の主な取組　　・ほっかいどう働き方改革センター　への相談件数、相談内容、成果、課題があるか知りたい。
・北海道・障がい者就労支援の窓口の企業の利用数、障がい者の利用数、相談内容、成果、課題が知りたい。
指標　　・平均所得の現状と目標値を設定しては？
・障がい者数から見た雇用数の現状と目標も設定しては？

優先課題　Ⅱ
豊かな自然と生物多様性の保全の推進　56 ページ
ゴール４を追加　　自然を保護する重要性を子どもから大人まで継続的に伝えることが重要である。

指標　　不法投棄されているゴミの現状と目標値を設定するべきでは？

地球環境保全の推進　58 ページ
参考となる主な取組例の１番目の企業の例を掲載しているということは今後もメガソー

ソーラ、大規模発電を推進するのか？　推進すべきは小さな地域単位での新エネルギーでであって、大企業依存、大規模開発らの脱却が望まれている。

　また、再生可能エネルギーの受入れを積極的に進め、申請を希望する事業を支援する必要がある。

持続可能な生産と消費の推進　60 ページ

ゴール４を追加

参考となる取組例　【NPO、市町村、教育機関、道民】「エシカル消費」や「フェアトレード」などの持続可能な生産と消費に関する消費者教育を積極的に推進。

指標　　食品ロスの現状と目標の設定が必要ではないか？

地域産業の創造やイノベーションの創出　64 ページ

ゴール４を追加　　地域産業の創造やイノベーションを創出するためには、付加価値を創造する教育が必要である。

参考となる主な取組例　BtoB BtoC どちらにおいても取引ルールを明確化し、互いに守ることにより、生産性の向上、従業員のストレス減少、イノベーションの創出、所得の向上につながっている。

指標　　中小・小規模事業者のITの利活用の現状と目標を設定する必要があるのでは？

中小・小規模企業の振興　　66 ページ

ゴール３、４、５を追加

指標　　企業の継承率の現状と目標を設定しては？

　　開業だけが振興ではない。

指標　　企業の継続年数の現状と目標を設定しては？

　　3 年以上　　5 年以上　10 年以上　　20 年以上　　30 年以上　50 年以上などに分けて。

以上

◇有坂 美紀　提出資料

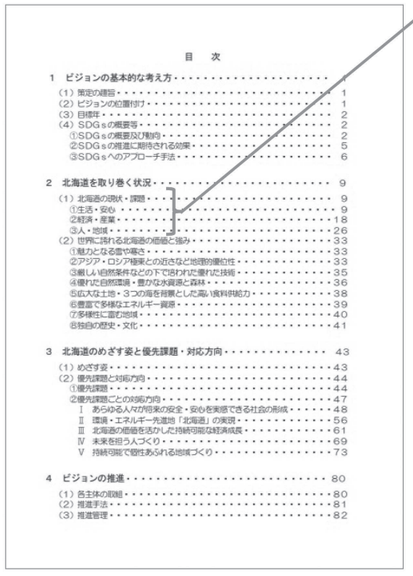
第３回北海道SDGs推進懇談会

◆北海道SDGs推進懇談会への提案◆

RCE北海道道央圏協議会
事務局長　有坂美紀
HP：http://rce-hc.org　email: info@rce-hc.org

提案：目次ついて

北海道の「現状・課題」と「価値と強み」に関して、表現のバランスを取る



目　次

1　ビジョンの基本的な考え方・・・

提案：SDGsの意義の説明

2030アジェンダから抜粋し、コラムとして追記

1　ビジョンの基本的な考え方

（1）策定の趣旨

北海道は今、急速に進行する人口減少や高齢化、道民の安全・安心を揺るがす大規模自然災害の発生など、地域の存続に関わる課題に直面しています。また、グローバル化や高度情報社会の進展に加え、資源・エネルギー新体の変化は、私たちの日々の暮らしや産業活動などに大きな影響を与えています。

一方で、北海道は、豊かで美しい自然環境や広大な大地と海に恵まれ、安全・安心な食をはじめ、豊富で多様なエネルギー資源や、アイヌ文化、開拓の歴史といった独自の歴史や文化を持つ、他の地域には持ちえない 本道ならではの魅力や可能性を有しています。

今、国際社会では、だれ一人取り残さない持続可能な社会の実現に向けて、多様性と包摂性のある社会の実現に向けて、国連で採択された「持続可能な開発目標：SDGs（Sustainable Development Goals）」を共通の指針として掲げ、その実現に向けた取組が始まっています。

2018年に、私達が暮らすこの地が「北海道」と命名されてから150年という節目を迎えたり、これから先の50年、100年後に向け、持続性の高い政策を確かなものとし、世界の中で北海道の存在感を高め、世界とともに歩む持続可能な地域づくりを進めていくために、SDGsの理念に向けた取組の積極的な推進（以下「SDGsの推進」という。）が重要となっています。

SDGsの推進に当たっては、**官民連携**について道民の理解が広がり、公共セクターと民間セクターの役割を超え、自治体や企業、団体・NPO、教育・研究機関などに広範で多様な主体が連携しながら、幅広い分野や地域で様々な取組が展開されることが欠かせません。

このため、「北海道SDGs推進ビジョン」を策定し、SDGsのゴール等に照らした、本道の直面する課題、独自の魅力や強みを踏まえた「めざす姿」などを示すとともに、道民の理解と共有しながら、道内におけるSDGsの主流化や多様な主体が連携・協働した取組を促進し、北海道全体でSDGsの推進を図っていきます。

※　ＳＤＧｓの主流化
それぞれの主体が次の観点に立って行動していくこと
①　自らの行動に当たって**三側面**（経済・社会・環境）の変化を最大限反映する
（自治体であれば政策計画や条例等、企業であれば経営計画等の策定や改訂に反映、道民であれば日常生活においてＳＤＧｓを意識して行動する　など）
②　ＳＤＧｓの推進に向けて、各主体が相互に連携し補完的な取組を推進していく
③　取組に必要な財源の確保に努める

（2）ビジョンの位置付け

・　ビジョンは、本道におけるＳＤＧｓの推進のため、~~中長期的な視点や理念~~ 本道の「めざす姿」や優先課題・対応方向、推進手法などを示すものであり、道内の多様な主体が互いに共有する基本的な指針とします。

1

■ SDGs が目指すもの（意義）

我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ （前文）より

このアジェンダは、人間、地球及び繁栄のための行動計画である。これはまた、より大きな自由における普遍的な平和の強化を追求ものでもある。

我々は、極端な貧困を含む、あらゆる形態と側面の貧困を撲滅することが最大の地球規模の課題であり、持続可能な開発のための不可欠な必要条件であると認識する。

すべての国及びすべてのステークホルダーは、協同的なパートナーシップの下、この計画を実行する。

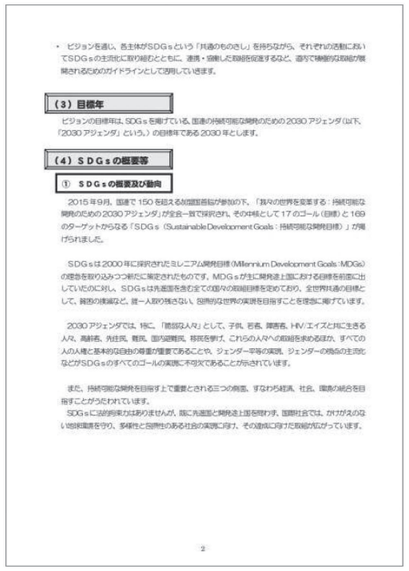
我々は、人類を貧困の恐怖及び欠乏の専制から解き放ち、地球を癒やし安全にすることを決意している。

我々は、世界を持続的かつ強靭（レジリエント）な道筋に移行させるために緊急に必要な、大胆かつ変革的な手段をとることに決意している。

我々はこの共同の旅路に乗り出すにあたり、誰一人取り残さないことを誓う。

提案：SDGsの理念「誰一人取り残さない」

SDGsの欠かせない要素をコラムでしっかり説明



・　ビジョンを通じ、各主体がＳＤＧｓという「共通のものさし」を持ちながら、それぞれの活動において**三側面**（経済・社会・環境）の変化を最大限反映するなど、道内で積極的な取組が展開されるためのガイドラインとして活用していきます。

（3）目標年

ビジョンの目標年は、ＳＤＧｓを掲げている、国連の持続可能な開発のための2030アジェンダ（以下、「2030アジェンダ」という。）の目標年である2030年とします。

（4）ＳＤＧｓの概要等

①　ＳＤＧｓの概要及び動向

2015年9月、国連で150を超える各国首脳が参加の下、「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」が全会一致で採択され、その中核として17のゴール（目標）と169のターゲットからなる「SDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）」が掲げられました。

ＳＤＧｓは2000年に採択されたミレニアム開発目標（Millennium Development Goals：MDGs）の成功を取り込みつつ新たに策定されたものです。MDGsが主に開発途上国における目標を前面に出していたのに対し、ＳＤＧｓは先進国を含む全ての国々の取組目標を定めており、全世界共通の目標として、貧困の撲滅など、誰一人取り残さない、包摂的な世界の実現を目指すことを宣言に掲げています。

2030アジェンダでは、特に、「脆弱な人々」として、子ども、若者、障害者、HIV/エイズと共に生きる人々、高齢者、先住民、難民、国内避難民、移民を挙げ、これらの人々への取組を求めるほか、すべての人の人権と基本的な自由の尊重の重要であることや、ジェンダー平等の実現、ジェンダーの視点の主流化などがＳＤＧｓのすべてのゴールの実現に不可欠であることが示されています。

また、持続可能な開発を目指すとで重要とされる三つの側面、すなわち経済、社会、環境の統合を目指すことがうたわれています。

ＳＤＧｓに法的拘束力はありませんが、既に先進国と開発途上国を問わず、国際社会では、だれ一人取り残さない地域社会を守り、多様性と包摂性のある社会の実現に向け、その取組に向けた取組が始まっています。

2

■ 誰一人取り残さない No one will be left behind

（2030アジェンダの「宣言」より）

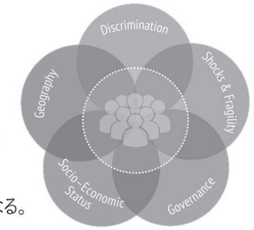
この偉大な共同の旅に乗り出すにあたり、**我々は誰も取り残されないことを誓う。**

人々の尊厳は基本的なものであるとの認識の下に、目標とターゲット がすべての国、すべての人々及び社会のすべての部分で満たされることを望む。

そして我々は、**最も遅れているところに第一に手を伸ばすべく努力する。**

取り残される理由を理解するための5つの要因

◇差別
◇居住地
◇社会経済的地位
◇統治
◇衝撃に対する脆弱性



これらの要因が交差する環境にいる人々は、不利益と貧困が複合化して助長され、最も背後にある可能性が高くなる。

引用：UNDP “WHAT DOES IT MEAN TO NO ONE WILL BE LEFT BEHINDE?” July 2018

提案：SDGsの要素の説明

2030アジェンダから抜粋し、コラムとして追記

引用：国際連合広報センター：
SDGsを広めたい・教えたい方のための「虎の巻」より

経済、社会、環境の調和
バックキャスティング的思考
主要原則：国連憲章、人権

■ 持続可能なキーワード　「５つのP」

SDGsは、**人間：People**　**地球：Planet**　**繁栄：Prosperity**　**平和：Peace** のための目標であり、**パートナーシップ：Partnership** で実現を目指すもの。

人間：あらゆる形態及び側面において貧困と飢餓に終止符を打ち、すべての人間が尊厳と平等の下に、そして健康な環境の下に、その持てる潜在能力を発揮することができることを確保する。

地球：地球が現在及び将来の世代の需要を支えることができるように、持続可能な消費及び生産、天然資源の持続可能な管理並びに気候変動に関する緊急の行動をとることを含めて、地球を破壊から守る。

繁栄：すべての人間が豊かで満たされた生活を享受することができること、また、経済的、社会的及び技術的な進歩が自然との調和のうちに生じることを確保する。

平和：恐怖及び暴力から自由であり、平和的、公正かつ包摂的な社会を育んでいくことを決意する。平和なくしては持続可能な開発はあり得ず、持続可能な開発なくして平和もあり得ない。

パートナーシップ：強化された地球規模の連帯の精神に基づき、最も貧しく最も脆弱な人々の必要 に特別の焦点をあて、全ての国、全てのステークホルダー及び全ての人の参加を得て、再活性化された「持続可能な開発のためのグローバル・パートナーシップ」を通じてこのアジェンダを実施するに必要とされる手段を動員する。

引用　「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」

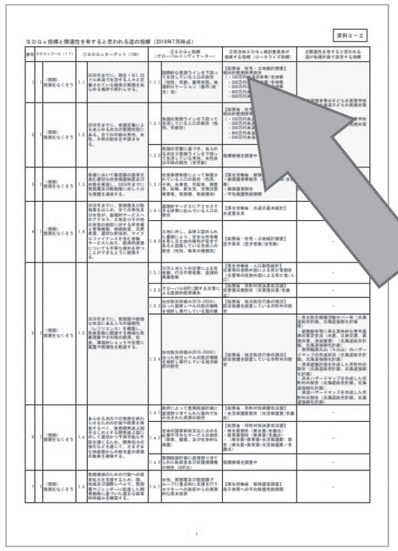
提案：世界基準で見る「北海道の現状と課題」
SDGsと比較した表現を加える

現状　◇ 生活保護世帯数が全国と比較して高い
◇ 生活保護世帯・児童養護施設の子どもの高等学校等進学率が全世帯の子どもと比較して低い
◇ 就学援助の対象となる要保護及び准要保護児童生徒の割合が全国と比較して高い
課題　◇ 貧困の現状にある子どもが健やかに成長できる環境整備
◇ 地域全体で子どもを見守り育てる社会づくり
◇ 高齢者、障がいのある方々などが住み慣れた地域で安心して暮らせる社会づくり

現状　◇ 2016年の農業産出額は過去最高を更新（１兆２，１１５億円）
◇ 農業就業者人工は減少傾向にあり、６５歳以上の比率が上昇傾向
◇ 漁業生産量、漁業就業者数、新規漁業就業者数ともに減少傾向
◇ 漁業就業者一人当たりの漁業生産額は、全国平均に比べ高水準
課題　◇ 農林水産業の生産力強化や所得の確保が必要

現状　◇ 二次医療圏別の医療施設に従事している医師数の地域偏在が著しい
◇ 介護職員の入職率及び離職率が他の職業に比べて高い
◇ 北海道福祉人材センターの支援による介護職の就業者数が年々減少している
◇ 生活習慣病のリスクを高める飲酒者の割合が全国平均より高い
◇ 喫煙率が男女ともに全国平均より高い
◇ 自殺死亡者率が全国平均よりも高い
◇ 交通事故死亡者数は減少傾向にあるものの、交通事故により多くの方が亡くなっている
課題　◇ 安心して子育てできる社会づくり
◇ 将来にわたり安心できる地域医療の確保
◇ 道民一人ひとりの生涯を通じた健康づくりの推進と疾病の予防
◇ 交通事故死ゼロ目指した交通安全対策の推進

提案：「SDGs指標と関連性を有すると思われる道の指標」（第１回北海道SDGs推進懇談会 資料３－２）の掲載



SDGsのどの目標に、北海道として対応しようとしているのか一目瞭然

➡ 世界共通の課題解決に対する北海道の貢献を分かりやすくする

＜表の項目＞
①SDGsのターゲット（１６９）

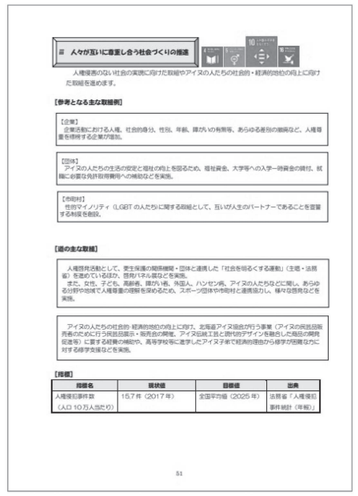
②SDGs指標
（グローバルインディケーター）

③自治体SDGs検討委員会が提案する指標
（ローカライズ指標）
➡ 「道の５つの優先課題」に変更

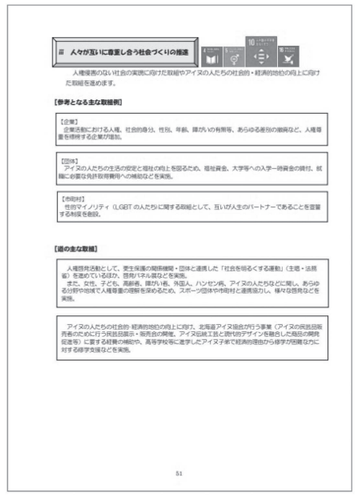
④関連性を有すると思われる道が各種計画で設定する指標

提案：北海道のめざす姿と優先課題・対応方向

【指標】は外す、もしくは【参考指標】【主な指標】などとする



現在で挙げられている指標では、対応方向の進捗状況等を十分に評価することは難しい。掲載されているものだけで評価が十分可能であるかのような誤解を招きかねない。
【指標】として残す場合は、世界に視野を広げるためにも関係するグローバルインディケーターを記載し、目標値の改定時期に達成年を2030年に統一する。
また、評価するための適切な指標を作る必要があると考える。



提案：道がリードするビジョンの推進方法について

・取組状況の確認　【モニタリング】及び【指標】の策定
➡ ◇ 専門性のある多様な主体との協働により、多様で客観的なモニタリングを実施するとともに、ビジョンの進捗状況を評価するための指標づくりを協働で行う。

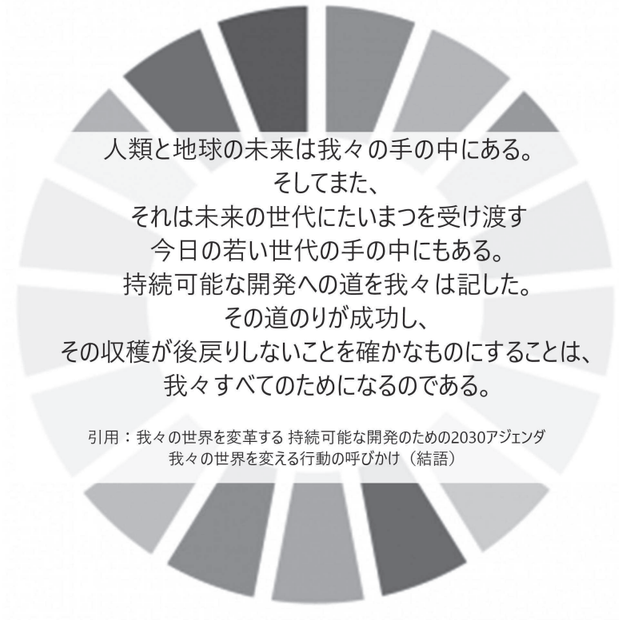
・修正を含むビジョンの見直しを定期的に行う
➡ ◇ 経済、社会情勢の変化や道内外の動向を踏まえ、年に一度、ビジョンの進捗状況を広く道民と共有し、意見交換を行う。
◇ 道民からの意見に基づき、必要な見直しを行う。

・多様な主体との意見交換や協働・連携の推進
➡ ◇ 国連が提唱するメジャーグループ及び各振興局の参画を得た意見交換の場の設置する
（国連が提唱するメジャーグループ及びその他の利害関係者）
女性 、子どもと若者、先住民、NGO、地方自治体、労働者・労働組合、
ビジネスと産業、科学技術コミュニティ、農業従事者、地域コミュニティ、
ボランティアグループと財団、移民と家族、高齢者と障がい者

・広報・普及啓発活動
➡ ◇ 道庁をはじめとした行政職員向けの「SDGs勉強会」を定期的に開催する
◇ SDGsの理解を各市町村や道民などに広げるために一般向けパンフレットを懇談会構成員をはじめとする多様な提言や意見を反映して作成する

・横断的な取組を推進していくための関係制度改革の検討及び財源確保
➡ ◇ SDGs達成を目指す政策を進める自治体を支援するため、既存の各種補助事業等にSDGsの要素を組み込む
◇ 各自治体単位でデータ収集力を強化するため、専門性を持つ多様な主体と協働で支援する

提案：末尾に2030アジェンダの「結語」を記載する



第３回北海道ＳＤＧｓ推進懇談会 議事録

日時：平成 30 年 10 月 22 日（月）14：00 ～
場所：道庁本庁舎７階共用会議室Ｃ

【出席者】
○構成員：有坂 美紀、大﨑 美佳、柏村 章夫、小泉 雅弘、定森 光、清水 誓幸、菅原 亜都子、鈴木 昭徳、野吾 奈穂子、吉中 厚裕　（五十音順、敬称略／ 10 名出席）
○北海道：谷内計画推進担当局長、石川計画推進課長、渡邉計画推進課主幹

石川（課長）　皆さんこんにちは。御案内の時間になりましたので、ただ今から第３回目の北海道 SDGs 推進懇談会を開催させていただきます。本日は、本当にお忙しいところお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。前回の懇談会の開催結果でございますが、道庁のホームページで公開させていただいています。今日の懇談会の開催状況につきましても、皆さんにご確認させていただいたのち、道庁のホームページで公開させていただく予定ですので、御承知おきをよろしくお願いいたします。今日の懇談会でございますが、概ね 16 時までを目処に開催させていただきたいと考えていますので、御協力をお願いいたします。それでは、開会にあたりまして、谷内計画推進担当局長から御挨拶をさせていただきます。

谷内（局長）　計画推進担当局長の谷内です。今日はお忙しい中、第３回目の懇談会に御出席いただきまして、ありがとうございます。本日は、先月に私どもの方で取りまとめましたビジョンの原案について、御議論いただきたいと思います。皆様方からの御意見ですとか、あるいは、知事の附属機関であります北海道総合開発委員会の御意見、こうしたものも参考にしながら、ビジョンの原案の取りまとめを行ったところでございます。この後、来月中には、最終案として取りまとめ、年内にビジョンとして決定をしていきたいというようなスケジュール感を持っているところでございます。この懇談会での御意見、あるいはパブリックコメントでもかなり御意見をいただいていますし、市町村からも御意見をいただいたところです。そうした御意見をできるだけこのビジョンの中に反映させながら、最終案を取りまとめて行きたいと思っております。皆様方にはこの懇談会だけではなく、それぞれの立場で会議等を開いていただき、今日もまた多くの資料を提出していただけるということですので、また忌憚のない御意見をいただきながら、取りまとめ作業にあたって行きたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

石川（課長）　それではここからの議事の進行につきましては、座長の吉中先生にお願いしたいと思います。

吉中　皆様どうぞよろしくお願いいたします。下川町の木原さん以外、全員出席ということで、皆さんの熱意の表れかと思っております。お忙しいところお集まりいただきまして、どうもありがとうございます。今日の議事はお配りされているとおりですが、まず、原案についてということで、今まで骨子案というのが、会議が始まる前に一応出来上がっていて、それを見ながらざっくばらんに色々御意見をいただき、補完し合いながら意見を道庁に伝えるということでやってきたと思っております。今回、それを原案という形でまとめていただいておりますので、今日は是非、具体的な原案の中身について、御意見をいただいて、懇談会として意見を出していきたいと思っておりますので、どうぞ御協力よろしくお願いします。できるだけ 16 時に終わりたいとは思っておりますので、ポイントのついた厳しい御意見をいただければ、ありがたいなと思っております。

今、課長の方からもお話しいただきましたが、皆様から色々な資料を共有していただきまして、どうもありがとうございます。今まで、ボクシングでいうとシャドーボクシングのようなことをずっとやってきましたが、本日は原案という形で、ようやく相手のプロファイルがはっきり分かり、具体的にどのようないゲームにしていけばいいかということを考えるタイミングかと思っております。そういうことで、私の提案としては、事務局から資料の説明をいただいた後、この策定のプロセスとして非常に重要な要素になってきていると思っていますが、グループ別のビジョン提案ワークショップというものを５回程開催していただいていますので、その概要のようなものを御紹介いただきたいと思います。資料の中にはそれぞれのミーティングごとに、「何ページのこの箇所を修正」といった具体的な御提案、あるいは、小泉さんのまとめていただいた資料には、全体のワークショップを通じての、「ビジョン原案の１のこの箇所に明記」といった具体的な御提案をいただいておりますが、その具体的な部分は後ほど、道庁から原案について簡単に御説明いただいた後、順々に議論していくというような形にしたいかと思っています。それでは最初に、皆様も既にお目通しいただいているかもしれませんが、ビジョンの原案について、道庁の方から御説明いただくということでよろしいですか。よろしくお願いします。

渡邉（主幹）　計画推進課の渡邉です。私の方から、事務局の方で用意させていただきました資料１から資料４について、簡単に説明させていただきます。資料１につきましては、これまで懇談会でいただいた意見を基に道の方で取りまとめさせていただきましたビジョンの原案になります。資料２につきましては、前回の第２回目の懇談会において、吉中座長におまとめいただいたこれまでの議論での御意見を、ビジョン原案の中でどのように反映したか、また、反映できなかった場合は、どういう考えなのかということについて、取りまとめた資料でございます。資料を合わせて御覧いただければと思います。

それでは、資料１の原案について、簡単に説明させていただきます。ビジョンの全体の構成、「ビジョンの基本的な考え方」、「北海道を取り巻く状況」、「北海道めざす姿と優先課題・対応方向」、「ビジョンの推進」という４つの構成については、骨子から変わっておりません。「ビジョンの基本的な考え方」につきまして、ビジョン骨子でお示ししたところから大きく変わったところとしましては、２ページから８ページにかけて、「（４）SDGs の概要等」として、SDGs とはそもそもどのようなものかということから、SDGs 推進で期待される効果、それぞれの主体がどのように取り組んでいけばいいのか等について、事務局としてできるだけ分かりやすく記載しました。

次に、９ページ以降の「北海道を取り巻く状況」についてですが、「（１）北海道の現状･課題」としまして、９ページから 32 ページまで書いております。SDGs に詳しくない方、初めて読まれる方でも分かりやすくなるようにと考えまして、「生活・安心」、「経済・産業」、「人・地域」という３つの分野から、それぞれ５、６個ずつ、全部で 15 の区分を行いまして、北海道の現状や課題というものを表やグラフを活用し、可能なものは時系列でお示ししながら、また、それぞれの区分を SDGs のゴールと照らしながら、北海道の現状と課題を整理させていただいております。33 ページから 42 ページには、「（２）世界に誇れる北海道の価値と強み」としまして､SDGs 推進に貢献していくために、北海道が持っている８つの価値や強みとその活用方法について、SDGs の関連するゴール等に照らしながらお示ししているところでございます。

次に、43 ページ以降の「３ 北海道のめざす姿と優先課題・対応方向」についてですが、「めざす姿」については骨子案のとおり「世界の中で輝きつづける北海道」としておりますが、その説明において、「「世界の中の北海道」としての存在感を高めながら、誰一人取り残さない、将来にわたって安心して心豊かに住み続けることができる地域社会を形成していく」としております。また、前段までで整理させていただきました、北海道の危機や可能性、SDGs の推進で期待されること、「めざす姿」の考え方などについて、詳しく記載させていただいております。44 ページ以降の「めざす姿」の実現に向けた「優先課題と対応方向」については、前回の懇談会までに事務局からお示しさせていただいたとおりですが、48 ページ以降に、詳細な記載を対応方向ごとに書いておりまして、企業や団体、市町村といった多様な主体の皆様が今後、SDGs の推進に取り組んでいただく際の参考となるような多数の取組例、また、道の取組例なども併せて、紹介させていただいております。SDGs を推進する上で、その目標や達成状況を分かりやすくするために設定している指標につきましては、SDGs のゴールやターゲット、指標、「自治体 SDGs 指標検討委員会」が提案するローカライズ指標などと照らし合わせながら、「経済社会の状況や道民の暮らしの状況を表すアウトカム指標」や「都道府県順位の把握や全国平均値との比較ができる指標」、「原則、毎年または隔年で公表される指標」といった要件に沿いまして、その中から入手可能な指標を設定しています。以下、79 ページまで、対応方向ごとに取組方法を記載しております。

80 ページ以降の「４ ビジョンの推進」についてですが、「（１）各主体の取組」としまして、道内の各主体の皆様が自発的な取組を推進していただく際に参考となるように、期待される取組を事例として記載させていただいております。「（２）推進手法」につきましては、８月に道の方で全道的な組織として立ち上げさせていただきました、「北海道 SDGs 推進ネットワーク」の活動などを通じて、多様な主体による取組の裾野を広げていくとともに、国から SDGs 未来都市に選定されたということも受けまして、推進本部の下に、多様な主体と連携を図りながら、幅広い分野や地域で取組を推進していくということとしております。次の 82 ページ、「（３）推進管理」としましては、ネットワーク組織の活動などを通じて、道内における取組状況を把握し、情報発信をしていくとともに、道の取組につきましては、政策評価を通じて、推進状況を取りまとめ公表していくこととしております。また、経済・社会情勢の変化や道内外の動向などを踏まえて、多様な主体の参画の下、幅広く御意見を伺いながら、必要に応じて見直す旨、記載しております。資料１と２につきましては、以上です。

資料３といたしまして、知事の附属機関であります「北海道総合開発委員会」が８月 20 日に開かれました。その際に、有識者や地域代表の方に、SDGs を切り口にした御議論をしていただいており、主な発言内容をまとめた資料が資料３でございます。道として SDGs を推進するにあたっての考え方や、各分野や地域における持続可能な地域づくりについて、様々な御意見をいただいておりました。こちらにつきましても、ビジョン原案の取りまとめにあたって参考とさせていただいているところです。資料４につきま

しては、資料４－１がパブリックコメントでいただいた意見の一覧でございます。４－２につきましては、同時に行いました道内各市町村に対する意見照会の結果を取りまとめたものでございます。パブリックコメントの実施に当たりましては、先に設立した「北海道 SDGs 推進ネットワーク」の会員や道庁各部を通じて、380 の関係団体にパブリックコメントの実施について周知し、御協力をお願いしたところです。また、市町村については、各振興局から全市町村に意見照会をしているところでございます。市町村意見とパブリックコメントを併せまして、計 69 件の御意見をいただいたところでありまして、この御意見や本日の懇談会の御意見などを踏まえまして、11 月中下旬頃までに最終案を取りまとめて、年内にビジョンを策定してまいりたいと考えております。以上です。

グループ別ビジョン提案ワークショップの概要

吉中　ありがとうございます。中身についての御意見・御議論は後ほどということにしたいと思います。御説明いただいた資料が足りない、この部分は少し説明が分からなかったなど、そういうことがございましたらお伺いしたいと思いますがいかがでしょうか。本体が結構なページ数となっており、その他にも重要な資料を付けていただいておりますが、いいでしょうか。それでは、議論の中で御不明な点が出てきたらお伺いするということで、先に進めさせていただきたいと思います。

次に、先ほど私から申し上げたとおり、この懇談会のメンバー中心に、策定のプロセスとして非常に重要な要素になっていると考えておりますが、「2030 年のほっかいどうを考える」ミーティングというものが計５回開かれて、さらにパブリックコメントのためのワークショップも開かれたということもありますので、できればそれぞれのミーティングの概要等について、それぞれから簡単に御説明いただいて、それから本論に入っていこうかと思います。まず、手元にございます、小泉さんがまとめていただいたグループ別ワークショップ全体の概要、その裏に具体的な提案がありますが、できればその表面の５つのミーティングの概要を御説明いただいて、その後補足していただく部分があれば、各ミーティングを担当された方から御説明いただくという形にしようかと思っております。「このページのこの箇所をこう書き直した方がいい」といった具体的な御提案等は、後の章ごとの議論でしたいと思いますので、御理解いただければと思います。よろしいでしょうか。では、小泉さんお願いしていいですか。

小泉　たくさん資料があり、分かりにくいかもしれませんが、「グループ別ビジョン提案ワークショップ実施の趣旨と概要およびそれを踏まえた提案」という資料があると思います。１ページに趣旨と概要の部分がある資料です。簡単に紹介します。まず、なぜこのようなグループ別ワークショップを呼びかけてやることになったかということですが、そもそもの初めの骨子案の段階から、北海道の方からいただいているこのビジョン案というものが、多様なステークホルダー、途中から主体に変わりましたが、多様なステークホルダーが互いに共有する基本的な指針としてビジョンを制定するということが前提となっていました。おそらくこれまでの持続可能な開発を巡る議論を踏まえてそうなっていると思いますので、基本的にそのことを歓迎したいと思っています。

歓迎した上で、今まで、私などがずっと言ってきたことと重なりますが、「多様なステークホルダーが互いに共有する基本的な指針」となるためには、この策定のプロセスにおいて、多様なステークホルダーが参画するということが前提条件になると思います。国連の SDGs 策定もそうですが、もう少しさかのぼれば、1992 年のリオサミットで「アジェンダ 21」という行動計画が策定されて、その時から持続可能な開発を進めていく上では、多様なステークホルダーの参画のプロセスが重要であるということが強調されています。その中心となるのが、ここでも何度か言いました９つのメジャーグループだと思います。そのメジャーグループについて、「アジェンダ 21」という約 300 ページの文章、４部構成くらいの文書の１部は、９つのグループの役割ということに割かれているわけです。それくらい持続可能な開発を議論する上で、それらのグループの参加が前提となっているということです。ですので、本来ならば、これまでの議論にグループのしっかりとした参加というプロセスが必要だと思っていて、「このスケジュールでは難しいだろう」という話を何度もしましたが、「スケジュールは変えられない」ということなので、これは当初から考えていたことですが、道庁さんだけでは多分できないので、懇談会の有志でできそうなところだけでも、原案の段階でビジョンの提案をするワークショップを、ボランティアといいますか、持ち出しで開催しました。時間がなかったということもあり、中々、準備が十分に出来なかったところもありますし、必ずしも人数が多いものだけではなかったと思いますが、それでも５つ、パブリックコメントも入れると６つ、主体別という意味では、女性、ユース、アイヌ民族、CSO（市民社会組織）という４つのグループでやり、経済というテーマに沿って１つやりました。その他、パブリックコメントのためのワークショップをやったということです。それぞれについては、それぞれから報告してもらいたいので、順番にお願いしたいと思います。女性からお願いしてもいいでしょうか。

菅原　「Women's Meeting」ということで、本日、追加でお配りした資料を御覧ください。おそらく一番下に付いているかと思います。「「2030 年のほっかいどうを考える Women's Meeting」から考える「北海道 SDGs 推進ビジョン」への提案」ということでお配りしています。女性グループということで９月 26 日の午前中と夜間に２回実施しました。結果についてはここに記載しているとおりです。ワークショップの進め方としましては、他のグループのワークショップと同様に、2030 年の北海道に、どのようなことを増やしたいか、減らしたいか・無くしたいか、そして、変わらずにあって欲しいことは何かという３つのテーマで聞き、参加者からたくさんの意見を出していただきました。その結果を、午前の部と夜間の部で２つの表に分けて記しております。この表の中で黄色く塗りつぶしている部分は、ジェンダー平等に直接的に関わると思われるところです。この作業を行った後、色々考えているうちに、黄色の部分が、増やしたいものよりも無くしたものに多いということに気がつきました。無くしたいものとして語られる時に、女性達が自分の経験を思い出すようにお話されていたのがとても印象的でした。例えば、働いている時に嫌な思いをしたこと、もしくはパートナーとの関係で理不尽な経験をしたことなど、そういった自分の悔しかった気持ちや腹立たしかった経験をお話されていたというのが凄く印象的でした。

そこから感じたことですが、女性の声をビジョンに反映されるということは、凄く丁寧なプロセスが必要だというふうに感じました。女性達が昔、自分達の権利を勝ち取る時にキャッチフレーズとして使っていた言葉で、「The personal is the political」という言葉があります。「個人的なことは政治的なこと」というキャッチフレーズで、フェミニズムの女性の先輩達は戦ってきましたが、やはり女性達の課題というのは、「私が我慢すればいい」だとか、「凄く個人的なことであって世の中に訴えることではない」だとかというふうに思いがちだと思います。それをワークショップという形で、安心な場でやったからこそ、皆さん自分の経験をお話くださって、是非ビジョンに反映させて欲しいと色々な経験を語っていただけたと思っています。それから是非、今後のビジョンについてお願いしたいと思っていますのが、今後このビジョンを下に、実際の取組を行い、評価をして、ビジョンをみんなで育てていくというようなことをしていくと思いますが、今回のワークショップのように、できれば丁寧な聞き取り、「あなただけの問題だけではなくて、北海道全体の問題ですよ」、「あなたが幸せになることが、北海道全体がハッピーになることですよ」というような丁寧な聞き取りをしながら、このビジョンを女性も男性も一人一人が自分事と考えられるような丁寧な育て方をしていくということを、推進体制のところに入れていただきたいということを、この提案書に書いていますので、よろしくお願いします。以上です。

小泉　それでは、一応順番にいきます。「the Ainu people's meeting」という、アイヌ民族の集まりを９月 27 日の夜にやりました。これは、RCE 道央圏のメンバーでもある札幌アイヌ協会の方に協力をお願いしましたところ、札幌アイヌ協会の学習会という位置付けでやっていただき、12 名程の参加を得ることができました。この会はある意味、凄く画期的だったのではないかと思っています。アイヌ協会などアイヌのグループはありますし、アイヌの政策というところで集まり、意見を聞く場というのはこれまでにも色々あったと思いますが、もっと広い意味での、SDGs、持続可能な開発という社会を包括するようなテーマの中で、アイヌ民族のメンバーだけで集まって意見を出し合うということ自体が、私は画期的ではないかと思っています。このときは、重鎮の方といいますか、年齢の高い方も来ていましたし、若い人も何人か来ていましたけれども、女性のワークショップと同様に、無くしたいこと、変わらずにあって欲しいこと、増やしたいことということを、自由に意見を出し合ったような形式です。それをまとめた資料が一つあります。全体として言えるのは、別にそういうことを求めた訳ではないですが、アイヌ民族が元々持っている価値観や世界観、精神というものはまさに持続可能な開発の精神に合致している、そしてそれをアイヌだけではなく、全ての人に広げていくというようなスタンスの意見がとても多く出されました。もちろん、自然との関わり方や今の環境汚染の問題といった意見もたくさん出されましたし、教育についても、所謂学校教育ということだけではなく、家庭内での文化の伝承や、子や孫に対してのコミュニケーションの重要性なども含めて、教育の課題ということも出ていたと思います。他にも、経済的なことで、貧困や差別の問題、経済的自立、そのための権利の回復ということも出ておりました。印象に残ったこととしては、初めは「なんだかよく分からない」と言われていましたが、最終的には、「こういう集まりは凄く重要だ」と、「もっと若い人達にも今度は参加してやってもらいたい」というような意見が、所謂フチと呼ばれるおばあさんの方から出ていました。そういう意味でも良かったと思っています。今回は札幌アイヌ協会なので札幌のメンバーだけですが、当然、本来は道内各地でこういうワークショップができたらいいなというふうに思っています。

次に、CSO ミーティングについてです。CSO という言葉は知らない人も多く、呼びかけ方としては失敗したな…と思っていますが、市民社会組織という打ち出しで 10 月６日にやりました。NGO・NPO というような呼びかけでもよかったのですが、意図としては、自分が NGO や NPO だと

思わずに市民活動をやっている人もいますので、そうした人にも参加して欲しかったということがあります。参加人数は十数人でしたが、人数よりも意見の方がたくさん出たという感じで、もの凄くたくさんの意見が出ました。このときは３時間と、割とゆったりとした時間の中で行ったので、共通の減らしたいこと、残したいこと、増やしたいこととということを初めにやった上で、「北海道のあるべき姿」（ビジョン）として、「○○な北海道」ということをたくさん出してもらいました。たくさんあり、ただ羅列すると分かりにくいので、後から私の方でなんとなく３つくらいに項目にまとめました。まず、「皆さんよく分かっているな」というのも変ですが、SDGs の「誰一人取り残さない」という前提を踏まえていると思いました。脆弱な人々のニーズを満たすとか、全ての人の人権を守るとか、子ども、障がい者、外国籍の人、アイヌの人達、そういった人達の権利を守っていくということ、女性に対しての話といった、所謂人権や包摂というテーマがたくさん出されました。また、自然環境との関わりということで、エネルギーの問題もたくさん出されていて、減らしたいことの中では、原発については５人くらいから出ていて、参加者の半分くらいの人が原発はいらないということを挙げていますし、原発だけではなく、再生可能エネルギーなら何でもいいというものではないということも言われてました。これは今､さっぽろ自由学校「遊」でもそのような講座をやっていますが、大型のメガソーラーや風車が乱立するような今の状況などは、地元の人達にとってかなり危機的な状況なわけです。ですので、その再生可能エネルギーにしても、何でもいいというものではないというような意見も多く出されていたと思います。それから、私がこの場で言っていることとも共通しますが、自治、参加といいますか、自分達で決めるといった広い意味での政治のあり方のようなことや教育のあり方ということも結構出ていたかと思います。以上です。次にユースお願いします。

大﨑　ユースとパブリックコメントのワークショップの二種類の開催報告を皆さんにお配りしています。ユースに関しては、札幌開催で 24 名の方が参加していましたが、旭川の学生さんとも繋がることができ、サテライトという形で旭川開催もできました。下は中学１年生から、上は 50 代くらいの方が混ざっていましたが、基本的には大学生の方が中心に来てくれていたと思います。色分けなどは全然できていないままなので、少し見づらいかもしれませんが、ユースの全体的に言えることとしては、自分の身近なことを多く書いていたということが一つ挙げられます。例えば、北海道のおいしい食べ物のことや雪のこと、北海道といえば農業や自然ということが多かったと思います。もうひとつユースの特徴として、交流の場が欲しいという意見が多く出ていました。同世代もそうですが、他世代の方と話す場が欲しいという意見も多かったことが、ユースの特徴ではないかと思います。その他にも、国際協力に興味があるので、そういった若者が増えて欲しい、一緒に活動できるような仲間が増えて欲しいという声も上がっていたなと思っています。どちらかというと、社会問題というよりは、自分と近いところでこういう北海道であって欲しいというような意見が多く、北海道が大好きということが伝わってきました。参加者の半分近くが道外出身者ということも関係あるかもしれないですが、北海道が好きで、自然や食といったものを残していきたい、増やしていきたいという声があったと思います。また、旭川開催はよかったと思っていて、３ページ目の下の表が旭川の意見です。「北海国」ということで、「独立をせよ」というような議論をしていたようです。札幌と意見が全然違っていて、後から旭川メンバーに札幌との意見の違いはなぜと話を聞いてみると、危機感が旭川にあるのかもしれないと旭川の学生が言っていました。やはり住んでいる地域によって考え方が違うということが見えたことがよかったと思っています。

　次に、パブリックコメントのワークショップについてです。これは、グループ別ミーティングとは別の趣旨で、EPO 北海道として主催しました。道庁さんの方でパブリックコメントを 10 月 10 日までやっていましたが、パブコメに意見を出すといっても一人でこの分厚い原案を読むのは苦しいので、興味を持っている方が集まり、原案を読み、意見交換を行うことで、原案について理解を深めていくという趣旨でした。良ければパブコメの方にも意見を提出してみてくださいというもので、これ自身がパブコメを提出したというものにはなっていません。資料を御覧いただくと、原案の概要を大きく張り出し、気になるところや質問事項などを自由に書いていくという形式でやらせていただきました。人によって見る視点は全然違い、色々な意見を書いていました。SDGs のアプローチとは一体何かといった細かい話から、道庁の計画自体が多すぎるのではないかといった意見がありました。人によってばらばらではありますが、こういった形式で一つ、ビジョンに対する意見やコメントという部分で行いましたので、今回は皆さんに参考までにお配りさせていただいております。これについては、他のパブコメに出す方の参考になればということで、EPO 北海道のホームページ等でも広く公開しているものになっています。以上です。

小泉　次に、経済のミーティングについて、清水さんお願いします。

清水　経済のミーティングを 10 月 11 日に行いまして、まず冒頭に、こちらの資料に「産学官協働アンケート」がありますが、北海道の中小企業に SDGs に関するアンケートの結果について山中教授より御報告いただきました。このアンケートについて簡単に説明してしますと、人権に対する意識が中小企業には薄いという結果が表れており、労働に対する慣行について、必要ではあるが取組が遅れているということ、取組がされていないというようなことが出てきていました。

　こういうような結果が表れてきた上で、グループ討論を４つのグループで行いました。４つのグループには、それぞれ自分達で課題を出してもらい、「飢餓をゼロに」（ゴール２）やワーク・ライフ・バランスに対する課題を議論したグループ、SDGs に企業が取り組むきっかけについて議論したグループ、ジェンダー平等の実現や「働きがいも経済成長も」（ゴール８）というテーマで議論したグループ、そして、SDGs の理想と現実のバランスをどのように取っていくのかということを議論したグループ、この４つのグループがありました。２時間という中でのワークショップで、中々、深掘りが進ませんでしたが、色々な話題が出ていました。飢餓の問題に関連してフードロスのことも問題であるということ、経済の持続と環境の保護は両立していかなければならないということ、時間外労働についての問題点、親の介護や病気があることを隠しがちになっている社会ではないかということ、「誰一人取り残さない」という理念を、「働きがいも経済成長も」という取組の中にどのように繋げていけばいいのかとクエスチョンになってしまい、そこからが中々進まない感じであるということ、そして、女性の管理職が少なく、単身赴任が多いということが、行政だけではく企業でも多く生まれていて、そういうことが色々なものを破壊していたり、我慢させていたりすることに繋がっているのではないかということなど、たくさんの話題が出ておりました。

　初めて会った方達なので、この１回だけでは出し切れていないと思います。また、多様な方達がいらっしゃいました。経営者の方もいれば、教諭の方、会社に務めている方もいらっしゃいましたので、１回で話を１つに落としていくことは難しいなと思いました。しかし、終わった後の懇親会や翌日にいただいたメールでは、非常に気づきがもらえたという意見がありました。自分では中々できないことでも、会社単位でできることが今回をきっかけとして見つかったという話しを伺いました。どんなことかというと、ペットボトルのリサイクルを自分の家だけで取り組んでもたかがしれているが、20 人、30 人いる自分の会社の皆で持ち寄って、会社単位で取り組めば上手く進むということに気づいたということでした。「このワークショップに出て気づきました。ありがとうございます。会社に提案したら会社も非常に喜んでくれて、従業員もすぐに喜んで、受け入れてくれました。」というような話を聞きました。このようなワークショップ、気づきが出来る場を継続して続けていくことが必要なことかと思いました。こういうワークショップを誰と出来るのか、誰と行うかということを考えながら、今回を期に継続できたらいいなと思っています。そして、原案に対する部分については、この６ページにわたって書いた物、原案と対比して書いていますので、後ほどのところで説明させてもらえればと思います。以上です。

小泉　ありがとうございます。最後に一言加えたいこととして、関心したといいますか、渡邉さんはおそらく全部のワークショップに参加されています。私も含めて、懇談会のメンバーで全て出た人はいないと思います。渡邉さんが一番全体像を把握しているのではないかと思いますので、そこで受け取ったことを是非反映させていただければと思います。以上です。

吉中　どうもありがとうございます。今、御紹介ありましたが、全て出られたということで、渡邉さんから補足したいことはありますか。大丈夫でしょうか。

渡邉（主幹）　皆さんが説明したことに大体入っていると思います。

ビジョン原案をめぐって―「１ ビジョンの基本的な考え方」

吉中　皆さんが仰っていたのは凄くいい会だったということと、１回では中々終わりきらないので、こういうプロセスを続けていくことが必要だということかと思います。そして、ワークショップでも具体的な様々な提言が出てきていると思いますので、さっそく原案に沿って皆さんの意見をお伺いしたいと思います。しかし、１行・１ページずつ、文言一つずつという訳にはいかないと思いますので、この目次で言いますと、大きく４つの章がありますので、大まかにそれに沿った形で、基本的な考え方の部分、現状の各部分、今後の方向性の各部分、そして、実際の推進のあり方の部分というような目次立てに沿って、今のミーティングからの御意見でも結構ですし、各委員からの御提言でも結構ですので、順不同でお伺いしていければと思います。ではまず､「１ ビジョンの基本的な考え方」というところで、原案では大分書き下していただいていますが、ここの部分で意見をいただければと思います。順不同で伺いたいと思いますが、まず、ミーティングの結果当たりから何か出てきた御意見はどうでしょうか。

小泉　結果といいますか、開催した痕跡を残したいということで、ワークショップの実施を踏まえた提案の一つとして、「基本的な考え方」の中に、グループ別ワークショッ

プを開催したということを、ビジョン策定までのプロセスとして書き込んでいただきたいと思います。繰り返しになりますが、ビジョンの中身も重要ですが、どのように策定したのかというプロセスが持続可能な開発の議論では中身と同じくらい重要だと思います。もちろん、この懇談会やパブリックコメント、色々な団体からの意見徴収ということもプロセスですけれども、懇談会の呼びかけで行ったグループ別のワークショップをプロセスの中に書き込んでいただきたいと思います。今回開催したのはグループとして４つ、テーマも入れて５つで、十分ではないと思っていて、あと半年あれば９つ全部できたとも思っていますが、少なくともそういう意見を取り入れるプロセスを行ったということを入れて欲しいと思います。

吉中　今日、共有いただいたレジュメがありますが、これそのものを付けるといったことまでは考えてはいないですか。

小泉　あまり全体で共有してはいないですが、付けられるのであれば、付けた方がいいのかもしれません。逆に言うと、しっかり反映されていれば、付けなくてもいいと思います。

吉中　策定のプロセスについて、しっかりと明記すべきという御提案です。他にありますか。

清水　６ページ目です。私の意見書の前半部分を一緒に見てください。６ページ目の３行目に「企業がSDGsへの取組をアピールすることで」という文章が書かれていますが、ここについて意見があります。持続可能な社会に向けたバランスの良い取組であるかどうか、現段階で審査する機能がありません。一部で取り組んでいることも、違うところでは持続に反しているということもあり得る話しです。SDGsのウォッシュの概念もあるので、このような現状においては、慎重な対応も求められると考えています。ですので、「企業がバランスのとれたSDGsの取組を続けることで、企業イメージの向上」と変えるべきだと考えました。アピールと書くのは、まだ非常に危険だと思います。また、その下の部分、７行目以降に「企業がSDGsに取り組むことで、フェアトレードを取り込んだ持続可能なサプライチェーンが創出され、ビジネスによって貧困や人権に課題を解決することが期待される」などの明記が必要だと思いました。ここの部分については、前の５ページにも「ビジネスチャンス」と書かれていますが、僕としては「チャンス」という言葉も変えて欲しいくらいです。チャンスと捉えるのか、いい言葉があまり浮かびませんが、ビジネスというものではないと思っています。やらなければならないものなのです。事業の中にどう取り入れていくか、事業価値の中にどう取り入れていくか考えていく必要があり、それをアピールする、チャンスにするということになると、厳選なSDGsの進み方ができている企業ということを誰が見るのかということになってくるかと思いました。以上です。

吉中　ありがとうございます。チャンスというよりむしろ責任という感じですね。その他、何かありますか。有坂さんからも資料をいただいていますが、ここのところではないでしょうか。

有坂　資料を見ていただきながら、意見を述べさせていただきたいと思います。私が作った提案書の２ページ目、目次についてです。もしかしたら次のテーマになるかもしれませんが、先に言わせていただきますと、「北海道を取り巻く状況」が「北海道の現状・課題」という部分と「世界に誇れる北海道の価値と強み」という部分の２つに大きく分かれています。価値と強みの部分は非常に具体的で分かりやすく書かれている一方で、現状・課題の部分はかなりシンプルに書かれています。中身を見ると、「健康・福祉」、「環境」、「安全・安心」と言った区分で書かれていますので、これをきちんと前に出すことで、「北海道の現状･課題」の部分が目次を見て分かりやすくなるかと思います。できれば、価値と強みのような説明文も入るような形で記載していただければいいかと思います。少しバランスが悪いような気がしました。それが一つ目の提案です。

二つ目、「ビジョンの基本的な考え方」について、もう少しSDGsの説明をきちんとしていただいた方がいいかと思います。作っていただいたものの中身を見ると、骨子に比べて非常に色々な要素を入れていただいているとは思っていますが、この基本的な考え方の中に何回もSDGsの要素や意義といったことが書かれています。それが一体何を示しているのかということを、もう少し丁寧に説明をいただく方が見る方も分かりやすいのではないかと思います。コラムのような形でもいいので、SDGsの意義の説明を入れていただくといいかと思います。これは私の抜き出したところなので、皆さんからも御意見があれば是非いただきたいと思います。SDGsが目指すものについては、アジェンダの中に書かれていることをそのまま掲載するのが一番妥当かなと思います。まず意義の説明という部分です。その後に、SDGsの要素の説明として、５つのＰが大切だということが言われていますが、ビジョンにはそこが入っていなかったと思うので、これもきちんと入れていただければと思います。なぜSDGsが必要なのか、なぜSDGsが出てきたのかという背景の、最も重要な部分になると思いますので、ここを是非入れていただきたいです。国連が作ったこの図は分かりやすいかと思います。文字だけではなく、こういった見た目で分かるものを入れていただくことで、キャッチーといいますか、目がいきやすくなるかと思います。もう一つは理念の部分です。「誰一人取り残さない」ということで、ビジョンの２ページにも書いてくださっていますが、少し埋もれてしまっている感じがします。理念が非常に重要だと、この懇談会の中でも何度か出てきていると思います。「誰一人取り残さない」ということがアジェンダの中でも非常に重要視されているということ、また、それが一体どういうことなのかということも入れていただけるといいかと思います。UNDPの資料から抜粋したものですが、これを付けていただくとより分かりやすくなるのではないかというふうに考えています。

吉中　目次のところの御意見を飛ばしてしまい申し訳ありませんでした。ありがとうございます。具体的で建設的な御意見をいただけているように思っています。他にどなたかいますか。資料を出していない方からも御意見いただければと思います。１番のSDGsの考え方のようなことが書いてあるところ、さらにこのビジョンの基本的な考え方が書いてあるところで何かご意見ありますか。いいでしょうか。４つの章を単純に割るとそれぞれ15分程の時間があり、まだ時間もありますが。とりあえずよろしいでしょうか。

今出てきた意見を私の方で簡単にまとめさせていただくと、策定のプロセスをしっかり明記すべきということで、その中には開催された５つのグループ別ワークショップを、この懇談会の開催と併せてどこかにしっかりと書くべきではないか。さらにワークショップからの提言を本文の中にしっかりと組み入れていただくか、あるいはそれが難しい場合は、何らかの形で資料として付けるというようなことも検討していただきたいということが一点。それから、ビジネスの「チャンス」というよりも「レスポンシビリティ（責任）」ではないかということ、グリーンウォッシュや生物多様性ウォッシュなどと色々なことがあり、「SDGsウォッシュ」のようなことも出てきてしまうと、諸手を挙げて、今、やっているSDGsの取組を全て推進していけばいいのか、そこには少し不安が残るのではないかというような御意見が一点。それから、SDGsそもそもの哲学といいますか、意義といいますか、国際的に合意された文言をそのまま本文に、あるいはコラムとしてでも、ビジョンに位置付けていただくのがいいのではないという御意見です。そして、目次のところでは、「（１）北海道の現状･課題」を「（２）世界に誇れる北海道の価値と強み」のような形で具体的にもう少し細かく展開していけば、見た目のバランスかもしれませんが、バランスが少し取れるように見えるのではないかというような御意見。他に何かありますか。

有坂　もう一ついいでしょうか。資料として提出していませんが、７ページ目の「経済・環境・社会を巡る広範な取組」の最後の文章に、「「どちらか」ではなく、「どちらも」を追求することが重要です。」と書かれている部分です。SDGsを進めるにあたって、ここに書いてあるように、相乗効果を生むものも、もちろんたくさんあるということは事実です。その他にも支え合っている、関係性のあるゴールやターゲットというものもある一方で、トレードオフという状況にあるものもあるということが言われています。トレードオフというのは、一方をたてると他方がたたないというようなバランスの悪い関係にあるということです。飢餓の対策のために、農作物をたくさん作ろうとすれば、水が必要になる。しかし、水のターゲットを考えると、水不足の問題があります。どちらか一方を進めてしまうことによって、一方のターゲットあるいは目標が達成できなくなるというような関係もあるので、どちらも追求することはもちろんそうなのかもしれませんが、複雑な関係性にもあるということを書き加えて置かなければいけないと思います。とにかく書いてあること、自分の出来る事をやってしまおうということになると、破綻してしまうターゲットやゴールもあるかと思いますので、そこを言い過ぎないように、少し注意的なことも盛り込んでいただけると、それによって、経済・社会・環境というものを同時解決していくということに繋がっていくかと思いますので、その当たり、少し説明を加えていただけるといいかなと思います。

ビジョン原案をめぐって―「２ 北海道を取り巻く状況」

吉中　ありがとうございます。重要なことだと思います。生物多様性と気候変動の世界でも同じようなことが言われていたり、オゾン層の話しが昔ありましたけれども、オゾン層のためにとった施策が実は温暖化を加速していたというような、色々なことがあったりします。少し関連したような話しかもしれません。ありがとうございます。他はどうでしょうか。よろしいでしょうか。それでは、またもし必要があれば戻るといたしまして、次は第２章に進みます「北海道を取り巻く状況」というところで、まず最初に現状・課題という章があり、次に世界に誇れる北海道の価値と強みというふうな分け方になっております。このところで、どの部分でも結構ですけれども、ご意見いただければと思いますが。

有坂　すいません。一つ戻ってもいいですか。言い忘れたことがあります。渡邉さんの説明で「（１）北海道の現状・課題」の３つの分類の仕方について、知らない人でも分かりやすいようにこのテーマを付けたという御説明がありました。非常に良く分かるのですが、３つに分けるのであれ

ば、「環境、社会、経済」になるのではないかと思いました。ここにも書いてありますが、SDGs の３つの要素に分けた方が、より SDGs 的なものになるかと思ったところです。そもそも、もう少し変えた方がいいかと言う意見もありますが。

吉中　それは「（１）北海道の現状・課題」の構成を少し SDGs の３つの要素に寄せた方がいいということですか。

有坂　そうです。そのように分けるのではあればということですが。

吉中　わかりました。「生活・安心」、「経済・産業」、「人・地域」の３つということですよね。

有坂　３つに分けるのであれば、「経済・社会・環境」かと思いました。

吉中　わかりました。ありがとうございます。その他、御意見いただければと思います。

清水　「（１）北海道の現状・課題」の部分ですか。

吉中　第２章の「北海道を取り巻く状況」のところであれば、どこからお話いただいても結構です。

清水　たくさんあります。９ページ目からの「北海道の現状・課題」の「健康・福祉」についてです。ゴール１について、働きづらい環境や立場に置かれている多様な方々の存在も明記して欲しいと思いました。病気や障がいを抱える人々や、LGBT、女性、ひとり親世帯などを明記してもらいたいなと思います。また、低所得者を減らすことも明記して欲しいと思いました。一般的には 300 万円以下が低所得者と言われていますが、北海道の市町村別の平均所得を見ると、179 市町村の内、130 市町村が 300 万円以下です。こういう現状がある上で、このことについて明記してもらいたいと思いました。ゴール３については、東京都の受動喫煙防止条例を見習って、全ての職場で実現させることが必要だと考えました。受動喫煙防止条例を北海道でも作るということを提案したいと思います。また、外国人労働者の健康と安全を日本人と同等にするべきということもゴール３の中に加えてもらいたいと思います。その他、ゴール８も加えてもらいたいと思いました。「健康を害する長時間労働をなくす」ということをその中で追加してもらいたいと思いました。

次に、13 ページの「環境」についてです。ゴール 11 の現状と課題について、課題として、放置された危険な住宅など建築物の処理課題があると思います。過疎化や高齢化が極度に進んだ市町村の持続の在り方を町の人々と考えて取り組むことが必要だということを盛り込む必要があるのではないかと思いました。ゴール 12 について、企業側は過剰包装を減らすこと、フードロスを減らすこと、容器など自然に戻せる素材などへの転換を目標とする必要があるということをゴール 12 に加えて欲しいです。ゴール４は記載されていませんので、加えて欲しいと思います。消費者はゴミが出やすい商品を選ばない、食料残渣が極力出ない食べ方、食料残渣が大量に出る食物を選ばないなど、消費者教育を推進する必要があると思います。そして、ゴール８も入れてもらいたいです。フードロス、製造品廃棄の裏側には、働きがいの搾取となり、労働生産性を下げる労働（原料の無駄遣い、廃棄物処理費用、価値に変わらない労働）などが隠されているため、フードロス、過剰生産、廃棄を減らすことが働きがい、賃金上昇につながると考えます。

次に、15 ページ目の「安全・安心」についてです。ゴール 10 に対して、外国人労働者、非正規雇用者、性別など、同一な仕事での不平等のない北海道にするということが明記されていて欲しいです。ゴール 16 に対しては、フェアトレードを実現したグローバルな社会が必要であるということを明記してもらいたいです。次に、18 ページの「農林水産業」です。ゴール３が盛り込んでありますが、労働者が高齢化している農林水産業では、北海道民の食を継続的に供給していただくために、特に働く人々全てが健康であることが大切であるということを盛り込んでいただきたいです。また、ゴール８も加えて欲しいです。農林水産業に従事している方たち全ての労働環境が一般労働者と同等になることを目指していただきたい。また、ゴール９も追加してもらいたい。上記のためにも技術革新や新たなインフラ（マイレージ）に力を入れる必要があると思いました。

次に、20 ページの「地域産業と研究開発」についてです。ゴール４を加えるべきだと思います。質の高い教育を受けられることによって、付加価値の高いモノづくり、サービスづくりが実現する基盤産業が必要だと思います。

次にいきます。21 ページの「中小・小規模企業」についてです。ビジョンにはゴール８しか記載されていませんが、ここの課題はたくさんあります。ゴール８の中だけでも４つあると思います。フェアな利益、フェアな賃金などの健全な経営により持続可能な経済循環に寄与している、または目指している中小・小規模事業者を評価することが重要である。企業数を減らす原因の一つが後継者不足であるが、企業価値を高め、後継者が出る取組が重要となっている。また、RCE 北海道道央圏協議会の協働プロジェクトとして、「北海道大学」と書かれているのは、先ほど少し説明したアンケートのことです。アンケートの結果によって、労働慣行に対する意識が低く、実施も進んでいないということが明らかになりました。意識改革、実施が必要とされるということを明記して欲しいです。そして、行政も企業も異動を当然とする習慣の労働環境があるが、単身赴任による二重生活が家庭崩壊を生むなどの課題や、離れた親の介護のための課題などがあり、働きがいを喪失、人材不足の原因になっており、柔軟な労働条件が求められているということも加えて欲しいです。また、ここには、ゴール４やゴール３など、ほとんど全てが加わると思いますが、それも全て話していきます。ゴール４について、小生の頃より、働くこと、多様な産業、事業の社会的価値や役割を学ぶ機会を授業の中に取り入れる「キャリア教育」の必要性が高まってきていると思います。仕事のイメージが無いままの就職での挫折というものが実際に生まれているということを、就労支援をされている支援センターからよく聞きます。また、キッザニアなどに人気があることも逆として考えられることだと思っています。ゴール３について、仕事に従事する人全ての健康を考えた企業の体制が必要であると思います。ゴール１について、働きづらい環境や立場に置かれている多様な方々やその家族が安心できる労働環境が望まれています。そして、低所得者を減らすということが、ゴール１として、「中小企業・小規模企業」の中に必要だと思います。ゴール５については、性別に分け隔てない、性別されない働く環境が必要であるということ、セクハラのない職場環境が必要であるということ、女性の管理者やリーダーが増える環境づくりのためのジェンダー平等教育が必要であるということを盛り込んでもらいたいです。ゴール９について、環境負荷が極力無い、技術革新を追求し続ける必要があると言うことです。ゴール 10 について、ビジネス対ビジネス、ビジネス対消費者の取引の中の不平等を無くす必要があります。また、労働者への人権意識が低いというアンケート結果を受け、人権意識の向上を図る必要があるということも盛り込んでもらいたいです。ゴール 11 について、中小・小規模事業者は、社会的責任において持続可能なまちづくりや地域社会に寄与することが必要です。ゴール 12 も重要だと思います。廃棄物の極力少ない製品づくり、梱包の在り方、残渣の削減、長く使える商品づくりなどの努力を行うことが必要だと書いてもらいたいです。ゴール 13 について、災害などによる影響を極力減らすため、また、事業の早期復旧のための措置（BCP 事業継続計画）を企業それぞれが取り組む必要があるということも明記して欲しいです。まだ、「中小・小規模企業」であります。ゴール 14 について、事業規模に拘わらず事業活動による廃水の成分確認と環境管理をする必要があると盛り込んでもらいたいです。ゴール 15 について、こちらも土壌汚染を意識して確認管理する必要があるということを盛り込んでもらいたいです。ゴール 16 について、パワハラや遣り甲斐の搾取などが無い職場環境が必要であるということです。ゴール 17 について、事業のサプライチェーンだけに留まらず、あらゆるステークホルダーと繋がり課題解決のために協力することが必要であるということを盛り込んでもらいたいと思いました。ここまでが「中小・小規模企業」についてです。

次に、22 ページの「エネルギー」についてです。大手電力会社に依存しない、小規模地域でのスマートグリッドの開発と促進が必要であるということを盛り込んでもらいたいです。

次に 23 ページの「観光」についてです。ゴール８について、観光客は増えているが、観光地域の平均所得は北海道の中でも平均以下がほとんどであります。地域の人々が潤う観光の在り方が必要であるということを盛り込んで欲しいです。数年間このデータを見ていますが、観光地と言われている登別市や小樽市などの観光都市と言われている市町村の平均所得は、半分以下のところにいるところがほとんどです。ということは観光によって潤ってはいないということです。そこの地域の人達は潤ってはいない現実をしっかり見るべきではないかと思っています。次に２４ページの「雇用」についです。ゴール８だけがありますが、この中に、北海道の労働時間は全国平均より長く、所得は平均以下であることは、働く地域としては魅力を感じてもらいづらい環境である。ＵターンやＩターンをしてくれる環境ではないと見られがちであるということです。時間当たりの付加価値の向上を図ることが必要であるということを明記してもらいたいと思います。また、ゴール５を追加してもらいたいです。ジェンダーによらない平等な就業環境整備が必要であるということを盛り込んでもらいたいです。ゴール 11 について、地域の多様な働き手を受け入れる環境を整え、雇用を図ることが持続可能なまちづくりに必要であるということが考え方として必要だと思います。

次に「人・地域」についてです。28 ページの「教育」です。ゴール４について、貧困家庭であっても教育を受けることが出来る社会づくりが必要であること、社会人になってからでもスキルを付けるための場や仕組みが必要であり、支援と理解が重要であるということ、この２つを盛り込んでいただきたいと思います。

次に 30 ページの「文化」についてです。ゴール４について、先住民族のことを全ての北海道民が認識する教育が必要であるということを付け加えてもらいたいです。30 ページの「インフラ」についてです。70 ページにも関連しますが、ゴール９について、北海道の広さ、広さに対する交通量、などを鑑み、交通規制は北海道独自の規制を考え、実施することで、お金を掛けずにインフラ整備の効果を生むことに繋げる（道東、道北地域の住宅や街以外の一般道の速度規制を 10 キロ上げるなど）。また、仕事におい

て重要度が高くなっているネット環境において、災害時にもダウンしな通信インフラが必要であるということを盛り込んでもらいたいと思いました。以上です。すいません、長くなりました。

吉中　網羅的に見ていただき、ありがとうございます。先ほど有坂さんからも言われていましたが、もしかしたら、全体の分類の仕方ということも少し考えなければまずいのかなと御提言を聞きながら考えておりました。さらに、SDGs の 17 のゴールごとの相乗関係の部分、あるいは少し気をつけないといけない部分など、色々なものがあると思いますが、北海道レベルに落とした時にもそういったゴール間の問題というのが出てくると思います。例えば、中小企業の部分で、「中小・小規模企業」が SDGs についての果たすべき役割は非常に大きなものがあるということは、今の御説明でも理解しましたが、そういうところも含め、どのように整理し直すかということは、少し工夫がいるのかもしれないと思いました。今すぐ結論が出る話ではないですが。他に何かありますか。

定森　９ページのゴール１の貧困のところです。パブリックコメントにも出ていましたが、生活保護世帯の数が出ていますが、数そのものがクローズアップされるのはどうかと思います。生活保護というのは、貧困をなくすための制度であって、それを減らすことは目的ではないと思います。むしろ、生活保護を受けられる状態なのに受けてない人の数が多いというのは北海道に限らず全国的にも問題になっていて、補足率と言われているものが大変少ないという問題があります。貧困をなくすという意味で言えば、むしろその補足率を上げるということも重要であって、生活保護の数が多いことはあまり問題ではないと思います。北海道で貧困が多いという、あくまで現象を表しているにすぎないと思います。少し誤解を生みかねないなと思いました。

　また、課題についてですが、「本道の現状・課題」に書いてあるところは、課題を書いているというより、こういう社会が必要だという目標を書いていて、課題の掘り下げには正直なっていないですよね。どうして生活保護が、北海道では他の全国と比べて高いのかということの説明をここに書くべきだと思います。同様にひとり親世帯数についても、多いから問題ということではなく、ひとり親世帯が貧困な状態に陥りがちだというとこが問題であり、どうしてそうなっているかというところの現状を書き、それに対してすべきことを、この後の目指すべきところに書くべきだと思います。ひとり親世帯や生活保護の数が多いということだけを上げるのは、少し違うのではないかと思います。なぜ、困窮になってしまっているのかという課題をしっかりと書くべきだと思いました。また、そもそも貧困というものが何か、北海道にとっての貧困とはどういう人達なのかということをしっかり定義しないといけないのではないかとも思います。清水さんの資料にも、300 万円以下の人が低所得者と書いていますが、例えば何かの金額などがあるかと思います。道としても貧困対策を何かとっているのであれば何かあると思いますので、そことしっかり整合性を取って明記した方がいいと思いました。以上です。

小泉　以前に言ったのと同じことですが、北海道の現状と課題について、北海道という地域の持続可能な開発を考えるには、歴史的な経緯をきちんと踏まえる必要があると思います。今、言われていたような、北海道で貧困率が多いのはなぜかということとも絡むと思いますが、北海道は、明治になって非常に短いスパンで外から人が入ってきた土地、「開発」が進められてきた土地であるということを踏まえないと、持続可能な開発というものがそもそもどういうものなのか、これまでの開発の在り方とどう違うのかということが説明できないと思います。これはステークホルダーの話とも絡みますが、「価値と強み」の箇所に独自の歴史・文化という形で、アイヌ文化や開拓の歴史について、若干触れられていますが、それが何を意味するのかということは書いていないと思います。価値や強みにも繋がることではありますが、私は基本的なスタンスとしては、この開拓・開発の歴史の中でアイヌの人たちに深刻な打撃を与えたということ、国の有識者懇談会の報告書の言い方を借りれば、「深刻な打撃を与えた」という歴史的な事実を踏まえて、その反省の元に未来に繋がる開発をしていくということが北海道の持続可能な開発のスタート地点だと思います。ですので、ただ単にアイヌ文化をＰＲするということではなく、そのことをきっちりと踏まえなければ駄目だと思います。

　また、価値と強みに、「豊富で多様なエネルギー資源」とありますが、先ほど有坂さんが言われたトレードオフの関係とも少し絡みますが、豊富で多様なエネルギー資源があり、メガソーラーやバイオマスエネルギーの施設の建設が相次いでいるということを単に肯定的に捉えるのは、問題があるかなと思っています。私も少し関わっていますが、現実に、大型のバイオマス発電は時代遅れだというのはかなり専門家の中でも共通認識だと思いますし、メガソーラーにしても風力発電にしても、地元の人たちにとっては、自然破壊の問題や健康被害の問題と絡み、非常に危惧しています。単なる強みや推進すべきことというだけの捉え方では、やはり問題があるように思います。もちろん大枠として、再生可能エネルギーを進めて行くということは必要なことだと思っていますが、その進め方にも少し注意した方がいいと思います。少なくとも SDGs、持続可能な開発に絡めて書く上では、そこを注意した方がいいのではないかと思います。

吉中　ありがとうございます。具体的には 39 ページあたりの話しですね。時間がなくなってきていますが、他に何かありますか。

有坂　何度かこの懇談会でも提案があったかと思いますが、17 の目標に沿って、現状と課題を書いたものを追加したらいいと思います。清水さんから膨大な提案がでていますが、他のゴールにも関わっている部分が非常に多いなと思っています。これはこれで表現の仕方としてはいいと思いますが、これともう一つ、17 のゴールに合わせて北海道にはどういう課題があるのかということがわかるように整理をしたものが付いているといいかと思います。取り急ぎ、今挙げられているものだけ載せて作ったものを提案資料に入れています。これは道庁が書いてくださった項目をただ単に並べただけです。「ゴール１については、こういう現状が北海道にはあり、こういう課題がある。」ということが分かる資料を付けられてはいかがかと思います。このようにすることで、世界のゴールに対して、北海道がどういう状況にあるのかということがよく分かると思いますし、後ほど提案させていただこうと思っていますが、何をしようとしているのかが、世界に対しても分かりやすくなるというふうに一つ思いました。

清水　私は有坂さんが言われることも十分かり、そのような配信というのも必要だと思いますが、今回、読み込む時にはこの道庁が作ったスタイルの方が読み込みやすかったというのはあります。ですので、こんなに書けたというのはあります。

有坂　両方あった方がいいと思います。おそらく他の人がこれを見たときに、17 のゴールではどうなっているのだろうかと思って見ると思います。17 のゴールに合わせて、北海道の課題や現状は何かと見たときに、行ったり来たりして見なければいけないのは結構大変かというふうに感じました。

野吾　見せ方としては、17 のゴールごとに分けると確かに見やすいという気はしました。ただ、この会議でも議論されている「ダイナミズム」といいますか、複合的に色々な問題が絡み合っているということが見えづらくなってしまうかもしれません。そこは決めの問題だと思います。

鈴木　私が組合員さんに SDGs の説明をするときには、有坂さんのようにゴール１、２、３と説明していきます。「世界の課題をこうですよ。日本の課題はこうですよ。北海道の課題はこうですよ。そしてコープさっぽろでしていることはこうですよ。」というふうに、17 のゴールを順にやると分かりやすいように感じています。ですので、ゴールごとの分け方というのは一つのやり方です。今回のこの章立てで、２章のところに基本データが入っていますが、清水さんから指摘していただいたように、ここが足りないのではないかというものは結構ありまして、しかし、それを全部入れると北海道白書のようなものが出来て、それはそれで見てみたいですが、何が重要かということが分からなくなると思います。道庁からビジョン原案をいただいた時に、そもそも国のものはどうなっているのかと思い、国のホームページを見ましたが、もっと大雑把でした。７つの重点課題が書いてあり、その下に単語だけが付いています。KPI も付いていないです。私も自分で書き直してやってみましたが、このビジョンは、国の７つの優先課題をくっつけられるところはくっつけて、５つにされていますよね。まだ進んでいませんが、３章の優先課題のところで、指標をアクションプラン形式で日本語にしていると思いますが、それなりに結構いいものだと個人的には思いました。私でしたら、最初に基本的な考え方をやった後、ゴールごとにするとボリューム感がありすぎるので、国と同じように優先課題を述べると思います。なぜこの優先課題を設定したのかという時に、ビジョンの２章で取り上げているような基本データを並べて、現状はこうだと示します。そこで触れきれなかったが、データが取れているものについては、インデックスでデータとして、まだ他にも残っている課題はこういうものがありますというふうに示すと、それを見た事業者であれば、我が社はこういうやり方ができるというふうに思えますし、道民の方であれば、北海道にはこういう問題があり、自分達には何が出来るのかということが分かりやすくなるのかと思います。ゴールごとの読み込み方は、SDGs がわからない時には大事ですが、実際に、何から着手したらいいかと考える時には、国も優先課題を最初に出しているように、優先課題をまず示すということが伝えやすいのかと思います。本当に課題自体はたくさんあるので、まずは何をするべきか、優先課題が５つあり、北海道ではこのように考えていて、基本的にはこういうデータがある、という見せ方が進め方としてはいいのかというふうに思いました。

ビジョン原案をめぐって―「3 北海道のめざす姿と優先課題」

吉中　ありがとうございます。既に３章の優先課題の方に入っております。時間も大分押していますので、どんどんいきたいと思います。今の、現状と課題について、皆さんからいただいたものを簡略にまとめると、課題の認識というのがまだまだ足りないのではないかということが割と共

通した御意見かと思います。「環境」や「安全・安心」、「中小企業」のところでも、たくさん意見を出していただきましたが、ここに書かれている以外の課題というものもしっかり書いておく必要があるのではないかということが一つありました。また、SDGsのゴールごと若しくはテーマごとに整理するのかというところで、両者それぞれいいところがあると思いますので、可能であれば、46ページに凄く簡略なゴールと優先課題とのマトリックスみたいなものがあり、本当はこんな単純なものではなく、かなり膨大な表になってしまうのが現実だと思いますが、こういう整理の仕方というのも考えていただければと思います。その時に、有坂さんからは、ゴールごとの整理をした方がいいのではということで、例としてゴール1からゴール3を試しに組み直してみたという御説明をいただきました。その次のページには、「SDGs指標と関連性を有すると思われる道の指標」ということで御提案をいただいていますが、これはまさに次の章の優先課題・対応方向の方に関連しているものだと思います。ここの構成としては、優先課題ごとに対応方向、「参考となる主な取組例」、「道の主な取組」、そして「指標」というような形で整理していただいています。指標の位置付けをどうするかという議論があると思いますが、それと少し関連した有坂さんの御提案かなと思います。もし良ければ、解説していただいてもいいですか。

有坂　鈴木さんがおっしゃったような提案にまさに近いと思います。コープさんの組合員さんに説明されるときに落としていくというようなところです。道庁から第1回目の懇談会で提出していただいた資料（資料3－2「SDGs指標と関連性を有すると思われる道の指標（2018年7月時点）」）は凄くいいものだと思っています。ただ、量が多いので、資料として出すと、見る人しか見ないかもしれませんが、非常によくまとまっている資料だと思いますので、是非これをビジョンに付けてもらえると、見たい人はちゃんと見るかなという気がしています。鈴木さんからもあったように、優先課題のどこにあたるのかというところに置き換えるのがいいのかと思います。前に出していただいた資料は、「自治体SDGs指標検討委員会」が提案した指標を表の中に入れていますが、ここに5つの優先課題というのを入れていただいて、それに対して関連性のある道の指標を書いていただけると、世界の目標、世界のスタンダードに対して、どのように道が取り組もうとしているのかが優先課題で分かって、それに対してこういう指標があるというのが分かるので、見やすくなるのではないかと思っています。ですので、是非付けてもらえるといいかというふうに思いました。

吉中　ありがとうございます。第1回目の懇談会の資料3－2の、非常に細かい字で書かれてある大きな表になりますが、一番左側にSDGsのゴールが並んでいて、横にSDGsのターゲット、さらにグローバル指標の欄があります。さらにその横に、「自治体SDGs指標検討委員会」が提案する指標が書かれていますが、それを無くして、代わりに北海道で検討されている5つの優先課題を入いれるのはいかがかということでした。さらに、一番右側には、「関連性を有すると思われる道が各種計画で設定する指標」を入れていただいています。その時には空欄となっているところがたくさんあり、さらに精査すると、空欄のところも埋まってくるのかどうか見えてくると思います。こういう趣旨だったかと思います。いいでしょうか。先ほどの鈴木さんからの御提案とも関連しているかと思い、この表の御説明をいただいたところです。3章の「北海道のめざす姿と優先課題・対応方向」のところでは、「めざす姿」、「優先課題」、そして「課題ごとの対応方向」という形になっています。ここでもまた御意見をいただければと思います。まず、1番の「めざす姿」のあたりで何かありますか。

小泉　繰り返しになりますが、先ほど紹介したグループ別の「2030年のほっかいどうを考える」ワークショップというのは、基本的にこの「めざす姿」を皆で考えようという趣旨のワークショップです。ですので、43ページにこのワークショップで出てきた提案・意見を反映させて欲しいです。前から「ビジョン」の捉え方が違うという話もありましたが、少なくともこの「めざす姿」というのは、2030年にどういう北海道であるべきかということを示すものであることに間違いないわけです。ビジョンである限りは、「めざす姿」がビジョンの骨格、中核なわけです。今回、グループ別ワークショップをやったことで、部分的にですが明らかになっているのは、多様な主体の立ち位置、主体によって描く未来の在り方というのは、共通点ももちろんありますが、やはり違うということです。その多様な主体で共有する指針にするためには、きちんと多様性を反映させた「めざす姿」にならなければならないと思います。どのように反映させるかというところは難しいところだと思いますが、基本的にはワークショップで出てきたような意見をできる限り反映させて欲しいと思います。もし形として難しければ、別途資料といった形で示すということもあり得るのかなとも思います。前から言っているように、今回のワークショップも部分的な訳ですから、多様な主体が、きちんと本当に共有するためには、この「ビジョン」の部分を考える取組を広げ、そして「ビジョン」を更新していくというプロセスがどうしても必要だと思います。

吉中　ありがとうございます。後半の部分は、次の推進の在り方というところに大きく関係してくるのかもしれません。ここで言われている「めざす姿」を道庁の方で「世界の中で輝きつづける北海道」と定めていただいていますが、ミーティングなどをやっていくと本当に多様な「めざす姿」というのが出てきているというのが実態だと思います。どうやって皆で2030年あるいはその先を目指してやっていくのかという、これからのプロセスの内容というところも、後ろの方になるのかもしれませんが、書いておく必要があるだろうというところと、今回のビジョンについても重要なエレメントの一つとして、色々な主体の方がワークショップを開いたわけですので、その成果をどこかにしっかりと入れていただけるといいのではないかと思いました。他に何か、「めざす姿」、優先課題と対応方向でありますか。

菅原　優先課題についてです。47ページが分かりやすいと思いますが、優先課題Ⅳの「未来を担う人づくり」の3番目に、「女性の活躍できる社会づくりの推進」とあるかと思います。ここに女性活躍だけではなく、男女平等参画若しくはジェンダー平等も入れた方がいいのではないかと思っています。というのは、28ページの現状と課題では、女性活躍の前に男女平等参画という言葉を入れていると思います。前回の懇談会の時に、私から「ガラスの天井」と「べたつく床」の両輪が必要だということを伝えさせていただきました。やはり女性の活躍推進も大事ですが、前提としてジェンダー平等というのがあります。ですので、ジェンダー平等もしくは男女平等参画があり、それから女性の活躍推進というようなタイトルにしていただく方がいいかと思いました。国の方でも「女性活躍加速のための重点方針」というものを毎年出していますが、2018年版では、女性活躍推進も引き続き行っていくが、女性活躍推進以前の課題もきちんと解決していくということが盛り込まれています。やはりジェンダー平等というところが2018年らしいかというふうには思っています。ちなみに国の方の「SDGsアクションプラン」の方では、女性活躍のことは「活躍系」の括りに入っていて、女性に対する暴力というのは「安全・安心」の括りに入っています。それも一つのやり方かと思いますが、ビジョンでは、女性活躍が全面に出ていて、少しおまけのようにDVやジェンダー平等、女性の人権の問題が後回しになっている感じがしますので、先にジェンダー平等をきちんと実現していくということ、それと同時に女性活躍を進めて行くということ、そういった見え方にしていただけるといいかと思いました。以上です。

吉中　ありがとうございます。他に何かありますか。

清水　まず、33ページの「魅力となる雪や寒さ」の「本道の価値と強み」というところで、観光業について書かれています。先ほど僕が話したことと重複しますが、観光業の付加価値額が変わるような施策をとっていかなければ、働いている人達の豊かさ、観光地の経済成長、観光地の投資も進まないのではないかと思いますので、この辺のことをもう一度考えていただけたらと思います。

次に50ページです。ここで思ったことですが、指標の中で犯罪者について書かれていますが、刑務所出所者の就職率や刑務所出所者の就労支援の確立の現状と目標が必要だと思いました。検挙率などというのは、「誰一人取り残さない」というところと少し趣旨が違うと思いますので、そういうことが見えるような指標を書いていただきたいと思いました。

次に51ページです。「参考となる主な取組例」の1番目の企業の部分ですが、先ほども言いましたように、人権意識が低いということがアンケートでも出ているので、何をもって出したのか分かりませんが、出来れば取り下げた方がよろしいかと思いました。また、指標の中には、色々な人権侵害の事件数のことが書かれていますが、労働局などへの相談内容や相談件数も指標に加えてはどうかと思いました。労働局にはそのような相談窓口がありますから、そういうところからも情報をいただきながら、相談というものが減るような社会を作っていくことが求めるものではないかと思います。

次に54ページです。ゴール4を追加して欲しいと思います。安心して働ける会社を選ぶ能力を身に付ける教育が必要と思います。道の主な取組の3つの括りの1つ目と3つ目に対して、どれだけの相談件数があって、相談内容はどのようなものなのか、成果はどれくらいあるのか、課題はあるのかなどを示していただきたい。知りたいと思いました。北海道の障がい者就労支援の窓口の企業の利用数や障がい者の利用数、相談内容、成果、課題が知りたいと思いました。こういうことを知っておくことで、企業側はどういう問題が起きているのかということを捉えて、障がい者雇用を捉えていくということにも繋がりますので、そういう見方が出来る情報を提示していただきたいと思いました。

次に優先課題Ⅱになりますが、56ページです。ゴール4を追加してもらいたいと思います。自然を保護する重要性を子どもから大人まで継続的に伝えることが重要であると思います。指標として、まだまだ不法投棄が北海道のあちこちで見られています。不法投棄されているゴミの現状と目標値を設定するべきではないかと強く感じるところです。

次に58ページです。「参考となる主な取組例」の企業の部分に、メガソーラーなどの大規模発電施設と書かれているところがありますが、これは是非とも取り下げていただきたいと思いました。先ほど小泉さんも言われてましたが、

メガソーラーなどの大規模発電をこれからも推進するのかというふうにとらわれがちです。大企業への依存や大規模開発からの脱却が望まれている社会となってきていますから、そういう目線で考えた場合に、この例は載せない方がいいのではないかと思いました。

次に 60 ページです。「参考となる主な取組例」に、NPO や市町村、教育機関、道民の取組として、「「エシカル消費」や「フェアトレード」などの持続可能な生産と消費に関する消費者教育を積極的に推進」ということも載せてもらいたいと思いました。また、指標としてなぜ出てこなかったのかと失礼にも思いましたが、食品ロスの現状と目標の設定が必要ではないかと思います。大事な課題だと思います。

次に 64 ページです。「地域産業の創造やイノベーションの創出」にゴール 4 を追加してもらいたいです。地域産業の創造やイノベーションを創出するためには、付加価値を創造する教育が必要であると思います。「参考となる主な取組例」としてあげてもらいたいと思うのが、BtoB、BtoC のどちらにおいても取引ルールを明確化し、互いに守ることによって、生産性の向上とか従業員のストレス減少、イノベーションの創出、所得の向上に繋がっているというような例がありますので、その取引ルールを全てお客様側の目線でなければ取引されないという社会、過剰なサービスでなければ売れないというような社会から脱却するということも重要だと思います。そうしなければ、働いている側にはストレスが続きますし、イノベーションは生まれませんし、所得は上がらないと思います。そういうような目線も必要なのではないかと思います。実際にそういう例もあります。指標としては、中小・小規模事業者の IT の利活用の現状と目標を数値化する、設定する必要があると思いました。

66 ページで最後ですが、ここにはゴール 3 、 4 、 5 を追加していただきたいと思います。指標が開業率だけになっていますが、開業だけが振興ではないと思います。企業の継続率の現状と目標を設定してはどうでしょうか。継続がどれだけされているのか、継承がされているのかということがまず一つです。もう一つは、継続年数です。 3 年以上継続している、 5 年以上継続しているということを分けて指標として見ていく。継続していなければ、新しいものが出来ても、何の意味もありません。その辺をしっかり見ていく、進めていくということを現してはどうかと思いました。以上です。

吉中　ありがとうございます。予定していた時間まで、後 7 分程ですが、もし良ければ 15 分程伸ばしたいと思います。どうしても 16 時に次の御予定があって帰られるという方はいらっしゃいますか。大丈夫でしょうか。15 分ではなくもう少しなら大丈夫という方がいらっしゃいましたら、順番を飛ばして後ろの方のパーツでも構いませんので、御意見をいただければと思います。いいでしょうか。では、戻ります。指標の話しも出てきておりましたけれども、その当たりも含めて、御意見があればお願いします。

小泉　今の清水さんとのお話とも絡みますが、パブリックコメントの意見を見てみると、結構いい意見があるなと思っていて、指標に関して、「指標の位置付けが不明です。達成しても優先課題の解決に繋がる指標になっていないと考えます。」というのがありました。何を指標とするのかというのは結構難しいと思います。本当にその指標が達成されれば、目標が達成されると言えるのかということ。どう考えても、ここに出ている指標だけでは何か計れるとも思えないですし、そもそもこの指標がその目標に繋がるのかというのは、見方によってはクエスチョンのものが結構あるように思います。また、パブリックコメントで書いてあったのが、目標が中途半端で、ゼロを目指すべきだといった意見や少し志が低いのではといった意見があったと思います。これは前々に有坂さんが言っていたと思いますが、指標をいま「ドン！」と打ち出すのは無理があるのではないかと思っていて、「参考となる指標」や「主な指標」のような、ごまかしではないですが、そうした方がいい気がします。やはり、指標を練るプロセスはこれから必要な気がします。「これが指標なのか」と疑問に思ってしまう指標は、先ほどの開業率の話のように、色々あると思います。これをそのまま指標として出すのはなんだか危険だと思います。

野吾　指標に関しては、JICA としても意見を出したところですが、例えば 77 ページで、JICA の事業に関連した国際協力の関連でいうと、ここに書かれている取組の例が、多文化共生メインで書かれています。道内でも多様な主体の方が国際協力・交流にも関わられているので、その事例も書いていただきたいということと、やはり、指標の「外国人居住者数が増える」ということがすなわち「国際協力や多文化共生の推進に寄与する」というロジックにはなっていないと思います。以前、指標の位置付けについて御説明いただきましたが、私はまだ少し納得できていないところもあります。せっかくなので、「この指標を達成したらここに貢献する」というのが分かりやすい、入手可能な指標を設定いただけたらいいのではないのかと思っています。

吉中　ありがとうございます。その他に何かありますか。

鈴木　今年度中に KPI を設定するのは無理だということは、皆さん共通した認識で、ただ何も数値がないというのも、ということで、今までに道の各部署が設定している数値目標を入れ込んでいるものですよね。ですので、道庁も該当するものがなくて、多分おわかりになっていると思いますが、少し無理矢理入れているところがあるのは、読んでいてすぐ分かります。ただ、現時点ではこれでいいと思います。ただ、SDGs の KPI なので、ゴールはやはり 2030 年に設定するのが筋です。2030 年までに何をするのかということを決めるのは、今年度は無理なので、いつまでに設定するということを示した方がいいと思います。まず優先課題ができて、それを各部署の方でしっかり課題として消化していただく、なにぶん予算も必要な案件なので、ただいきなり考えてと言っても、ネタが何もないと各部署も困ってしまいます。「現状、あなたたちの部署で出しているデータはこうですよ、これはあくまで参考数値です。」と示すといいと思います。これをそのまま KPI と言われると、おそらく詳しい人からはたたかれるとは思います。ですので、現時点ではあくまでも KPI を設定するにあたってということにして、誤解されないようにする必要があり、かつ、きちっとした KPI は、何年までに提示するというところを言ってあげると余計なバッシングはないのかと思いました。

吉中　ありがとうございます。今後のプロセスのところにも関連してきています。先ほど小泉さんの方からも御意見ありましたが、これから指標づくりというのをしっかりやっていかなければいけないのではないかということです。あるいは今回のプロセスがあまりに時間が足りなく、プロセスが不十分であったという認識であれば、これからの推進の時に、その認識をできるだけ踏まえていいプロセスにしていく、具体的には、指標づくりを広範な方の参画を得て行っていくプロセスがもしかしたら必要で、それに繋がってくるような御意見だったかというふうに私は理解させていただきました。更に指標そのものについて、野吾さんがおっしゃっていましたが、77 ページの国際協力の指標が外国人居住者数というのは、あまりにも合っていないという感じがしますので、指標の取り扱いを少し考えていただければいいのではないかと思いました。前回か前々回あたりの道庁からの御説明で、今ある指標でなければ載せられない、今目標値がはっきりしているものでなければ載せられないというお話がありました。そもそもそれがないということが SDGs、優先課題を達成するにあたっての一番の問題ではないかという認識を持っています。例えば、グローバルな指標というのが出ていますが、全てが北海道で対応するわけではないですし、また、それ以外の北海道ならではの指標というものを考えていかなければいけないと思います。出発点としてはグローバルな指標で、北海道でも当てはまる考え方かどうか、実際に指標になり得るものがあるのかどうか、そういうところの整理を少ししていただくとどうかと思っています。先ほど、有坂さんからも出ていた大きな表のところで、空欄となっている部分がありますが、空欄のままでいい部分もあると思います。北海道には関係ありませんというような。大部分は関係すると思いますが、北海道の特性を考えて、北海道ならではの指標をこれから作っていくというのが必要なのかと思いました。他に何かありますか。

有坂　同じことを提案書の中で書かせていただいています。「北海道のめざす姿と優先課題・対応方向」について、指標を外すか、若しくは「参考指標」や「主な指標」という標記に変えることが必要かと思います。鈴木さんがおっしゃっていたとおりだと思いますが、無理矢理載せているというところもあると思いますし、これだけではないということは道庁も御理解されている、分かった上で掲載されているとは思っています。これだけではないということをしっかりと明記しておくということが必要かと思います。この指標だけ達成すれば、この優先課題が解決するという誤解を招く恐れがあるので、誤解がないようにクリアにしておく記載が必要かと思います。指標として残さないとなんとなく違和感があるということであれば、グローバルインディケーターも一緒に記載して、関係する部分が分かるように載せることも必要かと思います。まさに鈴木さんがおっしゃっていた、目標年を 2030 年にするというところは、本当にそうだと思っていて、色々な御事情があって目標年がばらばらだということは理解しています。2030 年までになっていないものがほとんどだと思いますので、次の目標を立てるという機会には、少なくとも 2030 年に設定するということを図って統一するということをされてはいかがかと思います。皆さんがおっしゃっているように指標を作るということ、ないものに関しては今後作っていくということが必要かと思います。その際には多様な意見がちゃんと反映されるよう、専門家の方達と一緒に作っていただくことがよろしいのではないかと思います。

吉中　ありがとうございます。 4 章の方に入りかけておりますが、道庁の方で今ある指標、あるいは関係部局が策定されている関連しそうな指標で年度が違ってもの、そもそもサイクルが違うものなど、色々あるとは思います。そういうのについても、ビジョンを見てみると、82 ページの「道としての取組」の 2 つ目に、それを目指しているような書きぶりがありました。「各種計画等の策定や改定に当たり、ビジョンの内容や SDGs の要素の反映に努め、ビジョン推進の実行性を確保するとともに、道政における SDGs の主流化を図ります」と書いてあります。これが同じような方向を向いているかとも思いますが、既存の道主体で作られている計画や目標の改定に、是非、このビジョンの考え方

あるいはグローバルなSDGsそもそもの考え方をしっかりと入れていただいて、道庁全体の取組に繋がっていくといいなというのが一つです。また、今はないけども、やはり作らなければいけないというような計画や指標・目標というものも考えていかなければいけないという気がします。最後の方に入っていますが、３章、４章含めて、ビジョンの推進という当たりで皆さんから御意見いただければと思います。

ビジョン原案をめぐって―「4 ビジョンの推進」

大﨑　「4 ビジョンの推進」について、１枚の紙を出させていただきました。ビジョンに対する提案というものです。「（３）推進管理」について書いています。下の表には、文章をこのように変えてはどうかという御提案をしております。ここに書く背景にいたっては、ビジョンの原文の中に「必要に応じて指標とかビジョンを見直す」と書いていますが、必要に応じてではなく、具体的にどのように見直すのかということを書いて欲しいと思っています。今回、５回のワークショップを実施した中で、やはりグループごとで全く違う視点を持っているということが明らかになったと思っていますので、グループ別の意見交換の時期を年に１回は設けていただきたいと思っています。また、指標をなくそうという話しもありましたが、指標を残すのであれば、指標がどうなっているのかという報告とそれに合わせた意見交換会を年に１回はやっていただきたいです。その際には、国連が提唱する９つのメジャーグループと、その他利害関係者という３つのグループがありますが、道内各地に振興局がありますので、振興局ごとにやっていただきたいと思っています。それらの意見を踏まえて、例えば2021年、３年後に向けて、意見交換の場を重ねて素材を集めて、ビジョンの「めざす姿」や各種項目に合わせた指標の設定の見直しをするということを是非明記していただきたいと思います。

小泉　私も事前に出した資料の、ワークショップの趣旨と概要の後に、実施を踏まえた提案ということで、主にこのビジョンの推進のところについての意見を書いています。一つは、「（１）各主体の取組」について、前から何度も言っていますが、各主体の捉え方というところで、国連のメジャーグループなどを下敷きにした形にして欲しいと思います。道民というのはあってもいいと思いますが、具体的には、やはり、女性、アイヌ民族、ユース、CSOといった、今回ワークショップを行ったグループは、少なくとも各主体として位置付けて欲しいです。私はほぼ一つのことしか言っていませんが、各主体が参画するプロセスが重要だということと、ここにきちんと主体として位置付けるということは連動しているので、ワークショップの結果を反映させるということもそうですし、これからのプロセスに反映させる意味では、きちんと各主体の在り方として明記して欲しいということが一つです。

それから、「（２）推進手法」のところでも、多様な主体の連携・協働というのがありますが、むしろ「道としての取組」のところに、道がきちんと９つのメジャーグループやその他のステークホルダーのようなグループの参画や連携・協働をするということを明記して欲しいと思いました。

そして、次はほぼ大﨑さんが言った提案と同じです。今後のプロセス、モニタリング、フォローアップにおいて、多様なグループの意見を反映させるための場を作るということをやって欲しいと思います。配布している参考資料に、2030アジェンダから多様なステークホルダーの関与が書いてある部分を抜き出して書いてありますが、メジャーグループはちゃんと参加するということや、多様なステークホルダーについて、2030アジェンダの中でもきちんと書かれているわけです。ですので、レビューやフォローアップにちゃんと参加するということをきちんと書くと、「北海道、やるな」と思われると思います。

ついでなので、ビジョンの推進ではないですが、以前から道の人も、実際にSDGsのことがまだまだ知られていないので、PRしていくことが重要だと言っていたと思います。そのことは私もその通りだと思いますが、SDGsそのものを分かりやすく解説するものは既に結構出ていますので、各主体に沿った形で作るというのは一つ大きいことかと思っています。例えば、「SDGsとジェンダー」、「SDGsと子ども達」、「SDGsと外国籍住民」、「SDGsと障がい者」など、今回のグループ別ワークショップの結果でも分かると思いますが、それぞれの視点からSDGsの目標に関わる課題や目標というのは導き出せると思います。正直、このビジョンは誰が対象なのか、誰に読ませたいものなのかがあまり分からないところもあり、皆さんあまり読まないだろうと思うところが正直あります。これはこれで、ベースとして作っておくということはとても重要なことだと思いますが、SDGsを北海道の中で広めていく上で、それぞれの課題を知らせるということも含めて、もっと分かりやすいものを作ればいいかなと思っています。宣伝にもなりますが、さっぽろ自由学校「遊」で、先住民族の課題とSDGsを絡めたパンフレットを作成しましたし、また、ダリットという南アジアのアンタッチャブルと呼ばれる人達の課題をSDGsの５つくらいの課題と合わせて紹介した冊子もあります。こういうものがあると普及啓発の面ではいいのかなと思い、一つの提案です。

吉中　ありがとうございます。その他何かありますか。柏村さんありませんか。

柏村　全体的なところはあまりピンとこないので、農業で直結する部分でいうと、清水さんもおっしゃっていましたが、複合的に絡んでいる要素をどこまで入れるのかというところは難しいなと感じたのが一つです。また、少し戻ってしまいますが、優先課題の「北海道の価値を活かした持続可能な経済成長」のところで、農林水産業のことが出ています。ジェンダー、女性活躍のことをダイレクトに入れるのがいいのかどうかという議論はあるかもしれませんが、今、農業界において、付加価値を付けるというところで、販売などの生産以外のところでの女性の活躍が業界自体にも凄く影響を与えているなと僕自身が感じているので、ここにゴール５が入ってもいいのかなというふうに感じていました。また、「参考となる主な取組例」について、農業者は家族経営が多いので、書き方でしかないですが、団体や企業という書き方だと、少し自分事に落とし込みにくいかなと、表現方法のところで感じました。また、せっかく「道の取組例」でGAPについて触れられているので、初めのスマート農業などについて書かれているところでも、GAPについて触れてもいいのかなと思いました。労働安全、働く人にとっての規格というものがGAPでは取り組まれていて、業界にとってもいい印象なのかなと私自身は思っているので、入ってもいいのかなと思いました。以上です。

吉中　ありがとうございます。貴重なご意見だと思います。

野吾　ちなみに、先ほど有坂さんから提案されていたゴールごとに整理するという意見について、抜き出した表までは難しいかもしれませんが、出来ればゴールごとの索引みたいなものがあるとたどりやすくていいなと思いました。

鈴木　ゴールごとにまとめる時に、世界で起こっていること、日本で起こっていること、北海道で起こっていることというのを書いていただくと、ストーリーとして頭に入りやすいです。「飢餓がゼロに」とありますが、日本において飢餓で亡くなる方は、ゼロではないと思いますが、あまりいないと思います。ただ、「世界では何百万人という方が亡くなっていて、日本でこういう状況で、北海道ではこういう状況です。実際にはおそらく北海道において飢餓で亡くなっている人はいないと思いますが、相対的な貧困の問題があり、だから食品ロスを半分にする活動をしないといけないです。」というようなストーリー仕立てにした方がいいと思います。今回のビジョンでは、SDGsに関連したKPIを示すことができないので、優先課題を設定するにいたった仮定を丁寧に、世界、日本、北海道の比較で示すと、まずスタートラインにたったというところ、それだけでも凄いことだと思うので、これは是非やって欲しいです。ぱらぱらと見ていても、世界で何が起こっているかという問題は触れられていないところが多いと思いました。SDGs自体は国連で決めたものなので、世界の課題、日本の課題、北海道の課題、そして我々にできること、というような説明があると読んでいても分かりやすいと思いました。

吉中　ありがとうございます。先ほど私の方からも言いました、グローバルなインディケーターと北海道のインディケーターの比較、当てはめのようなことを検討される中で、今の意見も整理できるのかなという気がしています。例えば、貧困の部分ですと、「貧困をなくそう」というゴール、ターゲットがあり、その下にグローバルなインディケーター、例えば、各国の貧困ラインを下回って生活している人口の割合がありますが、このラインは北海道で決めればいいと思うんですよね。先ほど所得が300万以下が低所得者というような色々な御意見が出ていましたが、一体どのくらいのラインで北海道が目指していくのか、あるいは飢餓で亡くなっている方が北海道でどれくらいいるのか、また、「貧困をなくそう」ということでいうと、社会保障制度によって保護されている人口の割合10万人当たりの災害における死者数など、色々なものが出ていて、それの北海道版というものを、やはり何か考えていく必要があるのではないかという気がします。それをやっていく中で北海道と世界との繋がりというものがもう少し強く見えてくるのかなという気がしました。他に何かありますか。

清水　今日は６ページにもわたる意見書を書いてしまいました。自分も道庁と一緒の協働作業者の一人だと思っています。ですので、時間がない中ですが、ビジョンをしっかりと読み込みさせていただき、これだけの意見が自分の中から出てきました。別に考えて出てきたわけではなく、すんなりと出てきただけのことですので、まだまだ皆さんから色々なことが出てくるのは間違いないと思います。そういう自分達も他の人達も協働作業者として、読み込んだら意見が出てくるような仕組みづくり、また、その中で公表、公開していくということも重要なのかと思いました。私も一つの組織から出向で来ていますから、そういった責任というのもあり、これと向き合うというのが自分の課題でありましたので、貴重な機会にもさせていただきました。ありがとうございました。

吉中　ありがとうございました。すっかりまとめていただきました。皆さんから本当に貴重なご意見をたくさん賜りました。私も勉強させていただきました。この後のプロセス、最後に御説明いただくかと思いますが、是非、原案から最後の案に、これから御苦労されると思いますが、今日出てきた意見、紙で出された意見、そして、今までも、こ

ういう形でテキストが出てこなかったので具体的な意見として中々言えませんでしたが、凄く貴重な御意見を皆様からいただいていますので、最大限活用していただいて、いい最終案を作っていっていただければありがたいなと思います。どうしても不十分な部分が残るということであれば、次のプロセスに繋がるような仕組みを作っておく、次はもっと多様な方の参画を得て、もう少し時間を掛けてやるというように、次に繋げていただければありがたいと思います。他に何かいい足りない方はいますか。

有坂　皆さんがおっしゃったところは省きますが、道庁だからこそできることがたくさんあると思うので、そこについて、少しいいでしょうか。今後の話しになりますが、SDGs は非常に複雑ですので、道庁さんが主体となって勉強会をやっていただけるといいかと思います。そこに私たちも参加できるような形で、もちろん定期的に開催するということをしていただけるといいかと思います。また、小泉さんの方からもありましたパンフレットを作るということも、中身については、非常に皆さん言いたいことが色々あると思うので、作る時には是非、多様な意見を盛り込むような作成プロセスを踏んでいただきたいと思っています。また、自治体の支援についてですが、まさに道庁でしかできないことだと思います。北海道から各市町村へのサポートするような仕組みがあると思いますが、サポートする際に、SDGs の要素を入れ込むということをしていただけるといいかと思います。その他、年に 1 回、情報共有の場を作りたいというお話がありましたが、振興局ごとに多様な主体が参加して、北海道をどうしていくかということを意見交換できるような場を作っていただけるとありがたいなと思います。また、今回出させていただいたアンケート結果がありますが、そういったものはかなり専門的な部分になるかと思います。今回、道庁と札幌市、中小企業家同友会と色々な人に協力していただき、このアンケートを実施することが出来ています。こういったデータを収集するというのは、単体でやるのではなく、専門性を持つ多様な主体と一緒にやることが必要だと思いますが、それを自治体に対して、データの取り方などの支援をしていくようなことがあってもいいのかなと感じております。やはりデータがないと指標が作れないという話しが大分出てきたと思うので、その辺のサポートは道庁もなされたらいかがかと思います。専門家の人達もたくさんいて、いくらでも知識を提供してくださる方達だと思うので、一緒にサポートするような体制が作れるいいかなと思います。最後に、アジェンダの結語を記載してもらえたらいいなと思い、提案資料の最後に書きました。ビジョンの最後に SDGs をやるということが我々全てのためになるということが記載されていると、自分達のためになるということがメッセージとして伝わりやすいかなと思うので、こういったものをつけていただけるといいかなと思います。

吉中　皆さんいいでしょうか。貴重な時間ありがとうございました。皆さんに配られていると思いますが、北海道国際協力フェスタのチラシと SDGs アテンション、朝日新聞の冊子が配られています。すいません、御紹介する時間がなくて申し訳ありません。是非ご参加ください。では、今日の御意見、今までの御意見を是非参考にしていただいて、皆がいいなと思う最終案になることを期待して事務局にお返ししたいかと思います。ありがとうございました。

渡邉（主幹）　一点、その他ということで、今回残念ながら都合で来られなかった下川町の木原課長から意見をいただいており、道央圏以外の地域の声はどうなのかという意見もありましたので、我々の方で、道北、道東、道南の方を回って、企業や団体、または自治体の方と意見交換してこようと思っています。それらの意見も最終案に向けて、参考としていきたいと考えております。

吉中　すいません。その他がありました。他、その他の事でありませんか。

小泉　自由学校「遊」で、10 月 26 日から、「企業と人権 ― SDGs 時代のビジネスに求められるもの」というテーマで連続講座をやります。 1 月 25 日には清水さんに講師をお願いしていますが、今、CSR というところからもう少し進んで、企業に人権尊重ということがかなり大きく求められる時代になってきているということで、そのことを SDGs と若干絡めながらやりますので、学習会という話しもありましたが、是非、「遊」にも来てください。

吉中　ありがとうございます。他に何かありますか。せっかくなので国際フェスタについてどうですか。

有坂　RCE のメンバーでもありますが、北海道 NGO ネットワーク協議会が主催、JICA 北海道さんが共催のイベントが 12 月 15 日に開催されます。テーマが「私たちが SDGs です。」ということでやっていますので、是非参加いただければなと思います。

野吾　最後に告知だけ。11 月 10 日、11 日で「SDGs ×コミュニティアートキャラバン」が開催されます。主催は北海道 club、道庁も後援。11 日に JICA 北海道オリジナルの SDGs テーマソングを歌う予定です。以上です。

吉中　ありがとうございます。以上で議事の方は終わりということで、事務局にお返しします。

石川（課長）　本日も長時間にわたりましてありがとうございました。時間も経過していますので、簡単に申し上げますけれども、いただいた意見を踏まえまして、我々も最終案に向けて作業をすることになります。今日、この場でもお聞かせいただきましたけれども、また個別にも相談させていただく場面が出てこようかと思いますので、その節は是非よろしくお願いいたします。次回ですが、できれば 12 月くらいに開催したいなと思っています。また改めて御相談をさせていただきたいと思いますので、是非よろしくお願いいたします。本日はこれをもって閉会をさせていただきます。ありがとうございました。

■第４回北海道 SDGs 推進懇談会　道提出資料（一部のみ）

◇資料１　北海道 SDGs 推進ビジョン（案）　※省略、以下を参照

http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/sks/SDGs/hkdSDGskondankai4-1-1.pdf
http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/sks/SDGs/hkdSDGskondankai4-1-2.pdf
http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/sks/SDGs/hkdSDGskondankai4-1-3.pdf
http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/sks/SDGs/hkdSDGskondankai4-1-4.pdf

「北海道 SDGs 推進ビジョン」（完成版）表紙

エスディージーズ
北海道ＳＤＧｓ推進ビジョン

2018（平成30）年12月

北 海 道

◇資料２　北海道 SDGs 推進ビジョン（案）～原案からの主な変更事項

資料２

北海道ＳＤＧｓ推進ビジョン（案）
「原案」からの主な変更事項

【ビジョンに関する意見把握】

■ 北海道ＳＤＧｓ推進ビジョン（原案）（9 月 10 日　総合政策委員会報告）

■ 道民意見の反映
（１）第３回北海道ＳＤＧｓ推進懇談会（10 月 22 日開催）
・　懇談会メンバーによるワークショップ等（５会合）の開催結果の報告
・　ワークショップ等の開催結果を踏まえたビジョン（原案）についての意見交換
（２）北海道総合開発委員会（[委員会] 8 月 20 日開催　[計画部会] 10 月 29 日開催）
・　ＳＤＧｓを重点テーマとして議論
（３）道民意識調査　（８月実施）　７０８人回答
（４）パブリックコメント（９月～１０月実施）　４７件
（５）市町村意見照会　（９月実施）　２２件（１１市町村）
（６）地域の実践者との意見交換（１０月実施）
・　２企業（渡島・釧路）、２団体（上川・根室）、２市町村（渡島・釧路）

【意見を踏まえた主な変更事項】

１　ビジョンの基本的な考え方

項　目	変更内容
（１）策定の趣旨	・　ＳＤＧｓに関する「道民意識調査」の結果を追加【P2】
（４）ＳＤＧｓの概要等 ①ＳＤＧｓの概要及び動向	・　ＳＤＧｓを掲載する国連の 2030 アジェンダの理念等を紹介するコラムを追加【P4～5】
②ＳＤＧｓの推進に期待される効果 ○国内外の多様な主体との連携やパートナーシップの推進	・　ＳＤＧｓを通じて、海外と相互に学び合える旨の記載を追加【P7】
③ＳＤＧｓへのアプローチ手法 ○経済、社会、環境をめぐる広範な取組	・　ＳＤＧｓに取り組む際には、項目間のトレードオフが生ずる場合があることを紹介するコラムを追加【P8】

２　北海道を取り巻く状況

項　目	変更内容
（１）北海道の現状・課題 ①生活・安心 ○環境	・　生態系の保全に関するデータとして、「タンチョウ越冬分布調査による観察数」（国内希少野生動植物種）、「アライグマ生息・目撃情報の推移」（特定外来生物）を追加【P17】
①生活・安心 ○防災	・　大型台風や北海道胆振東部地震の発生など直近の状況を踏まえ記載を追加【P19】
③人・地域 ○教育	・　いじめ・不登校の未然防止等に関連するゴールや「本道の現状・課題」についての記載、データを追加【P31～32】
③人・地域 ○インフラ	・　交通ネットワークに関するデータとして、「鉄道輸送人員の推移」を追加【P35】
（２）世界に誇れる北海道の価値と強み ⑧独自の歴史・文化	・「本道の価値と強み」に本道東部の「大規模竪穴住居跡群」に関する記載を追加【P45】

3　北海道のめざす姿と優先課題・対応方向

項　目	変更内容
（2）優先課題と対応方向 ①優先課題 Ⅲ　北海道の価値を活かした持続可能な経済成長	・　優先課題を以下のとおり修正【P48、49、51、67】 Ⅲ　北海道の価値と強みを活かした持続可能な経済成長
②優先課題ごとの対応方向	・　ビジョンに掲載する指標の選定や、目標値の設定・見直しの考え方に関する記載を追加【P51】
対応方向 Ⅳ－ⅲ　女性が活躍できる社会づくりの推進	・　対応方向を以下のとおり修正【P51、P80】 Ⅳ－ⅲ　男女平等参画・女性が活躍できる社会づくりの推進
対応方向 Ⅱ－ⅰ　豊かな自然と生物多様性の保全の推進	・　「道の主な取組」に、海辺環境の保全に関連する取組を追加【P63】
対応方向 Ⅱ－ⅲ　持続可能な生産と消費の推進	・　対応方向の内容に、「消費者の自主的かつ合理的な行動の促進に向けた取組」を追加【P66】
対応方向 Ⅳ－ⅰ　子ども・青少年の確かな成長を支える環境づくりの推進	・　「道の主な取組」に、いじめの未然防止等に関連する取組を追加【P76】 ・　「参考となる指標」に「いじめに対する意識」を追加【P77】
対応方向 Ⅴ－ⅲ　国際協力や多文化共生の推進	・　関連するゴールに５（ジェンダー）、８（経済成長と雇用）、１５（陸上資源）を追加【P85】 ・　「参考となる主な取組例」に国際協力に関する団体の取組を追加【P85】

4　ビジョンの推進

項　目	変更内容
（1）各主体の取組 ○企業（個人事業者も含む）	・　企業活動における人権の尊重や、消費者・顧客との信頼関係の構築、事業活動を展開する国・地域への貢献に関する取組について記載を追加【P88～89】
（3）推進管理	・　ビジョンの推進管理の方法や見直しの考え方について内容を追加【P90～91】

5　その他

- 附属資料として、「策定経過」、「【参考】「２　北海道を取り巻く状況」ゴール別索引」、「用語解説」を追加【P92～101】
- 最終ページに2030アジェンダの「結語」を追加
- 上記のほか、文言整理、図表の修正、画像の追加などを行った

資料３

第３回北海道ＳＤＧｓ推進懇談会における主な意見について

■「目次」について

No.	意見の概要	意見に対する道の考え方	関連するビジョン(案)のページ
1	「２　北海道を取り巻く状況」の「（１）北海道の現状・課題」の「①生活・安心」、「②経済・産業」、「③人・地域」の各項目については、「健康・福祉」など、それぞれの項目を構成するカテゴリーまで記載した方がよい。	御意見の趣旨を踏まえ、目次の「２ 北海道を取り巻く状況」及び「３ 北海道のめざす姿と優先課題」に項目を追加しました。	－

■「１　ビジョンの基本的な考え方」について

No.	意見の概要	意見に対する道の考え方	関連するビジョン(案)のページ
2	懇談会構成員の呼びかけで行ったグループ別ワークショップ（女性、アイヌ民族、ＣＳＯ、ユース、経済）の実施についても、策定までのプロセスのひとつとしてビジョンに明記して欲しい。	御意見の趣旨を踏まえ、「附属資料」の「策定経過」にワークショップの開催状況について記載しました。	93
3	ＳＤＧｓの要素や意義がより理解されるよう、「ＳＤＧｓが目指すもの」や「５つのＰ（People、Planet、Prosperity、Peace、Partnership）」などについても、コラムのような形式でもいいので記載した方がよい。また、「誰一人取り残さない」というＳＤＧｓの趣旨についても記載した方がよい。	御意見の趣旨を踏まえ、１の（４）の「①ＳＤＧｓの概要及び動向」にコラムとして、「■2030アジェンダの理念について」、「■「５つのＰ」について」、「■「誰一人取り残さない」について」を追加しました。	4～5
4	ＳＤＧｓに期待される効果に関して、ビジョン原案の６ページ目「ビジネスチャンスの拡大や企業の持続可能性の向上」において、「企業がＳＤＧｓへの取組をアピールすることで、企業イメージの向上」と記載されているが、現段階で持続可能な社会に向けたバランスの良い取組かどうか審査する機能はなく、「ＳＤＧｓウォッシュ」の懸念もあるので、単に取組をアピールすることを記載するのではなく、「企業がバランスのとれたＳＤＧｓの取組を続けることで、企業イメージの向上」といった記載に変えるべき。また、「企業がＳＤＧｓに取り組むことで、フェアトレードを取り込んだ持続可能なサプライチェーンが創出され、ビジネスによって貧困や人権の課題を解決することが期待される」などの明記が必要だと思う。また、「ビジネスチャンスの拡大」という表現については、ＳＤＧｓは既に「ビジネスチャンス」というよりも「企業の責任」だと考える。	御意見の趣旨を踏まえ、１の（４）の②の「ビジネスチャンスの拡大や企業の持続可能性の向上」に、「企業がバランスの取れたＳＤＧｓへの取組を継続し、」という記載を追加しました。また、４の（１）の「企業（個人事業者も含む）」に、企業活動における人権尊重に関する記載を追加しました。なお、「ビジネスチャンス」という記載は、国が作成した「すべての企業が持続的に発展するために－持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）活用ガイドー」（環境省、平成30年６月）の内容を参考として記載しています。	7 88～89
5	ビジョン原案の７ページ目「経済、社会、環境を巡る広範な取組」において、ＳＤＧｓに取り組むに当たっては、取り組もうとするゴールとそれ以外のゴールとの関連について、「「どちらか」ではなく「どちらも」追求することが重要」と記載されている。相乗効果を生むものもあるのは事実だが、トレードオフの関係にあるものもあるので、複雑な関係性にあるということを追記した方がよい。	御意見の趣旨を踏まえ、１の（４）の③の「経済、社会、環境をめぐる広範な取組」に、コラム「■ＳＤＧｓの項目間のトレードオフについて」を追加しました。	8

■「２　北海道を取り巻く状況」について

No.	意見の概要	意見に対する道の考え方	関連するビジョン(案)のページ
6	「北海道の現状・課題」については、１７のゴールごとに現状・課題を整理したものを追加することで、世界の目標に対して、北海道がどのような状況にあるのかが分かりやすくなる。	御意見の趣旨を踏まえ、「附属資料」に「【参考】「２　北海道を取り巻く状況」ゴール別索引」を追加しました。	95
7	「北海道の現状・課題」の記載方法としては、１７のゴールごとに整理すると、ＳＤＧｓの入口としてはわかりやすい面もあるが、実際に何かに着手していく場合は、ビジョン原案のように優先課題を示して、その優先課題を導くデータを示した方が分かりやすいと思う。		
8	現状や課題については、世界・日本の状況と北海道の状況とを比較して記載すると、優先課題を設定するに至った経緯を丁寧に説明できる。		
9	「北海道の現状・課題」については、ゴールごとに索引が出来るものがあればよい。		

第３回北海道ＳＤＧｓ推進懇談会における主な意見について

■「２　北海道を取り巻く状況」について

No.	意見の概要	意見に対する道の考え方	関連するビジョン(案)のページ
10	「健康・福祉」といったカテゴリーごとにそれぞれ追加して欲しいゴールや記載内容、削除して欲しい内容等があり、別紙としてまとめたので、今後のビジョンの策定作業にあたり修正して欲しい。	・２の「（１）北海道の現状・課題」は、ＳＤＧｓのゴール等に照らしながら、本道の現状・課題を明らかにするため、ＳＤＧｓのゴール、ターゲットや指標と関連性の高い各種データを用いて示すこととしています。また、データは、原則、都道府県順位の把握や全国平均値との比較ができ、毎年または隔年で公表されるデータを用いています。御意見については、それぞれ、関連する「対応方向」に沿って、各主体が取り組んでいくこととしています。 ・御意見の趣旨を踏まえ、４の（１）の「企業（個人事業者も含む）」に記載を追加しました。	51 88～89
11	健康・福祉の現状・課題を表す指標に関し、「生活保護世帯数」については、「世帯数」そのものよりも、なぜ北海道が全国と比べて高いのかを書くべき。「ひとり親の世帯」についても、数が多いことが問題ではなく、貧困な状態に陥りがちだということが問題であり、その原因を現状・課題として記載すべき。また、課題を記載するにあたり、北海道にとっての「貧困」とはどういう人たちのことなのかということをしっかりと定義した方がよい。	御意見の趣旨を踏まえ、「ひとり親世帯の状況」に、母子世帯の総所得が、全世帯（及び児童のいる世帯）よりも低くなっている現状を示す国の調査結果を表として追加しました。	12
12	再生可能エネルギーを進めて行くことは重要ではあるが、メガソーラーやバイオマスエネルギーの発電施設の建設が相次いでいることを単に肯定的に捉えるのではなく、自然破壊や健康被害の問題とも絡むため、その進め方にも注意が必要。	１の（４）の③の「経済、社会、環境をめぐる広範な取組」において、ＳＤＧｓは経済・社会・環境の三側面において、バランスがとれ統合された形で達成するという基本的な考え方やその重要性について紹介することを通し、多様な主体による三側面に配慮した取組を促すこととしています。	8
13	アイヌ文化を価値や強みとしても捉えることができるが、北海道の開発の歴史的な経緯も踏まえ、アイヌの人達に深刻な打撃を与えたということをしっかりと踏まえるべき。	御意見の趣旨については、今後の取組を進める上での参考とさせていただきます。	－

■「３　北海道のめざす姿と優先課題・対応方向」について

No.	意見の概要	意見に対する道の考え方	関連するビジョン(案)のページ
14	グループ別ワークショップでの提案や意見をできる限り「めざす姿」の関連する部分に反映するか、別途資料として添付するなどしてビジョンに加えて欲しい。	御意見の趣旨を踏まえ、「附属資料」の「策定経過」にワークショップの開催状況について記載したほか、ワークショップでの提案や意見に関する資料を道ホームページに掲載しました。	93
15	ビジョンに掲げている指標だけでは優先課題の解決につながるものとはなっていない。「参考となる指標」や「主な指標」といった位置付けとし、今後、指標を練るプロセスは必要だと思う。	御意見の趣旨を踏まえ、「指標」を「参考となる指標」に修正しました。	51～
16	指標の目標年度は２０３０年に設定していくべき。今年度中は難しいと思うが、道としていつまでに提示するか示した方がよい。	御意見の趣旨を踏まえ、３の（２）の「②優先課題ごとの対応方向」に、指標の選定や、目標値の設定・見直しの考え方に関する記載を追加しました。	51
17	第１回目の懇談会資料に「ＳＤＧｓ指標と関連性を有すると思われる道の指標」（資料３－２）が提出されているが、世界の目標と道の指標との関連がよくまとまっているので、対応する優先課題の追加など適宜修正した上でビジョンに付けてもらえるとよい。	御意見の趣旨を踏まえ、「附属資料」に「【参考】「２　北海道を取り巻く状況」ゴール別索引」を追加しました。	95

第３回北海道ＳＤＧｓ推進懇談会における主な意見について

■「３　北海道のめざす姿と優先課題・対応方向」について

No.	意見の概要	意見に対する道の考え方	関連するビジョン(案)のページ
18	優先課題・対応方向ごとにそれぞれ追加して欲しいゴールや記載内容、削除して欲しい内容等があり、別紙としてまとめたので、今後のビジョンの策定作業にあたり修正して欲しい。	・御意見については、それぞれ、関連する「対応方向」に沿って、各主体が取り組んでいくこととしています。なお、御意見の趣旨を踏まえ、３の（２）の「② 優先課題ごとの対応方向」に、指標の選定や、目標値の設定・見直しの考え方に関する記載を追加したほか、４の（１）の「企業（個人事業者も含む）」に記載を追加しました。 ・「対応方向」に掲載しているゴールについては、特に関連が深いもの及び関連する主なものを掲載することとしています。	－
19	農業においては、生産以外のところで女性の活躍が業界全体にいい影響を与えていると感じているので、優先課題Ⅲの「ⅰ　持続可能な農林水産業の推進」に関連するＳＤＧｓのゴールとして、「ゴール５（ジェンダー）」が入ってもよい。	女性の活躍は様々な分野に関連する内容であり、各分野において各主体が取組を進めていく上での「対応方向」を分かりやすく示すために、優先課題Ⅳの対応方向「ⅲ 男女平等参画・女性が活躍できる社会づくりの推進」を設定しています。	80
20	労働安全などの働く人にとっての規格もＧＡＰには含まれており、農業の業界でもいい印象があるように感じているので、優先課題Ⅲの「ⅰ　持続可能な農林水産業の推進」の始めの部分にＧＡＰについて記載があってもよい。	御意見の趣旨については、優先課題Ⅲの対応方向「ⅰ 持続可能な農林水産業の推進」の内容（付加価値の高い農業の推進）に含まれています。	67
21	優先課題Ⅳに「ⅲ　女性が活躍できる社会づくりの推進」とあるが、女性活躍の前提にジェンダー平等があり、また、政府で毎年出している「女性活躍の重点方針」の２０１８年版で女性活躍推進以前の課題も解決していく旨触れられているので、女性の活躍のみではなく、男女平等参画若しくはジェンダー平等の視点も入れた方がよい。	御意見の趣旨を踏まえ、優先課題Ⅳの対応方向ⅲに記載を追加しました。	51 80
22	優先課題Ⅴに「ⅲ　国際交流や多文化共生の推進」とあるが、記載されている取組例が多文化共生に偏っているので、国際協力・交流の事例を追加して欲しい。	御意見の趣旨を踏まえ、「参考となる主な取組例」に国際協力に取り組む団体の取組例を追加しました。	85

■「４　ビジョンの推進」について

No.	意見の概要	意見に対する道の考え方	関連するビジョン(案)のページ
23	ビジョン策定後に、今後、具体的にどのようにビジョンを見直していくか明記して欲しい。様々な主体別の意見交換会や指標の進捗状況の確認のための意見交換会を年に１回は振興局ごとに開催して欲しい。また、３年後を目処とした「めざす姿」や指標の見直しを行うことを明記して欲しい。	御意見の趣旨を踏まえ、４の「（３）推進管理」に、ビジョンの推進管理の方法や見直しの考え方に関する記載を追加しました。また、３の（２）の「② 優先課題ごとの対応方向」に、指標の選定や、目標値の設定・見直しの考え方に関する記載を追加しました。	51 90～91
24	今回、グループ別ワークショップを行った、「女性」、「アイヌ民族」、「ユース」、「ＣＳＯ」はＳＤＧｓの各主体に位置付けて欲しい。	御意見の趣旨については、４の「（１）各主体の取組」の記載内容に含まれています。	90～91
25	道主体で作られている既存の各種計画・目標の改定にビジョンやＳＤＧｓの考え方をしっかり盛り込み、道庁全体の取組に繋がっていくのがいい。	御意見の趣旨については、４の（２）の「道としての取組」に記載しています。	90
26	道の取組として、国連のメジャーグループなどのグループとの連携・協働を明記して欲しい。	御意見の趣旨については、４の（２）の「多様な主体の連携・協働」の記載内容に含まれています。	89
27	ビジョンの推進に当たっては、今回、ワークショップを行ったように、女性も男性も一人一人がこのビジョンを自分の事と考えられるような進め方をして欲しい。	御意見の趣旨については、今後の取組を進める上での参考とさせていただきます。	－
28	ＳＤＧｓそのものの啓発資材は結構出回っているので、ＳＤＧｓと「ジェンダー」など、テーマごとに焦点を当てた啓発資材が作成できるといい。		
29	普及啓発として、行政向けの勉強会の開催や、自治体を支援するための既存の各種補助事業等へのＳＤＧｓの要素の反映などを道庁に行って欲しい。		
30	データがないと指標は作れないので、データの取り方の支援を自治体に行っていって欲しい。		

◇資料４～７　※省略

◇資料８　「北海道 SDGs 推進ビジョン」の推進管理について

資料８

※ビジョンは、経済社会情勢の変化、SDGsに関する道内外の動向などを踏まえ、必要に応じ見直し

◇資料９　SDGs の推進に関する今後の道の取組について（案）

資料９

ＳＤＧｓの推進に関する今後の道の取組について（案）

１　ＳＤＧｓの推進に向けた道の取組

（１）全庁横断的な組織である「北海道ＳＤＧｓ推進本部」の下、「北海道ＳＤＧｓ推進ビジョン」に沿って、多様な主体と連携を図りながら、幅広い分野や地域でＳＤＧｓを推進。

（２）各種計画等の策定や改訂に当たり、ビジョンの内容やＳＤＧｓの要素の反映に努め、道政におけるＳＤＧｓの主流化を図るとともに、ＳＤＧｓ関連施策を実施し、ビジョン推進の実効性を確保。

２　ＳＤＧｓの普及に関する当面の取組予定

（１）「ＳＤＧｓ×北海道 交流セミナー」の開催

・　本道におけるＳＤＧｓの推進に向け、多様な主体の連携の促進・強化を図るため、「北海道ＳＤＧｓ推進ネットワーク」会員を対象に、外部有識者による講演や「北海道ＳＤＧｓ推進ビジョン」の紹介、ネットワーク会員による取組のポスター発表を内容としたセミナーを開催。

※2019 年２月３日開催予定（札幌市内）

※参加対象はセミナー開催日までにネットワークに加入した方を含む

（２）地域説明会の実施

・　道内各地域において、道民の皆様や市町村を対象に、ＳＤＧｓ及び「北海道ＳＤＧｓ推進ビジョン」に関する内容の説明や意見交換を行う地域説明会を開催。

（３）「ＳＤＧｓ出前講座」の実施

・　道教育委員会や教育機関、各種団体等と連携し、学校や企業、団体等からの要望に応じて、職員が出向き、ＳＤＧｓ及び「北海道ＳＤＧｓ推進ビジョン」に関する内容の説明や意見交換を行う出前講座を実施。

（４）多様な主体と連携した情報発信・普及啓発

・　「北海道ＳＤＧｓ推進ビジョン」のリーフレット（概要版）の作成及び配布。

・　北海道ＳＤＧｓ推進ネットワークの加入促進及びネットワークを活用した道内におけるＳＤＧｓの取組事例等に関する情報発信を実施。

・　国（内閣府）が設置する「地方創生ＳＤＧｓ官民連携プラットフォーム」等に参画し、道内におけるＳＤＧｓの取組等について全国に情報発信。

・　ＳＤＧｓ未来都市をはじめとする道内の市町村や、道と包括連携協定を締結する企業・団体等と連携し、ＳＤＧｓの普及に資する各種取組（イベント開催等）を実施。

（５）道の各種事業における情報発信・普及啓発

・　ＳＤＧｓ及びＳＤＧｓと道の施策・事業との関連などについて、道の各種事業（イベント・研修会等）においてＰＲを実施。

（６）道の広報ツールを活用した情報発信

・　ＳＤＧｓに関する道及び道内の多様な主体の取組について、ホームページやＳＮＳなど道が有する広報ツールを活用し、道内外に広く情報発信を実施。

（７）市町村や民間団体等への支援

・　道内の市町村や民間団体等による「北海道ＳＤＧｓ推進ビジョン」に掲げるＳＤＧｓの推進に資する事業（イベント開催、広報普及、人材育成、調査研究など）への支援を検討。

◇資料 10　北海道 SDGs 推進懇談会構成員との意見交換における主な意見

資料１０

北海道ＳＤＧｓ推進懇談会構成員との意見交換における主な意見

区分	意見の概要
「北海道ＳＤＧｓ推進ビジョン（案）」について	・ビジョンは、これからＳＤＧｓに取り組もうという人にはとても役に立つものになると思う。 ・ビジョンの普及によって、道民の方々がＳＤＧｓの基本がわかるようになれば、ビジョンを策定した意義は十分にあると思う。さらに、電力消費やフードロスの問題など個別の課題に具体的に取り組まれるようになり、全員参加型でＳＤＧｓが推進されることが望まれる。 ・ビジョンの推進管理において実施する評価の結果などは、しっかりと公表してほしい。 ・中小企業は行政が示す方向性に沿って行動することが多いため、ビジョンの中小企業に関する部分には、もっと具体的な取組に関する記載や、関連するゴールを盛り込んでほしかった。ビジョンの見直しや指標設定の考え方に関する記載の追加は良かったと思う。 ・懇談会では、大枠の議論に時間を要したため、ビジョンの中身についてあまり議論ができなかった。全体的に時間が足りなかったと感じている。
北海道における今後のＳＤＧｓの推進について	・道内においてＳＤＧｓに先進的に取り組んでいる企業や団体などを紹介する事例集があると、関心の高い企業等は反応し、取組が広まっていくのではないか。 ・ＳＤＧｓの普及という点では教育が重要と感じる。教育の中にＳＤＧｓがあると良い。また、教育にＳＤＧｓを導入するためには、教師にもＳＤＧｓを理解してもらう必要があると思う。 ・ビジョンの地域説明会等における意見交換では、「これからの北海道について」などのテーマで意見交換するとよいのではないか。 ・今後、道で実施する取組については、他の団体と共催するなどパートナーシップを意識してほしい。また、懇談会でも意見が出ていた国連の９つのメジャーグループ（女性、子ども・若者、先住民、NGO、地方自治体、労働者・労働組合、企業・産業、科学技術コミュニティ、農業者）の参加という視点を意識して実施してほしい。 ・ＳＤＧｓ出前講座については、例えば、中小企業の経営者などは、ビジョンの説明だけでなく、具体的に何が問題で、何に取り組めばよいのかということを知りたいという人もいると思われるため、実践者の活用などについても検討してほしい。 ・今後のＳＤＧｓの推進においては、道は、様々な団体と協働で取組を進めていくと良いのではないかと考えている。 ・今後の道の取組として、職員の勉強会のようなものがあっても良いのではないか。ＳＤＧｓは一度勉強してすぐに理解することは難しいと思われるので、定期的な機会を設けるとよいのではないか。

■第４回北海道 SDGs 推進懇談会　構成員からの提出資料

◇清水 誓幸　提出資料

北海道 SDG ｓ推進ビジョン 懇談会 への意見書

本日の最後の懇談会は他の要件と重なったため参加できませんでしたが、最終原案に対し意見書として提出いたします。

先ずは、今年このような機会をいただきありがとうございました。

個人としましても、企業の経営者としましても、多くの学びや考えの深掘りができる機会となりました事を感謝申し上げます。

11 月末に提示頂いた最終案を、完璧ではありませんが出来るだけ 細部にわたり確認させていただきました。

また、私が前回の懇談会に提出した意見についての反映の観点から読ませていただきました。

以下、企業セクターとしての総評を含む意見として捉えていただければ幸いです。

そもそも持続出来ない世界、取り残される世界にしてしまったのは、全ての人間の責任であると思うところです。

誰一人取り残さない社会に向け 取り組まなければならないのは、意識が高い人だけの取り組みでは到底課題解決は困難に等しいし、人間として全ての人に役割があると考えます。

北海道、日本の課題、問題の抽出は 誰一人取り残さない 為には重要な作業であったと思いますが、結果抽出された課題問題は全体を網羅されていないことは明らかです。私としては特に、あらゆる理由で働きづらい環境に置かれてしまっている方たちが挙げられていないことは取り残していると思えてしまいます。

一つの課題にはいくつものゴールとの関連性があり、一つの取り組みを全てのゴールに照らし合わせて、触れている課題が無いか確認し、取り組み方の見直し、他の課題への取り組みを行う行動でなければトレードオフになり得りえます。

であるから、全てのゴールから見た課題、問題を取り組みを広げる時のルールとして認識する必要があると思いますが、この様な考え方の中から 前回 各項目への 追加案を出したのですが、ほとんど反映されておりませんでした。

説明を受けた中で、複雑になるという考え方も分からないわけでは無いですが、理解も取組も多面的に捉えなければならないのと、SDGs の行動には変革で臨まなければ！　と言う視点で考えると、一つの課題をすべてのゴールや課題との関連性を明確にする必要があったと思います。

企業対企業の取引は、顧客と提供者の間とは異なります。

企業対企業の取引が、フェアでなければならないのですが、未だお金を出す方、仕事を出す方が優位性を持つ関係では、仕事を受ける側は課題に取り組むこと以上に、課題を自分ごとと意識できない環境下にいるのでは無いかと考えます。

中小企業が多く下請け事業が多い北海道で、この企業対企業の在り方がビジョンの原案の何処にも触れられていない事は残念な思いです。

この企業対企業の関係、優位的地位の乱用については現在でも経済産業省が問題視しています。

次に、企業には具体的な課題を上げることが推進を図る上で重要だと思っています。

社会の課題を自分事としていくためにも、具体的な課題、問題を提示し、気づきを得る必要があると感じています。

道庁が例えば 企業や企業団体から 今後の取り組みのための相談を受けた場合、具体的に課題や例を伝えることが重要であると思いますが、そこを道庁だけでなく外部との連携で明確に伝える事が重要であると考えます。

今回の案で人権意識について明示されましたが、人権に関する課題は幅広く、働く環境下での人権ではどうする事が必要なのか？ 掘り下げて考え、示す必要があったのではと考えます。

以上が最終案に対する意見とさせていただきますが、今回の最終案が、推進の評価を測りながら毎年進化し続け、道民全てがステークホルダーとして行動が広がることを願いつつ、私自身も心構えした役割を今後も一層続けていく所存ですので今後ともよろしくお願いいたします。

2018 年 12 月 18 日

北海道中小企業家同友会　　清水誓幸

◇小泉 雅弘　提出資料　　※出典　ヒューライツ大阪

SDGs × 人権

ヒューライツ大阪
HURIGHTS OSAKA

◆ 2015年9月に国連で「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択されました。そこに含まれるSDGs（持続可能な開発目標）の17目標・169ターゲットの達成に向けて、世界でも国内でも、さまざまな取り組みが進められています。

◆ SDGsの内容はどれも「人が生きること」と関連しており、人権がベースにあります。「2030アジェンダ」の冒頭にある「誰一人取り残さない」はそれを象徴しています。

◆ このパンフレットの一覧表は、SDGsの各目標が具体的にどのような人権と関連しているかを示す国連人権高等弁務官事務所の文書（下記）を、国連の了承を得て、一般財団法人アジア・太平洋人権情報センターが日本語に翻訳したものです。
Summary table on the linkages between the SDGs and relevant international human rights instruments
（https://www.ohchr.org/Documents/Issues/MDGs/Post2015/SDG_HR_Table.pdf）

※ 条約名は略記しています（主要なものは次のとおり）。

経済的、社会的及び文化的権利に関する国際規約→**「社会権規約」**、市民的及び政治的権利に関する国際規約→**「自由権規約」**、強制失踪からのすべての者の保護に関する国際条約→**「強制失踪条約」**

(2018.10)

持続可能な開発目標		関連する人権*
1 貧困をなくそう	**あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる** 極度の貧困の根絶、社会保障制度の充実、男女の平等な経済的資源へのアクセスの確保など。	**•十分な生活水準への権利** [世界人権宣言 第25条;社会権規約 第11条;子どもの権利条約 第27条] **•社会保障を受ける権利** [世界人権宣言 第22条;社会権規約 第9条;障害者権利条約 第28条;子どもの権利条約 第26条] **•経済的な生活における女性の平等な権利** [女性差別撤廃条約 第11条、第13条、第14条(2)(g)、第15条(2)、第16条(1)]
2 飢餓をゼロに	**飢餓を終わらせ、食糧安全保障及び栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する** 飢餓の根絶、栄養不良の解消、農業生産性の向上、持続可能かつ強靭(レジリエント)な食糧生産システムの確保、貿易の歪みの是正及び適正に機能する食料品市場の確保など。	**•十分な食糧への権利** [世界人権宣言 第25条;社会権規約 第11条;子どもの権利条約 第24条(2)(c)] **•国際協力**（世界の食糧供給の公平な分配の確保を含む） [世界人権宣言 第28条;社会権規約 第2条(1)、第11条(2)]
3 すべての人に健康と福祉を	**あらゆる年齢のすべての人の健康的な生活を確保し、福祉を促進する** 妊産婦死亡率の削減、予防可能な子どもの死亡の根絶、エイズその他の伝染病の根絶もしくは削減、ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ、安価な必須医薬品、性と生殖に関する保健サービス、ワクチンの研究開発、医療へのアクセスの確保など。	**•生命への権利** [世界人権宣言 第3条;自由権規約 第6条]特に、女性 [女性差別撤廃条約 第12条]と子ども [子どもの権利条約 第6条] **•健康への権利** [世界人権宣言 第25条;社会権規約 第12条]特に、女性 [女性差別撤廃条約 第12条]と子ども [子どもの権利条約 第24条] **•母親と子どもへの特別な保護** [社会権規約 第10条] **•科学の進歩とその応用による利益を享受する権利** [世界人権宣言 第27条;社会権規約 第15条(1)(b)] **•国際協力** [世界人権宣言 第28条;発展の権利宣言 第3～4条]特に、健康への権利と子どもの権利[社会権規約 第2条(1);子どもの権利条約 第4条]に関して
4 質の高い教育をみんなに	**すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する** すべての子どもの無償かつ公正で質の高い就学前教育、初等教育及び中等教育へのアクセス、技術的・職業的スキルの育成、教育への平等なアクセス、教育施設、奨学金制度、教員研修の拡充など。	**•教育を受ける権利** [世界人権宣言 第26条;社会権規約 第13条] 特に、子ども[子どもの権利条約 第28条、第29条];障がい者 [子どもの権利条約 第23条(3)、障害者権利条約 第24条];および先住民族[先住民族の権利宣言 第14条] **•教育における女性と少女の平等な権利** [女性差別撤廃条約 第10条] **•技術・職業訓練を含む、働く権利** [社会権規約 第6条] **•国際協力** [世界人権宣言 第28条;発展の権利宣言 第3～4条] 特に、子ども[子どもの権利条約 第23条(4)、第28条(3)]、障害者[障害者権利条約 第32条]、および先住民 [先住民族の権利宣言 第39条] に関して
5 ジェンダー平等を実現しよう	**ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び少女の能力強化を行う** 女性及び少女に対する差別と暴力の撤廃、無報酬の育児・介護や家事労働を認識・評価すること、あらゆるレベルの意思決定における女性の参画を実現すること、性と生殖に関するヘルスケアへのアクセスの確保、女性の平等な経済的資源へのアクセスの確保など。	**•女性に対するあらゆる形態の差別の撤廃** [女性差別撤廃条約 第1～5条] および少女 [子どもの権利条約 第2条] 特に、政治的及び公的活動[女性差別撤廃条約 第7条)、経済的及び社会的活動 [女性差別撤廃条約 第11条、第13条]、および婚姻及び家族関係[女性差別撤廃条約 第16条]において **•子どもの数や出産間隔、時期を自由に決定できる権利** [女性差別撤廃条約 第12条、第16条(1)(e);子どもの権利条約 第24条(2)(f)] **•母親と子どもへの特別な保護** [社会権規約 第10条] **•女性及び少女に対する暴力の撤廃** [女性差別撤廃条約 第1～6条;自由権規約 第1～4条;子どもの権利条約 第24条(3)、第35条] **•公正かつ良好な労働条件を享受する権利** [社会権規約 第7条;女性差別撤廃条約 第11条]
6 安全な水とトイレを世界中に	**すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する** すべての人々の、安全で安価な飲料水と衛生の普遍的かつ公平なアクセスの達成、汚染の減少、水利用効率の改善、および水・衛生サービスの管理への参加の促進など。	**•安全な飲料水と衛生への権利** [社会権規約 第11条] **•健康への権利** [世界人権宣言 第25条;社会権規約 第12条] **•農山漁村女性の水と衛生への平等なアクセス** [女性差別撤廃条約 第14条(2)(h)]
7 エネルギーをみんなに そしてクリーンに	**すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な近代的エネルギーへのアクセスを確保する** 安価かつ信頼できる近代的エネルギーサービスへの普遍的アクセスの確保など。	**•十分な生活水準への権利** [世界人権宣言 第25条;社会権規約 第11条] **•科学の進歩とその応用による利益を享受する権利** [世界人権宣言 第27条;社会権規約 第15条(1)(b)]
8 働きがいも経済成長も	**包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用（ディーセント・ワーク）を促進する** 持続的な経済成長の促進、生産と消費における資源効率性の向上、完全かつ生産的な雇用及び働きがいのある人間らしい雇用（ディーセント・ワーク）、強制労働、児童労働並びに人身取引の根絶、移住労働者を含むすべての労働者の権利の擁護、金融サービスへのアクセスの促進・拡大など。	**•公正かつ良好な労働条件を享受する権利** [世界人権宣言 第23条;社会権規約 第6条、第7条、第10条;障害者権利条約 第27条; ILO中核的労働条約 ILO労働における基本的原則及び権利に関する宣言] **•奴隷、強制労働、人身取引の禁止** [世界人権宣言 第4条;自由権規約 第8条;女性差別撤廃条約 第6条;子どもの権利条約 第34～36条] **•雇用に関する女性の平等な権利** [女性差別撤廃条約 第11条; ILO条約 第100号、第111号] **•児童労働の禁止** [子どもの権利条約 第32条; ILO条約 第182号] **•移住労働者の平等な権利** [移住労働者権利条約 第25条]

9 産業と技術革新の基盤をつくろう	**強靭(レジリエント)なインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進を図る** 質の高いインフラへの安価で公平なアクセス、雇用を生み出す産業化、金融サービスと市場へのアクセス、イノベーションと技術の移転、情報通信技術へのアクセスの向上など。	**●科学の進歩とその応用による利益を享受する権利** [世界人権宣言 第27条;社会権規約 第15条(1)(b)] **●情報へアクセスする権利** [世界人権宣言 第19条;自由権規約第19条(2)] **●適切な住居への権利**（土地や資源を含む） [世界人権宣言 第25条;社会権規約 第11条] **●貸付・融資サービスと農山漁村インフラへの女性の平等な権利** [女性差別撤廃条約 第13条(b)、第14条(2)]
10 人や国の不平等をなくそう	**各国内及び各国間の不平等を是正する** 所得下位40%の所得成長率の向上、社会的、経済的及び政治的な包摂の促進、機会と結果の不平等の是正、すべての人のための社会保障制度の確保、経済に関する意思決定への参加の確保、安全で秩序ある移住の促進、移住者による送金コストを削減することなど。	**●平等と非差別の権利** [世界人権宣言 第2条;経済的、社会権規約 第2条(2);自由権規約 第2条(1)、第26条;人種差別撤廃条約 第2条(2);女性差別撤廃条約 第2条;子どもの権利条約 第2条;障害者権利条約 第5条;移住労働者権利条約 第7条; 発展の権利宣言 第8条(1)] **●公的分野に参加する権利** [世界人権宣言 第21条;自由権規約 第25条;女性差別撤廃条約 第7条;人種差別撤廃条約第5条;障害者権利条約 第29条;発展の権利宣言 第8条(2)] **●社会保障を受ける権利** [世界人権宣言 第22条;社会権規約 第9～10条;障害者権利条約 第28条] **●国際移住に関する条件の改善** [移住労働者権利条約 第64条] **●移住者が収入と貯蓄を送金する権利** [移住労働者権利条約 第47条(1)]
11 住み続けられるまちづくりを	**包摂的で安全かつ強靭(レジリエント)で持続可能な都市及び人間居住を実現する** すべての人々の住宅及び基本的サービス、公共交通機関へのアクセスの確保、参加型の居住コミュニティに関する計画、文化遺産及び自然遺産の保護、災害対策の強化など。	**●適切な住居への権利**（土地や資源を含む） [世界人権宣言 第25条;社会権規約 第11条] **●文化的生活に参加する権利** [世界人権宣言 第25条;社会権規約 第15条;人種差別撤廃条約 第5条、第7条; 障害者権利条約 第30条;子どもの権利条約 第31条] **●公共交通、公共施設、公共サービスにアクセスできること** 特に、障害者 [障害者権利条約 第9条(1)]、子ども[子どもの権利条約 第23条], 農山漁村の女性[女性差別撤廃条約 第14条(2)]のために **●自然災害からの保護** [障害者権利条約 第11条]
12 つくる責任つかう責任	**持続可能な生産消費形態を確保する** 持続可能なマネジメントと天然資源の効率的な利用の達成、廃棄物管理の向上、持続可能な公共調達慣行の促進、情報へのアクセスの確保、持続可能な開発の実効力の構築など。	**●健康への権利**（安全、清潔、健康的で持続可能な環境への権利を含む ） [世界人権宣言 第25条(1);社会権規約 第12条] **●十分な食糧への権利と安全な飲料水への権利** [世界人権宣言 第25条(1);社会権規約 第11条] **●自己の天然の富及び資源を自由に処分するすべての人民の権利** [自由権規約、社会権規約 第1条(2)]
13 気候変動に具体的な対策を	**気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる** 気候変動や自然災害に対する強靭性（レジリエンス）及び適応能力の強化（周縁化されたコミュニティにおいても）、緑の気候基金の活用など。	**●健康への権利**（安全、清潔、健康的で持続可能な環境への権利を含む） [世界人権宣言 第25条(1);社会権規約 第12条;子どもの権利条約 第24条;女性差別撤廃条約 第12条;移住労働者権利条約 第28条] **●十分な食糧への権利と安全な飲料水への権利** [世界人権宣言 第25条(1);社会権規約 第11条] **●自己の天然の富及び資源を自由に処分するすべての人民の権利** [自由権規約、社会権規約 第1条(2)]

14 海の豊かさを守ろう	**持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する** 海洋汚染の削減、つまり沿岸部生態系・沿岸海域・水産資源の保全、小規模漁業者の市場へのアクセスの確保、海洋生物多様性の保全など。	**●健康への権利**（安全、清潔、健康的で持続可能な環境への権利を含む） [世界人権宣言 第25条(1);社会権規約 第12条;子どもの権利条約 第24条;女性差別撤廃条約 第12条;移住労働者権利条約 第28条] **●十分な食糧への権利と安全な飲料水への権利** [世界人権宣言 第25条(1);社会権規約 第11条] **●自己の天然の富及び資源を自由に処分するすべての人民の権利** [自由権規約、社会権規約 第1条(2)]
15 陸の豊かさも守ろう	**陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する** 淡水・山地生態系・森林の持続可能なマネジメントの実施、砂漠化への対処、生物多様性損失の防止、保護種の密猟と違法な取引への対処など。	**●健康への権利** （安全、清潔、健康的で持続可能な環境への権利を含む） [世界人権宣言 第25条(1);社会権規約 第12条;子どもの権利条約 第24条;女性差別撤廃条約 第12条;移住労働者権利条約 第28条] **●十分な食糧への権利と安全な飲料水への権利** [世界人権宣言 第25条(1);社会権規約 第11条] **●自己の天然の富及び資源を自由に処分するすべての人民の権利** [自由権規約、社会権規約 第1条(2)]
16 平和と公正をすべての人に	**持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人びとに司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する** あらゆる形態の暴力の削減、子どもに対する暴力・子どもの人身売買の廃絶、全ての人のための法の支配と正義の促進、不正な資金、武器の流通、贈賄・汚職の減少、有効な制度の構築、あらゆるレベルにおける参加型意思決定、すべての人のための法的身分証明など。	**●人の生命、自由及び身体の安全に対する権利** [世界人権宣言 第3条;自由権規約 第6条(1)、第9条(1);強制失踪条約 第1条] 拷問からの自由 [世界人権宣言 第5条;自由権規約 第7条; 拷問等禁止条約 第2条;子どもの権利条約 第37条(a)] **●あらゆる形態の暴力、虐待、搾取からの子どもの保護** [子どもの権利条約 第19条、第37条(a)（人身取引 (子どもの権利条約 第34～36条;子ども売買、子ども買春および子どもポルノに関する選択議定書)を含む）] **●司法へのアクセスと適正手続の保障の権利** [世界人権宣言 第8条, 第10条;自由権規約 第2条(3)、第14～15条;女性差別撤廃条約 第2条(c)] **●法的人格を持つ権利** [世界人権宣言 第6条;自由権規約 第16条;障害者権利条約 第12条] **●公的分野に参加する権利** [世界人権宣言 第21条;自由権規約 第25条] **●情報へアクセスする権利** [世界人権宣言 第19条;自由権規約 第19条(1)]
17 パートナーシップで目標を達成しよう	**持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する** 国内・国際リソースの強化、債務の持続可能性、技術移転と能力構築、貿易の促進、政策・制度的整合性の向上、各国の政策余地の尊重、マルチステークホルダー・パートナーシップの促進、進捗状況把握のための測定ツールと非集計型データなど。	**●すべての人民の自決の権利** [自由権規約 第1条(1)、社会権規約 第1条(1);発展の権利宣言 第1条(1)] **●すべての人民の発展と国際協力への権利** [世界人権宣言 第28条;自由権規約 第2条(1);子どもの権利条約 第4条; 障害者権利条約 第32条(1);発展の権利宣言 第3～5条] **●科学の進歩とその応用による利益を享受する権利**（科学分野での国際協力を含む） [世界人権宣言 第27条(1);社会権規約 第15条(1)] **●プライバシーの権利** [世界人権宣言 第12条;自由権規約 第17条]（統計の収集及び利用の際の人権の尊重と倫理上の原則の遵守 [障害者権利条約 第31条(1)]など）

(*)　この表は、わかりやすく説明するためにのみ作成されており、関連する全ての権利が網羅されているわけではありません。国際人権法及び持続可能な開発のための2030アジェンダでは、全てのターゲットに必要なデータの収集が不可欠であり、かつそのデータは、国際人権法に基づいて、非差別、非集計アプローチで分析される必要があります。この国際人権法は、人種、肌の色、性別、言語、宗教、政治的又はその他の意見、国籍又は社会的出自、財産、世系、障害又はその他の社会的地位の区別なく、すべての人の人権と基本的自由の尊重・保護・促進を含んでいます。さらに国際支援と協力の義務もSDGsの全ての目標にあてはまります。

第４回北海道ＳＤＧｓ推進懇談会 議事録

日時：平成 30 年 12 月 19 日（水）14：00 ～
場所：かでる２・７６１０会議室

【出席者】
○構成員：柏村 章夫、小泉 雅弘、菅原 亜都子、野吾 奈穂子、吉中 厚裕　（五十音順、敬称略／５名出席）
○北海道：谷内計画推進担当局長、石川計画推進課長、渡邉計画推進課主幹

石川 (課長)　皆さんお揃いになりましたので、ただいまから第４回目となりますけれども、北海道 SDGs 推進懇談会を開催させていただきます。本日は大変お忙しいところ御出席をいただきまして誠にありがとうございます。前回懇談会の開催結果でございますが、先日、皆様にご確認をいただきまして、道のホームページに公開させていただいております。本日の懇談会の開催結果につきましても、後日、ホームページで公開させていただきますので、よろしくお願いいたします。なお、本日の終了時間でございますが、15 時 30 分を目処としていますので、よろしくお願いいたします。それでは開会に当たりまして、谷内画推進担当局長から御挨拶をさせていただきます。

谷内 (局長)　計画推進担当局長の谷内です。今日は年末の御多忙の中、懇談会にお集まりいただきましてありがとうございます。また、中々日程調整が上手くいかず、今日は５名の出席となりましたけれども、日程調整に御協力いただきまして、誠にありがとうございます。本日は、この懇談会の大きな目的の一つでありました北海道 SDGs 推進ビジョンについて、御報告させていただきますが、これまで皆様方から色々な御意見をいただきながら、それを踏まえて、先月、ビジョン（案）を取りまとめさせていただきました。今日はそのビジョンの報告とともに、これからの SDGs の推進について、どういった取り組みを進めていくかということも含めて、当面の我々の考えをお話しさせていただきますので、そういったことについても御意見いただければと思っております。このビジョンにつきましては、来年早々にでもですね、地域等を回っての説明会というものも開催したいと思っていますし、後ほど御説明いたしますが、２月には、SDGs のセミナー開催に向けて準備をしておりますので、そうした中で多くの方々にお集まりいただいて、色々な情報共有などができる場を作っていきたいと思っています。もちろんビジョンができて、新しいスタートがこれからまた始まると思っています。ビジョンができた後に何をやっていくのかということが大事だと思っております。このビジョンを色々なところで周知したり、活用したりするのはもちろんですけれども、企業や団体の方、NPO の方、あるいは市町村の方など、そういった方々に SDGs というものがより広く浸透し、取り組みの裾野が広がっていくよう、私どもとしても取り組んでいきたいと思います。そうした面についても、色々な御提言をいただければ、大変助かりますので、よろしくお願いいたします。短い時間ですが、今日もまた引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

石川 (課長)　それではここからの議事の進行につきましては、座長の吉中先生にお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

吉中　皆さんお忙しいところどうもありがとうございます。今、見てみますと、懇談会委員として頼まれている 11 人のうち５人出席ですが、出席者数による定則といった性格の会議ではないと思いますので、また貴重な意見をいただければありがたいなと思います。どうぞよろしくお願いします。今日は 15 時半を目途に終わるようにしたいと思っていますので、よろしくお願いします。それでは今日の議事ですが、議事次第では２つ予定されています。「「北海道 SDGs 推進ビジョン（案）」の報告について」と「北海道における今後の推進について」です。局長のほうからもお話いただいたとおり、これからどうしていくのかというところで、意見をいただければいいのかなと思っております。その他何かあれば、議事次第にはありませんが、その場で時間を取れれば意見交換させてもらいたいと思っています。よろしいでしょうか。それでは早速ですけれども、議事１のビジョンの報告についてと、ビジョンの４章にも「ビジョンの推進」という項目がありますが、具体的にどう推進されるのかということが議事２に関わってくるのかと思います。ですので、その辺をまとめて御説明いただいて、その後、色々と意見交換させていただければと思います。よろしくお願いいたします。

推進ビジョン（案）の報告

渡邉（主幹）　計画推進課の渡邉です。私のほうから簡潔に御説明させていただきます。まず、資料について、次第の下側に書いてありますが、資料１から資料 10 までつけ

させていただいております。足りないものがありましたら、その都度でもおっしゃっていただければと思います。

それではまず、資料１の推進ビジョン（案）について御説明します。これまで、懇談会などでいただいた御意見などを基にしまして、資料１のとおり、北海道 SDGs 推進ビジョンの最終案を道の方で取りまとめさせていただきました。先月に郵送で案をお送りし、報告させていただきましたが、その後の議会議論もあり、若干追加したものがありますので、この後の資料２と合わせて御説明させていただきます。資料２はビジョン原案からの主な変更事項をまとめた資料がございます。そちらをご覧ください。ビジョンの構成などにつきましては、原案から大きな変更はありませんが、懇談会の皆様からの御意見、パブリックコメント、市町村意見や議会議論などを踏まえまして、記載内容の充実や図表の追加、データ更新や文言整理などを行っております。主な変更事項ですが、資料の中段、「意見を踏まえた主な変更事項」のところにあるとおりです。ビジョンの基本的な考え方に関しまして、道の方で８月に SDGs に関する道民の意識調査を行っており、その結果を盛り込んでおります。また、前回の懇談会でも御意見いただきましたとおり、SDGs の趣旨や取り組みの必要性を分かりやすくするために、SDGs を中核とする 2030 アジェンダの理念などをコラムで追記しております。そのほか、北海道の現状や課題、価値や強みを表すデータの更新ということで、例えば、懇談会の中で、生態系に対するデータがあまりないという意見もありましたので、タンチョウの越冬分布に係る観察数のデータや外来種であるアライグマの生息目撃情報の推移などのデータを追加しております。また、市町村意見等にもありましたが、いじめ、不登校に対する記述が少ないという話もご指摘いただきまして、いじめ不登校に関する関連するゴールや現状課題などのデータの追加などをしております。続きまして、「めざす姿」の優先課題のところに関しましては、指標や参考となる団体の取り組みなどを追加しております。前に送りしましたビジョンとの違いでいいますと、ビジョンの 63 ページにありますが、昨今、特に海洋プラスチック関係、国の方の動きも出てきていたりしますが、議会議論の中でもその海洋プラスチックの取り扱いについての質疑が行われまして、63 ページの「道の主な取組」の上から４番目に、海洋プラスチックゴミなどの海洋ゴミに関するシンポジウムの開催など、こうした取り組みを道で行っておりますので、こうしたものの記載を追加しております。ビジョンの推進のところに関しましては、ビジョン推進管理の方法や見直しの考え方などについて、懇談会の皆様からいただいた意見などを基に修正しております。この点につきましては、後ほど、ビジョンの推進のところでまた改めて御説明させていただきます。また、御意見でいただきましたような策定経過に関する記載や、現状・課題を SDGs のゴールごとに検索ができるといいという御意見もありましたので、ゴールごとの検索表などもあわせて記載を行っております。以上がビジョン原案からの主な変更内容になります。

続きまして資料３ですが、前回の懇談会でいただきました御意見、これは可能な限りビジョンに反映するよう務めたところですけれども、いただいた御意見に対する反映した状況、または反映できなかった場合の道の考え方などについて取りまとめております。資料４につきましては、パブリックコメントでいただいた御意見に対する対応状況です。資料５は同じように市町村からいただいた御意見になります。どちらもビジョンに反映するよう務めたところですが、こちらもその反映状況、また反映できなかった場合の道の考え方などを整理しております。

続きまして資料６としまして、地域意見に関する主な意見ということで、懇談会の中でも道央圏の方が多いということで、地方の意見も聞いたほうがいいのではないかと御意見を伺いまして、10 月に道南、道北、道東の企業･団体･市町村それぞれ２ カ所ずつに意見交換などを行わせていただいております。意見としましては、これまで懇談会やパブリックコメントで出てきたような意見と同じような、まだ認知があまり進んでいない状況ですとか、勉強会やった後には盛り上がったが、やはり漠然としてしまって、その後何をやったらいいのかよく分からないまま活動がしぼんでしまっている、そういった御意見などいただいております。こうしたものについても今後の推進において貴重なご意見としてさせていただきたいと考えております。

資料７につきまして、先ほど御説明しました道民意識調査の結果についてとなっております。これは道のホームページの方でも公開しています。少し分かりにくいところもありますが、概略を御説明させていただきます。この調査につきましては、最初に SDGs の 17 のアイコン等を示しまして、こういった国連が定めた目標があるということを記載した上で、SDGs について皆さんに伺うといった形で質問しております。住民基本台帳に基づく無作為抽出による郵送で調査票を送らせていただいて、郵送またはウェブによる回答という形で行わせていただいております。回答率については 1500 人に対して 700 人ぐらい。半分ぐらいの回収となっております。SDGs の認知度につきましては、「よく知っている」、「少し知っている」、この二つを合わせまして、10％ぐらいということになっており、「知らなかった」という回答が大体７割程度と、認知度についてはまだまだ低い状況にあるということがわかりました。男女別で見ますと、男性の方がやや高い、女性の方がやや低いという状況になっており、年齢別では若い人の方が認知度は低い傾向にありました。この傾向につきましては、今年の１月に札幌市役所さんの方でも同じような SDGs の認知度調査が行われていますが、これと同じような傾向となっています。資料７の下の方に 123 ページとありますが、SDGs の達成のため、誰が主に行動すべきと考えますかという質問を複数回答で調査させていただきました。ここでは、「政府・地方自治体」に期待するという答えが８割ぐらいと最も高かったのですが、そのほかの教育研究機関ですとか、民間企業、個人、団体等については、概ね３割前後ということで、公的セクターに対する期待は強いという一方で、企業や道民自らが行動すべきという認識にはまだ至っていないかなというふうに見られました。資料の 125 ページのところにつきましては、道内で、主に取り組むべきゴールはどう考えますかと、こちらも複数回答で伺ったところですが、ゴール３の保健が最も高く、続いてゴール 11「持続可能な都市」、ゴール８「経済成長と雇用」などが続いておりました。サンプル数があまり多くないので、参考までの分析になりますが、性別や年代別の違いが見られたゴールというのが幾つかありましたので御紹介いたします。ゴール３の保健ですが、こちらは男女とも、また若年層でも、順位が上の方ですが、特に 40 歳以降の世代からの関心が最も高いということになっておりました。ゴール５のジェンダーについては、男女別でそれぞれ見ると、男性では１番関心が低い状況になっていました。ただ女性でも、中位ぐらいな順位になっておりまして、どちらかというと性別より年代別のほうが違いが見えまして、男女ともですが、若年のほうが高く、年代が高い世代ほど、関心が低いという結果になっております。ゴール８「経済成長と雇用」につきましては、性別による差というのほとんどないですが、30 代以下の若年層の関心が高く、年齢が高いほど低くなる傾向がありました。こうした調査結果なども踏まえながら、今後の普及啓発や SDGs 推進に参考としてまいりたいと考えております。

次に資料８、今後の推進について御説明させていただきます。資料８に、ビジョンの推進管理についてフローでまとめさせていただきましたので、こちらで御説明させていただきます。ビジョンに示している指標の達成状況を含む道の取り組み状況につきましては、道のほうで、政策評価というのですべからく評価を行っておりますのでこうしたところの結果が出てきたものを取りまとめるとともに、対外的に公表していきます。また、道は国の方から SDGs 未来都市に選定されまして、ビジョンの内容を基に、SDGs 未来都市計画というのを作っております。国のほうでは国の自治体 SDGs 推進評価調査検討会という有識者会議を作っておりまして、こちらの方に毎年進捗状況等の結果を提出して、外部有識者による評価を受けることとなっております。この国の外部学識者からいただいた評価結果についても広く公表しますし、また、こうした結果について、SDGs の実践者や関心のある方々に広く参加いただいている北海道 SDGs 推進ネットワークなどを通じまして、進捗状況について共有させていただき意見交換なども行っていきたいと思っています。また、そのネットワークを通じまして、道内の多様な主体の皆様の取り組み状況などを把握し、共有しながら、それぞれがまたそれを持ち帰って、自らの取り組みに反映していき次の取り組みに繋げていく、こうして北海道全体で SDGs 推進を展開していくというふうに考えております。

続きまして資料９としまして、SDGs の推進に関する今後の取り組みについてです。道としての SDGs の推進に向けた取り組みとしましては、知事を本部長として全庁横断的に設置しております北海道 SDGs 推進本部の下、ビジョンに沿って多様な主体と連携を図りながら、幅広い分野・地域で SDGs の推進に努めてまいる考えでございます。また、道の各種計画の策定や改定に当たりましては、ビジョンの内容や SDGs の要素の反映に努めて道政における SDGs の主流化を図るとともに、関連施策を実施してビジョン推進の実効性の確保に努めてまいります。道民意識調査のところでも御説明いたしましたが、まだ道内での SDGs の認知度というのは低い状況にあって、普及がとても重要になってくると考えておりまして、今後の普及についての当面の取り組みというのを、資料９の２番以降にまとめております。まず、来年の２月３日、日曜日ですが、かでる２・７の大会議室を予定しておりまして、SDGs 推進ネットワークの会員で交流し、意見交換などを行っていただけるようなセミナーの開催を予定しております。セミナーにおきましては外部有識者による講演、また、道からビジョンの紹介などもさせていただくほか、会員同士の自らの取り組みについて、ポスターセッションなどを行いまして、会員同士の相互交流や意見交換などを行えるようにしてまいりたいと考えております。また、ビジョンの説明や SDGs の推進に関する意見交換を全道各地域で実施してまいりたいと考えております。その他、若年層の認知度も特に低い傾向にあるということもありましたので、学校など、また企業や団体などの要望に応じまして、出前講座の実施も検討しております。今年も行ってきたところですけども、これからも多様な主体と連携した情報発信ということで、さまざまな企業、包括連携協定締結企業などと連携した SDGs の普及啓発、または国が設置している地方創生 SDGs 官民連携プラットフォーム、こちらに道も参画しておりますので、そうした場を通じて道内における SDGs の取り組みについての情報発信、ネットワークの活動などを通じた普及啓発、また、ビジョンを今回まとめたところですが、最終的に 100 ページを超えるような大冊になってしまいましたので、リーフレットのような形を作って、皆さんにまず手にとっていただけるような形で普及啓発を図っていきたいと考えております。その他、道の各種事業における情報発信

というものも引き続き継続して行ってまいりますし、道の広報ツールとしまして、道庁のロビーや広報紙など、そうしたものを当然のように使って活用していきたいと思っています。市民や民間活動等が、ビジョンに掲げる SDGs の推進に資するような事業、こうしたものへの支援についても、検討していきたいと考えております。普及啓発に当たりましては、今後とも皆様の御協力をいただく機会もあろうかと思いますが、その際にはまたよろしくお願いしたいと思います。私の方から以上です。

吉中　はい。ありがとうございます。推進ビジョン（案）と推進管理についてということで御説明いただきました。この後は意見交換をさせていただければと思いますが、その前に今日出席されてない方に個別に今のような御説明をしていただいたと思いますが、どのような御意見があったのか紹介していただけますか。

渡邉（主幹）　資料 10 としまして、今回、出席出来なかった方に事前に資料をお持ちし、意見などを伺ってまいりました。ただ、定森さんに関しては、直前に被災地支援に行くということになり、来られなくなったということで御説明できていませんが、今後、またお伺いし、御説明したいと考えております。

ビジョンの案に関する御意見としましては、これから SDGs に取り組もうとする人に役に立つものになって、普及啓発で基本が分かるようになっていただければ、策定の意義があると思うといった御意見や、推進管理の結果についてはしっかりと公表して、皆に分かるようにしていただきたいといった御意見、中小企業の活動としてはもっと細かい、色々な会社の自らの取組が分かるものをもっと盛り込めた方が良かったのではないかという御意見、懇談会では大枠の策定プロセスの議論が多く、中身の議論をもう少ししたかったというような御意見をいただきました。

今後の推進に関する御意見につきましては、先進的に取り組んでいる企業や団体などを紹介する事例集のようなものを作っていくと、自分のこととして感じやすくなるのではないかといった御意見や、教育の中で SDGs を導入していく必要があり、教師にも SDGs を理解してもらうと子供たちに広がり、そこから家庭にも広がってより進んでいくのではないかといった御意見をいただきました。また、ビジョンの地域説明会については、SDGs についてという入口で入るより、これからの北海道についてといった入口で入った方がより身近に感じられていいのではないかという御意見や、今後実施する取組などにおいて、パートナーシップ、特に懇談会でも意見が出ていたメジャーグループの活用・参加という視点を大事にしていただきたいという御意見を重ねていただいたところです。出前講座につきましては、道の担当者が行くのもいいが、例えば、企業経営者であれば企業で取り組んでいる方の方が身近なところもあるので、外部有識者等を活用するのも効果的ではないかという御意見などもいただいております。

清水さんからは、別に紙で提出いただきましたので、そちらも皆さんに配布させていただいております。前回の懇談会の時に、詳細にたくさんの御意見をいただいていましたが、道のほうで取りまとめるに当たっても、例えば、各取組事例のところに関連するゴールをもっとたくさん入れたらいいのではないかという御意見などをいただいていましたが、SDGs に関して、ケースバイケースで考えていくと次から次に増えてしまい、全てのゴールを載せてしまうこととなると、逆に分かりづらくなってしまうという考えもありまして、特に清水さんから強調された企業の地域人権や企業の責任などに関しては、「ビジョンの推進」の企業の取組のところに集中的に書かせていただきましたが、改めて清水さんからは企業自らにとっては自分事と分かるような身近なケースがたくさん載っていた方が良かったという御意見をいただいた後、推進ビジョンの認知を進めて、取り組みを進めていただくための最初のきっかけということで、今後、ビジョンの内容も SDGs の取り組み自体も広がって進化していくことを期待するという御意見をいただいているところです。以上です。

吉中　ありがとうございます。資料 10 についてと資料番号が付いていない清水さんの資料についてですね。では、自由に意見交換をしたいと思いますが、まず、この最終案、案と付いていますが、推進ビジョンがこのように出来ましたといただき、それを推進するために何をやるのか、道を中心にどんなことをされようとしているのか。ビジョンの 88 ページ以降が「ビジョンの推進」というところですが、今の御説明をお聞きしたところ、資料 8 というのは、この中でも特に「（3）推進管理」を絵にしていただいたものかという気がしているのと、資料 9 が 90 ページの中段の「道としての取組」のところを詳しく書いたという感じでいいですか。また、私の方から質問ですが、資料 7 のアンケート調査が 117 ページから始まっているのは、どう理解すればいいのでしょうか。

渡邉（主幹）　道民意識調査については、「7 持続可能な開発目標（SDGs）について」とあるように、他にも項目がありまして、この前に他の六つのデータが載っています。こちらは道のホームページにも出ていますので、関心がある場合はそちらを見ていただければと思います。

吉中　全体を 1500 人に送り、700 人から回答いただいたということですね。すごいですね。半分くらい回収されているんですね。

渡邉（主幹）　回収率は比較的大きかったです。

小泉　半分は多いですね。

吉中　さすが道庁という感じですね。分かりました。

意見交換

小泉　中身の前に、確認しておきたいです。今日は 5 人しか参加していませんが、私は RCE の運営委員でもあるので、有坂さんからは辞任の意思を伝えたというふうに聞いていますし、確か清水さんもそうかな。

渡邉（主幹）　清水さんにはその後説明いたしまして、清水さんから提出いただいた資料にもありますが、今後も取り組みに協力できるところは協力していただけることとなっております。

小泉　有坂さんからは一応文書が出ていて、配られてはいませんが、意見表明がされていると思います。私も今日参加はしていますし、辞任の意思を表明してはいませんが、今回のビジョン―もうこれは決定稿だと思いますけれども―については、基本的には納得がいっていない。初めからずっと言っていたことの繰り返しですが。懇談会の中で、もちろん今日欠席した人が皆、納得がいっていない訳ではないと思いますけど、あまりきちんとした納得のいく形になっていなかった、そのために辞任という意思を表明する人も出てきた、ということを、道側はどう受け止めているのかということをお聞きしたいです。あまり良いことではないと思うんですよね。

石川（課長）　有坂さんからは辞任をしたいと、文章で申し出がありました。今回の懇談会は、皆さんから色々な意見をいただいて、我々として、SDGs の推進をさせていくためにより良いビジョンを作ろうという意義で始めています。色々な意見を踏まえさせていただいて取りまとめさせていただいた。そして、それに基づいて、北海道で SDGs を積極的に進められるようにしていきたいなというところです。

小泉　やむを得ないということですか。

石川（課長）　色々な意見があるというのは承知をしています。

谷内（局長）　有坂さんからの辞任の申し出は昨日の夜にメールが入って始めて伺ったということで、我々も、その後、有坂さんと直接まだお話はしていません。

渡邉（主幹）　メールをいただく前ですが、先週の金曜日に御意見は伺っていました。

谷内（局長）　委員の皆様も色々と御意見をお持ちだとは思いますし、このビジョンを作る色々な過程の中で色々な御意見をいただきました。今回も御説明して、評価いただいている意見もあれば、小泉さんがおっしゃったように、やはり策定のプロセスにもう少し時間かけるべきだという意見もありました。我々としては、この懇談会でいただいた意見を、できるだけ最大公約数的に反映させながら、ビジョンを作ってきました。先ほど、道民意識調査の結果もお話ししましたが、やはり道民の中の認知度が 10％程度ということと、説明はしていませんでしたが、道民意識調査の結果では、認知度が低い中でも SDGs の 17 ゴールを提示すると、それぞれゴールを目指して取り組みたいといった意見もありました。ただ、取り組みたいが何をやっていいか分からないといった意見が 7 割ぐらいの方々で、非常に SDGs に関心を持っていただいている。ですから、このビジョンも 1 つのきっかけとして、できるだけ広く普及活動もしながら、取組の裾野の拡大、理解と参画というふうに拡げていく。そういうふうに、まずは進んで行きたいなと考えております。

小泉　欠席した人の代弁をするのではなく、私の意見ですが、やはり私が一番感じるのは、この懇談会も含めて、「参加」ということに対する考え方が違うかなというのが、この道の懇談会に参加しての思いです。繰り返しになりますけど、一番初めにこの懇談会は参考意見を言う場なのか、一緒に作る主体なのかということを確認したと思います。そして、一緒に作る主体だという回答だったかと思います。しかし、私の思いとしては一緒に作る主体とは扱っていなかったというふうにしか思えない。もちろん、アンケートも含めて、道は道で色々なことを、この 100 ページぐらいのビジョンを作るのにはもの凄く労力がかかっているとは思います。けれども、多様な主体と共有するビジョン、基本的な指針という打ち出しであるからには、やはり全て道が意見を聞いて判断するということではなく、対話の中で作り出していくということが前提だと思います。そんなことを今までの道の行政ではやってないかもしれませんが、逆に言えば、これは道の計画ではないわけです。多様な主体が共有する指針を作ろうとしたわけですよね。だからこそ、言われてもいないのに、グループ別のワークショップもやったわけです。やりましたが、その内容も本文には反

映されてないですよね。だから納得いかないんです。正直、私が前回、策定のプロセスも書いて欲しいとお伝えして、ビジョンに書いてありますが、書いてあることの良し悪しというのもありまして、書いてあるということは、懇談会がこのビジョンを作ったようなイメージにもなりますし、あたかもこの懇談会で開催したミーティングの成果がこの中に反映されているかのようにも受け取られると思うんですよね。しかし、恐らく本文の中にはほぼ反映されていない。ミーティングは、「めざす姿」についてのミーティングをやったわけですが、「めざす姿」については、骨子案の段階からほぼ変わっていません。これでは、多様な主体と共有しようという意思が感じられないです。そのことを批判しているといいますか、どういうふうに道は受け止めているのかなと思わざるを得ない。せっかく懇談会というのは、道の人に依頼を受けて集まっているわけですよ。別に意見を言うだけであれば、メールでもいいですが、あえてこういう対面で話しているわけです。しかし、意見への回答はパブリックコメントの回答と同様に、文書での回答という形でしかない。対話的な関係に全然なってないなというのが私の印象です。その「参加」という事に対してどういうふうに思っているのか、多様な主体と一緒に作りたいというのであれば、多様な主体をどう参画させて、どういうふうに一緒に作ろうとしているのか。その意思が感じられない。ネットワークも道が設定したネットワークのことしか強調されてないですよね。道は RCE 道央圏と当初、共同事務局でやろうと、RCE 道央圏は民間の中で立ち上がったネットワークな訳だから、そこと一緒にやろうという意思が曲がりなりにも感じられました。だけど、道の都合で、ある種一方的に、変更になった。何か色々な事情があるのかもしれませんが、私から見れば、民間のネットワークとは一緒にやりませんというふうに言っているようなものです。道のネットワークが立ち上がったのは去年ですが、RCE は 3 年前からやっています。別に RCE だけではないですが。

谷内（局長） 我々も、このビジョンの中でネットワークのことは記載させていただいていますが、読んでいただければ別にネットワークだけが SDGs を推進していく中心の組織だということではなく、一つの推進主体的な役割を担っている組織だと思っています。何もネットワークというのは、道が中心にこの組織を運営していこうというものではなく、事務局としてお手伝いしますけれども、多様な主体の方々が情報共有や情報交換をしたりする一つの組織であって、これが北海道の SDGs を進める中心ではなく、それこそ RCE の方々もいらっしゃれば、他にも色々な団体の方々がいらっしゃいますので、参画していただければいいし、連携・協力していただければいいし、これは一つの手法のことだと我々としても思っていますので、道がこの組織を中心として動いていこうというイメージでは少し違うと思います。

小泉 けれども、この推進管理についても、北海道 SDGs 推進ネットワークって書いてありますよね。

谷内（局長） 非常に多くの方々、160 くらいの方々に参加していただいていますので、そうした方々とも情報共有をしながらということです。

小泉 私も、団体としては今後の動向を見ないと分からないと思い個人でネットワークに参加していますが、はっきり言って、ネットワークにはなってないです。メーリングリストすら作られていない。相互の情報交換をできる形にはなっていない。この懇談会と同じなんです。道が意見や情報を得て、道が発信するという形をネットワークとは言わないです。

谷内（局長） 我々としては、ものすごく広い緩やかな組織として考えています。

小泉 緩やかな組織であるということと、相互に情報交換ができない形になっているということは全然関係ないことで、いくら緩やかでも、メーリングリストはすぐ出来ます。お金のない市民団体でもまず作りますよ。それすらないわけですよね。

渡邉（主幹） 物理的なことをいいますと、最初はメーリングリストにしたかったのですが、メンバーが 100 人超えますと有料になってしまいまして。調べが足りなかったかもしれないですが。また、ビジョン策定の過程でスタッフの労力を取られてしまったということもありまして、ネットワーク活動があまり出来ていなかったというのは反省点と思っています。なるべくこれからそれを充実させていかなければいけないというのは考えておりました。まだ始まったばかりということで動きも少ないということもありますが、会員の皆様には情報共有したいものがあれば、こちらに教えていただければ発信しますとは言ってはいます。

小泉 私が言いたいのは「参加」ということをどういうふうに捉えているのかということです。私は、活動が活発かどうかとか、会員数が多いかどうかということを言っているのではなく、先ほどのアンケート結果を見てもそうですが、道というのは一応、ある種の権威なので、道が呼びかければたくさん集まるというのはそうだと思いますし、そのことはそのことでいいことだと思います。けれども、道が意見や情報を貰い、道が発信するというのはネットワークではないです。ネットワークというのは網の目のようなものであって、相互に繋がりがあるものがネットワークです。最低限、メーリングリストぐらいなければ、ネットワークと名乗るべきでもないです。RCE と共同事務局にならなかったのは色々な経緯があると思いますが、共同事務局でないのであれば、どういうふうに連携するのかということを、少なくとも道のほうから提示すべきでしょう。

渡邉 (主幹) それに関しては認識の違いかもしれませんが、共同事務局でできずに、道のみでとなってしまったという話を RCE 側とさせていただいたときに、RCE 側としても、道のネットワークとどういうスタンスで行くのかというところを検討するというふうにお聞きし、その回答を待っていましたが、中々返事が来ないなというのが正直、担当としての素直な印象なんです。

小泉 別に私は RCE の立場でここに参加していませんが、なんといいますか、多様な主体と一緒にやろうという姿勢が、今回の 3 回程の懇談会という場に出た中で、正直、全く感じられない。中身にも反映されたという印象はない。であれば、「多様な主体と共有する基本的な指針」という打ち出しをやめて欲しいです。「道が推進する基本的な指針」というふうにうたって欲しいです。

谷内（局長） 我々としては非常に色々な御意見を伺いながら、文言の一つ一つ全てに御意見が反映されているかどうかというのは、分からないところもありますけれども、いただいた趣旨のようなことは、かなりこのビジョンの中に網羅的に、「めざす姿」や対応方向などそういったところに、考え方を盛りこませていただいているつもりですし、多様な主体の方々と一緒に SDGs をやっていこうということに関しては、今年、SDGs の取り組みを始めてから、色々な企業・団体の方ともそうですし、今回の有識者懇談会に参加されてる方々とも、色々な場面で話しをさせていただきました。また、今回、地方にも行ってお話をさせていただいていますし、そうした中で、何もこれがゴールではないと考えていますので、こうしたビジョンの策定も一つのきっかけとして、本当にこれからも、色々な方々と取り組んで、一緒にやっていきたいという気持ちは、当初から変わっておりませんので、その点は御理解いただきたいなと思います。

小泉 前から言っていますが、これがゴールでないのであれば、ビジョンをうたわないで欲しいということです。ビジョンというのは将来像なので。SDGs で何をやっていいか分からない人が多いというときに、私も 3 年間ぐらい SDGs に関わってきていますけど、やりながら分かるのは、やはり自分で将来像を考えないと、自分のものにはならないということです。SDGs にこんな目標があるということを取ってきても、あまり意味はないです。

谷内（局長） ゴールではないと申し上げたのは、このビジョンの策定がゴールではないという意味で申し上げたんですが。

小泉 ビジョンの策定は、ある意味ゴールを考えるのがビジョンを考えるってことですよね。

谷内（局長） ビジョンの策定が本道の SDGs の推進にとってゴールではないという意味で申し上げているつもりなんですが。

小泉 そうなんですけれども、ビジョンというのは、2030 年の将来のあるべき姿を考えることですよね。

谷内（局長） 北海道がこれから SDGs を推進していく上で、このビジョンの策定という行為がゴールではないということを申し上げているつもりなんです。

小泉 もちろんそうですけれども、ゴールを考えるのがビジョンです。

谷内（局長） ゴールの意味が少し違いますよね。

小泉 2030 年の将来像を示すのがビジョンですよね。

谷内（局長） そうですね。SDGs を推進していく上での色々なステップという意味での一連の流れとしてのゴールではないということを申し上げているんです。

小泉 2030 年の将来像を多様な主体と共有したければ、多様な主体を巻き込んで 2030 年の将来像を考えるプロセスがなければだめだと言っているんです。言っているし、時間がない中でやっていますよね、まがりなりにも。なぜそれを尊重してくれないんですか。そういうプロセスを尊重しているのが SDGs ではないですか。

石川（課長） 小泉さんからも何回もお聞きしているので、それは理解しているつもりです。

小泉 取り入れられていないから何回も言っているんです。では、今後のプロセスではどういうふうにそれを生か

すんですか。

石川（課長） ですから先ほども申し上げましたけれども、北海道ネットワーク。

小泉 全然話がかみ合っていないですよね。北海道が立ち上げたネットワークは、市町村や色々な企業・団体が入っているのかもしれませんが、それは北海道が立ち上げたネットワークであって、多様な主体ではない訳ですよ。

石川（課長） 先ほども申し上げましたけれども、北海道SDGs推進ネットワークだけと連携をするわけではなく、我々は色々な方々とも連携をさせていただきますし、それぞれ主体ごとに勉強していただいてもそれはもちろんやっていただくためにビジョンを作っているわけですから、我々が全て束ねてSDGsを一手に引き受けて推進するのではなく、それぞれの方々にSDGsについて御理解をいただいて、それぞれの立場の中で進めていただくきっかけにビジョンがなってくれればいいなという思いで作っていますので、そこは御理解いただきたいと思います。

谷内（局長） 今、小泉さんがおっしゃったように、このネットワークが多様な主体でないというのはどういう意味でしょうか。

小泉 多様な主体、もともと多様なステークホルダーと言っていましたよね。多様なステークホルダーの考え方を変えて欲しいということを何度も言っていますよ。その一つのモデルが国連のメジャーグループですよ。だから多様な主体というのは別に企業とか団体とか行政とかという話ではなく、例えば、女性であるとか若者であるとか先住民族であるとか農民であるとか、もちろんこの中に企業やNGOも入りますけれども、ベースになるのは、その課題に直面している人たちです。そのグループです。

谷内（局長） ネットワークは別にそういう人方を否定しているわけでもなくて、ネットワークはどなたが入ってもいいですし、企業の方や団体・NPOの方も多様な主体のお一人だと思っていますが。

小泉 そういうことではなく、私がわざわざ頼まれてもいなのにグループ別のワークショップを呼びかけたのは、それはもちろん道民の中に女性もいますしアイヌの人もいますよ。だけどそういうことではなくて、グループとしての見る視点が違うわけですよ。道庁の職員が考える2030年にこうしたいということと違うということは、この限られたミーティングから出てきた成果でも明らかなわけです。そのことをどう受けとめるかということです。今後の進め方についても、そのことを受けとめるには、そういうグループを道が率先して、道の下に置くということではなく、そういうグループとの継続的な関わりを保証するということですよ。それを国連はやっているんだから。

石川（課長） 全く排除もしていませんし、差別もしていませんが。

小泉 排除はもちろんしませんよ。SDGsというのは課題を解決するための取組なので、どのように積極的に課題を解決できるのかということを道も考える必要があると。そのヒントが、SDGsなり、国連の取り組みにあるんじゃないかということです。

石川（課長） 同じことの繰り返しになるので、他の方の御意見も。

吉中 はい。他の方からも是非、御意見をいただきたいと思います。

菅原 出来た後のビジョンに関してはもう決定したものということで、直していただいたところは本当にありがたいというふうに思って見ております。意見が出たけれども、足りないところや反映されなかったところについては、今後も見直していくもの、私たちも含め、道民皆さんで議論していくものだということで認識しています。ビジョンとは別に、今、小泉さんがおっしゃっていたこれからの推進の部分でお伺いしたいのが、今回、ネットワークについては時間がなかったというところもあり、相互のやりとりが出来る作りには今のところなっていないとおっしゃっていたと思いますが、実現出来ていないにしても、目指すような形はどういったものなのでしょうか。北海道が事務局になっていますが、事務局はあくまでも事務なので、例えば、私も小泉さんと同じように個人としてネットワークに登録させていただいていますが、私がこのネットワークで何かを提案したり、呼びかけをしたりするといったことが理論上できるのかということと、実際に仕組みとして出来るのか、そういったものをどうしていくのかということの最終のイメージを教えていただきたいということが一つです。もう一つは、先ほどおっしゃられていたことと関連しますが、ネットワークに足りていないと思っているものがあれば教えてください。前回の懇談会でお伝えしたことですが、女性の方たちは自分の課題を個人的な課題だと思っていて、社会的な課題だと思えず、中々話せずにいます。これは自分が我慢すればいいと思って話さない。そういった方達は、機会が平等に与えられているからということでは、

中々参加しづらいと思います。参加しにくい方たちにどうやって参加してもらうのかというところでも工夫が必要だと思います。ですので、ネットワークに足りていない、是非参加して欲しいと思う方がいれば教えてください。多様性で足りていない部分があれば教えてください。また、それに対して、どのような工夫をしていくかということがあれば教えていただきたいと思います。

石川（課長） ネットワークの相互のやり取りの仕組みですが、先ほど、直接メーリングリストがないので、やり取りができないという御指摘をいただきました。我々もなるべく相互にやりとり出来るようにしたいつもりで立ち上げていますが、現状のシステム上、一度、道にいただいて、道から発信するというやり方になってしまっています。ネットワークの皆さんには発信したい情報があれば御連絡ください、道から会員の皆さんに発信します、というのが現状です。ただですね、相互にといっても中々難しいので、先ほど少し御説明させていただいたような、交流セミナーでネットワーク会員の方にお集まりをいただいて、フェイストゥフェイスで情報のやり取りや意見交換が出来るような仕組み、パネルを出して情報発信できるようなコーナーを設けようと現在考えています。

菅原 ネットワークの最終というか、今はメーリングリストに関して、色々な御事情があると思いますが、最終的には、ネットワークのシステム上の仕組みとしても、相互に交流できるようなものを作っていきたいということですか。

石川（課長） 年1回は定期的に集まれるような場を作りたいと思っています。けれども、ネットワークのシステム上でどのようにやるのかというところは少し課題がありますので、現状では、一度、我々が情報をもらって、情報提供するというやり方だけでやっています。

菅原 現状はそうだけれども、その課題を解決していき、相互に意見交換や何か提案できるようなものにはしていきたいと考えていらっしゃるということですね。

石川（課長） それはやり方も含めて、また検討させていただければと思います。

谷内（局長） メーリングリストの件も上手くできるのかどうかも含めて検討させていただければと思います。

菅原 それこそ、得意な方がたくさんいらっしゃると思いますので、得意な人達に、色々なテクノロジーを使って仕組みを作るということは、お任せしていいのかなと思います。また、年1回の顔合わせといっても、やはり地理的な問題もあると思います。今回のセミナーも、札幌ですよね。どうしても札幌でやってしまいがちだと思います。ですので、地方の方、札幌以外の札幌に来づらい方も多分参加は難しいというふうに思いますので、そこをどうやってクリアしていくのかということも是非考えていただきたいなと思います。

吉中 ありがとうございます。ネットワークといいますか、プラットフォーム、ウェブ上での意見のやり取りの何が難しいのかなとも思いますが。国連でもごく普通にオンラインディスカッションをやっていました。登録さえすれば、事務局は全くノータッチで、登録した人達で盛り上がってやってもらうということはごく普通にやっていて、事務局の方もお金なんて全然かからずに、凄く有効に使っていました。是非、少し考えていただければと思います。

菅原 ネットワークの多様性に欠けている部分があるとしたら教えてください。

石川（課長） ネットワークの会員数は現在160ほどとなりましたが、市町村が3割ぐらい、企業も3割ぐらいです。教育機関は少し少ないです。市町村の方になるべく入ってもらいたいという思いと、教育関係にももっと参加していただきたいとは思っておりますので、今回のビジョンが出来上がった段階では、学校などの教育関係にもPRして行こうと思っています。

菅原 例えば、ジェンダーの視点で見たときに関わりがないのか、取り残されやすい方達の視点がきちんと入っているのかといった、そういった視点でネットワークの構成員を見た時にどうなのかというのが気になります。

渡邉（主幹） 構成員として団体の名前で入っていただいているので、個人でしたら性別、名前を見れば分かりますが、団体の場合、ジェンダーの区分というのは分からないんですが。

菅原 例えば、女性団体が入っているのか。

渡邉（主幹） 女性団体の方も入っていただいています。アイヌの方の団体にも入っていただいています。労働組合関係も一部入っていただいているところもあります。

菅原 そういった視点で見た時に、参画していただきたい方達はいますか。

渡邉（主幹） 資料８の中段、ネットワーク会員の構成員のところに、今おっしゃられているような区分で記載しています。団体で言いますと、青少年、農業、女性、障害者、高齢者、外国人などの団体の方に入っていただいております。

菅原 もう既にこれは入っている団体ですか。

渡邉（主幹） 入っているところです。

吉中 市町村が30％とおっしゃっていましたが、例えば、青少年団体は何％、農業関係の団体は何％など、どれくらい入られているのかというような分析はしていますか。

渡邉（主幹） すいません。そこの分析はまだ出来ていないです。

吉中 他に何かありませんか。柏村さん、何かありませんか。

柏村 しっかりとは読み込めていませんが、案を見た時には原案とあまり変わってないという心証を受けました。けれども、前回の原案も、入り口としては十分な内容だと僕は思っています。反映されているかどうかの受けとめ方は色々とありますし、そもそも初めからずれがあったまま進んできているので、こういう状況になるのはしかるべきかと感じています。ネットワークに関しては、今後、活用されていく中で、僕自身も加入もしていないので偉そうなことも言えないですが、加入している団体だけではなく、各業界の方や、先ほどから出てくる、重要な意見を聞く団体に対して、あえて意見を聞くような場面を作れれば、より多様な意見を聞くことができ、より進んでいくのかなと思います。まずは行動して、いかに自分事に落とし込んで動ける人を増やすかというところだと僕は思っているので、そういう意味では、いいのかなというふうに思いました。

小泉 質問ですが、今度の２月の交流セミナーはネットワーク会員向けですか。

石川（課長） ネットワーク会員向けですが、当日まで加入できる形にしています。

小泉 会員以外には開かないということですか。

渡邉（主幹） 会員の方々の交流の場として考えていたところですが、入会すると、何かやらなければいけないといったことや会費が発生するといったことはないので、是非入っていただければと思っております。

谷内（局長） 広くこのセミナーを御案内しようと思っていますし、セミナー参加していただけるのなら、出来れば当日までに会員になっていただきたいという趣旨ですので、会員にはならないが参加したいという方を排除するつもりはないです。募集もネットワーク会員の方だけに案内するのではなくて、広くホームページ等で募集しております。

渡邉（主幹） ビジョンのパブリックコメントの時と同様に、全市町村、また、関係する団体などにも案内を出しておりますので、会員だけに案内しているものではありません。

谷内（局長） 会場のキャパシティの問題もありますので、何百名もというわけにはいきませんが。そもそも、そこまで来ていただけるかどうかも分かりませんが。

野吾 道庁の「推進ネットワーク会議」は、SDGsに関わっている160の団体・個人の皆さんと情報共有や意見交換をして、こういう事例もあるということを幅広く知って、前に一歩進むための一つのネットワークなのかと受け止めました。JICAからのお願いとしては、今後、SDGsに関連する活動の年間計画やスケジュールを懇談会メンバーやネットワーク会議の皆さんと共有していただきたいです。今回の交流会の日程が、RCE・JICA共催のフェアトレードイベントと重なってしまいました。今、札幌でもSDGsもフェアトレードも具体的なアクターが本当にたくさんいて、色々な活動が随所で行われていると思います。せっかくネットワーク会議ということで、相互に知り合う場が設けられているにも関わらず、参加できないのももったいないですので。お互いに今後の年間計画を立てて、どういう動きがあるのかというところを幅広に共有しておくと今後いいのかなと思いました。また、ビジョンについて、今回、その指標に関するコメントもかなりあったかと思います。参考指標の達成状況を道庁の方でまとめていかれると思いますが、今後、このビジョンがどのような成果指標なりで図られていくのかというところを確認させていただきたいと思います。

吉中 まず、１点目のカレンダーの共有のようなことは、最低限、ネットワークでやっていただきたいと思います。

渡邉（主幹） 会場を押さえた後にお話が聞き、調整がきかなかったということもありましたので、今後は連絡を密

にしていきたいと思います。

吉中 そのお話をお聞きしていて思ったことは、もう20年も前から色々な所でネットワークというものがあり、それが堅いグループみたいなものになっていくということがよくあることだと思っています。ですので、この推進ネットワーク会議も閉ざされたものにならないようにして欲しいと思います。メールアドレスさえ登録すれば、誰でも自動的に情報がばんばん入ってくるような形にさえしておけば、それで何がだめなんだろうという気もしています。その人たちの誰でもが見ることができる共有カレンダー、SDGs共有カレンダーみたいなものがあればいいなと思います。イベントやディスカッションも誰でもすぐ呼びかけて始められるような、先ほども緩いというお話しもありましたが、開かれたネットワークの方がいいのではないかという気がします。さらに、ただ開かれているのではなく、先ほど、菅原さんがおっしゃったように、足りてない分野あるいはメジャーグループの中で該当されていない人にどのように伝えていくのかという事も、是非考えていただければと思います。そして、指標について、参考資料として挙げられているものでは全く足りてないという意見が前回もありました。これからこのビジョンができた後でも、色々な専門家の人にもっと入ってもらい、SDGsを本当に達成するのであれば、そのための指標がいるのではないかといった意見が出ていたと思います。その指標づくりのようなものを是非やっていってもらいたいといいます。どこでどういう仕組みでやっていけばいいのか、アイディアはありませんが、ネットワークというものが、その出発点になっていくといいのかなと思ったりしています。今の野吾さんからのご質問は、参考指標として書いてあるけれども、それがこれから色々なところで常に参考とされるものなのか、その時にはどういう仕組みで参考されて評価されるのかといった御質問だと思います。

石川（課長） 指標については色々な御意見をいただきまして、我々としても大きな課題として受けとめさせていただいております。ただ、今やれることとしては、先ほど、資料８の中で御説明させていただきましたが、参考指標の達成状況・進捗状況が今どの辺にあるのかというのは、道の政策評価の中で毎年度把握させていただいて、ネットワーク会議を通じて、ネットワーク会議だけではありませんが、道民の皆さんに公表させていただいて、共有していくというようなところがまず第一歩かなと思っています。ネットワーク会議を中心に情報共有させていただく中で、もっとこういう指標があるとよいとか、もっと目標値を上げるべきではないかといった御意見が出てくると思います。そうした段階、御意見をいただく中で、どのように検討していけばいいのかというところも、このネットワーク会議の中で皆さんと意見交換が出来ればと思っています。ただ、そこまで今、中々書ききれないものですから。イメージとしてはそういうふうにやりたいと考えています。

野吾 今後、この懇談会はどういうふうになりますか。

石川（課長） 最後に申し上げようとも思っていましたが、定期的にやる懇談会はこれが最後だというふうに思っています。この懇談会は委嘱とかではなく、その都度お集まりいただいているという形で行っています。何かあれば、このようにまた意見交換をさせていただくというようなことは当然出てくるかとは思いますが、定期的にやる懇談会は今回が最後となります。

小泉 この懇談会が最後になるということは、元々、一年の予定だったのでそうだろうなとは思っていました。繰り返しになりますが、今後、どのような形で道は、多様な主体とともにSDGsの取り組みを進めていこうとしているのでしょうか。先ほどの指標もそうですし、今までにも何度も言いましたが、レビューや推進状況の確認についても、やはり多様な視点からのチェックが必要だと思います。せっかくSDGsという国際基準を地域でやっていこうというのであれば、そういった部分をきちんと地域の行政、政策策定とか政策推進のプロセスに盛り込むということを、他ではやってないと思いますが、やっていないからこそ、それを入れて欲しいです。

石川（課長） おっしゃる意味は良く分かっているつもりですが、道は道でSDGsの全庁的な組織を作っていますので、その中で取り組みを進めていきます。先ほどの野吾さんのお答えとも被りますが、今後の推進は画一的ではないと思っています。SDGsはかなり分野も広いですし、全てのステークホルダーの方に取り組んでいく事柄ですので、それぞれの事柄によって、集まってお話する方々の対象も違うでしょうし、指標をどうしていくのか、今後の推進管理をどうしていくのかといったことも、それぞれケースバイケースだと思います。先ほども少し議論がありましたが、ネットワーク会議の中で、今の状況を皆さんと共有をさせていただいて、その上で今後どうするのか、具体的にどういう人が集まってどういうことを考えていくか、もっと進めていくためにどういう人が集まってどういう話をするのか、ケースバイケースで内容が変わると思いますので、今の段階でこうするということは中々難しいのかというふうに思っています。色々な方々と情報共有をさせていただきながら、北海道の中でSDGsを推進するためにどういうことが出来るのかということは、この中で考えていくと思っ

ています。

小泉　そのネットワーク会議というのは、定期的に会議をするイメージですか。

石川（課長）　先ほど言いましたように、今のところ、年１回は交流セミナーのような形で顔を合わせるような会を持とうと思っています。

小泉　話し合いをする場ではなく、セミナーみたいなものですよね。

石川（課長）　その中で出てきた課題について、指標を作るといいのではないかとなるとまた変わりますよね。医療関係の指標を作ろうとすれば、医療の専門家に入ってもらわないとならないでしょうし、地域づくりの観点で指標がいるとなれば、地域づくりの関係の方にお集まりいただくことになりますよね。ですので、一律にこういう形でこういうことをしますというのは画一的には決められないということを申し上げていました。色々な方々とまずは情報共有させていただいて、年１回意見交換をさせていただくというところをまず決めています。

吉中　年１回というところは、あまり強調されないほうがいいのではと思いました。

石川（課長）　今のところはですね。

吉中　フェイストゥフェイスももちろん重要で、定期的に顔合わせ、こういう直接話せる機会も重要だと思いますが、北海道は広いということもあり、時間的な問題としても、フェイストゥフェイスも難しいこともあるかと思います。今回もお集まりいただけなかった部分もあると思いますし。ですので、やはり先ほど菅原さんがおっしゃっていた、自由にメーリングリストなりオンラインディスカッションができる場を設けてさえいれば、いつだって議論は出来ますし、そこから、こういう人が足りないから呼びましょうといったことや、こういう分野の議論をしなければいけないといったようなことが、どんどん出てくるのではないかと思います。

石川（課長）　ネットワーク会議のお話しに集中してしまって申し訳ないですが、色々な形、例えば、地域説明会の中でも意見交換をしますし、先ほど、ネットワーク会議が札幌だけになっているというお話もいただきましたが、地域でも色々と意見交換をやろうと思っていますので、そういった中で色々な意見をまたお聞きしたいと思っています。

野吾　今、道庁では総合政策部の方がこのビジョンを主導で取りまとめられていますけれども、例えば、医療分野や農業の分野といった場合、その実務的なことを担当する部局が別にあると思うので、道庁の中では、そういった担当部局の方々を巻き込んだ意見聴取を進めたり、行政の方針を決めていくプロセスの中でそういったグループの方々と上手く意見交換をして、行政に反映させていく機会が増えていくきっかけになるといいかなと思いました。

吉中　この資料８の絵は何に使われる予定ですか。公表するものではなく、この懇談会用に作られたものでしょうか。

渡邉（主幹）　そうです。ただ、懇談会の資料はインターネットで公表しています。

吉中　そういう意味では公表されますと。少し気になったのは、道の評価、国の評価からの矢印が一方向でネットワークに向いていて、ネットワーク会議からは何の矢印もなく、後ろに何か黒い丸がありますが、何を意味しているのかよく分からないです。あまりにきれいになっていて、ヒエラルキーみたいに少し気持ちが悪いように感じています。一体的な管理ということで下にいって、推進本部、多様な主体と、そして上に戻ってきていますが、きっともっとぐちゃぐちゃした姿になるべきなのではないかと思います。SDGsの進め方としては。そういったところももう少し気にしていただけるといいかと思います。

石川（課長）　ぐるぐる回っているというイメージをお示しをしたかったものです。PDCA サイクルじゃないですけども、取組がどんどん循環していくイメージです。

吉中　それは分かります。私が言いたいのは、道の評価を受けてそれを共有するのはネットワークですか。違うのではないかということです。ネットワークでも議論をして、それが道の評価にも活かされるといったことや国にも伝わるといった、双方向になるのではないかと思います。一方向の矢印、上から下というのが、決定的に何かを表しているのかのように感じてしまいます。

小泉　もう１点すいません。もう一度お聞きますが、色々な分野ごとに色々な作りが必要だということはそうだろうと思いますから、それでいいですが、私がずっとこだわっているのは、もう少し端的に言うと、国連のメジャーグループのようなグループを形成する意思はないですか。

石川（課長）　今の段階ではないです。

小泉　何故ですか。何故というのは、これと持続可能な開発ということは、ある意味切っても切れない関係だから言っているのであって、リオサミットの時からずっと、少なくとも国際的な場ではこれらのグループの関与ということが前提となっているわけです。どのテーマを話すといった話ではなくて、どの主体が関与することが持続可能な開発にとって重要なのかという問題なんですよ。今回、限られたグループのミーティングしか出来ませんでしたが、個人的には、やはり持続可能な開発というテーマを議論する上で女性と先住民族というのは欠かせないと思っています。その視点なしに、持続可能な開発をうたってはいけないと思っています。ですので、今の時点でないというのではなくて、何故ないのですか。

石川（課長）　ないというのはですね、今、既存の団体や機関がありますので、そこに対して我々は丁寧に意見をお聞きしてビジョンに反映したつもりです。既存のものがない、何もないものがもし仮にあれば、それは改めてそういう組織や団体に集まっていただき、お話を聞く必要があったのかもしれませんが。

小泉　既存の団体もちろんありますが、吉中さんの方が詳しいと思いますが、国連の中で、世界中の何百という女性のグループが集まって女性グループを作っていたり、先住民族は先住民族で作っていたりとしていると思うんですよ。

石川（課長）　私の思いとしてはですね、北海道の中に、そういったメジャーグループに相当する団体や機関が既にある中で、今回のビジョンを作るために、そういう何か新しい集まりを作る必要性は感じていなかったので。

小泉　私は必要性を感じています。何故かというと、もちろん団体はありますし、アイヌ協会など色々あります。しかし、この SDGs の推進に継続的に関与する作りではないじゃないですか。

石川（課長）　ですから、それは既存の団体がございますので、そこに対して、当然ネットワーク会議ももちろん排除してる訳でもないですし。

小泉　排除するという話ではなくて、道が積極的にどう考えるのかということを聞いているんです。つまり、そういった主体を重要視する姿勢はないということですか。

谷内（局長）　小泉さんがおっしゃっている SDGs という切り口で多様な主体の方々とどう連携するかというのは、一つは、SDGs というものをどうやって推進して、認知度を高めて参画してもらおうかという大きな意味での SDGs、そもそも SDGs を知らないという方々も多いわけですから、このビジョンを使いながら SDGs をどうやって広めていくか、そのためにはそもそも SDGs に取り組もうということを市町村の方、道民の方々、いろんな方々と意見交換していきますし、もう一つはおっしゃったようにそれぞれの行政分野ですよね、行政分野というか政策分野というか。

小泉　行政分野を言っているのではないです。主体ですよ。

谷内（局長）　施策の分野としては、例えば、女性でしたり。

小泉　施策の分野として、女性政策とか先住民族政策があるのはもちろんありますよ。そうではないということを打ち出せるのが、SDGs ですよね。

谷内（局長）　そういった取組はですね、道庁がやる政策や施策の中では、先ほど野吾さんもおっしゃったように、それぞれの各分野の取り組みの中で、今回のこのビジョンもそうですし、SDGs というものを計画や方針に反映していこうと。その時に、道庁のそれぞれの仕事の中で、例えば、女性、女性団体の方々ですとか、農業でしたら農業団体ですとか、そういったところと意見交換しながら取組を作っているわけですし、そこで SDGs の要素をしっかり反映させていきましょうというのがこのビジョンの趣旨ですし、道庁のこれからの仕事の進め方だと思っています。

小泉　これまでの道庁のセクションの中にもちろん女性政策をやるセクションはあるだろうし、アイヌ政策をやるセクションはありますよ。ですけど、SDGs はこれまでのことをやるというお話ではないわけですよね。持続可能な開発という、今とは違う社会のあり方をどのようにしたら実現できるのかと。そのときに、例えば女性というのは女性政策という縦割りの一つという位置付けではないですし、先住民族もアイヌ政策という中に閉じ込められることではないんです。持続可能な開発という概念において、ここは欠かせない主体なわけですよ。

谷内（局長）　何か全く今までと違う新しいものということですか。

小泉　そうですよ。そういうふうに捉えないとだめですよ。今までが持続不可能な社会だから持続可能な開発をしなければいけないということです。

谷内（局長） 役所でもそうですが、色々な企業や団体の取り組みががらっとリセットというわけではなくて、取り組んできている中で、SDGsというものを取り入れながらやっていこうというわけですよね。

小泉 がらっと変わるかどうかは、その取り組みによると思いますが、だから、バックキャスティングと言っていますよね。現状から始めてはだめなんですよ。こうあるべきだというところから今を見つめるわけですよ。このビジョンがだめだと言っているのはそういうことです。バックキャスティングになっていないということです。

菅原 先ほど、ネットワークの登録団体の中に女性団体が入っているとおっしゃっていました。今、会議中に慌てて確認しましたが、全ての団体が分かるわけではないですが、１団体だけ、ここの道立女性プラザの指定管理の女性協会さんが入っています。それ以外は入っていないように見えますが、それで女性団体が入っているとは、私だったら言えないなというふうに思います。例えば、道内にはDVの支援をしていましたり、シェルターを運営している民間団体がいくつかありますが、そこは一つも入っていないと思います。そういう意味ではやはり、この中には全く多様性はないと思います。もちろんスタートしたばかりで、全ての多様性を揃えるという話ではなく、不足しているということをまず知っていただきたいということです。既に民間の団体で道内にたくさんあるからいいということではなく、そういった団体さんにきちんとSDGsの主体として関わって欲しい、協力して欲しいと私だったら思います。ですので、そういう視点でもう少し細やかに、本当に多様な主体が参画しているのかどうか、今出来なくてもいいので、何が足りていないのかというところを、常に私たちも一緒に考えていきたいなということを思いました。

吉中 ありがとうございます。小泉さんがと菅原さんがおっしゃったことを聞いていて思いましたが、このネットワークがどのようにこれから発展していくのか、あるいはしぼんでいくのかは分かりませんが、その中にメジャーグループ、ディスカッショングループみたいなものを初めから用意しておいて、新たに入ってくる方が、女性問題に興味があればそのディスカッショングループに自由に入れるというような、何かそういうことを用意しておくと、多様性を確保していく上でも分かりやすくなるのではないかと思いました。どのディスカッショングループに入っているのかどうかを見ていくと、SDGs全体を見渡すことが少し出来てくるのではないかなと思います。何かそういったものも考えていただくといいと思いました。メジャーグループという一つの団体を作ると言っているわけでは全くないと思います。そうではなく、それに関わっている人たちが集まって意見を交換、もっと密に意見交換できて、理想的にはそこから一つの提案として出てくるといったことだと思います。そういう場として、このネットワークが上手く使われていけばいいなという気がしました。

谷内（局長） メーリングリストが上手くできれば、そういった個別のテーマごとに議論できるような場をネットワークの中に作れるかもしれないですね。

吉中 あるいは、メジャーグループのカテゴリーのようなものを作っておいて、登録する際にどれに入りたいのかということを聞くといったやり方もあるのかと思いました。30分に終わると約束しましたが、他に何かありますか。

小泉さんが初めに、有坂さんが辞任するというお話をしましたが、僕のところにもメールを貰っていて、少し彼女と電話でお話しました。RCE北海道道央圏協議会の事務局長として、メッセージを寄せましたと彼女は言っています。今日はたまたま予定も合わず、出席できないということと、最初のほうにお話もありましたが、この懇談会は委嘱状を貰っているわけではないので、辞任というのもどうなのかという話も彼女はしていました。書いてあることをもう一度、よくよく読み返してみると、私も少し言いたかったことを言ってくれているところもあります。小泉さんも運営委員の一人としていらっしゃっているので、私が間違っているところや足りなかったことなどあれば補足していただければと思います。

どんなことを彼女が書いていたかということを簡単に共有させていただきたいと思います。もう皆さんとも共有されている意見ですし、私も何度も言っていますが、時間的な制約もあり、十分な議論が出来ないまま策定されてしまったことは残念です。今回、何らかの政策を決定するに当たり、従来の手法、考え方では多様な意見を反映することは難しいと実感いたしました。先ほど、小泉さんがおっしゃったSDGsというのは、まさにトランスフォーメーションを求めているということからすると、何か今までどおりの考え方では上手くいかないのは自明なものだと私も思います。今回のビジョンづくりというのは道庁にとってのトランスフォーメーションのきっかけになればいいなと期待しています。またその後に、特に、北海道において問題を抱えている地域、人々、自然環境などの存在が明らかにされないままでビジョンが策定されたことは根本的に問題であると言っています。北海道には「取り残されている」存在や問題として、具体的な例が書かれておりますが、すぐにでも解決しなければならない問題が山積しています。これらの問題が議論されないままビジョンが策定されたことは、「最も遅れているところに第一に手を伸ばすべく努力する」ということがどうもできていないのではないのでしょうか。それから、推進ネットワークのことは、先ほど、小泉さんがおっしゃったとおりのことです。SDGsの策定プロセスを見習えば、オープンに議論し、その進捗管理や評価も透明性と当事者性を持つものであるべきと考えます。私が先ほど申し上げたネットワークをぜひオープンにしていただきたいなということと、行政からの評価結果を一方的に受けて共有するものにはしてほしくないということは、少し関連する意見なのかと思っています。指標の話も申しましたが、RCE道央圏からも、各優先課題の進捗状況をはかる指標についても「参考となる指標」だけでは不十分であることから、新たに必要な指標づくりを専門家及び実践者を交えて作っていくことが求められます。先ほど、課長がおっしゃっていたことと同じ方向を向いているのかと思います。さらに、根本的なところで、私たち一人一人の意識を変革することによって持続可能な世界に変えていくことが必要です。それからそのトランスフォーメーション、「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」に書いてあることだということですね。2030アジェンダにある「誰ひとり取り残されない」「最も遅れているところに第一に手を伸ばすべく努力する」という理念を真摯に受けとめ、魅力や強みに注力することによるトレードオフに留意し、原理原則である「権利」ベースのアプローチによって、持続可能な世界実現に向けた北海道の取り組みを進めていかなければなりませんと書いていただいています。それで今後のこととして、私の言ったことのほとんど繰り返しですが、北海道SDGs推進ビジョンがきっかけとなり、全道でSDGsに関わるオープンで多様な参画による議論が展開され、北海道のビジョン自体もより良いものに進化していくことを期待します。同時に、RCE北海道道央圏協議会においても持続可能な世界の実現に向けた取り組みを一層進めてまいりますので、引き続きよろしくお願いします。このような意見でしたので、エッセンスだけでも議事録に残していただければといいかなと思います。

小泉 有坂さんが書いていることと少し重なりますので紹介しておきます。こちらの資料、たまたま先日講師で招いた方からの資料ですが、SDGsのベースは人権であるということを、何ていいますか、もう少し意識して欲しいと思います。これはSDGsの17目標がどういう権利と関わっているのかということを整理した、ヒューライツ大阪という団体が作ったものです。やはり、言葉として使っているかどうかはともかく、SDGsの根底にあるのは権利です。人権です。「誰ひとり取り残さない」という理念だけではなく、全体としてそうだと思う。そのことを北海道のビジョンにどこまで感じられるかというと、正直あまり感じられないなというふうに思っています。そのことを意識して、今後進めていって欲しいと思いますし、そのことを意識するということと私が今まで言ってきた、どういう課題に直面した人に注目していくのかということ、あるいはその人たちの参画を積極的に考えていくのかということは、同じことなんです。SDGsは、北海道の新たな可能性をどうのこうのとか、ビジネスをどうのこうのという話では基本的にないです。ないという前提をもう少し広めてくれないと、それこそSDGsに対する誤解が拡がるかなと思います。

吉中 ありがとうございます。これが一応、先ほどおっしゃっていたとおり、定期的に開かれる懇談会は最後ということですが、いい足りないことがあれば。よろしいでしょうか。

小泉 ちなみに、このビジョンの冊子はどれくらい作って、どういった形で配られるんですか。

渡邉（主幹） ページ数が凄く多いので、大量に印刷して配るというのは、そもそものSDGsの視点からどうなのかという声もありますし、また、データも多いので検索して使っていただく方が使いやすいかなと思いますので、基本はデータで配付して、欲しいという方には印刷してお配りするような形でどうかと考えております。

小泉 データで配布するというのはメールかなにかで送るということですか。

渡邉（主幹） とりあえず、道のホームページでも公開しますし、データが欲しいと言われれば、メールで送ることも可能です。

野吾 JICAとしては、今後もSDGsの推進ということで、市民の皆さんにも色々な情報発信を引き続きやっていきたいと思います。我々も本当に知らないことだらけだなということを、この懇談会の場を初め、いろいろな場で勉強させていただいて感じているので、引き続き、「変革」していく主体として、いい意味での緊張感で一緒に協働させていただきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

柏村 私も農業者として、始めから場違いなところに来ちゃったなと思ってしまい、余り貢献出来なかったと思いますが、こういう場に参加させて貰って、SDGsへの取り組み方や成り立ちを知り、物事の進め方なども初めての経験が多く、凄く学びが多かったと思っています。とはいえ、

農業者として、本業を通じてSDGsに取り組んでいる企業としては、先進的な方だということで、自分達が出来ること、役割が自分たちの業界にはあるだろうというふうに思っています。さらに、どう取り組むか、周りを巻き込みながら何が出来るのかということを考えていきたいと思いました。今後ともよろしくお願いいたします。

吉中　ありがとうございました。私の力不足で、皆さんから納得できるような議論をずっと出てなかったことは本当にお詫びしたいと思います。私自身は非常に勉強になって、今日の議論も面白く聞かせていただき、関わらせていただいて、本当に良かったと思っております。ありがとうございました。まず、そもそも懇談会を始めた時には、骨子案が出来上がっていている制約があったところから始まり、なおかつ、いつまでに作るということも決まっているという非常に厳しい中で、良く付いてきていただいたなという気がしております。ありがとうございます。道庁の方もそういう制約の中で、こういう色々な意見を聞いて、また、別の色々なところからも意見を聞いていただき、まとめていただいて本当にお疲れ様でした。ありがとうございました。おそらく、ポイントとしてはこの後だと思います。ビジョンはビジョンで、良いのか悪いのかあるのかもしれませんが、作ってしまいましたので。後は、とにかくSDGsを北海道で達成するんだということで、具体的な動きを皆でやっていかないといけないだろうなと思っています。その中でやはり道庁の役割は大きいものがあると思いますので、是非これからも協働させていただいて、一緒に頑張っていきたいと思っております。皆さん、どうぞ引き続きよろしくお願いいたします。ありがとうございました。お返ししたいと思います。

石川（課長）　長時間にわたりまして御議論いただき、誠にありがとうございます。また皆さんにはこれまでの４回にわたりまして、この懇談会に御出席をいただきました。大変色々な貴重な御意見をいただきました。改めて感謝を申し上げたいと思います。今後、このビジョンは12月末に決定いたしますけれども、このビジョンに沿って、我々も積極的に進めてまいりたいと考えております。皆様におかれましても引き続き、色々な立場から、御意見を頂戴できればと思ってございます。先ほども申し上げましたが、この懇談会、定期的に集まって開催していただくのが今回で最後とさせていただいてございます。今後につきましても、また、色々な場面で皆様方の御協力をいただくことが多々あるかと思いますので、引き続きよろしくお願いしたいと思います。この場で皆様方の御協力に重ねて感謝を申し上げまして、本日はこれをもって閉会をさせていただきます。ありがとうございました。

■新聞報道　（2019年1月19日　北海道新聞）

Government…英語で行政府、政治、統治者の意味

舞台裏を読む

道 お仕着せのSDGs指針

「空気に意見を言っているようなものだ」。国連の「持続可能な開発目標（SDGs＝エスディージーズ）」に関する道の有識者懇談会で、メンバーは何度もむなしさを訴えた。道は昨年末、「道内の多様な主体が互いに共有する基本的な指針」と銘打った「北海道SDGs推進ビジョン」を決定したが、「年内決着」という日程ありきで突き進んだ。懇談会での意見はほとんど反映されず、失望や非難の声が広がっている。

懇談会は昨年7月以降、SDGsの普及に取り組むNPOや大学教員、企業経営者ら11人をメンバーに計4回開かれた。「ビジョン」の最終案が報告された昨年12月19日の4回目の懇談会は過半の6人が欠席。うち1人は直前に辞任する異例の事態となった。

出席したメンバーからも厳しい指摘が相次いだ。「一緒に作ろうという姿勢が全く感じられない。それなら『多様な主体と推進する』ではなく、『道が推進するビジョン』と書くべきだ」。NPO法人さっぽろ自由学校「遊」の小泉雅弘事務局長(56)は痛烈に批判した。

懇談会初回で、事務局の道は「ビジョンはみなさんと一緒に作る」と言いながら、出された意見には「庁内で検討した」「既に道議会に説明した」と述べ、だから変えられないーとほぼゼロ回答。「道民の声を聞いたというアリバイ作りに懇談会が使われた」。メンバーの一人は憤る。

ビジョンはA4判10ページ。教育の普及や環境保全など国際社会が2030年までの達成を目指すSDGsの17目標の説明や、道内の学校での取り組み、二酸化炭素排出量のデータなどを掲載。北海道の目指す姿として「世界の中で輝きつづける北海道」を掲げた。

これは16年に作った道総合計画のキャッチコピーに「世界の中で」を加えただけ。懇談会初回で示したフレーズのままだった。「輝きつづける」という言葉や経済成長優先ともとれる目標は、「誰一人取り残さない」というSDGsの理念にそぐわないとメンバーの多くが再考を求めたが、変わらなかった。

15年9月の国連総会で採択されたSDGsについて、高橋はるみ知事は17年末、道も推進の輪に加わるとぶち上げた。知事が、ある会議で「道の政策にはSDGsの観点がない」と指摘され、意識し始めたのが発端だ。18年度の道予算のキーワードもトップダウンでSDGsに。内閣府の「SDGs未来都市」に応募し昨年6月に全国29自治体の一つに選ばれた。

道内は道と札幌市、上川管内下川町、後志管内ニセコ町。かねて持続可能なまちづくりを進めてきた3市町と違い、道に実績はなかった。やむなく、ビジョンというお仕着せの実績を急ごしらえした形だ。

SDGsの17番目の目標は「パートナーシップで目標を達成しよう」だ。「変革」なくして達成できないともうたう。

早くからSDGsに取り組む市民団体RC石狩圏協議会の有坂美紀事務局長(40)は「SDGsと言うなら従来の政策決定の手法やあり方の変革が求められる」と懇談会を辞めた。旧態依然の道庁のお役所体質ー。辞任願いには「十分な議論がされないまま(ビジョンが)策定されてしまったことは残念でならない」と記されていた。（報道センター　関口裕士）

SDGs　アドボカシーと対話

北海道 SDGs 推進懇談会の記録

発行日　2019 年 3 月 27 日
編集・発行　NPO 法人さっぽろ自由学校「遊」
〒 060-0061　札幌市中央区南 1 条西 5 丁目愛生舘ビル 5 F
TEL.011-252-6752　FAX.011-252-6751
E-mail　syu@sapporoyu.org　URL　http://www.sapporoyu.org/
助成　独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金